北條早雲

早乙女貢

五

北條早雲

早乙女貢

五

北條早雲 五 早乙女貢

文藝春秋

北條早雲

文藝春秋
¥950
0093－361690－7384

北條早雲 五 早乙女貢

文藝春秋

早乙女貢

北條早雲 五

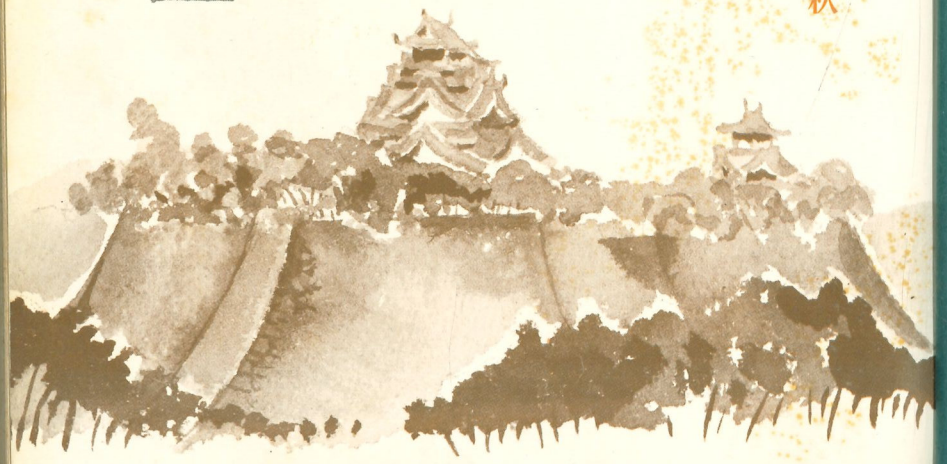
文藝春秋

北條早雲 五

早乙女貢

吉鋼藏書

文藝春秋



北條早雲　五

装幀　粟屋　充

承前

伊勢平氏の流れを汲むといわれる伊勢新九郎長氏の前半生に就いては不明な点が多い。備中国に生れ、青年時に京へ上って御所に仕えたことくらいしかわかっていない。この新九郎長氏が、いわゆる応仁の乱を避けて伊勢に下ったのは、足利将軍義政の弟義視に扈従（こしょう）してのことだが、義視が兄と和睦して京へ戻るとき、新九郎は伊勢にとどまった。

かれは一人になって静かに天下の動きを見つめた。動乱の世が要求しているのは卓抜した為政者であり、劫火を消す大志を持った人物である。新九郎はすでに壮年であった。かれは天命を感じた。伊勢で知りあった五人の有志と血盟し東海地方へ向った。

途中、船が難破し、九死に一生を得た新九郎が駿河へ着いて間もなく、今川の太守八代義忠が横死したことから、内乱に巻きこまれることになる。義忠の愛妾北川どの（夢子）は新九郎の義妹であったが、以前京にいたころ義兄妹の線を越えている。新九郎は夢子母子を救けるが、義忠の従弟新五郎範満や末弟の弥三郎春忠らの野望が卍巴（まんじともえ）となって抗争を果てしなくする。

戦乱の府中で、妖美な女陰陽師天殊や甲冑師明珍高義の娘おりょうや湯女小萩など多くの女の影が

新九郎の身辺を彩る。そのおりょうは奇縁から太田道灌資長の寵愛を受けるようになっていたが、道灌が主人の定正に暗殺されたことから、新九郎の庇護を受けるようになる。伊勢で知り合った小笛を妻にして二人の子をもうけていた新九郎は、小笛の病死後、おりょうと結ばれた。

永い相克ののちに、範満を討って今川家を竜王丸が継承し、氏親と改めると、新九郎は駿東の興国寺城を与えられた。漸く一城の主となった新九郎は眼を伊豆に向けた。伊豆の堀越公方（足利政知）は政治の意欲を失い後妻に溺れて家庭が乱れていた。前妻の子茶々丸は狂人に仕立てられ土牢に呻吟していたが、ある夜、破牢して兇刃をふるい、政知や継母とその子らを惨殺し、新御所と称した。この破牢を手引きしたのは、駿河の石脇城を新九郎に逐われた弥三郎春忠だった。

弥三郎は茶々丸の公方宣言によって、再び浮上した。茶々丸の狂気の沙汰は一層拍車をかけられ、諫言する忠臣に切腹を命じ、無辜の領民に暴虐を恣にし、その苛斂誅求は怨嗟の的になった。前に韮山の名流北條家と縁を結んで北條を名乗るようになっていた新九郎長氏は、

「尊属弑逆の足利茶々丸を膺懲せん」

と下命して軍勢を動員し、氏親から三百騎を借りるや清水港から軍船をもって伊豆に乗りつけ、一気に堀越御所を襲った。

この奇襲にさすがの弥三郎も防戦かなわず、辛うじて茶々丸とともに落ちた。南伊豆に逃れ、古城によって反撃の烽火をあげたが、新九郎の軍勢はこれを攻撃。ふたたび落城した茶々丸らは今井浜から海上に逃れる。かれらが頼る先は、三浦半島の豪族三浦時高しかいなかったのである。

海鳴り

この戦さの大勝によって、殆ど伊豆一国は、新九郎の掌握するところとなった。

その後、茶々丸の行方は杳としてわからなかった。

茶々丸の首塚と称されるものは、掘り起されて茶々丸の顔とは違うことが確認された。忠臣の犠牲的な死、はともかく、時間稼ぎにはなったのである。

新九郎は行方を追求させる一方、伊豆国内の政治に手腕をふるいはじめた。

すでに西伊豆では、新九郎の仁政は浸透しはじめ、帰服する者が増えている。

その方法をふたたび、南伊豆平定に向けたのだ。

かれは、土地の長老や有力者たちを集めて、こう訓したという。

「――国主の為には民は子じゃ、民の為には国主は親じゃ。これはおれが考えたことではない、古よりの定まった道じゃ、こういう親であり子である以上、如何にもして慈悲を示さねばなるまい。世の中が乱れてより、領主どもが欲深くして、百姓の年中の耕作を検地し、四つもなきところを五つもありと言掛けて取り、そのほか、夫銭（夫役を課して、その代替に献金させること）、棟別銭をとりたて、さらに野山にまで税を課すなど、あらゆるものを強引に奪いとるなど、非道な振舞いが多かった。こういう領主は、許すべからざるもの。さればこそ、わしが討ち平げたのじゃ」

新九郎の言葉はわかり易く、理路整然としていた。

民衆の側から政治というものを考えてきた男である。長い放浪の生活が、常にそのことを考えさせたのであろう。

支配者の論理を確立する前に、支配される側の生活感情をまず考える。

旅牢人としての歳月が、直接的に肌に感じさせたのだ。

「これまで、公方、管領などは、分際に過ぎたる振舞いを為し、御殿屋形を華麗に飾りたて、山海の珍味佳肴を喰い、美酒に酔い痴れて、民百姓が苦しみの果て餓死に及ぶのにも、眼を外らしてきた。わしは違うぞ、わしは、慈しむぞ、民あっての主だ」

かれの言葉が空疎なものではないだけに、説得力があった。

村人たちの疫病を治してくれたし、掠奪強姦などの行為は許さず、麾下の将士をも厳しくいましめ、犯す者には厳

罰で望んでいるのも、新九郎の言葉の裏付けとなった。
「わしが定むるところと申すは、年中収むる穀物のほかに、一銭にあたるものと雖も、農家に強いることはない。諸役宥免せしめた以上は、地頭と百姓と和合し、水魚の交りをなすがよい」
そしてさらに、こうも言った。
「こうして、主となり民となるも前世の因縁あってのことであろう。わしが望むところは、その方らの安らかな暮しじゃ。されば、いまより、年貢を五分ノ一減じて、もろもろの課役を除くことを約そうぞ」
租税五分ノ一を減じる、というのは大英断である。
貧苦にあえいでいた人々の歓喜はいうまでもない。
新九郎は言葉だけの男ではない。かれは伊豆国中に令して、麾下の暴戻をいましめ、誅求をうけた民衆の直訴の道をひらいた。
「前々の侍、年貢過分の故、百姓疲るゝ由に聞き及びぬ。以後は、年貢五つ取所をば一つ許し、四つ地頭に納むべし。此の外、一銭に当る儀なりとも公役かけるべからず。もし法度(法律)に背く輩あらば、申し出づべし、地頭職を取はなさるべき者なり」
〃取はなつ〃は、取外す、と同じで、地頭職を解任するというのだ。
これを聞いた農民たちの喜びは一方ならぬものがあった。
「新九郎さまこそ、わしらの待ち望んだ御領主さまだ」
「新九郎さまの御用とあれば如何なることにも、尽くしましょうぞ」
「今日から、わしは社に詣でて、御領主さまの武運長久を祈るつもりぞ」
「わしも詣でる。新九郎さま御安泰なれば、わしらも倖せじゃ、いつまでも、いつまでも、新九郎さまに御領主でいて貰いたいものよ」
伊豆の国人ばかりではなかった。この噂を聞き伝えて、他国の者まで羨望し、
「わしらの国も、あのような御領主であれば、どんなにいいことか」
と、生れた土地を逃散してくる者さえいた。
新九郎は、伊豆の国を一巡して、地勢をさぐり、廃祠を修復し、道を拓き、堤防を築き、津波のおそれあるところには護岸工事を進めさせるなど、民政に意を尽くしたので、悦服しないものはなかったという。
仁政ということがわかると、かれのために情報提供者も出てくる。
今井浜の漁師で、茶々丸の逃亡を目撃した者がいる。
船を奪ったかれらが乗り込むとき、近くの舟にいたという。
落武者狩りどころではなく、恐怖におののきながら、苫の下に身を潜めて、かれらをやり過したが、その声高な話を耳にしたという。
「三浦を頼って落ちてゆくとか、申しておりました」
「三浦ノ介か」
現在の三浦半島を領有していた豪族である。
茶々丸の落ちたことはわかっていたが、何処へ、誰を頼ったかが謎だっただけに、その漁師の密告によって判然とした。
「なるほどな、考えたな。弥三郎めの智慧であろう」
茶々丸らは、東伊豆の沿岸づたいに、北上し、相模の南辺をたどって、新井(油壺)へ落ちていったようである。
三浦半島では、ちょっと手が出せない。
まず伊豆にしっかり根をおろすことが先決だった。
「いずれ討たねばなるまいが、暫し、余生を楽しませてやろう」
いたずらに手をひろげることは、せっかく切りとった伊豆の国がまた荒廃するおそれがある。
まず内治に心を尽くさねばならない。足元から固めてゆく。
韮山城を修復してここを拠点としたのも、そのためであった。
この地北條が古の北條時政の遺跡であることを知って、この地に興ることの意義を悟った。
「前ノ右兵衛佐頼朝、平治のころ、この北條蛭島に流され、空しく二十一年の星霜を過したが、ついに四郎時政を語らい、治承四年八月十七日、伊豆の目代和泉判官兼隆を屋牧屋形に襲撃し、義兵を挙げて父の仇を討ち、志を天下に成したるところだ。これほどの瑞祥の地は他にはない」
新九郎が、それだけの理由でここを居城にしたとは思えない。
その縁起かつぎもあったろうが、やはり伊豆統治の地としては、この東海地方に接した地点の、平野であり、港を近くに控えた要衝という地の利が、何よりも魅力だったのであろう。
新九郎は韮山の北條を拠点とするために、大々的に城を改築した。
それが完成したのは、明応二年九月のことで、新九郎は駿河の興国寺城には、富永三郎左衛門政家を城代として置くことにして、諸将にこう語ったという。
「昔は源平並び立ちて朝家を護り、民を安んじ国を治めしが、保元・平治に至って源氏衰え、平氏起り、治承・養和に至って源平ところを替て、寿永・元暦の際、平氏ほろびて源氏権を執る。頼朝父子三代の後、北條氏にしてまた世を治め、九代の後、足利源氏にして之に替り、京都・鎌倉の公方たりしが、関東は持氏亡び政知亡び、京都は将軍ありといえども、威権はなはだしくふるわず、源氏の滅亡近

きにあれば、これに替る者は平氏ならざるべからず。
陰尽きて陽来るは、理に於て明らかなり。
今日、関東の形勢を按ずるに、今の管領両上杉氏の、源氏の家臣たるを顧みず、ほしいままに兵を動かして成氏と戦うは、下として上を犯すの科まぬかるべからず、天豈これを憎まざらんや。
われ天命に従って無道を誅し民を撫し、士を愛し、以て天下を平かにせんと思うが如何。
われ不肖と雖も、幸いに北條氏の由跡を継ぎたり、両上杉に代る者はわれに非ずして誰ぞや」
ここまではっきりと言いきるのは、大したものだ。満々たる自信であろう。
当時まだ、かれの語るごとく、武家の間に源平交替の思想がある。
新九郎は、さらに一歩を進めて北條氏の天下布武の番だと力説したのである。北條氏とは、すなわち新九郎その人である。
伊勢新九郎が北條新九郎となったのは、実にこのときである、と〔国史実録〕にはあり、さらに、関東を狙う志もこの時に起れるなり、と説いてある。
後者はそうかもしれないが、北條姓に就いては、やはり疑問だ。
北條の未亡人を娶って、北條の城を得たのが、ずっと前のことだから、やはり、そのときに北條を名乗ったとみるほうが、筋道が通る。
ただ、駿河では従来の伊勢を名乗っていたから、北條の姓は、あくまでも、伊豆に於てのみのことであったろう。
それが茶々丸を追いおとして、確実に伊豆全土（もしくは九分通り）を掌握し、本拠を移した時点で、伊勢の姓を捨てたのではあるまいか。
〔国史実録〕の説は、そう解釈すると、よくわかる。
なお、〔北條五代記〕によると、このころ、南伊豆の朝比奈六郎という者が、八丈島を発見したとある。〔大日本風土記〕には、長享元年に朝比奈がこの八丈島を北條早雲の伊豆国の属島にしたという。
版図が増えることは領主にとって喜ばしいことだから、大いに賞したであろう。
黄八丈の原反である八丈絹を毎年、運上として早雲の小田原へ献ずるようになった、ともあるが、早雲が小田原をとったのが後年のことだから、そのあとかもしれない。
この辺の記録は、かなりあいまいである。
ともあれ、新九郎は、韮山に来て住むようになった。
かれは、伊豆の国侍たちの長として、農民たちの生活の安定を保障するとともに、兵馬の強壮につとめ、茶々丸の討伐と、関東への出馬を計っていたのである。
〔沼津雑誌〕によると、興国寺城と三枚橋城は、やはりこの時期に今川氏親に戻したという。
その辺のところは、判然としないのだが、この後も、新九郎は今川氏と親密な関係を持っている。
今川氏の要請で、遠江に叛徒討伐に出向いたりしているのだ。
したがって、この話は、縁切りを意味するのではなく、伊豆一国を手中にした以上、同じ被官でも、ただ返戻したというのかもしれない。
もっとも、〔野史〕などによれば、富永三郎左衛門政家をもって城代に据えたというのだから、まだ勢力圏内にあったわけだ。
やはり新九郎一人では、伊豆も駿東もというわけにはいかなかったのであろう。
新九郎は延徳四年から明応三年までの間、伊豆の経営に力をそそいだ。まず、足もとを固め兵馬を養うのが先であった。
かれが茶々丸追討の軍を起したのは、したがって、三年の後だったのである。
新九郎はある日、わずかな供廻りで、相模に赴いた。まず小田原城に大森氏頼を訪れ「三浦義同どのを諏訪ノ原に見舞いたいが」と申し出た。
小田原の城では、こころよく、案内の侍をつけてくれた。
もっとも、それは表むきで、看視の役目を兼ねているのは、いうまでもない。
相模の諏訪ノ原は、小田原市の北郊、明神岳を西に仰ぐ山裾の辺である。
酒匂川流域の平原のひろがりを眺める小高いところに一寺があった。
新九郎は山王川の畔りで馬をとめて、杉の木立の中に見える屋根を望んで、
「あれか」
と、聞いた。
案内の侍は大きく頷いた。
「はい、総世寺でございます」
「よいところだな。ここなら静かに勉学もできるであろう」
城としても、悪くないところだ、と新九郎は思った。
山を西北に背負っていて、東南に土地はひらけている。近寄る軍勢があれば、すぐにわかる。土地は肥沃で水利もいい。
新九郎が、自身、わざわざ、ここまで出てきたのは、よほどの理由がなければならない。
この時代、隣国といえば、仮想敵国と見て差しつかえない。また、それが常識だった。感情的には、面白くないが、お互いにそうするのだから、しかたがない。

一寸、油断すると、大軍で攻め込まれる。力の時代である。負ければそれまでなのだ。正義や理屈は通用しない。攻め取られたくなければ、力を持つしかない。

新九郎がわざと小勢の供廻りにしたのは、大森氏に疑惑を抱かせぬためである。

さらに、かなりの手土産を持参したが、それらの荷馬や宰領の士卒など、小田原にとどめて来ている。

これは一種の人質の意味もある。

他国に来たのだから、そのくらい、敵意がないことを示すのは礼儀のうちであった。

「御出でのことを伝えてまいりましょうか」

「そうだな、驚かすのも悪いな……」と、新九郎は一寸案じたが、「いや、面識があるのだから、突然のほうが面白かろう」

新九郎は効果を考えていたのだ。

かれが馬を進めて総世寺に近寄ると、山門の前で、上半身裸になって、倒木を切っている坊主がいた。

嵐で倒れたらしい大木である。大まさかりをふるって太枝を切っている。

まだ二十代とも見える青僧であった。隆々たる肉塊に汗が光っている。大まさかりを振りあげては、がつッ、がつッと太枝を切り落す。小気味いい音が、午後の空気の中でひびいている。

「これ、総世寺の者か」

と、案内の武士は声をかけた。

僧は返事をしない。背中を見せているのだから、聞えないのか。

見晴らしのいい場所だし、馬蹄の音が近づいたのなど聞えているはずだ。知らないはずはない。

「これ！」と、武士は声を荒げた。

新九郎の手前もある。威勢のいいところを見せようとしたのだろう。

「耳がないのか、坊主」

と、怒鳴りつけた。

「耳はある」と、青僧は応えた。「聞えているぞ」

そう言いながら、振りかえろうともしないのだ。

傲慢というより、いかなる権威にも阿ねようとしない粗野な態度なのである。

「こりゃ、聞えているなら、こっちをむけ」

「用があるなら、待っていろ」

「こやつ、無礼な！」

侍はいきり立った。刀の柄に手をかけた。

そんな気配にも驚く様子はない。まるっきりかれらを無視して、大まさかりをふるっているのである。

新九郎は案内の侍を制して、穏やかに声をかけた。

「そのほうにものをたずねたい」

「何か」

依然として背中をむけたままである。

「当寺に浩然と申す客僧が罷り在ると聞き及ぶ。突然ながら御意得たくてまいった」

「ああ、いるよ」また、ばさっと、枝を切った。「庫裡にお出でなされ」

汗みどろになったまま、振りかえりもせずに言い放った。

礼を言って、新九郎は馬をおりた。

総世寺の境内は静かだった。陰暦八月なかばといえば、すでに秋である。日中の陽ざしはまだきついが、樹陰に入ると風は涼しい。

庫裡に行くと、小坊主が出て来た。

意外だったのは、新九郎の名を言うと、お待ちして居りました、どうぞこちらへ、と、心得顔で招じたことである。

どうして新九郎が来ることを知っていたのか。城から一足先に報じていたのか。しかしそれなら案内の者をつけてくれるはずはない。

麦茶の冷えたのが出た。麦茶を井戸の中に吊して冷やしていたという。

日盛りの道を来たので冷たい麦茶は咽喉にこころよかった。

従者たちは土間と軒下に腰をおろしている。小坊主はかれらにも麦茶をふるまった。

裏のほうでざーざー水音がした。それが、水をかぶって汗を流す音だったと知ったのは、ほどなく、新しい僧衣をまとって、爽やかな顔で入ってきた浩然を見てからである。

「ようこそ、わたらせられましたな」

「お、さきほどの」

驚いた。

さっき山門の前で倒木を切っていた僧ではないか。

「夜来の風で倒れましてな。大木ではござったが、中は空洞になっておりましたゆえ、倒れたのを切って薪にしようと思いましてな」

「浩然どのか……」新九郎はまじまじと見た。「一度、お逢いしていたので、見間違いはないと思うていたが」

「それがしの方では、おぼえて居りまする。随分、以前でございますな」

「左様、小田原の城内で……」

あれはもう何年前になるか。新九郎が江戸の太田道灌に会いに行く途中、小田原に立ち寄ったときだった。

大森氏頼の紹介で知り挨拶したのである。

あのころは、まだ少年の面影があった。育ちのいい好感の持てる青年という容子が印象に残った。

あのころから見ると、随分と成長した。すでに壮年である。どこかに弱々しさを残していたのが、見るからに逞し

く精悍な風貌になっている。
あの淋漓たる汗にまみれていた赤銅の肌は、鍛え抜かれたものだ。首すじも太く、眉は黒く眼は涼やかであった。
おのれに自信を持った壮者の表情である。そこには、苦難を切りぬけてきた者の強い意志と、絶望を近づけぬ自信があふれていた。
その自信はまた、物腰を謙虚なものにしている。自信のないやせ犬ほど眼を怒らし、吠えたけるものだ。
新九郎はまじまじと、浩然の顔をうち眺め、遠い昔を想った。伊勢を彷徨していたころの、おのれの姿を想った。
(丁度、昔のおれのように)
かれもまた野望を裡に秘めて、この寺で日々鍛錬しているのであろう。
倒木を切るという力仕事も、客僧の身のくせに、自ら探したことにちがいない。
「ずっと、この寺でお過しであったか」
新九郎は、いたわりと好意をこめて、浩然を見た。
「身を潜めるにはよいところです」
浩然——三浦義同は微笑で応えた。

三浦太郎義同は、三浦陸奥守時高の養子である。
三浦半島一帯を領する三浦氏は鎌倉時代からの地豪であった。源頼朝の家臣三浦大介義明が後胤である。その累代の勢力はあなどり難いものがある。
昨日今日の領主なら、民衆との関係がうすいが、代々となると土地に密着している。
民衆との関係が深いから血統を辿れば、どこかで縁辺につながることになる。
こういう土地柄では、他領からの侵攻が難しい。
武士と民衆という関係ではなしに、侵されることが、自分たちの生活への脅威となって反駁するからだ。
そのつながりが薄ければ、攻められるのは武士で、民衆は攻防の外に居ることもできる。
むろん巻き添えは避けられないが、少なくとも感情的に部外者たり得るのである。
この従四位下陸奥守三浦ノ介平ノ時高には子が無かった。ために、上杉治部少輔高救の子を養って嗣子とした。
これが太郎義同である。
ところが、俗に貰い子をすれば、子が生れるというように、間もなく、実子が生れた。
時高は飛び上らんばかりに喜んだが、次に困惑もした。
太郎義同の始末である。これが名もない者の子だったら、どうにでもなるが、治部少輔の子である上に、後を嗣がせるという約束で貰っている。
実子が出来たから、元へ戻すというわけにはいかない。自然死を待つか、策を弄して殺してしまうかもしれない。

あとは、本人が自由意志で出てゆくだけだ。
時高は後者を選んだ。ママ子いじめの典型である。いびりだしたのだ。
義同は大森式部少輔氏頼の甥である。藤頼との関係はしたがって従兄弟になる。義同は三浦半島の新井城を飛びだし、小田原に来ていた。
不憫に思った氏頼が保護していたのだが、氏頼には藤頼という実子がある。
藤頼は一に実頼とも名乗ったことがある。因みに、義同の母は実頼の女(娘)とする説があるが、それでは年月が合わない。これは氏頼の父民部少輔憲頼の間違いであろう。憲と實では写本転記などによる間違いが考えられる。
この大森氏は小田原を代々領しているが、その家系は五代を数えているから、豪族として大したものだ。
その勢力範囲は西相模だけではない。東駿河にも及んでいる。
駿東郡深良村の霊亀山奥禅寺は大森氏の開基でその塔頭松寿院は大森氏の大祖駿河守惟康の香花所であるし、同郡生土村の雲居山乗光寺も氏頼の開基である。
母の実家である小田原城に保護される身となった太郎義同は、悶々の日を送った。
かれの立場は奇妙なものであった。おめおめと、生家に、(いびり出されました)と言って帰るわけにはいかない。
何よりも、男が下る。若いながら武将としての誇りがある。その誇りを失うようでは、誰もかれに従いて来る者はなくなる。
武士はあくまでも、猛く、強いことが条件であり、そこに尊敬と信頼が生れるのだ。
たとえば政治に於ける仁慈などは、やはりこの乱世にあっては二ノ次だ。
〝強い〟という条件があってこそ、それに〝従う〟ことで、家臣や民衆はおこぼれにあずかる。そこには、生活の必然的条件がある。仁政はそれが成ってからである。
したがって、敗北を知らない新九郎のような、強い上に温情のある武将が絶対信頼を得るわけだ。
「いつまでも、とどまっているがよいぞ」
と、氏頼はこの甥に温かい目をむけたが、それだけに熱い血を燃やす太郎義同は、安穏と城内で遊んでいられなかった。
(一日も早く、新井城に戻りたい)
戻るということは、しかし、この場合、養父を追い出すということである。
むろん、易々と出てゆきはしない。
(力で叩き出す)
攻め取る。

それ以外に、太郎義同が、男になる道はなかった。
かれの人柄に好意を寄せる者も少なくなかったし、老臣の中にすら、時高の非道を非難する者もいた。
が、なんといっても少数派である。氏頼に頼めば軍勢を貸してくれそうであったが、それとても、多勢は望めない。
それに氏頼はとにかく、この十年ほど、健康がすぐれなかった。やむを得ぬ戦さには出陣するが、できるだけ内治を心がけ、からだをいたわっていた。
その上、氏頼の心配は、隣の新九郎の勢力伸長にもあったのである。
伊勢新九郎が北條新九郎となったときも、すぐにも東漸してくるのではないかと心痛した。
伊豆一国を掌握したと聞けば、国ざかいの警戒に数百人を割かなければならなかった。
近ごろ、そうした心労が重なって、一層弱りかたが目立っている。
新九郎の方は、野心の牙を内に秘めて、侵攻の気配など全く見せないが、年の功で氏頼は警戒を弛めない。
今度のことも、新九郎が義同の隠棲を見舞いたい、と辞を低くして頼みこんだのだ。
義同は小田原城にいるのが辛く総世寺に客僧として入り、薙髪して浩然と名乗っていたのである。
それも、ただ寺で閑日月を楽しんでいたのではない。
当時、教育機関というものがない。寺はその意味で、(貴族社会を別にして)唯一の学問の場であった。
義同は寺内にある多くの書をひもとき、晴天には体力を養い、武技を錬った。また、慕い来る腹心らと新井城奪取について、あれこれ劃策していたのである。
新九郎が、小田原に来て、義同に逢いたいと申し込んだことも、すぐに腹心の者が知らせに来ていたのである。
義同は倒木の伐採をやめなかった。小坊主にだけ、来客のあることを告げ、悠然と、作業をつづけていた。
(来た!)
と、感じた。
新九郎の来意は見通している。
(やつも、おれがほしいのだ)
兵法三略を学び、軍勢の動員如何が勝敗の大きな鍵であることを知った義同は、新九郎の野望をすでに見ぬいていた。
(茶々丸を討つ——その大義名分で、三浦を討ちほろぼす算段であろう)
そのためには、しかし、新九郎の軍勢では足りまい。
(今川からも借りるであろうが、それだけでは)
新九郎ほどの男の考えることだ。ソツはない。
ソツがなければ、当然、
(三浦太郎義同、新井城へ還る)

という名分がほしいはずであった。
(いよいよ、おれの出番だ)
義同は待っていた甲斐があった、と、思った。
新九郎は茶々丸を討つ。おれは養父時高を討つ。
目的は一つなのだ。三浦半島の新井城を攻めとる。それから先のことは、智慧合戦である。
義同にとって新九郎との合同は、新しい道であった。これが、凶と出るか吉になるかは、かれ自身の才覚と、天運であろう。
そのことにも、義同は戦国武将としての躍動するような喜びを感じたのである。
が、表面的には、そうした表情はあらわさぬ。
きわめて冷静に、新九郎を迎えた。
「——木を切っていましたな」
新九郎は、おのれの子ほどの年齢である義同を慈しむように見た。
「倒木が邪魔でしたから」
と、義同は明快に答えた。
「かなり年古りた欅の巨木でしたから、もう寿命でしたろう。もっとも、喬木ほど風当り強いという譬えもありますし」
冷えた麦茶に咽喉をうるおして義同は語を続けた。
「こうやって、寒村の寺にひっそりと生きながらえていますとな、さながら生ける屍(しかばね)のようなものでござる。が、幸い強風に倒されるようなことはない」
と笑いを噴きあげた。
才能のある男が、雌伏するのは辛い。身内に鬱勃たるものを秘めて、凝っと大風の過ぎるを待つ。
(喬木ほど風を受けるか……なるほどな)
新九郎は、おのれの子供ほどの年齢の太郎義同をうち眺めて、
(なかなかに鋭い男よ)
と、心中頷くところがあった。
思った通り、切れ者だ。苦難の歳月が、磨きをかけている。人間的にも練れている。
(将来の大器)
と、見た。
この新九郎の眼は誤っていない。
のちのち、この義同が、新九郎にとって手強(てごわ)く邪魔な存在になってくるのである。
だがそのときは、まだ、そこまではわからない。
いま必要なのは、三浦攻めの、〝名目人〟となるべき男であった。
「しかし、かようなところで、よく我慢できましたな」
「やむを得ませなんだ」
と、また義同は微笑した。

「しかし、かような譬えもあります」
「……」
「尺取り虫の身を屈するは、前へ進むがためとか。時にはやむを得ぬこと、麦は踏むほどに強く伸びるとも申します」
それだけの自負があるのであろう。
「てまえが身を屈していたればこそ、伊豆守護職たる御方が、かように迎えに来て下さる」
昂然と言い放つのだ。
不敵な男である。
「その通り、正にその通り」手を打たんばかりに新九郎は応えている。「おぬしには、それだけの値打ちがある。どうだ、売ってくれるか」
「買うて下さるか」
と、義同も調子を合わせた。
「まず、失望なさることはあるまい。が、これだけは、如何ともなりませぬぞ、はじめにお断り申しておく」
義同はつるりと、青い才槌頭をなでた。
「ははは、いくさは髷ではせぬものさ」
「して、出立は」
「急ぐことはない。それより万全を期すことじゃ。されば、およそひと月あまり」
「それだけあれば、いくらか、髪も伸びましょうな」
だが、その一カ月の間に小田原では変化が起った。
式部少輔氏頼の病状が悪化したのである。老齢ではあり、藤頼が後を継いだ。
氏頼は老いてもいたし、病気でもあったのですべてに消極的だったが若いだけ藤頼は、元気がある。
従弟のためでもあれば、喜んで三浦攻めに、参加することになった。新九郎は勇躍して、さらに、今川修理大夫氏親と、上杉定正に頼んで軍勢を出して貰った。
扇谷上杉修理大夫定正が新九郎の頼みを聞いて、軍勢を武州から南下させたのは、ただに交誼のゆえばかりではない。
かれの宿敵は山内上杉民部大夫顕定である。三浦時高はこの顕定のほうの被官になっている。
三浦氏を討ちほろぼすことは、即ち、宿敵の力を大いに削ぐことになる。
いうならば、新九郎に恩を売ると同時に、宿敵の勢力を減らす。
一石二鳥であった。この方策は遠交近攻策でもある。
軍勢を動かすというのは大変なことだ。食糧から武具から、馬匹その他大変なことだ。その失費に対する見返りは、むろん計算に入っている。
この時代の武士は、計算高い。自分に得なことしかしない。損得の計算が早い。後世よりも、よほどリアリスティックである。

今川氏親のほうは、ちょっと違う。これは新九郎をバックアップすることで、東方の守りを厳にするという意味も含んでいる。
〔北條五代記〕には、新九郎が関東へ爪を研ぐに至ったのは、神のお告げがあったのだと説いている。
まず、伊勢新九郎が北條を名乗るに至ったのは北條の地に住んだからだが、
――此旧跡を再興有て早雲（新九郎）居城し給へば皆人北條殿といふ早雲いはく北條家たえて久しき跡也われ此名をもとめずといへ共諸人其名をよぶ……
と。
さらに、
――願望によって三島大明神に参籠通夜し給ふ霊夢に不思議の告げ有とかや扨又大杉二本有けるを風一ツ出て喰折たると見て覚めぬ……
この夢を占い方に訊ねると、
「これは目出たい吉兆でございます。関東奥までの国司は両上杉殿上野相模両国にましますが、この二本の上杉を御退治になる霊夢でございます」
「そうか、神慮か……」
と、これから新九郎は関東制覇を神意に添うものとして行動に出た、というのである。
〔北條五代記〕は早雲以後の北條家の事蹟や当時の風聞を記したものだが、ひいき目であることは論をまたない。
したがって、こうした記述は多分に伝説的である。
何かというと神仏をひきあいにだすのも、この時代の風潮だし、神慮といえば、すべて肯定されると思っている。
北條の姓うんぬんは、風説であろう。やはり北條家に聟となったことがその正統性を自らあらわしているのではないか。
ともあれ、新九郎の関東出馬は茶々丸のせいで、正当化を得たといえる。
さらに新九郎をして決意させることがあった。
興国寺城の御殿でおりょうが男児を産んだのである。
葛山氏の養女として新九郎に輿入れしたおりょうが男子出生したことは、時期が時期であり新九郎にとってこの上ない喜びだった。
（吉兆だ、相模を攻めるよい吉兆だ）
永い放浪の旅と戦さに明け暮れた人生の果てに、漸く、伊豆一国を掌握したかれである。事を起すにも慎重であった。
ある意味では、丁度いい時期だったといえる。
一歩一歩、かれは目的に向って進んできた。家族のことを省みるひまはなかった。大志を抱く男にとって毎日が戦場でもあったのだ。

いうなれば、大志を述べる基礎が漸く出来上ったところだったのである。

「男の児か、でかした」

新九郎はすぐにも飛んで帰りたかったが、その閑がない。

小田原城では氏頼が衰弱して、容態が悪くなったという。おのれの喜びだけをあらわにしては、氏頼の疑惑を深めこそすれ、与力の軍勢を出させる目的が阻まれる。

氏頼は藤頼のことを心配していた。いまさら、箱根権現の別当海実に大森十六代を継がせるわけにはいかない。臨終になって、氏頼はそのことが悔やまれたにちがいない。

新九郎はこの子に、

〝菊寿丸〟

と名づけた。

これが後の長綱、すなわち後北條を支えた幻庵である。

新九郎の子供の誕生を知った浩然の太郎義同は、

「幸先がよい、てまえも男子がほしくなりました」

よほどそのことに感銘したらしい。

「男児が一人でもあれば討死しても、おのれの血を残せる。敗れても恨みもはらせる。男児をもうけたい」

義同が旗を揚げたと聞くと、遠近から、かれを慕う者たちが駈けつけてきた。

上杉家からも来たし、時高の被官なのに、縁を絶って駈けつけた者もいる。

準備が整ったのは、九月下旬になってからである。

「浩然の名を今日かぎり捨てる。娑婆へ戻ったしるしに、今宵は生臭ものを喰うぞ」

焼魚をたらふく食べたあと、義同は村の娘のところへ行った。

前々から眼をつけていたという。

「今宵から三浦太郎義同じゃ、おれの子を生ませたい」

のっけから言った。

娘はお可久と称った。浩然のことは、以前から敬愛していたのである。

「生ませて下さいまし」

「おれの子じゃ、強い子が生れる。そなたは、おれの子を生むにふさわしい女よ」

夜の白々あけまで、義同は女体を愛撫した。疲れを知らなかった。

三浦太郎義同は、その女を一夜抱いたことで、すっかり浄界から立ち戻った。

義同はおのれの行動を、はっきりと割り切る性格である。ためらいはない。

話が戻るようだが、諏訪ノ原の総世寺に一時蟄居したのも、ただ、人里離れたところとして選んだわけではない。

総世寺は、背後に山を背負い万一の場合は城として役に立つ機能があることを見ぬいたからにほかならない。

地の利からいっても、この諏訪ノ原は陣城にふさわしい。

後年、天正十八年に太閤秀吉の小田原攻めの際、徳川家康がここに陣を布いた。

はじめは一時的なものだったが小田原攻めが長引くにしたがって大規模なものにした。その遺構がいまに残っている。

氏頼の老衰と病いに対して、新九郎は、度々見舞いの使いを出し、贈り物をし、薬草を送らせ、親身も及ばぬ手を尽くした。それは、異常なほどであった。苦労人だったら、心底を見抜いたろうが、藤頼の若さは気がつかない。

後を継いだ藤頼の心を柔らげることが、目的だったのである。

かれはこの事態のために茶々丸攻撃の予定の期日を延ばしている。

「お心痛みであろう、出陣のことはなかったこととして、看病専一にされるがよい」

新九郎は理解を示したが、若い藤頼は、そう慰められると、かえってむきになった。

「いや、武士の一旦約束したこと、準備も整っておりますれば」

「無理をなされては」

「そのようなことはござらぬ。従弟のためにも、新井城を攻めとりましょうぞ」

藤頼は勇み立った。

むろん、新九郎にしてみれば、味方の人数は多い方がよい。それにかれらが先鋒を承れば、それだけ、新九郎の手勢が損傷を免れる。

三浦太郎義同は二百騎を率いて先鋒になった。かれにとっては、茶々丸などどうでもいい。茶々丸攻撃を口実に、非道の養父を討つ。

義同の後備えとなったのは大森藤頼である。氏頼の後を継いで、武名を挙げたいとねがっていた。

やはり、育ちのよさであろう。世の中を見る眼が甘い。一面しか見えない。

義同がまず攻撃の矢を放ったのは、真田城であった。

真田は現在、平塚市に包含されている。市の北方、秦野市と境を接するあたりである。

三十メートルたらずの丘だが地の利を得ている。

東北四キロほどで伊勢原市の中心に至るが、市街の南郊に岡崎城址がある。真田はその支城だった。

山城から平城へと移行しかけている時代である。

この平塚市の真田城はその遺構から考えても、非常に興味深い。

平城のあとはたいていがそうであるように、ここも寺の境内になっている。曹洞宗の天徳寺である。

北方を大根川が流れ、南方を金目川が流れている。いず

れも東方へ走っているが、台地はこの二つの川にはさまれ、細流が両者をつなぎ、さながら城の掘割を構成している。

台地の北西部は現在でも低湿地である。

大根川の水をひけば、容易に泥沼となって外敵の侵入を防ぐことが出来る。

義同は、先鋒を承るや新九郎に、軍略を説明した。

「あの城があるかぎり、岡崎城はなかなか落ちますまい。徒らに岡崎城を攻めても背後を衝かれまする。されば、まず全力をあげて真田城を襲い、城に雪崩れこむと同時に、後備えをもって岡崎城に打ちかかる。

真田城危うしとなれば、岡崎城からも、援兵が出ましょう。そやつらを討つとともに、岡崎城を攻める。この軍略でもって一両日に二城を抜き、一気に逗子の住吉城へ押し寄せまする」

理路整然とした義同の戦法に、新九郎は内心舌をまいた。

昨日まで、寺で仏のお守りをしていた男とも見えない。

「よかろう、一両日で陥されよ、新井城を陥すのは三日のうちであろう」

と、けしかけた。

実際、烽火をあげたとなるとその勢いを駈って一気に攻めなければ、徒らに守りを固める時間を与えることになる。

堀越御所を攻めたときも暁闇をついて駿河湾を一気に乗り切った。

寡勢をもって攻めるには、それしかない。三浦一族の強大な勢力は、時間を与えれば鉄壁のものになる。

新九郎が上杉定正の軍を動かしたのも、北と西から攻める方策だからであった。

実際には定正の軍勢は来ないでも、来襲の噂だけでも、その価値がある。

西から東進する新九郎に全勢力を傾けることが出来なくなるし、管領の軍勢という噂は、それなりの影響がある。

これに対して、定正と対立している山内顕定がどうでるか。むろん三浦時高と茶々丸は顕定に、救援を乞うだろうから、その閑を与えず攻めたてなければならないのだ。

連日のように雨が降った。時雨である。

雨はさながら新九郎らに応えるように、大根、金目の両河川の水かさを増し、泥田を深くした。

「これでは攻め難い。天の救けぞ」

真田、岡崎の両城では、空を仰いでほっとした。がその気の弛みが、敗を招くに至ったのである。

雨で水嵩が増せば渡河が難しくなる。膝までの湿地は腰までとなって寄手には、最悪の条件になる。

そう思うことが城兵を安心させた。安心は、気をゆるませるのだ。

ものごとには、必ず両面がある。寄手が攻め難いのは事実だが、城側からすれば、雨の帳が、視界を利かなくもす

るのである。

義同が養父攻めを扇谷定正に報告して合力を乞うたとき、定正は、

「岡崎を討つと見せて、真田を攻めよ」

と、教えている。

定正は家老の太田道灌を疑惑から暗殺して以来、とみに衰えてきていた。

四年前（道灌暗殺後五年後）には、まだ四十七歳だったのに、養子朝良（兄朝昌の子）に切々たる思いをこめて遺言状を書いているくらいだった。

自分が養子を貰ったのだから、甥の義同の養父への叛逆は、考えさせられるところもあったろう。

もっとも血のつながった甥を貰うのと、権力を利用しようとして縁組みするのとは意味が違う。

養子朝良には問題はない。が、感情的に定正には義同が、我が子のように思えた。

不愍なせいもある。定正は、この大事な戦さに、おのれが動けぬのがいまいましかった。

大事というのは、ただ、新井城を陥し、三浦の勢力をそっくり義同のものにすることではない。その含みはむろんあったのだが、時高を討ったあとの新九郎の出方が案じられたのだ。

嘗って新九郎は定正に対して関東管領への敬意を表している。

太田道灌とはお互いに肝胆相照らし合った仲だが、その道灌の主筋になる以上、新九郎も一応の礼を尽くしている。

氏親がまだ竜王丸だったころ、一族の範満との争いに、定正が野心を伸ばしてきたときのことである。

定正の野心を見ぬきながら、新九郎は巧みに、道灌の心に食い込んで、難を免れた。

あのとき、下手をしていれば、今日の今川家は、ない。

定正は、伊勢新九郎という、名もない男によって、野望の牙を折られたことに、憤慨しながらも、

（恐るべきやつ）

と、その炯眼に一目置いた。

道灌を猜疑して暗殺したのも、この新九郎と結んで自分を弑逆するのではないかと危んだからにほかならない。

時の流れは、この新九郎を伊豆一国の主とまで成長させている。義同が心服しているらしいことにも、将来の危惧を感じるのだった。

だが、義同という男は、しかしそれほど単純ではなかったようである。

心服しているというのは見せかけにすぎなかった。野望にヴェールをかけていたのだ。

誰もが一筋縄ではいかない人物ばかりであった。

乱世はお人善しでは生存さえ難しい。

一癖も二癖もある人物でないと人の上には立てないし、統率力のない者は敗北するしかない。

その行動は実と見えて虚であり、陽に見せて、陰であった。陰かと思えば実であるときもあるし、虚影と思わせて実体をあらわすときもある。

昨日の友も、今日は敵となり、実の兄弟もいつ敵対しあうかわからない時代では、そうした変化が生きる智慧であった。

話が飛ぶが、乱世にはじまる兵法（剣法）は、〝戦場で斬りおぼえにおぼえる〟やり方から、鹿島香取の神人による〝剣つかい〟の方法を生むのだが、その乱世の兵法家たる宮本武蔵が、度々の試合に後世から見て卑怯な方法を用いて恬として恥じなかったのも、兵法としては至極当然とされていたからである。

つまり、目をくらます、瞞す、というのも、強弱を争う以上、どんな手段でも勝ちさえすれば、即ち、強いことを意味するのだし、瞞されるのは〝弱い〟、という論理である。

後世――ことに現代人の感覚では、許せないことのように考えがちだが、もともと戦さの駈け引き、というのは瞞しあいであり、軍略、戦略というのも、すべて、

（いかに瞞すか）

に尽きる。

武器のない農民に、夥しい旗を持たせて大軍に見せるのもそれなら、少数の先鋒にわざと一戦さののちに退かせて伏勢がはさみ撃ちにするのなども堂々たる軍略なのだ。

兵法も所詮、その域を出ない。剣の法とは、いかに勝つかであり、それを禅と結びつけて〝道〟に高め、〝道徳〟と関聯させたとき、すでに、真の意味の剣の法はいのちを失ったといってよい。

したがって、兵法（剣法）と剣道とは全く次元の異ったものとさえ断言してもいいほどなのだ。

乱世の生き方とは、そのような甘いものではない。

斬るか斬られるか、殺すか、殺されるかである。それ以外に何もない。

扇谷上杉定正にしろ、太田道灌にしろ三浦義同にしろ、北條新九郎にしろ、そうした乱世で生きぬき、擡頭するだけの頭脳を持っていた。

勝敗とは、その智慧比べでもあったのだ。

そして、その才覚の劣った者は没落する。

「新九郎には用心せい、彼奴の馬はうしろへ走り出し、彼奴の杖は槍に変ずる、山を見ながら海の深さを計っているのだぞ、くれぐれも用心せい」

定正は義同にそう訓した。

（まず、真田城を攻め陥す）

それが先決だった。

義同はいま、

〝養父を討つ〟

ことに勇躍している。

が、ここまではっきりと、態度を表明したのははじめてであった。

いままで、かれは、養父とその実子の犠牲者だった。

哀れな犠牲者だった。ママ子いじめのママ子だった。

かれは養父にいびり出されたことに恨みはしても、哀しみも、泣きもしなかった。

怨恨の炎を裡に燃やすことで、逆境を生きぬいたのだ。

かれは、そろそろ養父時高の態度があやしくなりはじめたころから、口実を設けては、相模の城を訪れ歩いた。

小田原の母の城へゆく、その途中に立ち寄る。あるいは帰りに一寸休息に、というふうにした。

かれの若さと、その人当りのよさが、真意を疑わせなかった。

逗子の住吉城や、この真田城、岡崎城などは、度々訪れている。

かれは軍記類書を好み、孫子の兵法（軍法）などを愛読していたし、好奇心と後学のためにすぎなかった城内参観が、しだいに、養父時高と義弟への敵意を固めるとともに、目的が違ってきた。

（この城を攻めるようになろう）

そのために、識る。

攻める立場から眺める眼は真摯であり、裏から見て欠陥を把握した。

どんな城にも脆いところがある。金城鉄壁、難攻不落の城とは、あくまでも、外側からのみ見ての話である。

人間にも表裏があるし、いかに強豪でも弱点はある。いわゆるウイーク・ポイントは、ギリシャ神話の怪力の持ち主ヘラクレスにもあるのだ。

軍略とは、そこを識ることであり、そこを衝くことである。

城の抜け穴のあるなしもさぐったし、塀にも強いところと、脆いところを見抜いた。

地盤の柔らかいところ、硬すぎるところも攻防に影響する。

岩盤が硬すぎて、支柱の埋没部分が少なければ、いかに塀の厚さがあっても、長柄や鉤や、縄鉤でひっかけて、引き倒すことができる。

外目には一様に堅牢に見えても、それぞれ違っているのだ。

門扉にしても、乳鋲打って鉄蝶番でがっちりしているように見えて、木部が腐っていたり釘が腐蝕されて脆くなっているのもある。どこを一押しすれば、容易に門扉が破れ

るかがわかるのだ。
真田の城にも、岡崎の城にも、弱点がある。義同はそれを見抜いていた。
真田城の欠点は土質の脆さにあった。
雨と増水は、城の濠と泥田を深くしたが、それだけ周辺の土を洗い、塀の下をえぐっていた。
義同はそれを見抜いていたのである。屈強の足軽三十人を選んで、鍬を持たせ、塀の下を掘らせた。
小舟を操って近寄り、土を掻きとらせたのだ。
「彼奴らを近づけるな、射よ、射よ」
城内から横殴りの雨のように矢を射かけてきた。
濠は必ず櫓などから、矢が届くように出来ている。死角をつくらない。
小舟の方は、楯をかかげ、あるいは舷に楯を並べ、さらに上に伏せて屋根として、死物狂いに漕ぎ寄せる。
矢は蝟のように板楯を打っている。
小雨の中である。寄手は小高いところから遠矢を射て、城内の射手を牽制しようとしたが、雨と風に遮られて、あらぬほうへ流れるだけだった。
本丸はこの城をかたち作る丘陵の南西部のもっとも高くなったところから、北へ延びた一郭で、北方に段々低くなっている。
したがって、城の守りは南西部がもっとも堅固だった。
南と東の二方から攻めに攻めた。
城兵たちの大半は、そこへ集って防戦に熱中した。
雨がふたたび烈しさを増してきたのは夕刻になってからである。
暗くなっては、敵の姿が見えなくなる。火矢を飛ばすのもこの雨では効果がなかった。
その雨の中に岡崎城から援軍が駈けつけた。
「開門、開門」
城兵は松明をかざして援軍の将の顔をあらためた。が、それだけでは、安心できない。
「合言葉は」
と、城内からは怒鳴った。
「三浦！」
これに援軍は、
「三崎」
と、こたえている。
門が開くと援軍はどっと入ってきた。
「援軍が来たぞ」
わッと、城内は湧きたった。
だが、その援軍は全部が味方ではなかったのである。
岡崎城からの援軍が駈けつけるのを見計らって、雨と宵闇を幸いとまぎれこんだ人数がいたのだ。
援軍は六十名ばかりであったが城内に入った軍勢は、八十名ほどに増えていたのだ。
この二十名ばかりが、城内の各所に放火したのである。
外側は雨に濡れているが、屋内の調度などがめらめらと燃えあがり柱から壁板、棟木に燃え移った。
「火事だ」
「放火じゃ、消し止めろ」
「乱破が入ったぞ、打ち殺せ」
城兵たちは狼狽した。
雨中の火事である。湿気ているし、火は濡れた軒を焦がしては黒い煙を濛々とあげて、一層混乱を煽った。
乱破という叫びは味方同士で猜疑心をかきたてる。その不安と恐怖に乗じて、乱破たちはあるいは隠し持った縄梯子を投げおろし、あるいは不浄門や脇門の閂をはずし、石落しの用意をした足軽たちを狙い撃ちに倒した。
「踏み込め、城へ」
義同は一艘の小舟から指揮していた。かれはこの緒戦に於ける成功を確信していた。そして、これを手初めに、三浦半島をおのれのものにする将来を描いていたのである。
縄梯子を伝わって、蟻の群れのように城内に乱入し、開かれた門からは雪崩のように寄手が躍りこんだ。
そこ此処で、はげしい斬り合いとなり、名乗りと怒号と悲鳴とが、名状し難い叫喚の渦となって城内を包みこんだ。
こうなると城兵は、もう斬り合うだけが精一杯で、侵入を防ぐほうには手がまわらない。
草も土も濡れている。叩きつける豪雨の中での凄絶な戦いは、攻めるほうに分がある。
城兵たちは小半刻と経たぬうちに斬りたてられ、算を乱して逃げだした。
この敗走の将士は、いうまでもなく、岡崎城に向ったのである。
あらかじめ、逃げ口を開けておいてある。
窮鼠かえって猫を咬むという、そこまで追い詰めないほうが早く降参させる術でもあるが、そのためではない。
逃げる真田城兵の間に新九郎方の兵がまじっていたのである。
雨はしだいに小降りになってきていたが、闇夜だけに、逃げる連中が気がつくべくもなかった。
さらに雨で道はぬかるんでいる。
乱闘のあとでもある。誰もが、びしょ濡れで、泥と血にまみれていた。
すべって転んだらもう、全身泥だらけになるし、自分がはねあげるだけでなく、他人の蹴上げる泥をもろにかぶって、眼も鼻もない。
その泥まみれ血まみれの敗兵が岡崎城に辿りついて、
「開門、開門お願い申す、これは真田城の大場角左衛門手にて井沢小伝次……」

などと名乗る者は最初のうちであとからあとから流れこんでくる敗走の兵の所属や姓名を一々たしかめるひまはない。寄手の乱破の兵たちも一緒に岡崎城へ入りこんでしまった。

岡崎城は当時、相模第一の城と称されて、その規模の大きさと備えの固さを誇っていた。

三浦時高自身はそのとき住吉城まで来ていたという。

住吉城は現在の逗子市小坪の海に臨んだ丘陵で、三浦半島の咽喉部としての要地である。

現在は小坪にマリーナが出来、岩礁のところが数万坪埋め立てられてしまって、景観がすっかり変っているが、当時は、南の山裾は波浪に洗われて、いかにも要害の地だったろうことが想像される。

現在はこの城址の下にトンネルが二つもくり抜かれているが上部には寺や神社があり、城址としての郭の様子がわかる。

眺望もきき、三浦半島に侵攻しようとすれば、遠く東を廻るほかに、ここを通ることはできない。

鎌倉からは二つの道が、トンネルと切り通しになっているが、当時は切り通しもなかったのではないか。

この住吉城に時高が来たのは充分、ここから総指揮がとれると思ったからだ。

それだけ岡崎城の守りを信頼していたからでもある。

かれは真田城が抜かれるであろうことは予測していた。が、岡崎城は大丈夫だと思っていた。

もしも万一の落城があるとしても十日や二十日は持つ。その間に、充分、助けにゆける。

逗子の小坪から、岡崎城の伊勢原までは僅かである。そのための後備えとしての軍勢を城内に置いていた。

馬も揃え、いざとなったら、駈けつける。

その配慮は、二段三段の構えがあった。

軍勢も、新九郎の動員数がだいたいわかっていたし、それを上廻るだけの数を揃えていたのである。

「伊勢ノ新九郎なにものぞ。彼奴を討って、茶々丸を堀越御所に還し奉ろうぞ」

と、号していた。

名家だけに一応、かれが呼集をかければ、集るものは少なくなかった。

「不肖の子が、おれに背きおったわ」

かれは、一層、義同を憎悪している。ママ子いびりしたことは忘れて、

「おれの実子が出来た以上、当然自ら出てゆくべきではないか」

とすら、おのれの信念に疑いを抱かなかったのである。

ところが、そうした時高の気持を、必ずしも家臣たちが信奉していたわけではない。

一応、かれの旗のもとには集っても、気持の上では、離れていた者が多い。それに気がつかなかったのが時高の失敗だった。

三浦時高が絶対に不落だと信じた岡崎の城というのは、伊勢原市の中心部から三キロほど南方の丘陵地帯である。

城址は平塚市に含まれている。現在も八幡台につづき岡崎や城所の地名が残っている。

周辺は水田に取り囲まれ、高さはせいぜい四十メートルに満たないが、起伏に富んで屈折が多く、自然の要害をなしていることがわかる。

城の遺構はだいたい二千平方メートルくらいのものだったらしいが、複雑な地形が役に立っている。

本丸は八つ手のような丘陵の中心部になっていて、現在は無量寺という寺があるが、おそらく本丸矢倉のあとであろう。

空堀のあとらしい窪地や、水を引いた堀のあとも、それとわかるが、これくらいの高低の差だと、上からの矢がよく届く。

八つ手のような丘陵だけに、攻めのぼろうとすれば、あたかも檻の中の獲物を狙うように射られてしまう。

そのための矢倉址らしいところが現在でも指摘される。

三浦太郎義同が力押しでゆけば、攻めあぐんで、徒らに日時を費やすと見たのは正しい。

真田城の敗走の兵にまぎれて、城内に入りこんだ義同の軍勢は本丸に駈けこんで、そこらに放火しはじめた。

厩に火を放って、馬を切りほどき、松明を蔀蔵に投げこんだり、とがめだてる城兵を斬り倒しあるいは突き伏せるなど暴れはじめた。

この岡崎城を預る守将は佐々木弥右衛門宗弘である。一族の同苗意次郎勝武、神坂重左衛門氏吉らにそれぞれ矢倉を守らせていたが、こうなっては、もう城は救えない。

「ただちに住吉城へこの由を報じよ。かまえて敵の手に捕われるな」

気の利いた者を注進に走らした。

義同が、この〈闇中ノ兵、敵味方判別シ難〉きことを幸いとして、雪崩れ込ませたのは、やはり兵法（軍学）に打ちこんだたまものであろう。

いわゆる〔奇兵之備〕とはこれである。

人間は事の始めに成功するのと失敗するのとでは、人生行路に大きな違いがある。

すでに義同は三十八歳になっている。

この戦さがはじめてであった。一般的な意味では遅い。が、遅いことは、この場合、かえって幸いした。大器晩成型は、それだけ人生を長くするのである。義同はこの初陣で大勝したことが、あとあとまで大いなる自信となった。

「岡崎城危うし！」

の報が、住吉城（逗子市小坪）に届いたとき、時高は丁度湯を浴びていたが、

「なんと！」

と、驚きの声をあげて、立ち上った。

下帯ひとつの素ッ裸であった。

本丸の陣屋の中で、盥に湯をそそいでは、荒縄を丸めたタワシで小姓に垢をこそがせていたのである。

「武将たるもの、戦さの前には、よく首を洗うていないと、死んだ後、恥をかくものぞ」

と、冗談を言って、笑っていたのである。

こういう冗談は、勝算がなければ、なかなか言えないものだ。

万に一つも負けることはない。その自信が口を軽くしていたのだ。おのれの勢力を自認しきったところからくる余裕であった。

「心得のある武士は、古来、戦さの前には、よく飯を噛んだものじゃ、その心映えがわかるか」

などとも話した。

「それも、戦さの一刻以上前でなければならぬとした。一つには、飯が腹もたれしては、充分な働きが出来ぬ。さらには、首を掻かれたるときに、切り口から飯粒など出たれば、見苦しいがゆえじゃ」

その心映えを、おのれがせねばならぬことになろうとは、あまりにも思いがけないことだった。

誇張していえば、驚天動地の出来事だった。

「な、何かの間違いであろう」

と、怒鳴った。

「そやつ、これへ呼べ。何を寝呆けたか、われらをあざむき、士気を喪わせよう魂胆あっての、乱破のたぐいではないか」

「いえ、それは……」

取り次ぎの者は、時高の驚きと怒りが、大きすぎたことに、恐畏した。

「たしかに、佐々木弥右衛門どのが身内に相違ありませぬ。われらも、存じ寄りの者にて」

「呼べ、わしが糺す」

こういう時高の態度こそ、責められるべきだったかもしれない。

戦さはもともと、時の運でもある。軍勢の多寡必ずしも勝敗を決しないし、城郭の堅固もまた、安心できるものでもない。

時高はやはり先祖の三浦大介以来の血統を鼻にかけた、古い型の武将だったといえる。新しい時代に生きるには、欠けたものがあった。

使者は蒼くなって、時高の前にひれ伏した。

「いま一度申してみよ、岡崎の城が何として……」

「はい、まことに悪夢を見るが如き有様でござりました……」

使者は逐一、真田落城のしだいを話した。一刻を争うときだったのだ。何よりも早く応援の軍勢を送りだすべきではなかったろうか。

急を報じる使い番は次々と来た。あとになるほど、急迫した様子がはっきりした。

時高が応援の軍勢を西走させたころ、岡崎城は完全に義同と大森藤頼の軍勢に乗っとられていた。

義同はその喜びに浸ろうともせず、

「この勢いをかって、住吉城を陥そうぞ」

と、先鋒を早くも繰り出した。

守将佐々木弥右衛門宗弘の首級をはじめ、意次郎勝武、神坂重左衛門氏吉の首級を大槍に突き刺し、先頭に高々とかかげて、えいえい押しに進んだのである。

平塚北郊の岡崎城から逗子の小坪までは当時の道のりで三十キロくらいのものである。

この間に、城と呼べるほどのものはない。

鎌倉の二階堂に杉本城（現杉本寺の背後一帯）や藤沢市内の村岡城など小規模の城構えはあったが、古い時代のことで、当時は廃城になっている。

もしも、時高に冷静な眼があって、新九郎の力を過小に評価しなかったら、これらの城を改築し、それぞれに軍勢を配しておいたであろう。

そうしておけば、おそらく、義同が勝ちに乗じて、一気に小坪の住吉城へ攻めかかることもなく、あるいは逆転したかもしれない。

同じ負けるにしても、みっともない負けかたは、免れたに違いない。

なお、鎌倉といえば近世では玉縄城が思い浮べられるが、玉縄城が築かれたのは後年のことである。

三浦義同と大森藤頼の軍勢が茅ヶ崎辺まで来たころ、新九郎の麾下の大軍が東漸してくるのに遭った。

川の流れが合するように軍勢はさらに大きな川の流れとなって東へ進む。

稲村ヶ崎は現在切り通しの湘南道路が出来ているが、当時はむろん、こういう切り通しなどはない。

極楽寺の方を迂回しなければならぬ。それも細い小径だった。

軍勢は藤沢から三手にわかれている。

由比ヶ浜へ出てきたのが先鋒で、小坪の住吉城からは一眺のもとに手にとるように長蛇の列が眺められた。

「あれだけか」

時高は望楼から小手をかざして、

「極楽寺近辺に伏勢を置いていたら、打ち砕けたであろうに」

と、口惜しがった。
が、その見方は浅薄だった。
斥候（ものみ）の報告が櫛の歯を引くように、踵（きびす）を接して後から後からと来た。
鶴ヶ岡八幡の近くまで一手が攻めて来たという。時高をさらに狼狽させたのは、現在の金沢八景の南六浦から、住吉城に向って進んでくる軍勢があるということだった。
「さては、扇谷の！」
愕然とした。
上杉定正の意を受けた養子嗣五郎朝良が、迂回して背後をつくべく山越えしつつあったのである。

時高をして一戦も交えずに住吉城を捨てさせたのは、海上からの軍船の襲来だった。
夥しい旗を翩翻と風になびかして、大小の軍船が海上を蔽って漕ぎ進んでくるのが見えたのである。
「やあ、海上からもまいりまする」
「なんと大軍であることか」
住吉城は鎌倉のはずれ、逗子の海に臨んだ岬である。
由比ヶ浜がぐっと鎌のように湾曲してこの岬の丘陵が逗子との境界をなしている。
眺望のよさはいうまでもない。西をのぞめば、稲村ヶ崎が白浜のかなたに突きだし、その向うに江ノ島が見える。
晴れた朝には、その丁度中間の上空に富士が嶺が雪を頂いてくっきりと浮ぶのである。
その大小の軍船は江ノ島をまわって、住吉城に向って進んでくるのだ。
金沢の六浦からは背後を狙ってくるし、四方から攻められては、時高の自信はぐらつきだした。
「ひるむな、死守せよ」
守将に命じた。
「わしは新井へ戻る」
時高は数人の馬廻りに守られて、搦手から出た。
そのまま、まっしぐらに南へ向って馬を走らせたのだ。
葉山のあたりに来たとき、南の方から砂埃りをあげて進んでくる軍勢が見えた。
（敵か？）
一瞬、ぎくりとしたが、すぐに、
「公方にござりまする」
と、露払いの侍が馬印を見て声をあげた。
その男にも意外な喜びだったのであろう。
だが、馬を走らしてきた茶々丸は、小坪の住吉城に新九郎勢が殺到して来たと聞くと顔色を変えた。
「まことか」
その不安の色を見て、あわてて傍から弥三郎春忠が遮った。

「たかのしれた寄手、住吉城は容易に抜かれはしますまい」
「おう、左様とも、金城鉄壁じゃ、したが、如何なる手段でくるやもしれぬ。軍船が大小数十艘、新井へ攻め寄すると見えたぞ」
城を致すおのれの行動を弁解するように、時高は、大仰に言った。
「海上からまいったか」
茶々丸は緋縅の鎧に日月の大前立打った兜を猪首にかぶって姿かたちだけは堂々たるものだったが、廂のうちの双眸はきょときょとと落着かない。
「弥三郎、これは、新井城を固めねばならんぞ」
茶々丸も口実を見つけた気持だ。
「住吉城に加勢いたしておる隙に本城をとられては、腹背に敵をうけることになる」
子供でもわかる理屈をことさららしく言う茶々丸だったが、いまの時高も同じ気持になっているのだった。
茶々丸の股肱は少ない。弥三郎はじめ逃避行を倶にした連中は数人である。むろん、その連中が側近を固め、あとは、三浦時高が付けてくれた者と、伊豆から逃げて来た連中である。
茶々丸が存命で三浦時高を頼っていると風聞して、一人二人と駈けつけてきた。百騎を出ない数であったが、いまの茶々丸には、それだけでも心丈夫になったのだ。
堀越御所の兵ばかりではない。関東へ出兵していた将士が、伊豆の異変を聞いて、茶々丸のもとへ集って来たのだ。
この勢力もしかし、統率者たる茶々丸の腰が定まらないので、烏合の衆たることは否めなかった。
茶々丸の人気は、その血統と肩書である。人間的な魅力やこの時代の武将に必須な、魅力も才能もない。
したがって、軍勢はいても、士気のあがらぬこと夥しい。
はじめ茶々丸は、頭数だけ読んで、意気軒昂たるものがあった。
それが所詮は、虚しいと知ったとき、急激にかれは闘志を失ってしまった。
ひとたび、新井城にもどったかれは、
（ここが死場所になるかもしれぬ）
と、思った。
「弥三郎」
と、かれは二人きりになったとき、すがるように呼びかけた。
「そちはどう思うぞ」
「何を、でございます」
「しれたこと……」
わしの命運だ、と言いかけて、あわてて言い替えた。
「この城よ」

「はあ、堅城でござる……が」
「が、なんだ」
「城というものは、いかに金城鉄壁でも、城それ自体で、敵を防いでくれるものではありませぬ」
「……」
「城は人が守ってこそ、城でございます。如何に高厦高楼にしても、たとえ濠深く、流れを早くしても、城が無人なれば、寄手は僅かにして城へ侵入いたしましょうな。さればこそ、城は人がいてこそ城たり得るもの」
「それはそうだ」
「その〝人〟でござるが、これも、城を守るには、守るにふさわしい者でなくば、名城も、あたら宝の持ちぐされとなりましょう」
「そうかな。必ずしもそうは言えないのではないか。早い話が、刀じゃ、名刀は切り手如何に関らず、名刀ぞ」
「いや、名刀とても、拙(つたな)なき者の手にかかれば鈍刀になりまする。名刀とは、名人上手の腕によって生かされるもの。刀の刃渡りをなす者を御覧じられませい、刀は気と力と体、ひとつになって叩き斬る。それでこそ斬れるもの、拙劣な刀づかいでは、おのれで怪我いたしまする」
茶々丸は、段々死期が迫った顔になってきた。
新井城はいまの三浦半島の油壺である。
油壺湾から三方を海に取り巻かれ、大手は一方口で、絶対不落の堅城を誇っていた。
しかし、その堅城はいうなれば両刃の剣で、一つ間違えば、自らの首を締めることになる。
逃げ道がないのだ。それだけ守るのに必死になろうが、それにも限度がある。
寄手が三浦一族の力を上廻ったときは、もうどうにもならない。
茶々丸を奉じて、ここへ逃れてきたとき、弥三郎春忠は、(さながら地の果てに来たような)
と、思った。
東海の駿河からしだいに東へ落ちて来た弥三郎にしてみれば、そういう気持になるのはしかたがない。
駿河から見れば、相模の三浦半島は東の涯(はて)である。
何といっても、当時の日本の中心は京であり、人々の眼は西へ向いている。
坂東といえば当時はエゾに近い。その気持では、涯といっても言い過ぎではなかった。
殊に半島の鼻となると、あとは大海しかない。
三浦氏は、一応、三崎に砦を築いてはいるが、この油壺の新井城とは比べものにならない。
大海には遠く、伊豆七島が転々と存在はしている。
が、それは所詮、島にすぎない。
天下の名流たる足利茶々丸にしても、三浦時高にしても、

島に落ちてはおしまいだった。
それくらいなら、切腹するしかない。
(いさぎよく、切腹するしかあるまい……)
と、いよいよ、茶々丸は、その気になっていた。
伊豆の涯に近い城で敗れたとき、本来、いのちはなかったのだ。
忠臣が、身代りとなって死んでくれたし弥三郎のおかげで生き延びては来たが、もう、ここまで来て負ければ、これはとりかえしはつかない。
あとは、
(ただ一つ、房州へ落ちることもできないではあるまいが)
と、苦笑を浮べて思った。
房州へゆくにはしかし、江戸湾を乗り切らねばならない。
今度は、三浦半島沿いに舟を進ませても、上杉定正の一族の眼が光っている。
とても、それをすり抜けては、行けそうにない。
「勝つのだ」突然、茶々丸は、怒鳴った。「勝てばよいのだ、弥三郎、なんとかせい」
「なんとか致しまする。が……」
「勝つのだ、如何なることがあっても」
「戦さは時の運でございます。万一……」
万一、とは、万に一つしか勝目がないことを痛切に感じていた弥三郎だった。
新井城では、周辺地区の農民漁民たちに太鼓を打ち、触れを廻して、急を知らせた。
これは敵の襲来を告げるとともに、城内へ呼び集めて、防戦の人数に加えるためであった。
「これほどの人数あれば、人垣とするだけでも、容易に敵は攻めこめまい」
三浦時高は、ぞくぞくと集る人々を望楼から眺めおろして、しだいに自信が出てきた。
一喜一憂しているのは、茶々丸も時高も同じであった。
新九郎にとっては、茶々丸の首をあげることが絶対必要だったし、義同もまた、この戦さの先鋒を承った以上、養父時高を討ちとらねば、武辺の面目が立たない。
この一戦によって、義同が、一介の隠士から、武将になれるかどうかである。
それは、生か死か、をも意味していた。
義同には、実父の上杉高救と実兄その他血縁たちのてまえもある。
義同の隠遁は、実家の父や兄たちにとって困ることでもあった。
ここで武将としての力を内外に誇示することで、関東の武辺一統の端に名を連ねることもでき、
「さすがに、おれの子」「おれの舎弟」

と、ほこらしい思いをさせる義理がある。
そのために軍勢も差し向けてくれたのだ。
それは小田原の大森氏にしても同じだった。
こういう一族類縁がからみあって、戦国時代の争いは、規模を大きくしている。
武士の面目とは、この日本的義理のからみあいと無縁ではない。
「兵粮を運びこませよ。三カ月半年の籠りに耐え得るようにいたせ」
時高は家臣どもを激励した。
籠城には、まず兵粮である。それも大軍を養うのだから、相当な量が必要だった。
現在の油壺湾は、ヨットやボートでひしめいているが、当時はさびれた寒漁村であった。
三浦半島の突端から、少し北上したあたり、油壺湾の北側の岬の台地がそれである。
西に張りだした台地は三方を潮で浸蝕されていて、断崖をなしている。その首のあたりのくぼみが油壺湾になるわけだ。
油壺という地名も、この地形から来たものという説と、こう内側に深く入江となっているので、たいてい海面がとろりと凪いでいる。
その油を流したような海面の状態から来たものだという説とがある。
おそらく、その両者であろう。両者あいまって、油壺の名が伝えられて来たのであろう。この静かな湾の波が騒ぎ立ち、油に代る血が蔽うのも、すでに時間の問題であった。
「まず、どこから攻めてくるかじゃ」
時高は、いま〝城ノ内〟の地名が残る新井城本丸の望楼から四方を眺めまわして考えている。
あの夥しい軍船は、住吉城を陥したあと、一度に襲いかかってくるにちがいない。
「まず主力は大手にかかってくるであろう」
時高は東を見た。
この油壺湾を南に控えた新井城は、西に、すなわち相模湾に岬が張りだしていて、咽喉首にあたる東の部分がくびれている。
永年の荒い太平洋の波濤のために軟らかい地層が浸蝕されたのであろう。
一条の道が東へ延びているだけである。
油壺湾の入口のあたり、験潮場が現在設けられているが、ここは堀をもって容易な往来を遮り、大手の門には、はね橋でつながっている。
現在も堀切の名が残っているがここからが、岬ぜんたいが新井城であった。
今日踏査しても、新井城の郭の配置が推測できる。

虎口（こぐち）は地形によってそれとわかるが、桝形などは、殆どわからない。当時はまだ後世のような城作りが完成されていない。あるいは桝形などはなかったかもしれない。
だが、土塁のあとや空濠などはそれと見わけられる。
殊に二ノ丸と本丸を遮る土塁と空濠は、ほぼ、昔のままではなかろうか。
本丸はしたがって、この岬の西端に南北に矩形をなしているのがそれで、ここは西方海上を見晴らすのに最適ではあるが、追い詰められたなら、文字通り絶体絶命になる。
背水の陣である。
時高は、眺めまわして、
（掘り抜きを作っておくべきであったろうか）
と、悔んだ。
弥三郎の意見を採り入れて、かなりの改築をほどこしたのは昨年である。
この新井城は去年すなわち明応二年に義同の来攻に備えて築城されたという古文書があるが、それまで、全然、城がなかったという意味ではない。
これは大々的な改築を意味しているにすぎない。
この新井城に、しかし、抜け穴を作るのは、時高のプライドが許さなかったのである。
後年のことになるが、〔鎌倉公方九代記〕の記述では、ここの規模を左のように描いている。
——此城の有様、周囲三十余町を垣こめ東一方ばかりこそ、僅に陸地に続きけれ。三方は入海の島城にて白浪岸を洗い、峯高き羊腸の山坂、鳥ならでは翔（かけ）り難く、巌峙たる雁歯の嶮しさ獣と雖も通ふるに疲れぬべし……
さらに、こうある。
——たとひ百万騎の勢を以つて向ふとも、力攻めにはなし難し。千駄櫓と号して大いなる岩穴あり、常に米穀千駄を積み入れて兵粮の備となす。
と。
もっとも、当時とはいくらか違ってもいようが、大凡は変るまい。
新井城が、金城鉄壁を誇るのも、この地形に依るところが大きい。
三浦時高は眼を南に転じた。
本丸の下がやはり小さな湾になっていて、白砂が光っている。
ただ、浜とだけ称われていたが、いまでは新井城の名がここに新井浜と称されて残っている。
この浜つづきの小高い鼻にいまでは東大実験所が建っているが、少し下ったところにぽかりと岩穴があいているのは、往時のままだ。
これが前記の千駄櫓である。
しかし、〔九代記〕の記述は後年の出来事を記したもの

だからこの当時、洞穴はあっても、米穀貯蔵所にしていたかどうかはわからない。

場所から見ても、ここは外側になる。籠城した場合、寄手が断崖のきわまで来たら、それとわかってしまう。

普通、糒蔵などは、本丸か二ノ丸にある。最後の刻まで、いのちをつなぐのに必要なのである。

時高はこの城の大手へかかる戸張、鷺野、塚ノ越辺に伏勢を置き、途中で討ち止める方策をとった。

また小網代湾の藤ヶ崎や上ノ原の浜にも兵を置いた。城を海上から攻めるのに、これらの浜から船を乗りだすと見たのである。

さらに南方からの攻撃は、一衣帯水の浜ノ原の岬を固めることで、避けられそうであった。

ここの岬の先には岩礁が多く、満潮でも、かなり迂回しなければならず、それだけ攻め難い。

地勢に明るいことが、時高の強みであった。

「住吉の城は持ちこたえているか」

何人も斥候を出してたしかめさせた。

むろん、海上の見張りも怠らない。

住吉城では、大軍を受けて、苦戦しているらしい。

岩礁の乱立する住吉城の西崖には、軍兵がとりついているという。

小舟を持って接近し、岩礁の間に入ってきて、岩頭から岩頭を伝わって城の崖裾に至ると、雨と降る矢を陣笠あるいは楯に遮って、木の根につかまり、岩の凹みに手をかけ、よじのぼった。

新井城の大手門から三キロほど東に水谷戸というところがある。

道が二岐に分れていて、ここが新井城の一ノ木戸だった。

五十人ばかりの雑兵が木戸を固め、左右の丘の上から弓組が狙っている。

ここを通る者は、蟻ノ子一匹逃さない態勢であった。

「おい、誰かくるぞ」

巨松の梢で小手をかざしていた物見が、目ばたきして、

「小人数だぞ、たった三人じゃわ」

「なんだと、三人きりで、ここへ」

下の連中は呆れて松の梢をふり仰ぐと、

「やい、しっかり見ろやい、眼が呆けているのではないけ」

「そうじゃ、たった三人きりで攻めてくるはずがないて」

がやがや言いはじめた。笑いだした奴もいる。

だが、梢では、三人であることを確認した。

そんな小人数で攻めてくるなどまるきり予定に入っていなかったのである。

木戸を守っている雑兵の頭である赤石六左衛門尉茂直が、大薙刀を突っ立てて、道の真中へ出て来た。

「ふうむ、なるほどな、たった三人きりじゃ」

あきれたようだった。

ほかに誰もいないかどうか、六左衛門尉は、周囲を見まわし、梢を振り仰いだ。

さらによく見ろ、という意味だった。

丘の上には、弓組が矢をつがえたまま、かれらにつづく連中を捜している。

が、三人のほかには、誰もあらわれない。

「何者だ」

十間ほどの手前まで来たとき、六左衛門尉は大喝した。

「止れ、そこで止れ、何者だ。何用あってまいったぞ」

騎馬も供の者も、言われるままに、その場に止った。

「まず名乗れ」

「おう、わしを知らぬか」

馬上の人は、六左衛門尉に劣らぬ大声で叫びかえしている。

「これは箱根大権現の金剛王院別当大森海実と申す、三浦陸奥守時高どのに御意得たい」

「大森……海実僧正どのか」

六左衛門尉は、その名は聞いていた。

叛逆の太郎義同の母の家である小田原大森家の一族と聞いている。

父氏頼の老疾で家督した藤頼が義同との義理で寄手に加わっていることも、むろん知っている。

この海実が箱根権現の別当とはいえ、見方によっては、敵であることは論をまたない。

(よくも、ここにくることができたものだ)

と、六左衛門尉は海実を見やり、その大胆さに舌を巻いた。

「何の用じゃ、用の趣き、承ろう」

六左衛門尉はひるむ心に鞭打つように、肩を怒らして、喚いた。

「その方に用はない、陸奥守に逢いたいと申しておる」

「てまえが承る」と、六左衛門尉も負けなかった。「それが木戸を守る者の役目でござる。殿への用向きを承らねばここは通すわけにはまいらぬ」

頑強であった。

海実はにやりとした。おのれが、怪僧と称われるほどだけに、こういう一筋縄でゆかぬ男には、好感を持つのだ。

「よかろう、されば申す。こたびの戦さを扱うて進ぜようと存じてな」

扱うとは、仲裁という意味である。

大軍を動員した戦さの和睦ということは、両者ともそれぞれ戦わざるを得ない事情があるだけに軽々にできることではない。また双方に納得させるだけの仲裁人の貫禄というものが要る。

こうやって乗りこんできたのは、その自信があってのことであろう。

たしかに新九郎を中心として、大森藤頼、三浦義同の連合軍であれば、駿相境をなす足柄山箱根の別当という身分は、地域的にも、勢力的にもふさわしい。

乱世の寺社は神人も神慮に応えると称して剣を執り、僧侶も法燈護持を叫んで法衣の上に物具を鎧い、槍薙刀に屠って悔いるところがなかった。いわゆる僧兵である。

権現別当海実には動員できる兵力が百人はいる。僧侶ばかりではない。それだけ海実の信望は厚い。

六左衛門尉はただちに輩下を本丸へ走らした。

「なに、僧正が扱いに参ったと」時高は太い眉をひそめた。

「そのようなやつ、追いかえせ」と、怒鳴った。

だが、すぐに思いなおした。

「逢うてやろう、通せ」

「かしこまりました」

取り次いだのは近習である。本丸から二ノ丸へおりてゆく途中で、弥三郎春忠がせかせかと急いでくるのと出逢った。

「おお、陸奥守どのは何と仰せられたぞ」

弥三郎は海実が来たことを耳にはさんで駈けつけてきたのだった。

「は、目通りを」

「許されてか」

弥三郎春忠には、この海実の来城は、戦さのあらたな展開を感じさせたのである。

本丸の御殿に入ってゆくと、時高は鎧下でいらいらと歩きまわっていた。

「箱根の別当がまいりましたとか」

「おお、扱いじゃと。義同めが寄越したとすりゃ、住吉の城の堅固さに攻めあぐねているのであろうか」

大森海実はしかし、攻めあぐねての和睦の使者ではなかった。

むしろ、優位に立った者の傲慢さと尊大さで、乗り込んできたのである。

「三浦一族が血で血を洗う争いはよろしくない。相模の名流たる三浦氏が同族相食むの争いをつづければ、必ずや、他の窺うところになる。如何であろう、愚拙に扱わせてもらえまいか」

海実はこう持ちかけた。

かれの真意は奈辺にあったかわからない。おそらく、その言葉は表むきで、裏には別の意味が含まれていたのであろう。

海実は本丸へ通る間、ゆっくりと、猪首をねじまげて、あたりを眺めながら通っている。城内の様子を目に灼きつけていたのであろう。

義同がこの城を出てから数年を経ている。それから城がかなり改築されているから、昔の記憶だけではあやふやであった。

義同のもとに集った家臣たちによって、記憶の糸がつづりあわされたが、海実はそのまとめのために訪れたのかもしれなかった。

「おかしいのう、別当どの。こたびの戦さは、わしの方から仕掛けたのではない。旗をあげたのは、うぬのほうではないか」

和睦は敗色濃いいまの時高にとって願ってもないことではあったが、ここで弱味は見せたくなかった。

「そちらから仕掛けたこと、そちらで鉾をおさめればよいことじゃ。それで兵火はおさまる」

時高の言葉は理が通っていた。理からいえば、その通りである。

が、すでに寄手は住吉城を陥しかけている。時高がこのときに、なおこういう高びしゃな態度で出ようとは、使者の海実には思いがけなかったようだ。

海実は豪快な笑いで、この切り込みを躱した。

「これはしたり、陸奥どの。愚拙がまいったは、余の儀ではない。この城を救わんがためでござるぞ」

「……」

「名門たる三浦の家を惜しみ、陸奥の武名をここで露と散じさせてはならぬと思えばこそじゃ、この気持が、汲みとっては貰えぬかな」

「――僧正。おぬしの言葉を聞いていると、まるで、明日にでも、この城が落ちるような言いかたじゃな」

「おう」

「明日にでも、この陸奥守が首と胴を異にされるような話じゃな」

「おう！」海実の声は一段と高くなった。「その通りじゃ」

「無礼だ、言葉がすぎるぞ」

「おぬしの武名を惜しむあまりよ。この城を惜しむあまりよ」

そのとき、板戸の外で、弥三郎の声がした。

弥三郎春忠は、さっきから板戸の外にいた。

かれの立場は、この城では微妙なものだった。

もとより三浦陸奥守時高の家来ではない。足利茶々丸に扈従して落ちて来た。いうなれば客分である。

戦さに際しても、本来、発言は慎まねばならない立場であった。

時高が一応、弥三郎の出身と経歴を尊重して、参謀の一人に遇してはいたが、やはり老臣たちの間には、茶々丸と弥三郎をうとましく思う連中がいた。当然かもしれない。

かれらは、あまりにも、三浦家にとって、

〃お荷物〃

だった。
北條新九郎氏とかいう氏素姓明らかならざる男に、三浦攻めの口実を与えることになってしまったのだ。
茶々丸が逃げこんでこなかったら、時高を新九郎が攻めるのは、もっと数年あとになっただろう。
あるいは義同と組むなどということも、なかったかもしれない。
時高にとっては、最悪の事態であった。
弥三郎春忠は、充分、それらのことを考えて行動している。
海実が来たと知っても敢て、時高の引見の座に侍ろうとせず、板戸の外で聞いていたのである。
「入ってもよろしゅうございますかな」
弥三郎春忠は、そう声をかけたのだ。
「入るがよいぞ、今川どの」
救われたように時高は返事をした。
弥三郎春忠はのっそりと入って来、板戸の前に胡坐した。むろん物具したままである。
「お初に御意を得る。今川弥三郎春忠でござる」
ちらりと、海実は蔑みをたたえた目をくれた。
「名は聞いておる。駿河からの逃散者じゃとな」
「今川一族でござる。堀越の公方を奉じて、当城へまいったもの。伊勢新九郎を討つために、陸奥守どのを頼ったものじゃ。おぬしらも代々相模にありながら、一介の旅牢人に鼻面をひきまわされて恥しいとは思わぬか」
「黙らっしゃい、わしは縁に連なる義同のために、扱いをなさんとするもの。新九郎とは、何らの関わりはないぞ」
そうは言ったものの、海実の声は尻すぼみに小さくなった。新九郎の人間的魅力に傾斜していただけに、どうしても心中咎めるものがある。
「真実、おぬしが三浦家を救わんがためとあれば、和議の道なしとはせぬ」
弥三郎春忠は膝をにじらせて、時高の方をむくと、この儀、それがしにおまかせ願えませぬか、と言った。
和睦というものは、当事者同士では都合が悪い。そのために第三者が入ることで、まとまらないものもまとまる。扱い人の力にもよるが、話し合いには直接の利益代表ではない方が、話がスムーズにゆく。
時高もそれを察したのであろう。
「許す、後刻、吉左右を聞こうぞ」
と、顎をしゃくった。
拝揖して弥三郎春忠は御殿を出た。二ノ丸の弓蔵で二人は相対した。
「咽喉が渇いてであろう、まず酒をすごされよ」
弥三郎春忠は二人きりになると、がらりと態度を変えて、
「ここは、話し声が、外へは洩れぬ。如何ようなことでも

談合できますぞ」
凝っと、眼をのぞきこんだ。
「如何ようなことでも、とは」
「おてまえの存意だわさ」
弥三郎は片頬を笑わせている。
「陸奥守の前では言い難いことがあったであろうほどに」
「……」
「されば、言い易いように、ここへお誘いしたというわけじゃ」
「ほう、ほう、どんなことかのう、箱根権現にでもお伺いをたててみねば、よくわからぬが」
海実はとぼけた。
「これは……それがしに申させるのかい。おてまえがこれへ参ったは、和議なぞ、口実であろうが。城の内部を捜らんがためであろうな」
「どうかな」
「さらには……」
「さらには？」
「陸奥守の首がほしいのであろうな」
弥三郎春忠はぎょろりと眼を光らして言った。
ここは敵地である。海実はうっかりと返事が出来ない。
この弥三郎春忠という男がまた信用できないのだ。
駿河の府中（静岡市）から逃亡して、伊豆の韮山へ至り、巧みに堀越御所にとり入り、実父を殺した茶々丸の股肱になる。
そうした経歴は、海実の耳にも入っている。
決して信用の出来ない男なのだ。
しかし、清濁併せ飲むだけの器量がある男だ。
（こやつほどの変節漢、存外使いものになるかもしれぬ）
と、思った。
「二人きりじゃよ、僧正。肚裡の中を見せさっしゃい」
「さて、わしのほうより、おぬしが何を望みか、じゃ」
「陸奥守の首を進ぜよう」
「なんと」
「進呈する。されば、それがしを箱根に匿もうてもらいたい」
弥三郎が言いたかったのは、それであった。
すでに新井城は、命旦夕に迫っていると見たかれは、安全な逃げ道を探していたのだった。
（もはや、新井城は陥ちる……ここより逃れる道は？）
卑劣な弥三郎春忠にとっての、それが、今の命題であった。
かれは、もはや、茶々丸を連れて逃げだすことは不可能だと見ていた。
（わし一人だけでも……）
逃れるために、と考えていたところに、海実の来訪は、

渡りに舟だったのである。
茶々丸の首を斬って、新九郎に降伏しても、弥三郎春忠は生き延びられない。
卑劣なことの嫌いな新九郎が助命してくれるはずがない。新九郎が、心から憎んでいるのは、茶々丸よりも弥三郎なのだ。
茶々丸を討つことは、新九郎が名実ともに伊豆の主となったことの対外宣伝に役立つ。
実父殺しの茶々丸を討つ——天誅という美名もその行為に金箔をつける。
弥三郎がいまさら、返り忠をしたところで、これまでの罪を許してくれる新九郎ではなかった。
「陸奥守の首を進ぜる」
と、はっきりと、弥三郎春忠は言った。
「その代りに、匿もうてくれい、箱根権現ならば、わし一人を匿うくらいのことは容易でござろうが」
「うむ、それは」
海実も、味方の死傷なしに、三浦陸奥守時高の首を得ることができれば、これに越したことはない。
「しかし、小田原に計ってみなければのう……」
「おてまえの存念で、じゃ。そのために、かようなことまでしようとするのじゃ。陸奥守が首級は義同へくれてやるがよい」
「……」
「茶々丸の首は、小田原へ、手柄になされよ」
「茶々丸どのも！」
「左様……」
弥三郎は平然たるものだった。
「茶々丸の首は、小田原の手柄になろう。されば、新九郎に大きな顔をさせずに済む。おわかりか」
「うむ……」
あいまいな返事だったのは、まさかそこまで、弥三郎春忠が味方を裏切ることをするとも思えなかったからである。
「暫時、待たれよ」
弥三郎は自信ありげに、かれをその場へとどめ、輩下の数人に入口を見張らせて、本丸へ行った。
「済んだか」
陸奥守時高は、まさかそうした企みがあるとは知らない。和睦する場合の、義同への弁解と譲歩の限度を考えていた。
「はい。話はまとまりました」
「ほう、なんと」
「まず、義同どのが、当城へ、詫びにまいられる」
「それは、まことか。そうさせると申したか」
こおどりしたいような気持で、時高は叫んだ。
形だけでも、義同が、詫びにくれば、大幅に譲歩できる。時高の面目が立つ。

かりにも義同は養子なのだ。
「そうか、その上で、和議を整えるというのだな」
「はい。されば、それがしが敵中へ乗りこんでまいりましょう。向うへまいり、海実僧正と二人して義同を説得いたしまする」
「できるか」
「できませいでか。そのために、公方を一時、人質と致しまする」
「公方を」
「背に腹は代えられませぬ。公方にも得心なされると思いまする。むろん、新九郎の前には出しませぬ。すべて海実僧正との間の内々のこと」
「そうだ、義同も藤頼も、新九郎に踊らされているのじゃ」
「公方が海実僧正のもとに人質にいっているとなれば、義同どのも、こちらへまいりましょう」
「なるほど、なるほど、それは名案」
「つきましては、御筆先を」
「木戸を通すためじゃな」
「恐れ入りまする」
「書いてとらせる」
時高が右筆の者を呼ぼうとするのを、弥三郎春忠は、静かに圧えた。
「内々のことゆえ、御直筆を」
「それもそうだ」
時高は経机に向って、筆を執った。
さらさらと書きあげ、
「これを所持しておれば、誰も通行を阻まぬ」
と、淡く笑った。
その笑いが、時高の最期となったのである。
「忝(かたじけ)ない。これだけ頂けばもはや、用はない」
弥三郎の態度は急に変った。
すっくと立つと、つかつかと時高の傍へ近寄った。あまりに突然だったので、時高はまるきり気がつかなかったのである。
「御最期であろう」
眉をひそめた時高の口を左手がふさいだ。と思ったとたんに鎧通しが時高の脾腹を貫いていた。
「あ、何をする！」
もごもごした口が叫んだ。痛みのあまりがぶと、かれは、指を咬んだ。
腹巻（胴鎧）と草摺のあいだである。
深々と入った刃は、すっと引かれた。と思うと、次の瞬間、咽喉を横に切った。さっと血汐が噴きだした。
それきりだった。もがいているのを、押し切りのようにして、首を胴から切り離した。
まだ驚きを表情にあらわしてかっと眼を剝き、唇は半開

きだった。
弥三郎春忠は、この首級を掻きとると、壺を逆さにして中の液体をこぼすように、首から血をしぼりだし、それから陣羽織にくるんだ。

「死中に活を得ましたぞ」
弥三郎春忠は、家来一人を連れただけで茶々丸のところへ来て嘯いた。
丁度、茶々丸は飯を食べているところだった。膳の上で石鯛がまだぴくぴくしていた。半ば削りとられても、まだこの生命力の強い魚は鋭い歯を見せたままエラのあたりを動かし、眼を見張っていた。
その眼が怨みがましく見え、茶々丸は切身のひとひらを眼玉の上に乗せた。
茶々丸は肥満している。実父政知を弑逆して御所の主となって以来、この男は痩せたことがない。
入牢中の歳月の空白をとり戻すかのように、食欲と色欲を押えることがなかった。
この最後の城が落ちる時が迫っているというのに、がつがつと飯をかきこんでいるのだった。
「弥三郎も食え。この魚がうまい」
「いや、結構でござる。それより、時刻がうつっては、生き延びることも、かないますまい」
「なんじゃと」
「さ、早く、参りましょう」
「一人で落ちるのか」
「供がついては邪魔でござる」
弥三郎は小脇のまるい包みを、ゆすりあげるようにして、歩きだしている。
存外に重い。人間の頭というものは重いものだ。重いが、家来には持たせられない。
「何だそれは」
まだ口の中をもぐもぐさせながら茶々丸は聞いた。
「舟でお見せしまする」
「舟で？　海へ出るのか」
「陸路は味方の眼につきすぎて、邪魔が入ります」
茶々丸は弥三郎春忠の言葉に従うしかない。
本丸から浜へおりてゆくと、海上からの攻撃に備えて矢来が組んであり、水軍の者が守っている。
「殿の密命でまいるのじゃ、舟を仕立てよ」
弥三郎春忠は生前の時高に書かせた書状を見せた。いうなれば通行手形である。
数十隻の大小の軍船が、この小さな入江と油壺湾に点在していた。
その一艘である。水軍の者が船頭を仕る、というのを、
「いや、こやつは漁師上りで、櫓を操るのが巧みじゃ」

と、家来を乗り組ませた。
腹に一物ある弥三郎春忠である。水軍の者がいては都合が悪い。
小舟は大小軍船の間を縫って漕ぎだしていった。
万一の場合、鎧を着ていては泳げない。
「ここまでは矢もとどきませぬ」
と言って、弥三郎は、茶々丸の鎧を脱がせている。
すでに新井城を遠くに見るあたりに漕ぎ進んでいた弥三郎は、次の仕事にとりかかった。
次の仕事——
それに茶々丸はまだ感づかない。
「どこへ行くのだ、弥三郎」
「こうなったら、あとは上手な生き方をせねばなりませぬ」
「それを聞いている」
「まず、御覧じられませい」
これが答えだ、というように、ごろりと、膝前に陣羽織包みを投げだした。
「何じゃ、それは……げッ」
ぞんざいな扱いだったのである。何げなく眼をおとした茶々丸は転り出た時高の血まみれの首にぎょっとなった。
「こ、これは……」
「化粧なさるか」
「陸奥守が……切腹を」
「いや、そのひまはありませなんだな」
けろりと、他人事のように弥三郎はこたえている。
驚いたのは家来も同じである。思わず、櫓を漕ぐ手を休めて棒立ちになった。
「こりゃ、しっかりと漕げい」
「は、はい」
新井城からはすでに数町離れている。
いくら目性のいい見張りでも、小舟の中に誰がいるかは見分けられまい。
弥三郎は岬の城をふりかえった。
「今日中に、城はおちましょうな。主を失った城は、支えを失った大屋根と同じこと、崩れ落ちるしかありませぬ」
「……」
「三浦一族はほろびの運命にある。ほろびるものをしてほろびさせよ、天のさだめた運命には小賢しき人智など、脆きものでござる」
「わしは、伊豆の足利はほろびぬぞ」
狂ったように、茶々丸は叫んだ。
その声は潮風に吹き払われ、弥三郎のこけた頬に、嘲けりの笑みをきざませただけである。
「喚いたところでどうなるものでもおざない」
あくまでも弥三郎が冷静なのが茶々丸の気にくわなかっ

た。

「きさま、何を……」

「御曹子にも、そろそろ諦めを知ることでござるな」

「あ、諦めよとか。そのほう、生き延びることだと申したではないか」

「左様、生き延びるに足る者と、そうでない者とが、この世にはおざる」

意味をはかりかねて、茶々丸は眉をしかめた。

「この陸奥守時高どのは、生きていて詮ない者」

と言い、弥三郎は脇差を抜き放った。

恰も、この生首を切りきざむかのように見え、茶々丸は狼狽して、

「死者を辱しめることはあるまい」

「いかにも。生前、罪障ある身も死ねば仏になる。されば、仏になられませい」

脇差は次の瞬間、茶々丸の腹に突き刺さっていた。

(海に落ちたら泳ぎ難いから)

という弥三郎春忠のおためごかしの言葉に従った茶々丸は、愚かであったといえよう。

もっとも、食いたいだけ食って何もしないから、醜いまでの肥満体になっている。

それだけでも、この時代の武将としての資格に欠ける茶々丸である。

後年のことだが、年少の織田信長に名をあげさしめることになった今川義元も、眉毛を剃って堂上公卿の如く、天上眉を打って、うす化粧していたというくらいで、肥満体の典型だった。足が短く、一人で馬に乗れなかったというほどだから、それに大鎧をつけたらどういうことになるか。

雨中とはいえ、気鋭の信長勢に突っこまれて、何もなし得ず、化粧首をあげられたのも当然だ。

茶々丸も肥満しきって、そのくせ、体力がないから鎧が重苦しい。もともと我儘者だ。本来、武将の生れではない。脱ぎ捨てて、ほっとした。

その無防備な姿が、結局、死を早めたことになる。

「な、何をする！」

脇差が、腹に突き立ったとき、この男は、まだ、何かの間違いとすら思った。

「弥三郎、その方……」

「乱心ではありませぬ」

弥三郎春忠は冷静だった。そのくぼんだ奥眼は、しかし、いささか嗜虐的な光を放っていたのは否めない。

「立派な御最期を……」

「な、なに！　なんとして、きさま、おれを……」

「じたばたしては、御名に傷がつきましょう。公方たる御身の最期はいさぎよくなされるものでございます」

船頭になった家来は、この思いがけない事態に、動顛した。櫓を操る手もとも狂って、舟が大きく揺れた。

「しっかり漕げい」弥三郎春忠はこれに大喝して、「さ、お腹を召されませい。いさぎよく」

「ゆ……許せ、弥三郎、助けてくれ」

茶々丸はもがいて、刀を抜きとろうとした。が、ふかぶかと突き刺された刀を抜きとるには、死の恐怖が先立って、力が出なかった。

「ぬ、抜いてくれい、たのむ、弥三郎、きさま、主人を、殺すのか、おりゃ、死にとうない」

「お気の弱い」

つと、手をのばした。

が、刀を抜きとるのではなかった。柄頭に手をそえて、ぐいとさらに押し込んだ。

「あ、弥三……」

「切るのじゃ、切腹じゃ、こうなされい」

茶々丸の手を柄にかけて握らせると、上から強く押えて、ぐぐーっと右腹へ引きまわした。

切腹には作法がある。この作法は形式というより、切りやすさと死の目的の確実さからきている。

腹を切りやすいのは、深く刺さないことだ。

したがって、後世になるほど、浅く、腹の皮を僅かに傷つける程度になった。

場合によっては、扇子で、真似だけする。むろん、それは介錯人がいて、首を落す場合である。

大波に揺れる小舟の上では介錯は難しい。

弥三郎は、茶々丸の真正面から、脇差を突き立て、手を添えさせると、ぐーっと押し切らせたのだ。

「うわ……や、弥三郎……」

ざっくりと、下腹の半ばが深く切り裂かれ、夥しい血糊とともに臓腑がぶくっとはみ出てきた。

弥三郎の顔も、両の手も、噴きだした血で真赤だった。

「おみごと、おみごとじゃ、それでこそ足利公方……」

「う、うぬ……うぬは……」

もはや、力の失せた茶々丸の唇は何か言おうとしながら、言葉にならず、けいれんしているだけだった。

何を言いたかったのか。

あくまでも忠義面をして、かれを死なしめようとする男に、かぎりない憎悪と怨みを抱きながら茶々丸は、激痛と出血のために、しだいに気が遠くなっていった。

「――なさけないのう」

がっくりと、崩れた茶々丸を冷たく見おろしての、弥三郎の言葉だった。

「これが堀越公方か……所詮は伊豆の仇花じゃったのう」

こんな男を守り立てようとしたのが、間違いだったと言わんばかりの口吻だった。

いつの間にか弥三郎春忠は当初の目的を忘れている。

もともと茶々丸へ義理があるわけでもなかった。
新九郎に追われて、陋巷に落ちたかれが、野望を充たすための道具にしたにすぎない。
したがって、都合が悪くなれば始末するしかない。ただ、それを活用することを忘れなかった。
死体でもいいのだ。
弥三郎春忠は、陣太刀を抜くと、胴ノ間に突っ伏した茶々丸の猪首に押しあてて、何の感情もなく、左手を峰にそえ、ぐい、と押し切った。
その血を茶々丸の袖で拭い、鞘におさめた。
ふなばたから身を乗りだすようにして、顔や手の血を洗っていると、矢のように漕ぎ進んでくる小早があった。
それには、あの箱根の別当大森海実と、義同の腹心である出口五郎左衛門が乗っていたのである。
弥三郎春忠は、これを見やって、
(これで、わしは安泰になる。ともかく、新井城と運命を倶にせずにすんだな……)
ほっと息をついたのであった。
遠く海上には、夥しく軍船が見えた。大小の船が舷側に板楯を並べ、槍を立て、旗をひるがえしているのが、弥三郎春忠には、もう自分とは無縁の眺めのように思われた。
ぼんやりと放心したように眺めていると、
「舟が、来ます」
さっきからの異変に、とまどいつづけの郎党が、唇をふるわして言った。
むろん、それも弥三郎の視界の中にはあったのである。
「――わかっておる」
弥三郎春忠は重く頷いた。
近づいて来た小早からは、別当大森海実が、身を乗りだすようにして、
「今川弥三郎か、首尾はなんと」
「これに」
向うからは、茶々丸の死体が見えなかったのである。
弥三郎春忠が一人だけで、脱走して来たのかと思ったのだ。
降人に対しては、武士の作法として、相当の待遇をすることになっているが、それも時間の問題がある。
落城後は降人とは称わない。落城直前の降人は、〝怯れ者〟として一人前には扱わないことになっている。
逗子小坪の住吉城が落城したいま、油壺の新井城から脱出して降人となるのは、寄手の側から見れば、怯れ者の範疇に入る。
手ぶらでは弥三郎春忠の立場は悪いものになるのである。
舟を寄せる間、出口五郎左衛門は槍をひきそばめて、いざといえば、突き出す用意をしている。

万一を慮ったのである。胴ノ間に身を伏せた隠れ武者がいるかもしれない。
そういう虚々実々の駈け引きも、この食うか食われるかの時代では、きわめて当り前のことであり、その策略にはひっかかるほうが愚かと誹られる。
が、その胴ノ間は、血の海であった。
血の海の中に、生首が二箇転って、白眼をむいていた。
舷側が触れあうほどに近寄ると、五郎左衛門の従者が、長い鉤竿で、こちらの舷側を、ひっかけて、ぐっと引き寄せた。
舷側がぶつかった。二人は中をのぞいて、ぎょっとなった。
血や生首には馴れているこの時代の男たちだが、小舟の中だけに、凄惨すぎたのである。
「御検分をなされい」
弥三郎春忠の声はかわいたものだった。
「足利茶々丸の御首級じゃ。これを手土産に降人として遇して下さるか」
「うむ……これで戦さも終る。よろしいとも、万事、愚拙におまかせなされい」
海実は生首から眼をそらして、陸地を見やった。主人を失った新井城が、抜け殻のように見えた。

箱根越え

北條新九郎が、常人にはない粘りと不屈の意志をもって、一介の旅牢人からのし上ってくるに就いては、その天性もあろうが、時代の要請もまた作用していた。
今川家のお家騒動がそれであり伊豆公方の家庭の複雑さもそうであるし、三浦一族の相克もまた、かれのために起ったようなものである。
そういう見方をすれば、茶々丸が、三浦時高を頼って新井城へ逃げたことも、また新九郎の開運のために設定された歴史的必然であったろう。
三浦時高は亡びた。
その地盤と名声の割には、あまりにもあっけない死ざまであり、亡びかたであった。
茶々丸の逃亡を受け入れたことが、直接的にはその死につながっているが、やはり遠因は、義同を養子にしたことだ。

これが義同でなかったなら、泣き寝入りしてしまったかもしれないのである。

義同という男は、これからしだいに頭角をあらわしてくるのだが、その苦悩の歳月を無駄にはしなかった。

新九郎に放浪の歳月の人間形成があったとすれば、義同の場合は、追い出され養子という、特殊な環境の嘗胆の日月がある。

この両者は、所詮、相容れないのだ。勇者であるほど、猛士であるほど二人の角は突き合う運命にある。

共同の敵に向うときは、それが倍にも三倍にも威力を増すが、そこには、いずれ決裂と、対決の刻が用意されている。

三浦義同は、新井城を陥すや、ここをおのれの居城と定めた。

主君時高を失って新井城の守りは、実に脆いものだった。義同の旗が進んでくるや、内部で降伏の声があがった。

それは義同や義同を慕う家来たちと共通の感情を持っている者が一部残っていたからだ。

義同に同情しながらも、累代の恩義が時高から離れさせないという、板ばさみに苦しんでいた者もいようし、どっちつかずの気持で流されている者も多い。

あくまでも時高と、その実子のために尽くそうとする者が、頑迷に敵対したのである。

内部の戦いで、義同の兵は勇躍した。

「呼応の火の手があがったぞ、それ、この機をはずさず、攻めおとせ」

どっと一斉に殺到した。殺戮の修羅場は半刻ほどつづいた。長駆してその間に岡崎城、住吉城を抜くなど戦ってきた余勢である。内側からの招きがなかったら攻め陥すのはなお数日を要したろう。

こうして義同が、陸奥守を名乗り、三浦の新しい主となったのだが、新九郎はそれをどう受けとめていただろう。

新九郎は欲がない。いや、その行動は、欲がないように見える。

人徳もある。生来物に対して淡泊なのも事実だが、かれはあせらない。

目の前に欲しいものがあっても、すぐ手を出さないのだ。手を出すには、恰好の時機がある。

それを見通す眼を放浪の歳月の間に養ったのであろう。

京における将軍や管領の座をめぐる醜く激しい争いが、かれの智慧となった。

争いの渦中にいれば見えないことも、傍観者の立場からは、明らかなことが多いのだ。

普通だったら、茶々丸を攻めることで、三浦氏をほろぼし、ついでに三浦半島一円をおのれの勢力下におさめる。

新九郎が短兵急にそれをしなかったのは、人心の帰趨を

見る眼があったからだ。

三浦半島は、三浦一族の本貫の地である。

足利政知、茶々丸のように、一氏二代の由縁なら、力が衰えれば民心は簡単に離反する。

だが、数代に及んでいると、いわゆる根を張った喬木のように、その土地との結びつきが深い。

三浦時高の義同に対する非道も、三浦一族のより強固な血の結束への願いから出ているものとすれば、それがやりすぎたと見る者があっても、三浦の氏族全般への否定にはならないのである。

新九郎が三浦義同と手を握ったのは、そうした事情を見抜いたからだった。

(当面茶々丸だけをほろぼせばよい)

欲を出さないことだ、と思った。

(それに……)

三浦討ちの第一の段階、という考えかたもある。

時高とその実子をほろぼすことは、たとえ義同が次代を背負ったとはいえ、三浦一族としての勢力を半減することになる。

新九郎は、その効果だけでも、おのれの進展に対してプラスだと思ったにちがいない。

その見方は、一半では当っていたが、一半ではずれていた。

後者については、いずれ述べることになるが、新九郎の眼にただ一つの誤りがあったとすれば、義同という人物に関する認識の甘さであったろう。

新九郎が思ったよりも、義同という漢(おとこ)は大変な代物(しろもの)だったのである。

茶々丸の首は新九郎のところに届けられた。

「こやつを討ったものは」

恩賞をとらせなければならぬ、といったが、大森海実は、弥三郎の名を洩らさなかった。

「乱戦の間に見出されたものでござる。ま、これで北條どのも兵を出した甲斐があったというもの」

大森海実は、全面的に北條新九郎を信用しているわけではなかった。

かれの武将としての実力は信頼しても、相模の豪族としての立場からは、新九郎の行動に警戒の眼を怠らない。

相模の大小名にとって、駿河伊豆の武将の動向は、常に気になるものだった。

表面的には友好の度を保っていても、裏ではどんな工作をしているかわからない。

これが乱世の相(すがた)なのだ。大森海実が箱根権現金剛王院の別当になっているのも、駿豆を見張る意味があったのだ。

「弥三郎春忠の功は認めねばならぬ」

と、海実は、三浦義同と大森藤頼に言った。

「人間的には色々と批判もあろうが、こたびの戦さでは、弥三郎の功績は評価せねばならぬ」
「しかし……」
義同は、落城直前の降人は認め難いと言った。藤頼もこれに同調したのである。
「世間の聞えも如何かと思うが」
そのことは海実も考えに入れていたのである。
「それゆえ、弥三郎の名は出さぬ。名前は出さずに生かしておく」
「……」
「一つには、男の約束じゃよ。二つには、あの男、まだ使い道があると思う」
「返り忠は武士の恥。信用できぬ漢でござるぞ」
「信用できぬさ」
にこりとして海実は、二人を見た。
二人とも若い、という顔である。
「信用できぬやつは、信用せねばよいではないか。むかし、父上にこんな話を聞いたことがある。横蹴りの癖があって始末に悪い馬を持っていたそうな、日ごろはむしろ困った馬だが、戦さになると、役に立つ。敵中に突っ込んだとき、敵兵を蹴散らしたり嚙みついたりでな、とんだ活躍をするとよ」
「――弥三郎もそれほどに」
「さ、それは何とも申せぬ。が、あの漢、尋常ではない」
「……」
「執念のようなものがあるな。使いようによっては、何か役に立とう。それというのも、ほれ、伊勢の北條よ」
「伊勢の北條？」
「新九郎だわさ。弥三郎は新九郎を憎んでおる」
「それなら、尚更に」
「否とよ。新九郎のほうでも、奴を殺したがっておる」
「……」
「それゆえ、生かしておく」
この意味がわかるか、というように海実は二人を見た。
「箱根山中に匿もうておく。いつか役に立つときがある……新九郎が相模を窺うときにな。それがなければ重畳。いざという場合の薬も時が経てば効目がなくなるが、薬を使わずに済めば、これに勝ることはない。な、その道理よ」
いさぎよい――北條新九郎の行為は、世間の眼にそううつった。
戦さが終ると、新九郎はさっさと韮山に引きあげた。
あとは三浦義同にすべて任せるというのである。大森藤頼にしても、義同を援助したのだから、領土的野心はない。
新九郎は、伊豆経営に腐心するようになった。
かれにしてみれば、相模へ手を伸ばすのは、
（まだ早い）

と、思った。
三浦一族と大森一族を追っ払ってその版図をおのれのものにするには、軍兵が不足した。
（野心を研ぐには、裏付けとなる兵力が要る）
その力を持つまでは、徒らに、爪を出さないことだ。
新九郎は伊豆の人心を惹きつけることに専念して、一切、胸裡をのぞかせなかった。
前にも述べたように、年貢の率を四公六民にして行ったし、天災があったとき――旱魃や地震、津波が少ないときは三公七民という思いきった減税措置を行った。
新九郎の巧みな政治感覚は、土地の風習や伝統を重んじ、安易に改革しようとしなかったことである。
豪族や地頭などを安堵させ、その権威を認めてやったことだ。
民衆の多くは、急激な変革を望まない。生活の変化は不安の要素が多いからだ。
新九郎はそうした庶民感情をよく知っていた。
国が富めば、領民も富み、領主も富む。民衆が安心して働けることが、政治の要諦であった。
人間の運というものは、おのれの行動のみで、もたらされるものではない。おのれの意思や努力だけの結果なら、運にはならない。
多分に他動的な幸運が作用する。
大森式部少輔氏頼が病死したこともそれなら、上杉定正が死んだことも、新九郎の開運につながる。
大森氏頼の死を聞くと、
「死んだか」
と、頷いた。
「哀れにな……」
それは誰のことを言ったのかわからない。
「弔問の使を出しませぬと」
と、荒木兵庫が言った。
「それを思うていたところよ」
「誰を」
「そちが参れ」
「これは、言い出しっ屁でございます」
「そうではない。そちがよい。これは難しい使者だぞ」
新九郎はゲームを楽しむような顔になっている。
「死者を弔うということは、何のためか存じておるか。つまりは葬いを盛大に行うのは」
「故人の冥福を祈るためでございましょう」
「違うな」
それくらいわからぬのか、と言いたげな顔である。
死者を葬うことの真意を問われて、荒木兵庫の答えは、常識的なものだったが、新九郎はかぶりを振った。
「違うな。死人をいかに葬ったところで、甦ることはな

い」
「はあ、それは」
「遺族のためよ。悲しみに打ち沈んでいる遺族を慰めるためよ。それが葬儀を盛大に、豪華なものにさせる……豪華であるほど、それは遺族の涙を拭きとってくれるものよ」
「なるほど、左様なもので」
「弔問の使は、したがって、遺族の悲しみを理解せねばならぬ。これが一つ」
座にいたのは、荒木兵庫ばかりではなかった。多目(米)権平がいたし、在竹兵衛、山中才四郎などがいた。
新九郎はかれらを見廻して、
「遺族を慰め、力をつけてやる。生きる力を与えてやるわけだ。つまりは、葬いに参集した者の数が多いほど、遺族は安心する。支えになる気がするものだ」
供物は充分に用意せよ、と言った。
早速、干魚や海苔や絹など、二十駄ほどを曳いて、荒木兵庫と山中才四郎が弔問使として行った。
父式部少輔氏頼に死なれて、信濃守藤頼は自信なげであった。あの戦さでも、かれは目立った働きをしていない。
才四郎は弁口の才がある。容子もいい。いかにも同情したように慰めた。
「われらが殿は、いたく式部少輔を悼まれての、何事にてあれ御援助仕りたいと申されておる。お力落しなきよう」
兵庫や才四郎は新九郎の腹心であり、重臣である。いまでは荒木は兵庫頭、山中は上野介に陞っている。
その重臣たちが心からの哀悼の辞である。若い藤頼は感泣した。
「北條どのに宜しく申し上げて下されい」
「お伝え致しまする」
北條新九郎が、早雲庵宗瑞と号した時期は明確ではない。北條系図によると延徳元年のこととしているが、古文書で見るところ、その年だと断じるほどの確実なものはない。文書から正確を期す場合本人の自署よりも、他人の文書の中にその記述があるほうが信用できる。
そういう意味では、確実なところ、京から飛鳥井卿が駿河へ下った際の〔富士歴覧記〕と名づけられる日誌に〝伊豆の早雲庵より……〟との記述が見える。
これは早雲が手紙を寄越したことを記しているので、早雲は、庵号であって、かれが名乗ったのは宗瑞である。
したがって、いつから、北條新九郎が、北條早雲という呼称になったかは明らかではない。
前記の飛鳥井卿の駿河下向は明応八年のことである。〔北條五代記〕によると、茶々丸を追い落した前後に早雲を名乗ったかのような調子で書いてあるし、多くの史書、稗史では、新九郎が、名を実子氏綱に譲って、早雲庵宗瑞と号したのは、茶々丸攻めの前だとしてある。
これを執ると、延徳三年の終りごろか四年の初めごろということになる。
それも、茶々丸の警戒を解き、伊豆の情勢を探るためだというのだ。
氏綱に名を譲ったのち、
「我すでに疾病の身たる上、齢すでに半百を越え、余命幾何もなかるべければ、自今以後弓箭を捨てて、閑に余生を養はんと欲するなり」
と。
因て、髪を削りて早雲庵宗瑞と号し、病気療養のため、且つは弘法大師の霊跡を巡拝せんと称し、俄に旅装を整え、往いて修善寺の温泉に浴す——とある。
だが、前記の飛鳥井卿の日誌は間違いないとして、その以前だとは推察できるから、どちらにしても、その十数年の間のことにちがいない。
信ずべき古文書で早雲の字が見えるのは、右の日誌を別にすると、まだ後になる。
宗瑞の名は、しかし、日誌以前に見える。
同じ伊豆の伊東伊賀入道宛の書状が残っている。これには宗瑞(花押)とはっきり書かれている。
おそらく、これは入道した際の法名であろう。はたして早雲庵の庵号も同時期だったかどうかは断定できないが、この明応四年二月には、宗瑞と名乗っていたことは確かだ。
話が前後するが、宗瑞とは自署したようだが、後世呼びならわされたように、北條早雲と自署したものは、寡聞にして、まだ見ない。
北條早雲と称うのは、後世の呼称ではなかろうか。
〝伊豆の韮山に在城ゆゑ伊豆の早雲とあまねくいひ伝へり〟と〔北條五代記〕に見えるが、これは後代の者の文飾であろう。
右の古文書からおして、筆者は、早雲庵宗瑞を名乗ったのは、足利茶々丸、三浦時高を新井城に破った後としたい。
茶々丸討ちに、駿河の清水港から兵船で押し寄せた事実を考えると、修善寺で入道したというのも、一寸そぐわないような気がする。
むしろ、その入道には、大森藤頼や、三浦義同の警戒の眼をあざむく必要があったからではないか。
前述のせりふも、そのほうが生きてくると思うのだ。
箱根には大森海実が、ぬけ目なく見張っているはずだし、かれらを安心させるためには、これくらいの細工が必要だったろう。
それくらい、新九郎の箱根越えは容易ではなかった。
大森氏の拠点は小田原である。箱根はその西の口になる。管領上杉定正の要請によって、新九郎は軍勢を関東へ出すことはあったが、そういう場合でも、ちゃんと大森氏へ意

を通じる。
定正の方からも、そのむねを大森氏へ申し送って、道をひらかせる。
こういう手続きで、通過するのであって、相模への侵略の意図が少しでも見えれば、阻止される。
新九郎には、その野心はないかに見えた。
定正の要請にはこころよく応じたし、小田原を通過するにも、手土産を忘れない。
馬匹とか、逞しい数頭の牛とかを、贈り物する。兵にもきびしく戒めて、小田原城下はむろん、大森氏の領内に於ける暴戻のことのないようにした。
戦さで気が荒くなった将士は日ごろの行いからは、思いがけないような振舞いをすることがあるのである。
新九郎がひたすら大森藤頼へ虚心を示したのは、死んだ氏頼が新九郎の野心を見ぬいていたことを知っているからだ。
藤頼に強く、新九郎不信を吹きこんでいたに相違ない。
それが、全くの氏頼の根拠のない猜疑だったと、思いこませねばならなかったのだ。
新九郎が生前、氏頼の心を獲ろうとして、和親を重ねんとして、使者を送り、辞を厚くして近づいたとき、氏頼は頑迷なほどの態度だった。
老臣らをこう訓して警戒心を解かなかったという。

「吾、新九郎ごとき者と交りあるにあらず、然るに、今、俄に来て和親せんとするは怪しむべし。故なく和を請ひ、交を求めんとするは、必ず謀あり、近づくべからず、寄するべからず」と。
権謀術数の乱世には、これくらいの用心は当然であったろう。
むろん、戦っているわけではないから、使者がくれば、応対する。
贈り物があれば貰う。が、それ以上に、胸襟を開こうとはしない。
新九郎はそれを見ながら、せっせと、好意を示しつづけた。
茶々丸がほろんだのち、さっさと兵を引きあげたのも、大森父子や一族の疑惑の眼をそらすためである。
こうした新九郎の気長な行動は、漸く若い藤頼をして、笑顔を向けさせるようになったのだ。
若い藤頼にとっては、新九郎のような男には一種の魅力を感じずにはいない。
小田原城に生れて苦労知らずに城主になれた男と、青春から壮年に至るまで多くの苦難を経てきた男の違いである。
「まだでございますか」
大道寺太郎重時が、しびれを切らしたように言う。

「何のことだ」
「箱根越えでございます」
「申すな」
「もはや、その秋が来たと存じますが」
「はやるな、まだじゃ」
「はやってはおりませぬ。機を外らしては、と、そのことを案じております」
「まだ、機ではない」
新九郎はあせらない。
藤頼は、かれへの疑いは、ほとんど解いたが、それだけでは足りなかった。
邪魔が入ってはならないのだ。
管領の上杉定正である。山内顕定のほうは、どうせ敵対しているからかまわないが、定正が小うるさい。
定正の眼が光っているうちは、うっかり手を出せない。
小田原城を奪れば、定正が、被官大名らに命じて、小田原奪還の軍を起すだろう。
それに対応するだけの戦備はまだできていなかった。
新九郎は、待つのに馴れている。
(機会はやがてくる)
信じている。信じて待つ。
これも新九郎の運というべきだろうか。かれの祈りが功を奏したように、定正が死ぬのである。

都合よくいきすぎる。
後世のわれわれの眼には、あまりにも、出来すぎている。そこまで都合よくいくものかと思うが、それが幸運なのであろう。
もっとも、新九郎にしてみると先のことなどわからない。人間は一寸先が闇である。死ぬのは自分かもしれないのだ。常人なら、自分の年齢を考えると、あせりがくる。それを圧えて凝っと好機の至るのを待つというのは大変なことである。
壮年のうちなら、それも出来るが、初老を過ぎてからは難しい。
人間の寿命は、潮の寄せるように、ひたひたと周囲に迫ってくる。同年配の者が、あるいは病苦を訴え、あるいは忽然として逝ったりするのを、身近に見聞きするたびに、焦躁せずにはいられなくなるものだ。
新九郎の偉さは、それに耐えたところであろう。おのれを恃むところが強かったのだ。
それも若年から、困苦にめげず、理想を抱き、強く生きぬいてきたことからくる自信。
(おれは容易には死なぬ。夢を実現するまでは、おれは死ねないのだ)
その信念が、常に気力を充実させ、壮軀を保ちつづけさせたのであろう。前記の〝病鴟うんぬん〟は、鋭鋒を隠す

擬態であろう。孫子は虚報を以て敵の戒服の帯を弛めさせることを教えている。

上杉定正の死は、疑いの眼で見れば、人為的でないこともない。

新九郎は、そのとき同じ戦さに出陣していた。

定正が宿敵の山内上杉顕定と干戈を交えると聞いた新九郎は、手勢を率いて大森氏へ意を通じ、相模へ出張った。

定正は大いに喜んだ。

「おぬしが来てくれれば、千騎を得たもひとしい」

日ごろ豪気の定正が、そんなことをいうのは珍しい。

事実、定正は苦戦していた。すでにかれは疲れていた。老衰と病魔に蝕ばまれていたのである。

武将の価値は強く、信望を担っているところにある。弱くなった武将には、存在の意味がすでにない。

定正としては、ここで山内上杉氏を完膚なきまでに叩きのめしてしまわなければ、安心して病いを養うことも、老いの身をいたわることもできなかったのである。

定正は忠臣の太田道灌資長を暗殺するという愚行を演じはしたが、その資質と戦歴から見れば、平均以上の武将である。

そのことは、かれが養子朝良を訓戒すべく、遺言状といってよい手紙を、後見の曾我豊後守に書いているが、その長文の手紙に詳らかである。

ここで引用するには長すぎるので、割愛するがその中で、嘗っての三度にわたる合戦のことを振りかえっている。

今日では貴重な資料であるとともに、定正自身の戦略や腹づもりがよくわかり、武将として一流であったことも、判然する。

これはむろん朝良への訓戒が目的なのだが、その内容は驚くべき記憶力によっており、その指摘も的確で、それは、また遂に朝良の凡愚さをあらわしてもいる。

この戦さ巧者の定正が、老いてなお、最後の気力をふりしぼっての戦闘であった。

あるいは、この戦さに、定正は出陣するべきではなかったかもしれない。

帷幕にあって、戦さ駒を動かしていても、新九郎などの軍勢でもって、勝利を得たかもしれない。

定正にはそれだけの自信はあったろう。いや、かえって、その助勢を得たことによって、さらなる自信を得、馬上で疾駆したのかもしれなかった。

かれの猛攻は、たしかに目ざましいものがあった。山内上杉顕定は高見原の戦いで先に敗北している。

いうなれば雪辱戦であり、それだけに意気込みも凄まじかった。

度々の戦いで、山内方は多くの将士を討死させてはいたが、何しろその分国は広範囲にわたっている。

駆り集めた武力は、扇谷上杉勢を上廻るものであった。

この熾烈な戦いもしかし、新九郎勢などの猛攻によって、顕定は敗走し、その首級を狙った定正は老軀を忘れて追いこみ、荒川を渡河したのである。

荒川を渡って、敗走の顕定を追おうとした定正は、河原で落馬している。

老軀は渡河するのが精一杯なのだったろう。

のちに新九郎が奇略によって、定正の一命を奪わんとし、落馬せしめたという説が流れた。

定正の死は、たしかに、新九郎にとって、飛躍のもととなった。したがって、かれの所為と見られたのだが、そう断定するには確証がない。

定正は、落馬して肋骨を折り、そのまま、病床に横たわるのを余儀なくされて、この戦さも、引き分けのかたちになったが、死ぬまで、定正は、上杉顕定の幻影を追っていた。

「顕定を討ったか、顕定の首級はいずれにあるぞ」

蒼白になったまま、うわごとのように叫び、何度も身を起そうとして暴れた。

側近の者があわてて押えつけねばならないほどだった。

骨折した肋骨が、そのたびに、またはずれた。定正は、眼球が飛び出るほど、眼を剝き、

「討て、山内を討て」

と、叫びつづけていた。

その叫びが、かすれ声になり、咳込んで、かっと血を吐いた。

傍に見守っていた養子の朝良の腕をしっかりつかんで、尚も何か言いかけたが、それは夥しい吐血で、言葉にならなかった。

朝良の手と膝は定正の吐血で真っ赤になり、かれは、蒼くなってわなわなと顫えているだけだった。

この凄惨な死にざまを、もしも太田道灌の子の太田資康が見たならば、心中、快哉を叫んだにちがいない。

資康は、山内勢の中にあって、父の仇である定正を狙っていたのである。

定正の死は、新九郎にとって目の上の瘤がとれたようなものであった。

ともかく、定正は関東管領であった。

新九郎の行動は、のちの世から見ると、下剋上の典型のように見えるが、仔細に行動を追って見てわかるように、直接的に、主君を討ってのし上ったわけではない。

駿河では竜王丸の五郎氏親を助けて今川氏の跡目を継がせているし、伊豆公方を殺したわけでもない。

政知はともかく、伊豆公方にちがいないが、茶々丸は、公方を僭称していただけであり、身分的には、なんの権限もない。

管領たる定正も、新九郎が手をかけたわけではない。

こう見てくると下剋上というのは新九郎を評するのにふさわしくないのである。かれは機会を待ったにすぎない。その機会を利用して風に乗った。機会をはずさなかったという点で、人生巧者だったのである。じっくりと年月をかけて待つだけに、その機をはずさないのだ。

定正の死は、相模への道を、新九郎のために開いてくれたといえる。

「いよいよでございますな、いつ箱根を越えるので」

荒川豊前守（又次郎）がそそるように言った。

定正の死によって、小康状態となった戦さから手を退いて、韮山へ戻った新九郎は、以前に変らぬ態度で、内治に専念していると見えた。

（いよいよ、相模進出の時機到来）

と、思っていた六人の宿将たちは、新九郎の腹中が理解できなかった。

（何ゆえ、愚図々々していなさるのであろう？）

と、不審がった。

乱世の武将たるもの、力が備わり、相手に隙があれば、容赦なく襲撃する。

それが当然の時代だった。

（まさか、怯れたわけではござるまいが）

新九郎を兄貴と立てて、神前に誓いの血盟をした六人である。

新九郎の行動には、心服している。彼が待つには待つだけの理由がある。一々理由を問うことはなかった。これまでも、議論の結果の行動ではない。心服とは、そういうことである。

だが、ここまで来て、動こうとしない新九郎に、じりじりしてくるのは、かれらもまた、壮軀に疲れを感じる年齢になっていたからではなかろうか。

「この機をはずすと、せっかくの秋が無になりまするぞ」

「いま攻めこめば、管領家には、手も足も出せませぬ。御決断下されては」

「口はばったいようではござるが一言、御下命あれば、われらが、手勢のみにても、小田原を抜き、相模の過半を切り取ってまいりまするが」

埒があかぬと見て、豊前守は、山中上野介（才四郎）や荒木兵庫頭などと連袂して、口説きにやってきた。

新九郎はうすく笑って、はやまるな、と静かになだめた。

「おぬしらは機と申すがな、その思いは、おぬしらだけではないぞよ」

「は？」

「おぬしらが思うように、向うも思うているということさ。人間の考えは、大したちがはない。おのれだけ、頭がよいと思うては、間違うぞ」

「はあ、それは、そうでござろうが」

「碁でも囲んで考えることだ」

「囲碁を」

「左様さ、おのれが陣をとったと思うと、いつの間にやら敵に囲まれておる。敵の方も頭の働きは同じさ、違うとすればほんの僅かのところだ。その僅かの違いは、のぼせあがっているか、冷たく考える時を与えるか、その差よ」

「わかりました」

「人間は猜疑ぶかいものだ」

と、新九郎は、三人の顔を見まわしながら言った。

「いかなる人間にも、な、多少に関らず、猜疑心はある。殊に弱い立場にあれば、風の音にも、樹々の葉ずれにも、神経をいらだてるものよ。たとえば小田原の大森藤頼にしてもが、おのれ一人では心もとない。三浦義同と上杉定正を頼りにしている。その両輪の一方が欠けた……となればこれは不安であろうからな」

その不安の延長線上に、新九郎がいる。

新九郎の動静には、看視を怠りない。少しでも新九郎の挙動にあやしいふしが見えれば、防備を固めるだろう。

三浦義同は、表面、新九郎の恩に感じいったように見せてはいるが、肚の中はわからない。

三浦一族を率いる立場になった以上、かれもまた、相模の名族としての排他性をあらわにしてくるのは、疑いない。

相模には鎌倉以来の名門を自負する流れが多い。かれらは武士の誇りを持ち、それは、かれら以外の者への拒絶の感情を養うものだった。

新九郎のように素姓のあやしい者には、はじめから、壁をへだてている。

便宜上、手を握り、行動を倶にすることはあっても、腹の底から共感することはない。

（旅牢人の成り上り者）

という差別感情をいつまでも持っているのだ。

新九郎にははじめからそれがわかっていた。

放浪の間に、どれだけ、その侮蔑の眼に見られたかしれない。はっきりと、口にされたこともある。罵られたこともある。

その年月が、かれに人生の裏を充分に知らせることになった。

無駄に辛酸を舐めてはいないのだ。

「名門を鼻にかける奴らほど、信頼がおけぬ」

と、かれは断言した。

新九郎にしては珍しく、はげしい言葉であった。

「おのれ一人尊しと思うている。名門といい名流という、かれらは無位無冠の素姓あやしき者を侮蔑することによって、おのれを高しとし、地位と権力を得ようとしている。いや、その名門のゆえに、その地位と権力が得られると思

うている。それを手にするのが当然だとな。それは言葉を替えれば、名門ならざる者には、地位を与えぬということよ。いかに力があろうと、いかに徳があろうとも、だ」
「左様な！　もはや左様な時代ではありますまいが」
「うむ。それをやつらは知らぬ」新九郎はにやりとして言った。「されば、それを知らしめてやることさ、な」

新九郎が悠然としていたのは、自信に満ちていたからである。
たとえば、自信のある犬は吠えないし、小犬のようにちょろちょろ動きまわらない。
時が来るのを待つ。その時を得れば一気に行動に出る。充分にためた力は、噴きだすとき、逡巡しない。その力は、容易に、一城を陥し、一国を奪うにちがいなかった。
「上野介」と、新九郎は才四郎を呼んだ。「小田原へゆけ、また進物を持ってな」
「はあ、二十駄がほども」
「そうだ、二十駄がほどな」
新九郎は笑った。
「家来どもも選んでゆけ、城下で事件を起さぬように、気の荒いやつは残してゆくのだ」
「そのように致しましょう、つまらぬことで喧嘩などされては、小田原の心証を悪くする」
「あまり酒も飲まさぬようにするのだ」
翌日、進物の荷を積んだ行列が箱根を越えていった。
大森藤頼はこの行列を迎えて、意外の感に打たれた。
「またか？」と、眉をひそめて、「伊豆の新九郎が、何とて、進物を」
「いえ、別段のことではないとか。ただの……」
「ただの、何だ」
「友好のしるしとかで」
「ふうむ」
藤頼はなお不審の眉をひそめていたが、贈り物だ。悪い気はしない。人間には、誰でもうぬぼれがある。
（おれのことを、さほどに思うているのか）
新九郎は油断のならぬ男だとは思っていたが、こう微笑を投げかけられては、態度も柔らかくならざるを得ない。
「新九郎どのに、よしなにお伝え下さい」
三日間、逗留して、歓待されたあと、上野介は返礼の品品を貰って、また箱根を越えて戻ってきた。
「こういう役目は悪くありませぬな」
従者が昨夜の思いを甦らせながら、にやにやして、山下をふりかえった。
「どうであった、昨夜の女は」
「はい、それがもう、ぬめッと白い肌で、はい、ひたひたと吸いつくようで、こう……」

「ばかめ、涎を垂らすな」
「そう言うおまえさまの伽の女は？」
「悪くはなかったな……」
黒髪を乱して、悶えた女の表情を、上野介も宙に描いた。自ずと相好がくずれるのはしかたがない。
能を見たり、女と遊んだり、珍味佳肴でもてなされてきたのだ。それは新九郎の好意に儀礼的にこたえるということだけではなく、正しく喜びからでたものであった。
その行列が、険岨な山路を越えてゆくのを見送っている眼が、巨杉の陰にあった。
「新九郎めの使いじゃな」
「あの旗印は、そのように見えまする」
嵐気に旗ははためいていたが、三つ鱗（うろこ）の紋所が見える。駄馬は積荷を重たげに、一歩一歩蹄を踏みしめてゆく。
「行きよりも、帰りが積荷は多いようじゃな、信濃守（大森藤頼）が、大層、はずんだものか」
皮肉な調子で言ったのは、今川弥三郎春忠であった。
かれはたっぷりした白布で頭巾をしていた。
大森海実が、そのことを強要したのであろう。
弥三郎春忠を助けて匿っておいたと知れれば、新九郎が承知しない。
海実は、箱根権現金剛王院の別当として、一身の責任で弥三郎春忠を生かしておいたのである。
これは絶対の秘密なのだ。新九郎にかぎつけられたら海実の立場は困難なものになる。捜（さく）りの者が山中に入っているかもしれないのだ。そこで、頭巾をかぶらせることにした。
弥三郎春忠は、その命令を聞くと、
「頭巾をな……」
一瞬、眉をひそめたが、妙な笑いを口辺ににじませた。
それは自嘲の笑いだった。おのれの昔を思いだしたのだろう。
顔の傷を隠すために、四六時中頭巾をかぶっていたことがある。あのころは、まだ若かった。駿河の泉ヶ谷で新九郎との宿命的な出逢いのときも頭巾をかぶったままだった。
むかし話に、鬼婆の仮面の話を聞いたことがある。
安達ヶ原か、あだし野か、こういう説話には、地名などはどうでもいいのだが、旅人から金品を脅しとるために、鬼の面をつけては、夜な夜なあらわれているうちに、鬼の面が顔から離れなくなってしまったという話だ。
弥三郎春忠はそのことを思いだした。
（おれには頭巾か……）
夏の暑いさなかに覆面をしているのは苦しい。快適ではない。
が、若さは——殊に今川の名門の血が、おのれの容貌の醜悪さを意識させて、かぶらずにはいられなかった。

若いうちは、男女ともに、容貌に対する意識が強い。
年齢とともに、容貌よりも中味が人間には大事だとわかってくるのだが、若いうちはどうしても、外見に左右される。
漸く、そのコンプレックスから解放される年齢になったのに今度は、隠遁の生活から、頭巾を余儀なくされることになったのだ。
（こうせねばならぬのも、新九郎めのせいだ）
弥三郎春忠は行列を見ているうちに、いつかぎりぎりと歯を軋らせていた。
（あいつを奪ってやろうか……）
弥三郎春忠は眼を光らした。
韮山の北條新九郎からの使者の行列。小田原へ行った帰りである。大森藤頼に貰った土産を二十駄に積んである。警護の士卒は馬喰まで含めて四十人たらずだ。
（山賊になって奪ってやったら、新九郎め、どんな顔をするか）
弥三郎春忠は、その思いつきに舌なめずりした。
（あの宰領は、背恰好からみると山中才四郎にちがいない。彼奴は新九郎の腹心の一人であった。つまりは、わしにとって仇の片割れじゃわさ）
殺しても当然、と思った。
弥三郎は足柄連山、箱根山界隈の地勢には通じているつもりだった。
悪くいえば執念深い、よくいえば計画性がある。一つのことを成就するためには、まず地形風俗を丹念に調査して、人心の帰趨を考慮し、あらぬ噂をたてておのれに都合いいように、誘導する。
今川家の内紛を煽動したのも、その術だった。
今川五郎範満と竜王丸との後継者争いを、火に油をそそぐようにして、憎悪と怨恨で決定的に分裂させたのも、かれである。
今川義忠が横死したことで、跡目を継ぐ資格は、血統からいえば、竜王丸。実力と今川家の血の濃さから見れば範満であった。
乱世の常識ですれば、範満が立つのがふさわしい。この二者択一の情勢から見れば、弥三郎春忠の入りこむ余地はなかった。
かれは、そこに入ろうとした。
名門という意味でも、血統的にも、たしかに、かれはナンバー3であった。
かれが野心を逞しくする方法はいわゆる漁父の利を占めることでしかない。
両者の和解は、もっとも、かれの存在を稀薄にさせることだったのだ。
その野心をうち砕いたのは、竜王丸の後見者を買ってでた新九郎だったのである。
伊豆に逃れて、伊豆公方足利政知の家中の騒ぎに乗じる計画をたてるに際して、かれは豆相の人心の向背を調べた。山河を跋渉し、気候を案じ計画を練った。かれには、手足となる家来が少なかった。
狩野川をあふれさせて、堀越御所を水攻めにすることまで考えた。これは人手と金を要することで断念せざるを得なかったのだ。
こうした計画性は、馬齢を重ね逆境を味わうごとに、ますます陰湿になってきている。
（才四郎を斬って、にせの行列で韮山城に乗り込む。新九郎めが、駿府の館を奪った術だ。あれを逆用してやれば、彼奴、仰天するだろうな）
行列は遠去かってゆく。
弥三郎春忠には、まるで、新九郎討ちの好機を逸したような無念さが感じられた。
所詮、いまの弥三郎には出来ないことだった。
（おれに家来があれば……）
四十人ほどの行列を襲うのに、同数はいらない。
（半分でよい、二十人もあればよい。新九郎を討てるかもしれないのだ）
その二十人どころか、五人といない。
いまの弥三郎には本当の家来は、たった一人。侍二人、小者一人、それに飯焚きの老爺と身のまわりの世話をする女一人。
むろん、その女は、夜伽も兼ねている。侍のほうは一人は老人だ。
この人数は、かれの家来ではない。
むしろ、看視役と呼ぶほうが正しい。
が、大森海実や藤頼に、
〝新九郎討ち〟
を歓迎する気持さえあれば、その人数はただちにかれの手足となるだろう。
（新九郎めは、世渡りがうまい）
腹だたしいほど、かれには巧みに見える。
（あいつは、ただ強い武将というだけではない、それが許せぬ）
おのれの妬心を、そう自己弁護した。
（誰もかなわぬ強い武将であれば、わしとて頭を垂れよう……だが、彼奴は、戦さ巧者というだけではない！　世渡り巧者なのだ。世間の奴らはそれを知らぬ。
うまく誤魔化されている。戦さ巧者のゆえに、今日を得ていると、世間では思うている。人を見る眼のないやつらめ、うまうまと瞞着されおって……）
弥三郎春忠も武将である。かれの誇りとする武士の名誉に於て、新九郎に敗北したことが、いまいましくてならな

いのだった。
「行ってしもうた……」
がっかりしたように、弥三郎春忠は呟いた。
「やれば、やれたのではないかのう、あの積荷を奪って、眼にものを見せてやりたかったな」
「はあ、ですが」
と従者は、その言葉を真に受けようとはせず、
「小田原からお咎めがありましょうほどに」
「知ったことか」吐き捨てるように言って、「いや、かれらとて、肚裡の中では、それを望んでいるさ」
「……」
「ただ、表面だけの交りよ。外交とはそういうものさ。そのうちに、と思うていよう。いや、その思いは新九郎の方が、強い。うかうかしていると、新九郎にやられるぞ」
弥三郎は、まだ昂奮が消えぬように、そこらを歩きはじめた。
そのとき木立の間に、女性の姿が見えた。
その女の姿は、木立のなかで、新鮮なものに見えた。
満目緑のなかで、女小袖の摺箔模様が、紅梅を描いた大胆なものだったせいだろうか。
「みほか？」
毎日、見なれた女であるにも関らず、弥三郎春忠には、まるではじめて見る女のようであった。
かれの気持が、女をそう見せているのだ。弥三郎春忠の視線を知って、みほは、小腰をかがめ、微笑した。
「――何の用だ」
ふっと、そんな言葉が出る。
心とは反対に咎めるようなひびきがある。軟禁状態の老人のとがった感情であろう。
かれは、山小屋から方十町の外に出ることを禁じられていた。
出る気持はない。いまの境遇は敗残の身にとって必ずしも悪いことではないのだ。
本来、斬首さるべきところを救って貰ったのである。その意味では、大森海実僧正に感謝している。
いまは雌伏の時なのだ。雌伏とは無為に蟄居するのとは違う。
尺とり虫の屈するは、延びんがためである。明日の飛躍のために今日がある。今日の閑暇を、明日のために生かす。弥三郎春忠は、その時機を何度か経てきているだけに、退屈とか無聊に苦しむということはない。
ただ、自らの意志で動かないのと、禁止されているのとでは、大いなる違いがある。
山小屋からかなり離れている。十町のあたりに幹に布繩を巻いた目印があるはずであった。
弥三郎春忠は、それを意識しないようにしてきた。

方十町といえば、かなりある。散策して、うっかり踏み出すほど狭い範囲ではない。
が、付添いの者たちは、きつく言い含められているのであろう。踏み出しそうになると、どこからともなく、誰かがあらわれるのである。
木立の向うにあらわれたみほは、しかしその看視の意味ではなかったようである。
「小屋に山賤がまいっております」
と、みほは言った。
「山賤が、か」
弥三郎春忠は眉をひそめ、従者を見た。
「このあたりの山賤なら、二、三人存じておりますが、誰であろうか」
「字平とか申しました」
「おお、あの者か。何か珍しいものでも持ってきたか」
「はい、鹿は如何かと申しまして」
「鹿肉か、悪くない」
従者は下唇を舐めた。
「弥三郎さま、鹿肉はお食べになりまするか」
「味噌煮にするか」
弥三郎は意味ありげにみほを見た。
小屋に帰ると、二人の山賤が待っていた。大きな水瓶から柄杓で水を掬って飲んでいた。
弥三郎は嫌な顔をした。
飲料も使い料も岩清水から汲んでくる、その水瓶からすべて使うのだ。
土間に大きな鹿が四肢をくくられて転されていた。まだ息があった。
そのみごとな斑文の背が一カ所破れて血が噴きだしていた。矢が命中したところであろう。
まだもがいているやつを四肢をくくって、丸太棒で担いできたのだ。
「買うて下さいまするか」
山賤の字平は、膝をついて挨拶した。
「みごとな角でござりましょう、お刀台に致せば、立派なものができまする。また、この皮も、むかばき、敷物など、何に致しましても……」
「わかっておる」
うるさげに弥三郎は顔を振った。
それきり無言で、足を拭いて上った。
囲炉裡が切ってある。粗朶火がちろちろと燃えていて、鉄瓶からは湯気がたちのぼっていた。
「あの、お酒を」
みほが部屋の隅から、酒壺を持ってきた。これは濁酒であった。

弥三郎春忠は黙って、酒盃を傾けた。
「あの……鹿は」
宇平がおずおずと声をかけるのへ、
「急ぐな」と、嗄れた声で言った。「考えておる」
「はあ……」
「考えておるのだ」
大鹿はまだ動いていた。が、もう生き返る様子はない。じりじりと死に近づいてゆく。
これを冷たく見ながら無言で盃を重ねた。盃といっても大きい。さしわたし、五寸ほどもある。
かれが飲み干すと、みほが注ぐ。弥三郎春忠も無言なら、みほも無言であった。
宇平と、もう一人の山賤だけがじりじりしているのだ。
何杯目かの酒をあけてから、漸く、弥三郎春忠は言った。
「――貰うておく」
「ほっ、これは有難うございます。やっと仕止めた甲斐がございます。こやつは、去年から追うていたやつでしてな。この箱根にも、これほどの大物は、なかなかにおりませぬ」
べらべらと饒舌りはじめた。
「一年もかかって、やっと仕止めたわけで、はい、如何でございましょうか、すぐに肉を喰わっさっしゃるなら、この場で皮を剝いで」
「余分なことをせずともよい」
「へ？」
「そのままでよい」
「左様で……では、鳥目を」
「別当の海実どのに申して、好きなだけ貰え」
弥三郎春忠は言い放った。
大鹿の価はいくらだったか知らぬ。その宵、大森海実のところから使いが来た。
「別当がお呼びでございます」
というのだ。
そのとき、弥三郎はすでに床に入っていた。みほを抱いていた。
「悪いところへ」
ふわふわと、弥三郎は笑った。
予期したもののごとくであった。
みほが弥三郎の傍にまるい腰をすべりこませていくらも経っていない。
ほかの付人たちは、別棟の小屋にいる。
弥三郎の様子は、いつもとは明らかに違っていた。五十の坂を越したとも思えない強い力と、激しさで、みほを抱き、まるで、憎しみをぶつけるような勢いで、挑んできたのだ。
みほは、そんな男が好きであった。小田原城下の育ちではあったが、みほは十六ですでに男を知っていた。弥三郎は最初の夜、問いつめて、みほが女になったのは、浜辺の破船の中だと聞いた。
その男の名は？　と聞かれて、おぼえていない、と彼女はこたえた。若者が三人がかりで、襲ってきたという。
「おかしな人たち」
と、その三人のことを、みほは思いだしながら嗤った。
「あたし、逃げる気なんかなかったのに、ガツガツして、そりゃもう、まるで、時化のあとの漁師が魚をとるみたいに」
三人で次々とのしかかってきたが、手や足を押えられていて、少しも楽しめなかったという。
そんな話は、弥三郎春忠を昂奮させたものだ。
この宵は、その話のせいではない。昂奮のもとは大鹿にあるのか、あの行列にあるのかわからなかったが、ともかく、弥三郎春忠のからだには、精気が漲り、年齢を感じさせない、おとこになっていた。
みほは小鼻に汗を浮べて、若鮎のような肢体を波うたせてこたえた。二人とも、しかし、歓喜の絶頂にのぼりつめないうちにほとほとと戸を叩かれたのである。
海実からの使いと聞いて、弥三郎はみほに囁いている。
「病気だと言え」
「え？　そんなこと……」
語尾が笑いによじれた。女の手は、かれのものに触れている。まだ熱く硬いのである。
「これで、病気？」
「方便じゃ」
「でも……」
「用があるなら、こっちへ来させろ」
囚人にひとしい身で、そんな強気なことをいう弥三郎春忠を、みほは驚きの眼で見た。
「ほんとうに、そう言ってもいいのですか」
みほは立ちあがり汗ばんだ素肌に小袖をひっかけながら眼を笑わせた。
みほは髪のほつれをなおしながら、戸口の方へ歩いていった。
その腰のあたりを、弥三郎春忠はねっとりした目で追った。
くりくりした腰の動きである。若い娘のはつらつとした生気は、初老の男にとって長命の薬にひとしいのだ。
交接の快楽が、まだ肌に余炎を残している。放ち果てていたら、さすがに弥三郎春忠も疲れを見せたろうが、訪問者のために中断しなければならなかった。
まだ、その証が、かっかと股間に燃えている。
門口へ出たみほは、汗ばんだ顔で金剛王院の別当大森海実の下命を齎した使者に笑いかけている。

「あの、別当さまにお伝え下さいって……ええ、こちらへお出で下さるようにって」
使者は、思いがけない口上に、急には返事が出来なかった。唖然としたのである。が、その驚きからさめると、激怒した。
「何ということじゃ、弥三郎めが左様なことを申したか」
「はい、病いで動けませぬと」
そう言いながら、みほは、自分の顔が、まだ昂ぶりを残しているのを、見抜かれるのではないかと気になっていた。
「病いですから、しかたがないんです……」
みほはそう言ってしまってから、何もあたしがこんな弁解をしてやることはないのに、と、自分の気持を計りかねた。
「病気か、病気ならしかたがないが……」
使者は、不満を残しながら、しかし、そのまま報告に帰るのはためらっている。
「別当さまに、こちらへ来いとは僭越ではないか」
「でも……」
「まあよい、そっちがそのつもりなら、それでもいいさ。おれは使いだからな、報告すれば済むことだ」
かれは念を押すように言った。のびあがって、女の肩越しに、部屋の方を見た。
それは、報告しだいで、弥三郎春忠がどんな目にあっても知らぬぞ、という意味だった。
むろん、その覚悟はできているのである。
弥三郎春忠には、あくまでも考えがあってのことだ。
「その通りにお伝えする。待っておれ」
使者は肩を振って去っていった。
心配そうに見送ってから、みほは、蒲団のところに戻って来た。
「大丈夫かしら」
「何が、じゃ」
「あんなことを言って。別当さまがお怒りになったら」
「ふふ、わしの首が胴から離れる」
「まあ、そんなことになったら」
「ほかの男に抱かれることさ。さ、そのまえに、さっきのつづきを」
弥三郎春忠は、素早く、女を抱きすくめて裾前から手をさしこんだ。
今度は、早かった。異常な事態が男女の性慾を昂ぶらせ、放ち果てるのに、時間をとらなかった。
弥三郎春忠は、若いみほのからだの上で、けもののめいた声を洩らして、躍動し、四肢を固くした。まるで骨が砕けるような強い力であった。
みほは悲鳴をあげた。はげしいあえぎが快楽の呻きに変ってゆく。

男が急速に冷めてゆくのとは反対に、身を弓なりにのけぞらせて、爪を立てた。
「こりゃ、痛い……」
「ああ、弥三郎春忠さま！　みほは、みほは……」
「いいか、いいであろうな。むだに年齢はとらぬて。ははは」
それにしても、この女、爪を立てるくせだけは、やめさせねば、からだじゅうアザだらけになるわい、弥三郎春忠は、満足のなかで思った。
（それにしても、そろそろ別当がやってくるかもしれぬ）
身を起そうとすると、みほは尚もしがみついてくる。
「これ、別当に見られるぞ」
「いい……かまわない」
「かまうのは、わしのほうじゃわい、ほれ、足音がした」
これは、みほの熱を冷ますのに役立ったようだ。漸く、手が離れた。
が、まるきり嘘ではなかったのだ。
その言葉が終らぬうちに、熊笹に音がした。笹を蹴散らすようにして、急ぎ足にやってくる者がいた。
大森海実だったのである。
「弥三郎！」
戸口で怒鳴っている。
「弥三郎、わしだ」
これに、にやりとして弥三郎春忠はみほに顎をしゃくった。
「ほれ、お出でだ。開けてやれ」
この家に戸閉りはない。
みほがのろのろと起き上ろうとしたとき、蹴破るような勢いで、海実が入ってきた。
「やい、弥三郎、うぬは、わしの恩義を忘れたか、よくも、わしの顔に泥を塗るような雑言を吐きおったな」
怒気に顔を赤くして、剃りこぼちた頭から、文字通り湯気を立てんばかりであった。
「これはこれは、わざわざ御足労いただいて申し訳ない」
ぬけぬけと弥三郎は言った。
言葉のようには申し訳なく思っている様子はない。
みほははね起き、あわてて、夜具を片付けはじめた。
身の廻りの世話をするのが役目であり、それは必然的に夜伽の義務も含まれてはいたが、やはり見られることは、娘の身ではたまらなかった。
「まあ、お怒りを納めて下され」
弥三郎春忠はにやにやしながら海実をなだめた。
「こやつ、無礼であろう、わしを何だと心得ておる。わしが一言、韮山へ通報すれば、その痩せ首は素ッ飛ぶのじゃぞ」
「ほ、そのときは、おてまえの猪首も討ち落されるでしょ

うな。つまり、韮山の新九郎を瞞した当人ゆえに」
「そ、それは……」
せっかくの恩がアダになったのかと、海実は、蒼くなったり赤くなったりした。
「ははは、ま、いうならば、そのようなわけじゃ。もとより、左様なことにはなるまい。別当どのとこの身は一蓮托生」
「……」
「左様とも、助けて下されたことは恩に感じておる。生涯、忘れはせぬ。が……」ぎょろりと眼をあげて、「この身を助けるには、それだけ其許のほうにも、利用したい気があったのではないか」
ずばりと言われて、海実はたじろいだ。
「いや……そうではない」
「ははは、糊塗されるな」
「そうではない」と、むきになった。「おぬしほどの男、出自といい、器量といい、死なせるには惜しい……」
「左様に小田原や三浦を説き伏せてくれたようだが、それは、あくまでもタテマエでござろう」
「否とよ、本心……」
「そうではあるまい。わかっている。本音は、別であろうがな」
「……」
「わしにはわかる」
こうなると、弥三郎春忠のほうが一枚上であった。年輪のちがいである。
「ただに器量だけではない。この世に、新九郎めを仆せる者があるとすれば、わしだけじゃとな」
「……」
海実は、完全に圧倒されていた。冬眠していた土竜が突然、土を盛りあげて、姿をあらわした感じであった。
「そこまで見こんでくれたことには感謝している。左様さ、その感謝を如何にしてあらわそうかと思うてな、ははは、頭をひねっていたのよ」
海実は何か言うべきだと思いながら、言葉が出なかった。うかと言えば、言質をとられる。この男を助命したのは、あくまでも、海実の胸三寸から出たことだったのである。
「何も申されずともよい。新九郎めは、わしが片付ける」
「左様なことを、人に聞かれては」
海実は、ぎくりとした。みほのうしろ姿をあわてて見た。
「御心配なく。それゆえ、かような手段で、この小屋へ御足労ねがったわけよ。おわかりか」
弥三郎春忠は、歯の欠けた口をあけて、嗄れた笑いを噴きあげた。
こうなれば、もうこっちのものだ、と、弥三郎春忠は、主導権を手にした思いだった。

「みほ、小屋のまわりを見て来い。注意して見るのだ」
「はい」
囲炉裡の火を別の粗朶にうつして束ねると、即席の松明にして、外へ出ていった。
この時代、夜行のための燈火といえば、殆ど、松明である。
少し後になると、油にひたした燈芯を燃やす短檠（燭し燈台）を手にさげるようにしたものを利用するようになった。
これが〝あんどん〟の原型になるのだ。行燈と書くのも、そのゆえである。
小さな松明をかざして、みほが小屋のまわりを警戒してゆく。
深閑たる箱根山中である。鳥の声がときどき、するどく頭上を走った。
草むらには虫の声がある。みほが歩いてゆくと、その声は細まり、通りすぎると、また湧然と起ってくるのだった。
中には松明の火をめがけて飛んでくるものもあった。
ジジ……と羽を焼かれて火のかたまりとなって落ちてくると、みほは、
（ばかな虫だこと……）
と、思った。
まだからだは、余情を残している。弥三郎春忠の熱いものが、股間にはさまっているように感じた。かれの身のまわりを世話するようになって以来、彼女は弥三郎ひとりのものであり、ほかの男には触れていない。
若者が隆々たる筋骨を太陽の下にさらして、汗を流して木を切ったりしているのを見ると、ふっと欲情したりもするのだが、みほはみほなりに、
（あたしは弥三郎春忠さまにお仕えするもの）
ほかの男と交ってはならないと思っている。
小屋の中では、弥三郎春忠が一膝乗りだして、海実の説得にかかっていた。
「新九郎めの野望には、其許もとっくに気がついておるであろうがな」
「いや……わしは、それほどには。韮山で如何なる考えを持っているか、そこまでは見通しが利かぬ」
「権現の利益でもわからぬかな」
皮肉に弥三郎は口を歪げて笑った。
「ところが、わしにはわかる」
「やはり相模を」
「乗っとる気持だわさ。この推測は箱根の山が崩れることがあろうとも、誤またぬ」
「……」
「一刻も早く、新九郎めを殺すことじゃ、一刻早ければ一刻だけ、大森一族が安泰になる」

「……」
「三浦義同を語らうがよい。そして一気に韮山を攻めるのじゃ」
「しかし、それは……何も理由がないではないか、いやさ、口実がない」
「口実など、あとから、何とでもなる。ほれ、昔から申すではないか、女は抱いてしまえ、銭は借りてしまえ、とな」
（女は抱いてしまえ、銭は借りてしまえ、か……なるほどうまいことをいう）
海実は感心した。弥三郎春忠には年輪の智慧がある。説得力がある。
海実は辛うじて、こう応えている。
「なるほどな、鉄は熱いうちに打てと申す」
「左様、その熱いうちとは、いまだ」弥三郎春忠の眼がぎょろりと光った。「いまをはずせば、鉄になってしまう、柔らかいうちに叩き折るのじゃ、よいかな、早速に三浦へ牒を出されよ」
「む……そうは思うても、こちらの考えを、必ずしも聞くとも思えぬ。三浦には三浦の考えもあろう。三浦のほうで何と申すか」
「さ、そのために口がある。口説くがよい。陸奥守義同とても、新九郎へは警戒を怠っていないはずじゃ」
「それはそうだが、じゃとて、戦さを仕掛けるのは……」
海実が言いよどむのを、弥三郎春忠は憐れむように、
「これだから坊主は困る」
と、横をむいた。蔑みをあらわにした。
「大慈悲もときによりけり、じゃ。決断を遅らせたゆえに、其許の首がとぶことになりかねない」
「まさか。左様なことにはなるまい。ともかく、まだ暫く様子を見た上で……」
「やれやれ、これだから坊主は」と、また言って、「そのような因循なことを言っていると、いよいよ、笠の台を失うことになるが、わしは、御免蒙りたい。わしはわしの方法でやろう」
「待て、弥三郎。軽挙するではない」
海実はあわてた。あわてて、止めにかかった。
「おぬしがへまをやれば、わしのほうにも、禍いが及ぶのじゃ。勝手な真似は許さぬぞ」
「ははは、へまをやれば、であろう、へまをやらねばよいではないか」
自信ありげな弥三郎春忠の言葉は、軟禁されている身とは思えない。
「念のために聞いておきたいが、新九郎を殺れば、奴の所領はわしのものにしてよいか」
「それは……」

「イザという場合に、軍勢を貸して貰いたいのじゃ、その約束ができるなれば、わしがこの一命かけて両家のために禍根を断とう」
「大きなことを」
「出来ないと思うか」
「――当り前ではないか、わしだけではない。誰でもそのように思うわ。一人の家来もなく、銭もなく、何が出来る。おぬしに出来ることは、みほを抱くことと、飯を喰うことくらいではないか」
「そのように蔑んでおくがよい、あとで驚くまいぞ」
弥三郎春忠は、したり顔に言い、顎をしゃくって大鹿を示した。
「あれじゃ、あれを用いる」
大鹿はもう完全に死んだように、びくとも動かない。

朱卍の矢

大鹿を用いる。
一体、何に使うというのか。軽挙せぬように、念を押して海実が去ったあと、弥三郎春忠はただちに行動を起している。
一人ではなかった。みほが手伝っている。
この女は、弥三郎の命を受けて喜々として、命令を遂行している。
二日目のことである。事件が起った。
いまの熱海市の西方に鷹巣山が聳えている。北伊豆の背景といわれる箱根連山の十国峠から二十キロばかり南方になるが、その西に丹那の盆地がある。
丹那トンネルが通っているあたり、滝沢の聚落が静かなたたずまいを見せている。
当時は、このあたり草葺きの家が数えるほどあるくらいで、韮山城の番小屋が建っていた。

鷹巣峠を見張っている者が三人交替で詰めていて、木樵などが、時折、立ち寄ってゆく。

この南北へ走る山脈が、北條氏と伊東氏の所領の境界をなしているのだ。

新九郎が、堀越御所を焼討ちして、伊豆公方をほろぼしたあと、南伊豆のほうまで手をのばして、結果的に版図となしたのは、茶々丸を滅ぼす必要性からである。

したがって、やたらと近隣を浸蝕したわけではない。

伊豆の北東に蟠踞する伊東氏と、友好を保っているのがその証左であった。

伊東伊賀入道は領民の信望厚くその版図はゆるぎがない。

新九郎も侵略しようとしなかったし、伊賀入道の方でも、この新興勢力に挑戦するような素振りは見せなかった。

したがって、両者共存のまま今日まで来ている。

伊賀入道が慎重だったのは、茶々丸攻めにも加わらなかった代りに、茶々丸や三浦時高に与力することもなかった。おのれを守るのに固く、毅然として、存立していたのである。

ところが、この両者の平穏が破られることになった。

それは一頭の大鹿のせいだった。

滝沢番所の者が見つけた。いや正確には木樵が発見したのだ。

みごとな大鹿が杉林に横たわっていた。

矢が深々と刺さっている。

そのことにふしぎはない。

矢柄に伊東氏の隠し紋である、卍紋が見えたのである。

鷹ノ羽のすぐ下のところに卍紋を彫り、朱を入れてある。いわゆる朱卍といわれるものだ。

北條家の滝沢番所の連中は、この卍矢に顔色を変えた。

「これは大変なことになった」

「伊東の家中が、当家の鹿を射殺したぞ」

「当領内の鹿を伊東家の者が射殺した」

その報告がただちに韮山城へ届けられた。

当時の境界はすこぶるあいまいなものだった。

川などがそれである場合ははっきりしているが、山の稜線などはかなりいい加減なものだ。

あの山からこっち側とか、沢の向うとか、きわめて漠然としている。

そこで仲違いすれば、必ず紛糾するのだ。

縄が引いてあるわけではなく、塀や柵があるわけでもない。

たとえば巨木の幹を削って墨書きしたり、なかには石柱を立てたりしたところもある。

が、所詮そんな程度では人間は知らず、山に棲む動物にわかるはずもなく、彼らは自由に往来している。

野生の動物たちにしてみれば、領主もくそもないのだが、

人間の世界ではこれが大問題になる。

「なに朱卍の矢が鹿を!?」急報を受けた多米周防守長宗は眉をひそめて「左様なはずはあるまい。伊東の者が当領で狩りをするなど」

「しかし、矢が……」

「うむ、確かに朱卍は伊東家中の用いるもの。だが軽々に騒ぎたてるではないぞ」

昔、多目権平といっていた時代なら、それこそ先頭に立って騒ぎたてたに違いない。だが彼も年齢とともに、落着きが出ている。

「これは、しかと確かめねばならぬ。その鹿と矢は、そのままにしてあるであろうな、ただちに運んでまいれ」

使者に命じた。

使者はその返命を持って、すぐに馬を飛ばせた。

その間に、周防守は新九郎のもとへ知らせをやる。

新九郎はその時興国寺城に来ていた。

彼は伊豆の過半を領するようになったが、なお駿河の今川氏の被官としての立場を保持していた。

今川氏親の後見であり、もっとも良き味方として、駿東の守りを固くしていたのである。

氏親もまた、新九郎がいるという安心感でなにかと相談する。

駿東の方は安泰なのだが、西の遠江、三河のあたりにまた不穏な空気があり、その相談もあった。

新九郎は大鹿と朱卍の矢のことを耳にすると、

「大事に至らぬようにいたせ」

といった。

伊東氏とは事を構えたくはなかった。

今の新九郎にとってもっとも考えねばならぬことは、箱根の問題であった。

大森藤頼はまず心配はないが、三浦義同は油断がならない。義同が動く時は、しかし藤頼はその手先になる。

そのためにも箱根山を自領にしておかねばならなかった。

韮山に運ばれた大鹿は、重臣たちの面前に横たえられた。

「まれに見る素晴らしいものじゃのう」

「左様、これほどの大鹿は、めったに見ることはできぬ」

「これほどのものを、伊東の者が射止めたということは、前々から狙うていたのではないか」

「ということは、御領を窺うていたことの証左になるな」

「そこじゃ、問題は」

大道寺玄蕃頭重時をはじめ、荒木兵庫頭、多米周防守、荒川豊前守、在竹兵衛尉、山中上野介らである。

問題は、自領に生息する鹿を盗ったとか殺したとかではない。

それは些細なことだ。

当時は——後世でもそうだが、武門にあっては、面目を

重んじる。
　他家から、（あなどりを受けた）ということが、大事なのだ。
　あなどり、とは、軽く見られたということであり、それは侮辱を意味し、面目を踏みにじられた、ということだ。
　武士たる者は、〝他に犯されない〟ことが誇りであり、他の暴虐や侵略には、決然と立つ——その原則があってこそ、価値があり、存在理由がある。
　何ごとも丸くおさめようとか、少しぐらいは我慢しようとか、そういう情の話ではない。
　一歩、譲歩するのは、全部を譲ることであり、自らを抹殺することであった。
　それは武門にとっての死を意味する。
　乱世では殊にそうである。武士ばかりではない。
　商人たちは〝座〟を形成し、（現在でいえば、組合）衆生済度の坊主でさえも、僧兵として武装し、それぞれ自分たちの利益を守ろうとしている。
　譲歩は、敗北であった。
　力がすべての時代に、侮辱を許せばどうなるか、重臣たちの中には、
「これは戦うしかなるまいぞ」と、言いだす者もいた。
「向うでは、その気で、当家のけものを射たのだ」
「まあ待て、そう性急に考えては事を誤まる」
　新九郎のもとから折りかえし、帰ってきた使者は、慎重に処理するようにとの伝言を持ってきている。
「間もなく、殿も、お戻りになる。決定はそれからじゃ」
　大道寺重時が、みんなを押えた。
　新九郎が戻って来たのは、それから半刻ほど経ってからである。
「なるほど、これか」
　白州に横たえられた大鹿を見、それから朱卍の矢を見たが、
「しかし、たしかに伊東の朱卍であろうか」
　新九郎の言葉を聞いて、重臣たちは、眼から鱗が落ちる思いだった。
「それは……」
　と、荒木兵庫頭が何度も頷いた。
「たしかに、考えねばなりませぬな。ただ朱卍というだけで、伊東のものとはかぎらぬものを」
「それはそうだが」山中上野介は、朱卍の矢に手を伸ばして、「他にかような文様を彫るなどする者がいようか」
「さ、それはわからぬ」
「こちらへ」
　持って来るように、と、新九郎は手を差し延べた。
　白州にうずくまった侍の一人が、大鹿の矢に手をかけたとき、

「待て」
　と、新九郎は立ち上った。
　立ち上って、きざはしをおりていった。
　しかし、矢を自ら抜こうというのではなかった。
　手を触れずに、矢を見た。いや、矢が突き刺さった個所を見ていた。
　他の者には、その視線の向けられたところが、異様に感じられたのである。
「おかしい……」
　ふっと呟いている。
「殿、何か」
　と、大道寺重時が、傍へ寄ってきた。
「面妖じゃな」
「……」
「見よ、この傷口を」
「はあ？」
「この矢は、動かしてはいまいがな」
「はあ、最初のままでございますが、それが、何か」
「傷口がはじけている」新九郎は手をふれた。「この傷口は、皮のところが、逆に裂けているな……さながら、大雁股の矢尻を、ひき抜いたあとのような傷じゃ」
「なるほど、仰せの如くに見えまするな」
「ひとたび、矢を抜いて、また、刺した」
「はア……しかし、左様なことが。何故に、左様なことを」
「誰かが、仕組んだことかもしれぬ」
　新九郎のこの推理は、しかし、大道寺たちには、かなり突飛な発想に聞えたことである。
「左様な酔狂な真似を」
「いや、考えられることよ。したが、もう一度、よく調べてみよ、滝沢番所の者を重ねて問い訊すがよい、この矢尻を一度、抜いたかどうかじゃ」
　そのことは、先に多米周防守が聞いている。
　動かさなかったという返事だったのである。だが、念のために、かれらはふたたび問われた。
　新九郎の前である。恐縮しながらも、はっきりと答えた。
「こりゃ、大事だと思いましたゆえ、手をつけずに、運びましてございます」
　というのだ。
　矢が引き抜かれたのは、それからであった。
　大雁股だとばかり思っていただけに、一同は、その矢尻を見て、意外なあまり、眉をひそめた。
「尖矢ではないか」
　尖矢にも大小ある。その朱卍の矢は、大尖矢であった。
「ふうむ、これは」小鬢を掻いて、「どうやら、殿のお考えが当ったようでござりますな」
　慎重に矢は引き抜かれている。

雁股の矢尻は、一度刺さったら抜けないように、先端がわかれている。

卑俗な表現をするなら、腰をかがめて、両脚を踏んばったようなかたちだ。

ところが、尖矢は、先が細く尖っていてよく刺さる。が、引き抜くのは雁股に比べて楽である。

刺さっていた朱卍の矢は、後者であった。

傷口の大きさに比べて、尖矢はすっと引き抜けた。

「それみろ」新九郎は、それが楽に引き抜けたことも、証左だと言った。「番人どもが発見したときからでも、半日以上経っている。本来、尖矢であってもかように容易には抜けぬぞ」

刀でもそうだが、時間が経つと矢尻など特に肉が巻きこんで、抜けなくなるのだ。

「すると、これはひとたび矢を抜いて、ふたたび、突き刺したわけで？」

「そうとしか考えられぬ」

そういわれてみれば、死んだ鹿の眼は、かなりの時日の経過を物語っているようであった。

「ともあれ、この矢が、真実、伊東家中のものかどうか、それから先に調べては、如何でござろう」

在竹兵衛尉が膝を進めて言った。

「どうやって調べる」

「伊東の城へまいって……」

「左様な手だてで、真実が知れるかな」新九郎は、片頬を笑わせて兵衛尉を見た。「もし真実、その矢が伊東のものであったとしても、素直に、左様に候、と申すと思うか」

「さ、それは」

「申すまい。おれなら申さぬ。さすれば、これは隠密に捜るしかあるまいな」

「隠密に、と申しますと」

「それよ。わしに考えがある。このことは内密にしておけ。それから、大鹿のことも、敢て騒ぎたてるには及ばぬ」

新九郎が何を考えたのかわからない。その日のうちに、かれの密命を受けた者が西へ走った。

その一方、新九郎は大鹿のことを調べさせた。

その大鹿を韮山城下の立売ノ辻に吊し、傍に高札を立てさせた。

「この鹿に見覚えある者は直ちに申し出よ」

というのである。

むろん抜身の槍を持った足軽小者が番をしている。

何事かと群衆が寄って来る。これほどの大鹿はやはり珍しいのだ。

人々は鹿を囲んで、口々に驚きをあらわし、ほめそやしたりしている。

「ほうほう、なんと大きな鹿だがや」

「ほんにのう、大したものだ。この鹿肉なら五十人前はあるじゃろ」

「いや、百人は喰えるわい」

「なんと美味そうな」

「いやいや、かように大きゅうなるとな、肉は固うて、喰えたものではないで」

「そうでもないぞ、鹿肉は喰い方ひとつじゃで。鹿肉と女は、こなすほどよいちゅうてな、ははは」

どっと周りの者が笑い崩れた。

群衆の中にまじっていた周防守は、

「つまらぬことばかり申しておるわい」

と、藁編笠の陰で太い眉をしかめた。

「肝腎のことを……」

鹿肉のことなどどうでもいいのだ。

問題はこの大鹿に記憶のある者がいるかどうかであった。高札を立ててはいても、なかなか領民という者は本当のことをしゃべってはくれない。

そのためには、こうしてしゃべっているのを盗み聞きした方が確実であった。だがなかなか核心には触れてくれないのだ。

しばらくいて、周防守は歩き出した。

と――、

「鹿のことなら鹿兵衛を連れてくるのが一番早いわいな」

そんな声が聞えた。

周防守は足を止め、振り向いた。

手作りらしい弓矢を肩にし、兎を二、三羽ぶら下げた山者らしい老爺が、したり顔に歯の抜けた口に唾を溜めてしゃべっていた。

「鹿兵衛なら、どの峰にどんな鹿がいて、どの沢の鹿は、夫婦だとか子が産まれたとか、よう知っとるわえ」

「おぬしは鹿は追わぬのか」

と聞いた者がいる。老爺はしわしわと笑った。

「わしはこれよ。この年になると兎や狸しか追えぬわいな」

百獣屋にでも行くのであろうか、老爺は歩き出した。

黙って半町ほど後をつけていってから、周防守は足を速めた。

「これ、ものを訊ねたい」

「へえ」

「わしは城の者だが、その方が今申していたのを聞いた。鹿兵衛とは何者か」

鹿兵衛という名はおそらく鹿好きの上に自ら名乗ったのか、他からいいならわしたのか、通称となったものであろう。

鹿兵衛の小屋は、藤ノ尾というところにあった。韮山の城下から一里あまり離れた山麓である。

そこに鹿兵衛は一人で住んでいた。
偏屈者という評判だった。住所を聞くと、多米周防守は郡奉行に命じて鹿兵衛を呼び出させた。
ところが、
「小屋にはいませぬ」
という返事だった。
「鹿兵衛は小屋にいるよりは、山や谷で寝ることが多うございましてな。なんしろ、鹿を追って山深く入りますとな、帰って来れないことがあるので」
鹿兵衛をよく知っているという村人がいった。
「大体どのあたりかわからぬのか」
「はい、それが、あの鹿兵衛めは、一頭の鹿を追うて山から山へ渡り歩きますゆえ、御領内はおろか他領へも踏み込んでまいりますれば、とてものことに足跡を追うのも難しゅうございましょう」
「すると、今日明日に戻るという目安もないのか」
「さてさて、今にも帰るかもしれませぬし、五日も戻らぬかもしれませぬ」
それではまるきり当てには出来ない。
「――そうか、ま、戻って参ったら、すぐに左様に申し伝えよ。また他の山者にも申しつけて、鹿兵衛と逢うたならば、韮山へ出頭いたすよう申し聞けおけ」
鹿兵衛だけを頼りにしなくても、誰かが申し出るかもわからない。
多米周防守は、その次第を、新九郎に告げた。
「そうか、鹿兵衛という名があるほどのやつなれば、界隈の鹿のことに詳しかろう。山奉行の手の者を二十人ばかり、探しに行かせよ」
大鹿はすでに死んでいる。
あまり日数が経ってしまうと、腐りがくる。
その前に、疑惑を突きとめねばならなかった。
新九郎はその一方、密かな手を打っている。
その男がやって来たのは二日と経たぬうちであった。
山者の一人がその男を見かけたのは、三国峠の近くであった。
黒い一陣の風が走ったかに見えた。
小柄な男である。紫蘇の染めの筒袖に軽衫(かるさん)様の脛の詰った袴をはいて、短い刀を差している。
その男は、杉木立の中を魔風のように縫って走っていく。山を下れば伊東の城がある。
「おお、あれだな……」
濃い紫蘇染めの頭巾の陰から、その男は城の姿を見てうなずいた。
後世のように、華麗な天守閣はない。丸石の乱積みの外側に濠が掘りめぐらしてある。
空濠のところもある。水利の関係で水を引けないところ

は空濠を掘る。
その忍び装束の小柄な男は、濠を渡ると石垣に飛びついた。
まるで乱積みの石の間からすべり出てきたヤモリのような感じであった。
あざやかに石垣を登って、土塀を越え、板楯の間をぱっと飛んだ。
伊東の城は、伊東伊賀入道の居城である。これまで堀越御所に対しても敵対を示さず、さりとて接近するわけでもなく、おのれの本貫の地を守ってきた。
その態度を、新九郎に対しても取り続けている。
いたずらに戦さをするよりは、おのれの父祖の地を守ることが使命だと考えている伊賀入道であった。
ことにますます強大になっていく新九郎には、警戒を抱きながらも、それを表面にあらわさない。
まさかその怪しの影が忍び込んで来ようとは。
伊東一族には、思いがけないことであろう。
一応見廻りの者はいる。たとえ直接的に戦争状態ではないにしても、なにしろこういう時代だ。警戒は怠らない。隙を見せれば、どこから牙をむいて飛びかかってくるか知れない。
見廻りの者は、長槍をかいこみ、小具足をつけて、片手に松明。それぞれ持ち場を定めて見廻る。
忍びノ者は、じっと身を伏せて闇の中で眼を光らせている。
見廻りの隙をうかがって、ぱっと小石を投げた。
小石は、遠いところで石垣に音を立て、はねて濠の中に転り落ちる。小さな水音がたった。
見廻りの者は怪しんで松明をかかげ、濠の面(も)をのぞき込んでいる。
その間に忍びの影は、塀際をすべるように、望楼の下へ走っていた。そこから、さらに矢倉の方へ。
城の構造というのは、どこでも大体決っている。彼が狙っているのは、矢倉のようであった。
この伊東の城は、二ノ丸と三ノ丸に大きな矢倉があり、本丸には糒倉がある。
物陰から物陰へと拾って、忍びノ者は、三ノ丸の矢倉へ近付いていくのであった。
見廻りの雑兵であろう、松明の火が近付いて来る。その忍びの影はさっと跳んだ。
巨杉の幹に張り付いた。ところが、そこも安全とはいえなかった。
松明のはぜる音が別の方向からも近寄った。
それを知ると、次の瞬間、影は大地を蹴って、舞い上っている。
下枝に飛び付くと、ひらりとはねて、枝の上へ。そのま

まぴたりと、身を伏せる。数片の杉葉がはらはらと散った。さいわい、見廻りの者には悟られなかったようである。松明が近くを通り過ぎた。忍びの影は、呼吸を止めている。

二つの松明が遠去かるのを待って、その影は枝から地上へ音もなく舞いおりた。

忍びノ者が敵を倒すのは易い。だが、それは忍びノ者としては、下策のワザである。

本来、忍びノ者はその存在そのものを抹殺していなければならない。

足跡を残してはならないのである。

たとえば錠前なども破るのは易しい。が、破ったという痕跡を残していいのは、よほどの場合か、戦さの最中のことだ。

忍びノ者に入られたことを相手が悟れば、次の手を打ってくる。それは大方の場合、折角の行為も無に帰すことになる。

矢倉の背後には、矢竹が生えていた。

忍びの影は、まだそこに忍んで根気よく機会を狙った。彼はただ潜んでいたのではない。見廻りが矢倉の前を通り過ぎて、また廻って来るまでの間を計っていた。己の呼吸を数えている。

忍びは耐忍を第一とする。夜の底に虫のように潜む。常に冷静であらねばならなかった。従って、呼吸を乱さぬ訓練をしている。その間隔は狂いがなかった。見廻りの者の眼が離れる僅かの時間に、矢倉の錠前に挑むのである。

忍びの影は、さっと走り寄るや、錠前を開け、確実に戸を元の通りに閉める時間まで計算していた。

彼は中に入ると、ほっとして懐中から紙燭を取り出して点火した。

小さな火が内部を照らし出した。夥しい矢がある。弓も数十張、板壁にたてかけられ、矢も靫に並んでいる。

火が消えた。忍びの男は、別の紙燭に点火した。そして、一本の矢を取り上げた。夥しい数だけに一本くらい盗んでもわからないに違いない。彼が次に考えることは、また見廻りの者に見咎められることなく、この場を出ることであった。

矢を盗む。

伊東の城では、そうした者が忍びこむなどということは、考えられなかったろう。

だが、その翌日、この事実は、伊賀入道に知れることになった。

韮山には、透破と呼ばれる情報を集める者が入れてある。隠密とも呼ばれるが、これらの忍びノ者たちを入れることは、当時では常識であった。

戦さの相手に忍びこむのは当然としても、そうでない平

時にこそその活動は重要なのであった。

透破と乱破のちがいは、その間のことを証明している。

透破は、情報を集めることが主な仕事であるが、乱破は、破壊活動だ。後方攪乱を専らとし、火つけをしたり、ときには暗殺もやる。

その専門の者もいるが、透破も場合によっては、その行為に転じざるを得ないことがある。

しかし、そうしたことは、緊急のときであり、透破の専門ではない。

かれらは情報蒐集に乗りこんでゆくのではなく、年月をかけて、領民の顔になっている。

つまり、三年、五年と、そこに住んでいる。その間は一切、情報活動はやらないのである。

いかに領民になりきるか、それが、目的だからだ。

領民になってしまえば、いざというときに、多少の怪しいことがあっても、追及されることは少ない。

たとえば、深夜、城の近くを歩いていて見咎められても、弁解は容易なのである。

ところが、旅の者であれば、一寸、目つきがおかしい、というだけで、引っ張られる。

近代的な法律など考えられない時代だ。力が法律の時代である。拷問されても抗弁の余地はない。

したがって、難しい仕事は、この地理地勢に明るい〝根つき〟の者がやり、その情報は連絡係に渡す。

それには、ただの連雀（行商人）でいいし、山伏などの風体をしていて、足をとめずに通過する。

あらかじめ定めてあるところに置いているのを拾ってゆくだけでもいい。下手に手渡すなどの接触もする必要はないのである。

もっとも、通過するだけでも、訓練された目や耳をはたらかせれば、かなりのことは摑めるのである。

その透破が、もたらした情報では、

「当家の朱卍の矢が、北條領内の大鹿を射殺したとかで、大変でございます」

というのであった。

「左様なことがあるはずはない」

あわてて、矢倉の矢を調べさせた。かなりの数ではあったが、一本不足しているのが発見された。

伊東の城に不安がみなぎるころ、多米周防守は、藤ノ尾の鹿兵衛の小屋を訪れていた。

小屋は粗末なものであった。

山麓といっても、山を少しのぼった杉林の中である。

鹿兵衛は、鹿とりの名人ではあるが、偏屈者で通っている。

この小屋もそう訪れる人がいないとみえ、草が踏まれるより、伸びる力のほうが強いのであろう、あたりは雑草に

蔽われていて、一見、人が住んでいるとは見えない。
「まだ帰っていないとみゆるの」
周防守は供の者をかえりみて言った。
「はい、いつ戻るやらわからぬと村人も申しておりました」
「待てぬ。急がねばならぬというのに……」
周防守が自身で、わざわざ、このような小屋にやってくることはまず、あり得ないことであった。
それだけ、事件は大事であった。鹿兵衛は不在であったが、戸は開いていた。
戸じまりなどしないにしては小屋の中は、豪華なものであった。
いや、豪華というのは、当時あたるまい。異様というべきか。
中は、鹿だらけであった。鹿の頭がごろごろしている。鹿の角が投げだしてある。
みごとな鹿の皮も、十枚前後ほうりだしてある。
この粗末な小屋に、これほどの鹿のすべてがあるなどとは、誰も知らないであろう。
鹿兵衛が、人づきあいが悪いだけに、この小屋にはこれほどのものがあるとは、誰も知らない。
しかし、本人は、それほど、これらの鹿皮などを、大して貴重なものとは思っていないのであろう。
鹿を追う。
狙った鹿を仆すことに、異常な熱意を持った男にちがいなかった。
手作りの弓が、二、三張、立てかけてある。
けもの相手に山野を駈けめぐるかれらの中には、弓師の作る弓に、ものたらなく思う者が多い。
弓は、おのれの手にあう大きさ、重さ、均衡を必要とするから、自分で作りたくなる。
弓の弦もまた、張り方がある。
弦はもともと、麻を縒って作るのだが、これを天蓼子と呼ばれる松脂を油で練ったものを塗って乾かして用いるのである。
強弓には、強弦が必要なのはいうまでもない。
弦の、矢筈のあたるところを中仕掛というが、ここには太く麻糸を巻いておくが、その太さも常用する矢筈の切れこみにぴたりとあわなければ、思うように射れない。
これらのことを考えると、自分の弓は自分で作るのが一番なのだ。
周防守は、その弓に目をとめた。
「鹿兵衛と申すやつ、よほどの大男であろうな」
と、言った。
「はい、左様な話でござります。身の丈六尺あまり、膂力あくまで強く、大鹿と組み打ちに倒し、鹿の角をひき裂い

たというほどで」
「なるほどな、これほどの弓を使うとなれば、それくらいの膂力がなくばかなうまい」
周防守は弓を手にとって頷いた。
鹿の首も、鹿角だけのものも、無造作に置かれた鹿の皮も、いずれもみごとであった。鹿皮にはどこにも傷がない。
鹿の皮は特に武将たちがほしがる。敷物としても、ムカバキにしてもいい。
特に敷物は、矢傷などがあると、価値が半減する。
この無傷の鹿皮をこれほど持っているというのを見ても、鹿兵衛が強力だというのがわかる。
弓で射止めるだけでは、こういう無傷の鹿皮は手に入らない。
罠にかけるか、組み打ちに倒すかしなければ、得ることが出来ないのである。
それも、常に一人で行動しているというのだから、大したものだ。
「山賤にもかような男がいるものを、捨てておくのは惜しいな」
周防守は、感歎して呟いた。
人の上に立つ身になると、ものの考えかたが違ってくる。いまの多米周防守は、もはや昔の旅牢人の権平ではない。
いかに北條家のために役立つ人材を集めるかを考えるようになっている。
そう話しているとき、外に足音がした。
「やい、誰じゃ、わしの留守に小屋に踏みこんでいるのは」
野太い声であった。
「鹿兵衛さまの小屋を荒す奴は、生けては返さぬぞ。うぬの素ッ首、引っこぬいて……」
ぬっと、入ってきた。
見るからに野性的な壮漢であった。日焼けした皮膚は、さながら松皮のように厚く、無精髭が半面を蔽って、眼だけが、ぎらぎらと光っている。
かれは一頭の鹿を背負っていた。
小屋に入ってくると、二人の前にどさりと投げだした。
「世話を焼かした割には、大したものではなかったわい」
これは独り言である。
かれは大きく呼吸をし、小屋の隅の甕の蓋をあけると、柄杓で掬って水のように飲んだ。
芳香が小屋の中にひろがった。何かの果実酒だったようである。
それから、あらためて、二人を振りかえった。
「何を盗みに来たのかいの」
と、言った。にやりと、皓い歯を見せた。咎めるふうではない。
「角か、皮か。この鹿兵衛小屋のものは、ちょっと値が張

るが、よいか」
「なるほど、みごとなものばかりじゃ」と、多米周防守は、頷き、小屋の中を、また見まわしていった。「いずれも、ほしいものばかりよ」
「そんなら……」
「いや、ほしいものがあって参ったのではない。おまえに聞きたいことがあってな」
「何じゃい、鹿獲りのワザかや、ふん、こりゃ、わしが祖父から教わったものよ。誰にも、洩らすものかや。帰れ帰れ」
この傍若無人な態度に、供の者は、蒼くなったり赧くなったりしていたが、
「こりゃ、言葉に気をつけい。こちらさまを、どなたと心得てじゃ。北條家の御家老だぞ、無礼があってはならぬ」
「へえ、何も無礼はしねい、ここは、鹿兵衛さまのお城じゃで、わしが城主で家老じゃ」
「ははは、面白いやつだ。咎めることはない。ともかく、韮山へ来てくれ」
「何しにじゃ。わしは人混みは嫌いじゃ」
「人に逢わするのではない。逢わしたい鹿がおる」
「ほッ、鹿に逢わするとかえ」
「そうじゃ、向うも、おぬしに逢いたがっているやもしれぬ」
一風変っているだけに、そんな言い方に、気軽く乗ってきた。
韮山の城下へ、その足でやってきた鹿兵衛は、件の大鹿を見せられると、頬を弛めた。
「おお、これは、足柄の金太郎だわい」
「やはり、存じていたか」
「へえ、随分と前から、顔馴染でね」
「足柄の金太郎という名か」
「へえ、こいつが名乗ったわけじゃねえが、わしがそう呼んでいたので。こいつは、わしがどうでも仕止めるつもりで、追いかけまわしていたやつでございます」
「足柄山……とすると、この鹿は当家の領内のものではないのだな」
「へえ、それは……けものゆえ、国ざかいがどこか知りませぬ」
「であろうが」
周防守は、大道寺重時と顔を見合わせた。
この大鹿が、どこの領内のものか、それを知ることで、朱卍の矢の謎も解けるのである。
「この大鹿は、滝沢の山中で死んでいた」
「へえ、滝沢のねえ」鹿兵衛は首をかしげた。「おかしゅうございますぜ」
「何がおかしい」

「二つのことがね。一つには、こいつが餌をあさるのは足柄山の、せいぜい箱根までで、滝沢のほうへ来たなどという話は聞いたことがありませぬし、わしも、こっちの方で見たことがないのでね」
「それで、こいつは、足柄山の金太郎というのがぴったりなので」と、鹿兵衛は言った。「箱根から、こっちへ来たことはねえ、わしは一度も見たことがねえ」
「たしかだな、それは」
「へえ。滝沢辺で射止められたなんて考えられねえことで」
「そうすると、もう一つのことというのは何だ」
「この大鹿を宇平が明神岳のあたりで射止めたと聞きましたので」
「宇平？　なんだそやつは」
「箱根の山者で、へえ、やはり鹿とりでは、腕のあるやつでございます」
「……」
「こやつは、足柄山では、わしよりも兄貴分で、よう土地のことを知っておりますで」
「足柄山の宇平と申すのだな」
鹿兵衛は頷いた。
「そやつが、たしかに、この大鹿を射止めたと申したのか」
「噂を聞きました」
「ただの噂か」
その周防守の失望は、鹿兵衛には理解が出来なかったようである。
「ただの噂って……へえ、噂で」
鹿兵衛のように単純な生活をしていると、噂というものは、ニュースであり、それは当然、ある事実を伝えるものであって、疑いをさしはさむなど考えられないらしい。
武士の間に於ける権謀術数は、けもの相手のきわめて単純な、勝つか負けるかだけの行動には、無縁のものだった。むろん、けもの相手だから、罠を仕掛けたり、待ち伏せたりするが、それと、人間同士の虚実の駈け引きとは、大いに異なる。
周防守たちの疑惑など、鹿兵衛には、まるきり考えもつかないことだった。
「この大鹿を射止めることのできるやつは、わしか、宇平かの二人しかいませぬで」
「……」
「わしがやっていない以上、宇平でございましょうな」
「すると、宇平が……明神岳で射止めたとなると、滝沢で死んでいたのは、解せぬのう」
「へえ」
「この謎はなんと、解くぞ」
「へえ……」鹿兵衛は首を振った。「わしには、わかりま

しねえ」
「それに、宇平とやらが、朱卍の矢を用いたとは、どういうことだ」
「朱卍？」
「伊東の家中で用いる矢だ」
「そら、おかしい。宇平の使う矢は、黒柄の大雁股でございますがの」
「黒柄の大雁股？」
「かような大モノを仆すには、大雁股でないと難しゅうございますからな」

足柄山の宇平が、この大鹿を仆したという噂があること。
その用いる矢は特殊なもので、黒柄の大雁股であること。
等々の鹿兵衛の証言は、韮山城の家老たちに、
（やはり、罠であったぞ）
と、確信を抱かせたのである。
「宇平とやらから聞きだすがよい。宇平が仆した鹿を、誰ぞが、買いとって、伊東の矢を傷あとに射込み、わざと滝沢に放置したのであろう」
なぜ？　という反問は、権謀術数の時代に、愚かなことであった。
「伊東家と当家を戦わせよう謀略じゃ」
荒木兵庫頭が断定的に言った。

「伊東家に怨みを含む者の考えであろう」
「いや、逆かもしれぬ」山中上野介が膝を乗りだして、「当家をけしかける算段ではないか。通常なれば、この大鹿を伊東家中に越境して射られたと判断する。怒るのはこの方よ。されば、抗議を申しこむのは、この方なれば、戦さを仕掛けたことになる」
「ははは、必ずとも戦さになるはずはないではないか」
「いや、もしも、朱卍の矢を信じたとする。されば、抗議するのにも、居丈高となるは必定。この方の権幕あらければ、伊東家中でも、素直には詫びまい」
「それはな、痛くない腹をさぐられたなら、誰でも立腹しよう」
「さ、そこが狙いじゃ。お互い気が立って、喧嘩となる。伊東ではそれこそ、弓矢にかけて、潔白を証明しようとするし、この方でも、相手がそう出れば、弓矢をもって意地を貫く……」
黙って、さっきから聞いていた新九郎は、
「危なかったの」と、一言、ぼそりと洩らした。「充分に疑うてみてよかった。おそらく、誰かの謀略であろう。だが……もう一つ、決定的な証拠がほしいの」
それは、その夜のうちに齎されたのである。
新九郎が、重時ら腹心三人と大絵図をひらいているとき、どこやらで、呼ぶ声がした。

〈ただいま帰城……〉
そう聞えた。
「む……？」
その声は、新九郎の耳にだけ、呼びかけたようであった。
短檠の灯が、ふっと揺れた。
室内の暗い一隅に、いつ入ったか、影がうずくまっていた。
かれの姿は、新九郎たちの眼には見えない。が、かれの声だけは新九郎に聞えたのである。
〈伊東の朱卍、持参つかまつりました〉
新九郎は振りかえった。
三方に折敷して、あの矢が置いてある。
いつの間にか、その矢は二本になっていた。
「おお、これか、伊東の矢は」
三方の上から、新九郎は、二本の矢をとりあげた。
一本の方は、大鹿の背に刺さっていた方であり、いま一本は、もとより血に汚れてはいない。
「――これにも朱卍……」
似ている。
矢羽根の下の部分のところに、やはり朱で卍が入っている。
卍はただ書いたものではなく、彫って、そこに朱を入れたものである。

新九郎は、灯の下に二本を並べ、見比べた。
「似ている……似てはいるが」
そこに、大燭台が運ばれてきた。
一きわ明るくなったなかで、二本の矢は、四人の視線を浴びた。
「――似て非なるものじゃ。これは、ただ真似ただけぞ」
新九郎は、ぎろりと眼を光らして断定した。
「できれば、宇平なるやつに、大鹿のこと、仔細をただしたいの」
それは、独り言のようにみえて、実は、暗がりにひそむ〝忍び ノ者〟への下命であった。
〈承った……〉
返事は、正確に、新九郎の耳に入った。
また、灯が揺らいだ。
隙間風が入ったようである。重時がその方を振りかえったが、もう板戸は閉っていた。
「この矢は、一本は大鹿に刺さっていたもの、このもう一本のほうは？」
「伊東家中で使っていたものよ」
「……」
「さる者をつかわして、手に入れてきた」
「……」
「正真、伊東家のものじゃ」

「すると、ますます、これは第三者が当家と伊東家の争いになるのを、望んでの計りごとでございまするな」
「十中八九、間違いない」
「したが、左様な、不埒なことをどこの、誰が」
荒木兵庫頭は、いまにも走り出しかねない勢いで、目尻を吊り上げた。
「さて……」にやりと新九郎は笑った。「およその推察は出来ようわさ。まず、わしを恐れている者であろう」
新九郎の擡頭を恐れる者。それは、相模の諸豪にちがいなかった。
「はあ、なるほどな」
大道寺重時は髭をなでた。
「小田原……」
「かもな」
「三浦……」
「それも」
新九郎は酒を運ばせた。
ゆっくりとみんなと酒盃をあげて考えようというのである。
「大森藤頼には、わしに刃向う気はあるまいが用心せねばならんのは、別当の海実よ」
忍びノ者が明神ノ宇平の小屋を突きとめたのは、その夜のうちである。

宇平はいなかった。山者の暮しは、小屋にいることが少ない。
猟をしては、それを金に換える。
あるいは、その金があるうちは遊び呆けて、戻らぬ場合が多い。
忍びノ者は小屋に近づいて、
(留守か?)
と、察した。
けもののように敏感になっている忍びノ者である。
その勘は当っていた。小屋は空だった。だけではない。
(妙だな……)
男くさい小屋の中に、女の匂いがした。
雑然とした小屋である。男所帯に蛆がわくというが、全く、汚れきった内部には、蠅がぶんぶんしていたし、夜具が敷きっ放しで、飯櫃や茶碗などが転っていて、よくこんなところで生活できると思われるくらいだった。
忍びは耐忍を本分としている。その意味では、汚いところも常人のようにはこたえない。
この宇平小屋もそのかぎりでは忍びノ者を驚かすに至らなかった。
ただ、女の匂いを感じたのである。
女ッ気のない小屋だけに、一層、強く意識されたのかもしれない。

(女が来たか)
宇平という男は、やもめだと聞いたが、女嫌いというわけではあるまい。
それなら、女がくることがあっても、不思議ではない。
ただ、〝女の匂い〟は、若い女性であることを意味している。
忍びノ者は、室内を見まわした。けもののめいた眼の光である。その視線は一つのものをとらえた。
かれは腰をかがめ、何やら拾いあげた。
女櫛であった。
素朴な黄楊(つげ)の櫛である。
この乱雑ななかでは、落した者も気がつかなかったのであろう。
そこに何やら字が見えた。
美保
と、読めた。
(みほ……)
みほの松原、を忍びノ者は思い浮べた。
その翌朝のことである。早川の上流で、男の死体が発見された。
宇平の死体であった。
山賤の一人が発見したもので、宇平は水に顔をつけて死んでいた。

そのあたり奇岩怪石が露出していて、宇平は崖から落ちたものと思われた。
からだ中、岩角などで打った傷があり、肋骨も数本折れて、首の骨がはずれていた。
「宇平はこのあたりのけものと同じじゃ、崖から落ちて死ぬことなどあろうかい」
かれをよく知る山賤が、顔を真っ赤にして喚いているのを、忍びノ者は、人々の間にまじって聞いていた。
「このあたりの路は、目ェつぶっても走れるのじゃわい、宇平が崖から落ちることなど、あろうかい」
「猿も木から落ちるで」
と、まぜっかえした者がいる。
「猿は木から落ちても、宇平は崖から落ちるものかわ。誰かに突き落されたに違いねい」
たしかに、山に住む者には、険峻の路も、崖や沢も、熟知していなければ、歩けない。
けものを追って走るとき、あるいは夜の道では、山谷に精通していないと、常に危険に陥る。
その山賤たちの中でも、殊に名の聞えた宇平が、崖から転落死することは、まずあり得ないことであった。
宇平をよく知る者ほど、それを感じたのである。
引き上げられた宇平のからだからは、岩角で打ったらしい多くの打撲傷などのほかは、一切、刀傷などが見えなか

った。
群集の中に、忍びノ者は、一人の女を見た。
若い女であった。
その女は、群集の背後から、遠慮しがちに、死体をのぞいていたのである。
通りかかった旅人とか、箱根の村の者などが、集っているなかで、その女が、眼にとまったのだ。
大きな牡丹の模様が派手で、ひときわ、眼を惹いた。
が、忍者が、注意したのは、その模様のせいではない。
女性は、彼女だけではなかった。中年の女もいた、若い女もいた。
だが、その中で、牡丹の女の様子がおかしかった。
どこがおかしいというのではない。その挙動である。永年の忍びノ者の勘であろう。
凝っと忍びノ者の眼が見まもっているとは知らぬらしく、女は、群集から離れた。
そのまま、小急ぎに歩いてゆく。逃げるような足どりである。忍びノ者は、ゆっくりと、そのあとを尾行しはじめた。
(あの女……)
忍びノ者は、おのれの勘を信じている。
(あの女にちがいない……)
あの櫛の女だ。
(美保、と書いてあったが、あの女であろう)
関係がある、と睨んだ。
その挙動だけで、下手人だと判じるのは、尚早だが、犯罪をおかした者は現場へ戻るという。
気になるからであろう。
「よう、みほじゃねいか、ちょっと見ないうちに、美い女になったな」
こう声をかけた男がいた。
女は何かこたえたが、迷惑そうに足を速めた。
(やはり……あの女だ)
忍びノ者はいうまでもなく、新九郎の密命を受けた伊賀ノ太郎である。
みほはとっとと歩いてゆく。
箱根には旧街道の石だたみの路が残っているが、当時はまだ街道としての整備がなされていない。
江戸時代に入っても、わざと箱根は険阻なままにしていた。関東を守るための政策からである。
したがって、当時の道路のひどさは充分、想像できる。
みほの足どりは馴れたものだった。
見え隠れに、あとをつけてゆく忍びノ者がいるとは、気がつかないのか、みほは出湯のほうへおりてゆく。
出湯は、いわゆる湯本である。
箱根の出湯は、古来、多くの人に利用されてきていたが、

何といっても山間のことではあり、設備も悪く、山賤や旅人たちが立ち寄ってゆくという程度だった。
湯本小屋には、頑丈作りの老爺と家人が二、三人いるだけで、たてまえとしては、湯治の客は自炊であった。
旅人も当時は、自炊用具を持参するのが普通であり、よんどころない者だけが、木賃を払って、食事を頼んだ。
みほは小田原生れだから、湯本ではみんな顔を知っている。
「おじいさん、元気かえ」
坂道から、みほは声をかけた。
「おお、みほじゃないか、湯に入りに来たか、入ってゆくがええ」
小屋の檜皮葺きの屋根を修理していた老人が、おおらかな声でこたえた。
屋根は丸太のワク組みで押え、その上に大きな石を一つずつ乗せてある。
大風で屋根が飛ばされないための智慧である。
岩をたたんだ小さな出湯は、十人も入れば、いっぱいになるほどだった。
四方柱も丸木で、これも檜皮葺きになって雨や雪は除けられる。
みほは小屋で小袖を脱いだ。小屋は床板が張ってあり、蓆が敷かれただけの、後世から思えば簡単な、酷いものだが、乱世の山間部では、これでも有難いほうである。
小屋の中には、老人や病人が寝そべっていたり、膝を抱えて、濁酒を飲んでいたりした。
腰屏風や三尺ほどの衝立などで枕元を仕切っているが、客が混むと、それらは移動させられて、一人あたりのスペースが狭くなるのである。
みほは、部屋の隅で、帯を解き小袖を脱ぎ、手拭を持ち腰のもの一つになって、岩の段をおりてゆく。
白い肌に乳房が揺れている。
むろん、出湯は、男女混浴であった。
腰のものを脱いで四方柱にひっかけると、みほは、岩のふちに腰をおろし、ゆっくりと湯の中に足を入れた。
尾行して来た忍びノ者が、やはり小屋の中で、着衣を脱ぎながら、ちらちらと油断のない視線をおくっていた。
もの馴れた様子で、着物を脱ぎ下帯一つになると、伊賀ノ太郎はやはり出湯におりて行く。
その途中、みほが脱いだ小袖の下へ、素早く手をさし入れたのを誰も見た者はいない。
「やあ、お邪魔しますで」
誰にともなく声をかけて、湯へ入る。
出湯には、みほのほかに三人の客がいるきりであった。
夫婦者らしい老人と、行商の者らしい中年男である。
「さあさ、お入りなされ、いいお湯じゃ。寿命がずんと延

びるような気がしますわい」
老人がにこやかに答えて、身をずらした。
太郎はみほの近くへ身を沈めてぺろりと顔を洗った。
「いいお湯だ」
「おまえさま、はじめてかいの。このあたりでは、見かけない顔じゃが」
「へい、旅の者で」
「どちらへ行きなさる。小田原かえ」
「いえ……西の方で」
あまり詮索されても困るのだ。太郎はまた顔を洗った。
みほは無関心を装いながら、それとなく太郎の様子を見ている。
太郎は小柄だが、ひき締ったからだである。鍛えぬいた五体は一片の贅肉もとどめず、筋骨質で太い針金を入れたようだ。
その肌には、無数の傷があった。
刀傷ばかりではない。矢傷、擦り傷、さまざまの傷あとが、肌を縦横に彩っていた。
みほの視線は、その傷あとへの興味のように見えた。
「お前さま、大変な傷じゃが、よほどに戦さ場を駈けめぐって来られたようじゃのう」
つくづく、見惚れながら、感歎のあまり老人が言った。
「いや、なに、むかしの傷でございまして」
「それにしても、とてもに、常ならば、生きてはおれぬであろうにの」
「なに、へえ……運がよかっただけで、戦さにまきこまれましてな、死ななかったのが、めっけもので、へえ」
実直そうに見せることが、身分を隠すのに一番であった。
太郎は永年の経験で知っている。
「――でも、痛かったでしょうねえ」
みほは指を伸ばし、太郎の腕の傷に触れた。
それは、かなり深い刀傷のあとであった。
女の指が、傷あとを、そっと撫でると、太郎は、思いがけない感触で、ぶるっと顫えた。
蛇に舐められてもこたえぬはずだったが、この感覚は意外だった。みほの健やかな乳房が、湯の中に鞠のように浮んでいる。
みほの指に刀傷をさわられて伊賀ノ太郎は心のふるえを、おぼえた。
忍びノ者に、常人の感情は無用である。いや、使命の妨げとさえなる。そうした情に応じないのも、耐忍の一つであった。
裸になったことの気安さが、伊賀ノ太郎から忍びの心得を忘れさせたのであろうか。
「もの好きなお方じゃナ」
と、太郎は、わざとおどけてからだをすくめるように身

を離し、
「そなたこそ、さようなお乳をつけていて、さぞ、重いじゃろな」
と、両手で、掬うように、掌を触れた。
「あら、いやだ」
みほは嬌声をあげ身をひねった。
「いやなひと」
と、言いながら、艶っぽくにらんだ。媚びるような眼である。言葉ほど嫌がっているふうではない。
「ははは、あんまり美い肌じゃゆえな、かんにんかんにん」
「かんにんしませぬ」
と、またにらんだ。艶っぽい眼である。
「こうしてあげる」
湯の中で、太郎の股間に手をのばしてきた。
指先が触れた。湯がしぶき、中年の男が、大仰に叫んだ。
「こりゃ、よさんかい、湯の中でいちゃつかれては、こっちがたまらんでえ」
「ははは、左様ともな、お二人とも楽しむのなら、わしらの眼のとどかぬところでやって貰わにゃのう」
老人夫婦もにこにこしながらたしなめた。
「あら、ごめんなさい、あたし、そんなつもりでは……ほれ、お前さまがいけないから」
「へえ、わしが悪いので、へえ」
太郎は頭をかいた。
ここで、あまりみほに深入りしたくはなかったのだ。
みほの気持がそのとき、どこまで、太郎に傾斜していたかわからない。
老人たちの妨害が入らなければ、みほは、湯の中のたわむれのままに、太郎と交ったかもしれない。
みほは照れくさそうに、はしゃぎながら、湯から出ていった。
太郎が待っていたのは、そのあとのことである。
かれもあとを追うようにして出た。
小屋にあがって、肌を拭いながら、みほの様子を眺めていると、みほは、手早く小袖を着て帯をしめた。
ふと、足もとを見た。櫛である。
みほはそれをとりあげ、首をかしげながらも、髪を梳いた。
それは、宇平の小屋で太郎が見つけたものだったのである。
みほは、その櫛を見たとき、一寸、妙な顔をした。
それから、とりあげて髪を梳いたのは、自分のものに間違いなかったからだろう。
ただ、どうして、紛失した櫛がそこにあったのか、その疑問が胸を掠めたらしい。

だが、そこにあるのだから、深く考えることもない。
みほはそんなふうに単純に思ったのだろう。そのままさっぱりした顔で、湯本小屋を出た。
（やはり……あの女だ）
美保は、みほ、なのだ。このころは戸籍などないから、名前は呼称を重んじていて、アテ字を書くのは平気だった。みほは途中で、ふっと振りかえった。
何度か振りかえっている。尾行の影を感じたのかもしれない。
彼女が立ち止ったのは、熊笹に蔽われて、小路が細くなり、亭々たる巨杉が天日を翳らしているところだった。
「……」
居ない。
尾行されていると感じたのに、誰も背後にいないのは、不思議だった。
尾行ということも、しかし、このような女にしてみれば、大した意味は持たない。
男と女という感覚でしかなかった。
（あたしを跟けてくるなんて、誰かしら……）
きっと、自分の魅惑的なからだにうつつになった男だろうと思った。
そう思うことは、みほにとってある種の快感を齎すものだった。

彼女は、歩調をゆるく、ゆっくりと歩いた。
すでに晩秋である。箱根の秋は早く、すすきの穂が長く伸びている。
みほは歩きながら、腰をくねらしている。
（女の尻を狙う男たち……）
を意識するだけで、若いからだは燃えてくるのだ。危険本能とともに、犯されることの被虐的な快感は、女性の特質でもある。
一足一足に、男の眼をうしろに意識すると、自ら、腰が動くのだ。
ところが、その〝眼〟はうしろになかった。
突然、目の前に、空から人間が降ってきた。
いや、杉の梢から、はらりと落ちてきたのだ。音もなく、それは影が投げられたようなものであった。
「だれ！」
ぎょっとなって、みほは、のけぞった。
が、すぐに、その影が、さっきの男だと知れた。
忍者の太郎である。むろん、忍者とは知らぬ。太郎はにやりと皓い歯を見せた。
「わしだ」太郎はにやりとして言った。「みほよ。家へ帰るのか」
「ええ……おまえ、どうしてこんなところに」
ちらっと、みほは、あの尾行の影を思いだした。

だが、いそいで打ち消した。後から尾行してきた者が、前にまわっているはずはない。単純に考えた。もともと単純な女なのである。
「ははは、想う女を待っていたのよ」
「……」
「そなたのことだわさ」
「……どうして、あたしがこっちに来ることがわかったのさ」
「わからないでか、それくらい」
「だって……」
みほは、任意に、この道へ来たのだ。
弥三郎春忠の小屋はこちらではない。
わざとこの道を選んだのは、〝男〟を誘うためだった。尾行してくる男に襲われる喜びを味わうために、わざとこの小路をえらんだのだ。どうして、それが事前にわかるのだろう。
「お見通しさ」と、太郎は笑った。「おまえの気持はな」
「……」
「湯の中で、わかったさ」
「あら、あたし……」
「恥しがることはない。女と男……ははは、わしも、そなたが好きだで」
「でも……」
そう真っ正面から言われると、みほは逃げ腰になった。
いっそ、黙ったまま、うしろから抱きついてくれた方がよかったのに、と思った。
犯された、といえば、万一の場合も言い訳がつく。楽しんだあとで、その言い訳がほしかった。
いまのみほは、昔の、ただの尻軽な娘ではない。金剛王院の別当大森海実に飼われている。いや、弥三郎春忠の身の廻りを世話をする立場だ。それも、こんどのことで、すっかり深入りしている。
「あたし……いやだよ」
みほは急に恐くなった。
あたりを見まわした。ほかに人影はない。この小路は、いつも人通りがない。それを知っていて、入ってきたのだ。
「何がいやだ、え、わしを好きなのであろう」
すっと、太郎は近寄ってきた。
「ええ、でも……」
「ははは、いいではないか、それ、わしの古傷を触ったではないか。好きなのであろう、それ、好きなだけ、触ってよいぞ」
太郎の手が、女の手くびをとらえた。
そして、おのれの胸へひきこんだ。みほは、小さく悲鳴をあげてよろめいた。その手は、誘いこまれて男の胸毛に触れている。

みほは男のからだに触れるとそれだけで、眼がくらむ思いだった。

弥三郎春忠は戆鑿たるものではあったが、それでもやはり老齢は否めない。

いま、みほをつかんだ太郎の手は、がっしりとして、ゆるぎないものだった。

太郎は矮軀である。にも関らず手は大きく、骨組みは、仁王を小型にしたようであった。

若壮のころの鍛錬ぶりが窺える壮軀である。そのからだから発散するおとこの匂いが、みほを魅了したのだ。

いま、その太郎に強引に、懐ろへ手を導かれて、みほは思わず、眼をつむっている。

「どうだえ、これが、男の傷じゃ、ほれ、これが、五年前の傷、こっちが三年前の刀傷」

「あ……」

「触るがええ、存分に触るがええぞ、な」

「ああ……おとこ」

「そうだ、おとこだ」

太郎は、みほを抱きすくめた。

もう、みほは逃れるどころでなかった。全身の血が、くわッと逆流し、自分が淫楽の流れへのめりこんでゆくのが、はっきりわかった。

みほのからだには、淫蕩な血が流れている。みほ自身はそのことを意識していない。彼女にはいわゆる貞操観念がないといえる。男というものは、常に女のからだをほしがっているものであり、彼女は気がむけば、それにこたえる。それが女だという気がある。

嫌なときは嫌なものだが、そんなときに無理に犯されるのも、悪くないと、みほは思っている。すでに、何度か、そうした経験がある。

いま、太郎に抱きすくめられてあらがいながら、すでに気持は傾いていた。

「放して……」と、いう声も、力がなかった。

「さあ、たんと触るがいい、どこを触ってもいいぞ」

太郎は自信がある。太郎のからだは、たしかに、どこを触ってもおとこにちがいなかった。

みほの手は、強い力で、太郎の下腹部に、導かれ、その部分の硬いものにおしつけられている。

「それ、これが、わしのものだ」

みほの掌は、熱いものに触れていた。

彼女は手をひっこめようとしながら、逃れようとしながら、いやだと思いながら——その思いとはうらはらに、それをつかんでいた。

掌が、彼女の意思を裏切って、つかんだのだと思った。

それは、彼女の淫らな血への弁解にすぎなかった。

草むらにひき倒されたとき、すでにみほのからだも濡れ

ていた。

忍びのワザは多様である。透破や細作は人心収攬も心得ていなければつとまらぬ。女の心を獲るのもその一つである。女体をこなすワザは鍛錬にある。太郎はみほの下肢をひらくと、巧みに手を用いて、情感をかりたてていった。

もうみほは抵抗はしなかった。

太郎の指先に翻弄されて、ひしとしがみついたまま、わなわなとふるえていた。

「いいか？……」

太郎の息が耳をくすぐる。

「いいだろう？」

「え、ええ……」

「いい、といえ」

太郎は女の中へ入った。みほは一瞬小さく悲鳴をあげて、身をねじるように、ずり上った。太郎は遠慮なくなおも、深く、沈んだ。

「あ……」

「ふふふふ。おとこだ、な」

「え、ああ……おとこ」

「泣いてもいいぞ、誰も聞く者はいない」

そう言いながら、太郎の下半身は巧みに微妙な動きを見せていた。

その動きに合わせて、みほも、波に揺れるように、あえぎつつ、快楽の舟を漕いでいた。

「な……みほ」

「あ、あい！」

「やったのは、おまえだな」

「え？……」

「宇平だ」

「……」

「宇平を、殺ったろう」

「あ……知らない」

「嘘を吐くな」

太郎の腰の動きは、さらにはげしくなった。

ひいィ、とみほは、たまぎるような声をあげた。

「手、手が……手がしびれる」

唇から小さな泡を吹き、白く涎が流れた。

「言え」と、太郎は容赦なく責めたてた。「宇平を、小屋から誘いだしたろう？」

「あ……」

「誘いだしたな」

「……」

「嘘は通らぬぞ、お前の櫛が落ちていた。吐け、吐け」

「あ……手が……あたし」

「誘いだしたな」

「ええ……でも、あたしが、殺ったのじゃない」

「誰だ」
「……」
みほの顔は弛んでいた。快楽の波に洗われて、夢とうつつの境にさまよっている。自分でも、いまの立場がわからなくなっているようであった。
「言え、誰だ、宇平を殺ったのは」
「し、知らない。あたしは……ただ、あそこへ」
「崖のところへ誘っただけだというのか、誰に頼まれた」
太郎の逞しい肉塊は、みほのからだを貫き、咽喉もとまで突き上ってくるようであった。喜悦の絶頂のなかで、みほは弥三郎春忠の名を洩らしている。

新九郎は馬を走らしていた。狩野川の畔りである。
風が強く草が騒いでいる。空の雲は飛ぶようであった。その雲の影が、川面にうつっている。
北の空に富士が浮んでいる。雲の切れ間に雪をかぶった山頂が美しく見えた。陽がかげると、ふいに風は冷たくなった。
狩野川が大きく湾曲したあたりまでくると、畔りで釣糸を垂れている男が見えた。
笠を目深にかぶっている。小柄な男である。
新九郎は馬からおりた。手綱を松の下枝に投げただけで、釣人の傍へおりて来た。

「釣れるか」
と、大きな声でたずねた。
「釣れませぬなア……」
男はのんびりした返事で、語尾を急にひそめた。
「だが、委細、わかりました」
「申せ」
男はいうまでもなく、伊賀ノ太郎である。
ウキを眺めたまま、低い、あの風の吹くような声で、
「今川弥三郎春忠でござりまする」
「なんと!?」
「弥三郎春忠は生きておりました」
「ううむ……」
「宇平を殺ったのは、弥三郎かと思いまする」
「しかと」
「はい。みほと申す女を使って、誘いだし……崖から突き落したらしく」
「すると、大鹿も」
「左様、宇平の口をふさぐ所存でございましょう」
新九郎は唇を一文字に結んでいた。その眼は川面を見つめていたが、そこには、弥三郎春忠の面影を描いていた。
(彼奴が、生きていたか……そして、大鹿を宇平から購い、伊東の朱卍を用いて、戦さをさせようと計ったのか)
なるほど、弥三郎春忠の目論見らしいことだ。

こうわかってみれば、その手口のあざとさが、一々、思い当る。
「弥三郎は如何にして生き延びていたのか」
「女の話では、世話しているのはどうやら金剛王院の別当らしく」
「海実めが!」
「何の企みがあっての助命か。一切、他には秘して、ひそりと生きてきたようでございます」
「ふむ……妙な策を弄しおって、かえって、馬脚をあらわしたか」
新九郎は腰をあげた。いつの間にか、その足もとに、革袋が置かれていた。
「鳥目はここに」
「頂きまする」と、うしろをむいたまま言ってから、「弥三郎を殺りますか」
新九郎は、静かにかぶりを振った。
「いや、待て。殺るのはいつでも出来る。それより有効な使いみちがある。彼奴の裏をかくのじゃ」

火牛戦法

韮山城下の辻の大鹿は即日、とり片付けられた。
とともに、大規模な鹿狩りが催されたのである。
「あの大鹿に勝るとも劣らない鹿を射止めよ」
と、新九郎の下命があったとして、領内では、鹿狩りに出かけた。
韮山城を中心として、北伊豆の山谷に人々は、弓矢を手にして散らばった。
その様子は、ただちに近隣の大名の知るところとなっている。
「ほう、鹿狩りをな」
と、伊東伊賀入道は頷いた。
「朱卍の矢のことは不問に付したらしいの」
誰が射たかわからないが、朱卍の矢が一本、紛失しているのは事実である。
その矢が、噂の大鹿を射たらしいと聞いて、韮山から抗

議の使者がくるのを、戦々慄々として、待っていた。
来れば、言いひらきをしなければならない。まるきり心当りがないのなら突っぱねられるが、一本紛失しているとすれば、誰かが、それで射たということになる。
(韮山の謀略かもしれぬ)
開戦の口実のための、術ということもあるのだ。
どちらにしても、韮山の動向は伊東一族にとっては、当面の関心事だったのである。
そこへもってきて、
〝鹿狩り〟
が、はじまったという。
これは、一応、ほっとさせるニュースだった。
「何を企んだのか」
領内の鹿を伊東の家中に射られるなら、こっちでとってしまえ、というのか。
それとも、
「当領内に踏みこんで、迷ったふりをして、当領内の鹿をとるつもりか」
正面から、正式の抗議をしないで、陰で実質的に、報復する。
そうも考えられる。
「ま、左様なことがあっても、しかたはあるまい」
と、伊賀入道は家臣らをいましめて言った。
「たかが鹿くらいのことで、韮山と争いになってはならぬ」
伊東家としては、どことも戦さはしたくない。事を構えたくないという方針であるから、一切、そ知らぬ顔をすることにした。
一方、箱根の別当大森海実は、この噂に、ちょっと不審を感じている。
「新九郎が鹿狩りをな……」
かれは、先日の大鹿と関聯して、韮山城下の大鹿のことを意外に思っていたのである。
むろん、伊東家の朱印の矢のことも聞いている。したがって、弥三郎春忠が山賤の宇平から購った鹿と同じものとは知らない。
ただ、おかしい、とは思った。宇平の死が、さらに、その疑問を深めた。海実は、弥三郎春忠を呼びつけて問い訊している。
「あの大鹿は何とした?」
海実にそう問われて、弥三郎春忠は唇をひん歪げた。
「アテがはずれました」
「何としたと訊いておる」
「ま、やむを得ませぬ、人間のすることじゃ、いかにこの弥三郎春忠の頭脳をもってしても百に一つくらいは、当りはずれがあってもしかたがない」

「大鹿をわしに購わせおって、大口叩いたのを……」
「じゃから、詫びている」
詫びにならない、尊大な態度だ。
が、海実にしてみれば、いまさら、この老人を殴ってもしかたはない。
「大口叩いたのが、失敗か。よくもぬけぬけと、わしの前へ出ることができたな」
「おのれに自信のない者ならば、首でもくくるか、崖から身投げでもしましょうな」
「……」
「一度の失敗で、人間を見捨てるほうが、御損でしょうな。有能な男というものは、一度や二度の失敗にはめげぬものじゃ」
「ふむ。おぬしの失敗は、一、二度ではきかぬのではないか」
「五度でも十度でも、だ」
弥三郎春忠は、痛いところを突かれると、眼に異様な光が点じられる。
「わしは、わし自身に絶望したことがない、いや、失敗を重ねることが、成功へつながることじゃ」
「詭弁……」
「と、人は思う、世間は思うじゃろう、それは、世の中を知らぬ者の愚かな考えよ」
「こりゃ弥三郎。そういう強がりを、盗人たけだけし、と申すのだぞ」
「ははは、盗人と申せば、大名というものは、みんな盗人じゃ。城を盗み、国を盗む」
「うっ」
「同じ盗みでも、大きく盗むと小さく盗むの違いでな、同じことなら大泥棒になるほうがよい。左様とは思われませぬかな」
「おぬしの話は、飛躍しすぎる」
「いやいや、真実のところを申したまでだ」
弥三郎春忠はひるまない。
「早い話が、新九郎めがそうではないか」
「……」
「わしの口から申すのもおかしいが、わしは今川家の血統じゃ、今川家を継げる立場にあった。待たれよ、氏親や範満にいまさら、とやかくいう気はないが、後を継いでもおかしくない立場であった、な。そのわしが、いまはかように山中に蟄居を余儀なくされ、どこの馬の骨ともしれぬ旅牢人あがりの新九郎めが、韮山城や興国寺城に蟠踞して、広大な所領を誇り剰え、相模にまで眼を向けている。これは大きく城を盗り、国を盗った、すなわち盗みではないか」
「弥三郎……」と、大森海実は、むしろ、憐れみすら感じ

て言った。「おぬしの申す通りだ、理屈ではたしかにそうだ」
「であろう」
「だが、それはな、屁理屈と申すものだ」
憐愍と蔑みが、海実の表情にある。
かれは手をのばして、大きな椀を口に運んだ。濁酒であった。
「人間、屁理屈を申すときは、落目だぞ、伸びんとする芽は、くだくだと、愚痴は申さぬし、理屈は捏ねぬ」
「そ、それはそうじゃが」
「大名は、たしかに城を盗り国を盗る」
「……」
「それを泥棒と申す者は、所詮は、嫉っかみよ。ねたましいのよ」
「……」
「ほしければ、おのれが盗れ。おのれの手で盗れ。それが出来ぬゆえにぐだぐだと、ねたましげに申すだけではないか」
「盗るわさ」と、弥三郎春忠は吼えた。「おぬしが、力を貸してくれればな」
「こりゃ、その方は本来、首と胴が離れているところじゃぞ、忘れるな、わしが助けてやったことを」
「もとより、忘れてはいぬ。そのために、鹿を利用しようとしたのではないか」
「失敗ったな」
「うむ……じゃが、なんとか、次の手をうつわさ」
「その前に、新九郎の方で、鹿狩りをはじめたぞ、これは何と考える」
「左様、なあ……あの朱卍の矢を信じこんだのかな。伊東に鹿をとられるくらいなら、おのれのほうで、とってしまえと」
そう言いさして、弥三郎春忠は自身、その見方が、はっきり的中しているとは、思っていないようであった。
「朱卍か……その方が、贋モノをこしらえたのか」
「ははは、あまりに巧みすぎたかな」
新九郎と伊東家との間で争いが起れば、その戦さを側面から利用できる。
混乱にまぎれて、新九郎を討ちとることも出来るし、韮山を占拠することもできる。
それらの企みも、水泡に帰した。
所詮は、弥三郎春忠の浅智慧だったようである。
その失敗には、新九郎を軽く見すぎていたことに、原因があったかもしれない。
「鹿狩りとなれば」と、弥三郎春忠は、遠くを見る眼になった。「新九郎の身辺が手うすになるかもしれぬ。その隙に、いっそ殺ってしまうがよい。の、決断なされぬか。新

九郎を殺ってしまうのが一番じゃ、もはや、小細工を弄しているときではない」
大森海実にとって、目的とするところは、一つである。
その身は箱根金剛王院の別当ではあるが、もともと大森一族として、その発展と安全を祈っている。したがって小田原大森家を襲うおそれのある者を事前に抹殺しようとする気持は、きわめて、当然のことだった。
ただ、海実は必ずしも、新九郎を、
〝敵〟
と、思っていない。
(侵略するであろうか?)
その点で、疑問が残っていた。
それは海実の性格もあるかもしれないし、新九郎の態度に対する、好意的解釈が禍いしていたかもしれない。
しかし、全面的に信頼していたわけではない。
かれが弥三郎春忠をひそかに保護していたのは、一抹の不安のゆえではある。
明確でこそなかったが、なんとなく、不安が残っていた。
大森藤頼が若いことだ。三浦義同も、新九郎から見れば若い。この二人に対するに、あまりにも新九郎が大人すぎる。
海実が冷静に見ても勝負にならぬ。
(義同がもう四、五年すれば……)
かなりの人物になるであろうが、新九郎は老獪で、油断がならなく見えた。
笑っていれば、笑っているだけ、奥深く、底が知れない。
かれが、あのとき、すぐにでも相模併呑の野望を見せたなら、対抗のしようもあった。
その様子を見せないだけに、尚更、底が知れないのである。
(新九郎を暗殺すれば!)
というところまで決断できなかったのは、そのせいでもある。
敵か味方か、はっきりしないものに暗殺の手をのばすのは、良心が咎める。
金剛王院の別当職であるだけに乱世に生きている男ではあったが、良心と呼べるものがあった。
海実は、弥三郎春忠のように新九郎暗殺というように、一足飛びには、走りかねた。
弥三郎春忠が、新九郎を憎む理由はわかっている。怨みのよって来る所以もわかる。
それだけに、利用はするが、
(こんなやつに動かされてたまるか)
という気持もある。
そうした相克は、ある意味で、海実の弱点にもなっていたようである。

弥三郎春忠の眼はそれを見ぬいている。
「いまにして手を打たねば、悔いを残しますぞ」
と、感した。嗄れた声をひそめて言う。
「手を打つとすれば、いまじゃ、いまをおいてない」
「――よし、殺せ」
海実が、そう決断を下したのはまる一日経ってからである。
その決断を下すについて、かれが、どれほど苦慮したかは、その憔悴ぶりを見ただけでわかった。
一夜で、げっそりと、頬がこけ瞼がたるみ、眼がぎらぎらと充血で光っていた。
「よく肚裡を決めなされたな」
「ただし、条件がある」
「ほ……」
「まだ、聞く、その方に、自信があるか」
「ありませいでか」
「では、さらに聞く、万一、ということがある。その場合何とする」
海実のその質問の意味はわかっている。
(こやつ、自分に禍いが及ぶのを恐れているのだ)
弥三郎春忠は、腹中で、笑った。慎重さを軽蔑した。
何くわぬ顔で、聞き返している。
「万一、とは」
「わかりきったこと、失敗したときのことよ」
「あ、そのことか、万一にも、それはあるまいが」
「ばかな。容易ではないぞ、きさま、大鹿のことでも失敗したではないか。況や……」
「ははは、万一よりも、万万一でしょうな」
「だから、その場合は何とする所存じゃ」
「死にまする。死ねばよろしかろう」
「当然だ」
「……」
「が、その場合でも、その方一人の考えで、決行したことにして貰わねばならぬ」
「……」
「よいか。よいな」
「御心配なく。すべて、この一人の胸におさめて死ねばよいのでござろう」
「そうだ、忘れるな」
海実は、そのことだけが気がかりだったようである。
苦慮はそこにあった。海実が命じたということになれば、新九郎に小田原討ちの口実を与えることになる。
(もしもそういうことになったらわしの配慮が、かえって大森家に禍いをもたらすことになる。慎重になるのは当然ではないか……)
海実のそんな気持に対して、弥三郎春忠は、皮肉な冷笑

を投げていた。
(馬鹿め、おれが、黙って死ぬるものか、やり損じたら、うぬらも一緒に亡ぶのさ)
そのくせ、外面は殊勝な顔でこう言っている。
「御心配なさるな。それにしても、これには、かなり費用がかかる。よろしゅうござるな」
ぬけ目なく、弥三郎春忠は、金銀をねだりはじめた。
北條領内の鹿狩りは、三日間にわたって行われた。
弥三郎春忠が、行動を起したのは、その三日目である。
かれは勢子の一人に扮して、同勢の中にまぎれこんでいた。竹皮笠をかぶり、その下に手拭ですっとこ被りをしているので、人相はわからない。
鹿狩りの勢子は、山裾から、山上へと追い詰めてゆく。侍たちは弓矢を持って、追いこまれてくるのを待っている。
沢から沢へと、あらかじめ定められた手順で、進んでゆくのだ。
(新九郎めは何処に?)
弥三郎春忠は八方に眼をくばりながら昇ってゆく。
若鹿が突然、林の中から飛びだして、樹間を縫うようにして走ってゆくのが見えた。
「いたぞ!」
「それ、あっちだ」
一人が呼笛を吹き鳴らした。
鹿を発見した合図である。鳥が飛び立つ。栗鼠が草むらを走ってゆく。
鹿は一頭ではない。この時代は、北伊豆には、かなりの数が生息していたことが、〔伊東家伝書〕に記されている。
弓矢の侍たちが、矢ごろになるのを待って、きって放つ。鹿も心得ていて、矢ごろになるかと見えると、横っ飛びに、谷へ走りこむ。
「あっちへ逃げた」
「鉦だ、鉦だ」
笛や鉦や、それぞれに吹き方、打ち方で、目的がちがう。騒然たるこの鹿狩りの混乱が、弥三郎春忠のつけ目だった。
かれは巧みに、群れから離れ、新九郎のいる本陣のほうへ近づいた。
いうまでもなく、鹿狩りにかぎらず、猪狩り、熊狩りなど、大名が家臣を動員して行うときは、模擬演習を意味している。
士気を煽る意味もあるし、どちらにしても、戦さのための訓練なのだ。
山野を駈けめぐることが、怠惰になった気や心をひきしめる。闘争本能をかりたてるのだ。
新九郎は山の高みに陣張りして、指揮をしていた。

韮山笠を目深にかぶり、むかばきをつけて、やなぐいを掛け、弓を手にしている。
その弓を揚げて、指図している姿を、弥三郎春忠は遠くから眺めて、
（あそこに近づくことが出来れば……）
勢子としての服装は、ここまでだった。
ここまでくるのは、勢子のほうがいいが、ここから先は、侍でなければ近づけない。
弥三郎春忠は、あたりを見まわした。見張りの侍が、弓に矢をつがえている。その背後にかれは、近づいていった。
誰もが鹿の走るのに気をとられている。母子の鹿であった。
同じ方向へ走ってゆく。別れ別れになれば、それだけ勢子の力が分散されるのだが、そこまで智慧がまわらないのであろうか。
弥三郎春忠は見張りの背後へ近づいた。
その男はそれが癖なのであろうか、つづけざまに舌打ちしたり、首をやたらと動かしたり、いらいらした様子だった。
弥三郎は、脇差に手をかけた。
とたん、侍はふりむいた。ぎくりとしたのである。が、ちらと、見ただけで、すぐ視線をそらした。
なんだ勢子か。と、それ以上には思わなかった。
それが、この不運な男の命とりになっている。
弥三郎は、懐中から何やらつかみだすと、ひゅっと投げた。
手裏剣であった。侍の後頭部、ぼんのくぼに突き立った。
悲鳴はなかった。侍はよろめいた。瞬間、弥三郎はつと近寄って、背後から支えている。
他の注意を引いてはならなかった。
そのまま、木陰に引き寄せると、静かに倒した。
深い草むらの中だ。丈なすばかり、ススキが群生している。
弥三郎春忠は、素早く侍を裸にしてゆく。扮装をとり替えるのである。
手際がいい。呼吸にして百と数えぬうちに、弥三郎春忠は、勢子から侍姿になって立ち上っていた。
これなら、新九郎の傍へ近づいても怪しまれない。
あたりのススキを抜きとると、不運な男の死体を蔽い隠した。
埋めてしまえば、一番安全なのだが、その時間はない。
弥三郎春忠は、弓を小わきにして、尾根を歩きだした。
少し離れたところから、
「おい……」
何か怒鳴るような声で話しかけられた。
弥三郎は、これに顔を見せないようにして、笑いながら

手を振った。大した度胸である。
新九郎の傍までゆくことはないのだ。弓矢がある。近距離であれば自信はある。
かれは平気な顔で近づくと弓に矢をつがえた。
つがえたまま、近づいてゆく。みんな鹿の方に気をとられていて気がつかない。
一せいに矢が鹿の方に飛んだ。
誰の矢が当ったかわからない。鹿は、哀れな声を放って、もんどりうった。
子鹿にはあたらなかったようだ。
「それ、子供の方が逃げた」
わっと喚声があがった。
新九郎まで、距離およそ五間。
弥三郎はにやりとした。かれは老杉の陰で、弓をひきしぼった。次の瞬間、矢はひょう！　と放たれた。
矢は真っ直ぐに宙をさいて走った。
的確であった。侍たちを指揮する〝新九郎〟の胸にぶっつりと突き刺さったのである。
「やった！」
弥三郎春忠の怨みをこめた一矢である。
その怨みの年月は永い。憎悪と怨恨の積み重なりが鋭い矢尻となって、かれの胸を貫いたのである。
新九郎の偉軀がのけぞるのが見えた。
「あ、殿が！」
近くにいた侍たちが、叫びをあげて、駈け寄った。
「矢を……」
どこから矢が飛んできたのか、一瞬わからなかった。
みんなの眼は鹿のほうにむいていたのだ。侍たち自身、矢がかれらのほうに飛んでくるなど思いもしなかっただけに、この事実は、まるで、白昼夢のような感じであった。
「殿に矢があたったぞ」
「誰が、左様なことを……」
「愚か者めが、殿の方に矢を向けるなど!!」
誰もが、流れ矢と思ったのだ。この混乱は、弥三郎春忠にとって望外の倖せだった。
（いまだ）
ススキのかげに身をひそめた弥三郎春忠は、窪地をひろうようにして走りだした。
「殿が、殿が……」
意味のない叫喚をうしろに聞き流して、傾斜をすべりおりた。まわり道をせずに、少しでも早く、圏外に去ろうとした。
「おい、どこへゆく」
三人の侍が見咎めた。弥三郎の様子に不審を感じたのだ。
「殿が大変じゃ」
顔を見せずに、かれは言った。

「医師を呼ばねば」
「もう人を走らした。そっちは道が違うぞ」
「あ、そうか。動顚していたゆえに」
それは主君を討たれて、混乱したかに見えたのである。
三人の者は、それ以上の不審を感じなかったようだ。
が、弥三郎春忠の姿が、見えなくなってから、
「はて？」と、一人が立ち止った。「あいつ、見たことのない顔だな」
「よくは見えなかったが……老人のようであったな」
「白髪じゃった」
「とすれば……誰であろう。家中にあんな奴は」
よく顔を見なかったのだ。新九郎の胸に的確に矢が刺さっていたと知ったとき、その男のことを三人は思いだした。
「流れ矢ではないとすると、ひょっとして、あいつが」
侍の死体が発見されたことで、はっきりと狙われたのだとわかった。
（やった、やった、やった！）
弥三郎春忠は、笑いが止らなかった。走りながら、頬が弛んでくるのを押えようがなかった。
（やった、とうとう、やった、おれは、新九郎を仕止めたぞ）
同じく新九郎を狙う者が他にいたとしても、この弥三郎春忠ほどの歓喜はなかったろう。
かれにとって、この一事は、それがすべてといってよかった。
弥三郎春忠は、一生を費やして、新九郎を抹殺しようとしてきた。
かれのその憎しみが、かえってかれ自身の墓穴を掘ることになり、二転三転、苛酷な運命を与えられている。
それが、さらに、憎しみの炎を大きくしたのである。
その炎は、燃え熾って、ついには燃え尽きる。弥三郎春忠のいのちの油が、すでに尽きようとするいま、漸く、目的を達したことは、死んでも悔いないほどの喜びであった。
弥三郎春忠は、走りながら、笠をかなぐり捨てた。
白髪がむきだしになった。かれは狂ったように笑った。
杉林の中である。もうそのあたりには、北條家の侍はいなかった。
弥三郎春忠は、口にだした。喜びは口にだすことで、一層、大きくなるのである。
「ははは、やった、とうとうやった」
谷川の崖下の岩棚に小屋が見える。
今度の鹿狩りの勢子に加わるために、準備した小屋である。空小屋になっていたのを利用したのだ。
ここに変装のための着替えが置いてある。みほもいるはずであった。
弥三郎一人でいると万一、調べられた場合、言いひらきができないが、女連れなら、なんとでも、言い逃れることができる。
それに、みほがいると便利であった。
女体としてだけでなく、彼女はいろいろと利用できる。
宇平の始末のことも、その一つだ。
弥三郎春忠は、晴れ晴れとした気持で、小屋にもどってきた。
いつものかれだったら、小屋に入る前に気がついたにちがいない。が、あまりの嬉しさが、かれにいつもの鋭敏な嗅覚を失わせていたのである。
「みほ、やったぞ、とうとう」
喜びに声をふるわせながら、小屋に入ったとたん、ぎくりとした。
小屋の中にいたのは、みほだけではなかった。侍が四人いた。
その中の一人がこう声をかけた。
「みほだけでなくて悪かったな、今川弥三郎よ」
弥三郎春忠は歓喜の絶頂から突き落された。
まさか、この小屋に、新九郎の家臣たちが来ているとは思いがけないことだったのである。
「おぬし！」
棒立ちになった弥三郎へ、多米周防守は余裕のある笑顔をむけて、
「どうした。そんなところに立っていては話にならん、こっちに来たらどうだ」
「……」
「遠慮するな、おぬしの小屋だ」
まだ、夢を見ているような気持だった。
「この女、美いな」と、周防守は、みほの腕をつかんで引き寄せたまま、「おぬしの年齢では勿体ない。どこで探してきた」
「――手を放せ」
「ははは、放してやってもいいさ、わしの好みではない。だが、いまは好みを申しているときではないからな。それにしても、よく生きていた」
「ぬ！　わしは、容易には死なぬぞ」
「らしいな。そこに立っているのが、幽霊でなければ、な」
「……」
「ははは、まあ、懐しいと言っておこう、よく生きていた」
この男が、新九郎の死を知らぬはずがない。
新九郎は、たしかに死んだ。死んだはずだ。はっきりと手ごたえがあった。
矢が、深々と突き刺さったのを弥三郎春忠は、手ごたえとともに、両眼で見たのだ。
あの矢は、誰が相手でも、致命傷だったはずだ。
新九郎は偉軀である。が、左胸部を矢は貫いている。

即死したか、そうでないまでも、即死に近いはずであった。
それにしては、重臣である周防守が、こんな暢気な顔をしていられないはずであった。
「――よく見つけたな、ここを」
弥三郎春忠は、呪咀めいた声で言った。
「だが、おぬし、こんなところにまごまごしていていいのか」
「ほ？　いけんか、わしは、おぬしに逢いに来たのに」
とぼけているのか。弥三郎春忠はとまどった。
とぼけているとすれば、これ以上、新九郎暗殺を口にしないほうがいい。
こちらも、とぼけてやれ、と思った。
「わしも、お逢いできて喜ばしい」
「本心、そう思うか」
「……」
「そう思うなら、酒くらい振舞ったらどうだ」
弥三郎春忠は、ますますわからなくなった。かれは、まだ注意を怠りなく、囲炉裡のそばへ坐った。
「他の衆は、元気かな」
新九郎を殺せば、死んでもいい、と思っていた弥三郎春忠である。
人間というものは不思議なものだ。死を前にしたときは、いさぎよくなるが、

（助かる！）
と思うと、意地汚く、欲望が頭を持ち上げてくる。
多米周防守をはじめ家来たちの様子を、弥三郎春忠は眼の隅で観察しながら、
「みほ、酒を煮ろ」
と、顎をしゃくった。
「はい……」
みほはどんな目にあったのか。周防守へちらちらと恐怖の視線を投げながら、酒の支度をした。
むろん一時的な隠れ家だから、小屋の中は雑然としたものだし、酒も余すところ、僅かであった。弥三郎春忠は、場合によっては刺し違えてもいいだけの気持で、この小屋を出立したのである。
囲炉裡の粗朶を増やして、みほは酒の鍋をかけた。その手が顫えている。
「多目権平……とか、昔は小盗人だったお方を、いまは周防守と敬わねばならぬかな」と、声のない笑いで、弥三郎春忠はかれを見た。「いまや韮山では六将の一人として大層な羽ぶりとな」
「ははは、弥三郎、いまさらお追従をしても、遅いぞ。命乞いにはならぬ」
「命乞い？……」
ぎょっとしたが、

「何の命乞いか」
と、さぐりを入れた。
「知れたこと。新井城の領袖としての罪よ。その方は磔刑に掛けられるところであった」
「……」
「足利茶々丸を唆し、三浦時高と組んで、北條家に敵対した以上負くれば、命なきこと、覚悟していたろうがな」
そう言いながら、しかし、周防守は悠然としている。
弥三郎がどんなにもがいても、駄目だと心得ているからであろう。
年齢もある。どんなに弥三郎が暴れても、壮漢三人の敵ではない。
「いかにも、男がこれと思うての働きじゃ、負くればとて、悔いはない」
「死ぬも悔いがないか」
「左様……」
「ならば、この期に及んで騒ぐまいな」
「うむ……」
弥三郎春忠は頷いた。やはり、逃れられぬか。それならば、死ぬしかない。
「これか……」と、骨ばった手で腹を切る真似をした。
「いよいよ鰒腹を切るかの」
酒の匂いが流れた。みほが黙って、酒を椀にそそいだ。

「まず、一献……」
「今生の別れかの」
遠慮なく周防守はぐっと一息に空けた。
「おみごと！」
と、弥三郎春忠は揶揄するように言った。
「おぬしらもどうだ、遠慮なく過されい」
みほへ目まぜをした。このときすでに、弥三郎の胸には、次の行動が描かれている。
みほがそれぞれ大きさの違う椀へ酒をそそぐ。客人をもてなす予定などないから、余分の椀はない。
飯や汁などの椀である。家来たちも緊張はしていた。
が、周防守が飲んだので、家来たちも、手を出した。
ほやりと頬を弛めて、酒椀を口に運ぶ。
その瞬間、さっと、弥三郎春忠が膝を起した。自在鍵にかかっていた鍋をひっくりかえしたのである。
残りの酒が、ざぶっと、粗朶の上にかかった。火が消え、もうッと灰神楽が舞い上る。
「わあっ、何とした」
一瞬のことで、弥三郎春忠が故意にやったとは思えないほどであった。
凄まじい灰神楽の中に、みほの悲鳴がつんざいた。
弥三郎春忠は身を翻している。小屋の外へ。
小屋は崖下の岩棚の上に建っている。弥三郎は戸口から

一跳して、転り出た。一番近くにいた男が、酒椀を捨てて、抜き討ったのである。
刃風に首をすくめて、突んのめったように転り出る。
「待てえ」
手もとにあったものを投げつけたやつもいる。瓢箪だった。水筒代りにしていたのだ。瓢箪は弥三郎の背に当っている。それが脇差だったら、そこで取り押えることが出来たろう。
弥三郎は岩の上で、身を起し、前後を考えるひまもなく、空に身をおどらした。
渓流が岩を嚙んで流れている。初老の男にしては、これは冒険であった。すでに晩秋の山だ。冷たい水が、しぶきとともにかれを呑みこんだ。
「逃げた、川へ飛びこんだ」
狼狽の叫びで家来たちが飛び出してくる。
「誰か、飛びこめ」
周防守も驚いている。まさか弥三郎が、そこまで生に執着していようとは思いがけなかった。
それは弥三郎の性格を見ぬく眼を持たなかったことを意味している。
「川下だ、早く！」
「はい」
弓に矢をつがえて、まごまごしているうちに弥三郎の姿は川面に見え隠れして、流されてゆく。
「向う岸へあがられたら、逃してしまうぞ、早く、飛びこめ」
周防守は家来の一人を突き飛ばした。
突き飛ばされた男は、姿勢がきまっていなかった。突んのめって、川へもんどりうった。
一つ間違っていたら、岩角で頭を打ったろう。幸い、川の中へ落ち、一たん沈んだが、夢中で水をかいて、浮き上った。
弥三郎春忠の方は、そのとき刀が岩の間にはさまって、もがいていたのである。
身を切るような冷たい谷川だ。その上、衣裳を着、刀を差したままなのだ。
流れは早いし、刀が邪魔になった。だが、刀を抜いて捨てることをしなかったのは弥三郎のためにも幸いであった。
近づいてくる侍を見ながら、焦ったが、漸く、脱し得て、かれは、抜手を切った。
川幅は広くはない。せいぜい五、六間の谷川だ。
向う岸の岩にすがりつくと、弥三郎春忠はほっとして振りかえった。
「逃すな！」
周防守の怒鳴る声がしている。
いつの間にか流されて、十間ばかり川下に来ていたのだ。

岩は水苔でぬるぬるしていた。草をつかんだ。が、すぼりと脱けた。あやうく、また水の中にすべりこみかけた。
夢中で何かをつかむ。灌木の根だった。
ずぶ濡れのまま、漸く這い上ったとき、
「待てい」
ぱしゃっと、水がはねた。
すぐ背後まで、侍の一人が迫いすがってきたのだ。
その手が足をつかもうとする。「ええい、寄るな」
蹴った。
相手は半ば上りかけていたが、大きくのけぞって、また水へ落ちた。が、それくらいではひるまない。ふたたび、草にすがって、上ってきた。
「逃さぬぞ」
あとに一人、川の流れに乗ってくるのが見えた。
「くそ！」
弥三郎春忠は、振りかえりざまに抜き打った。岸辺の高みから、さながら、馬上から斬り下げるような一刀だった。
あざやかに肩先から袈裟がけにきまった。
凄まじく血が噴いた。弥三郎の顔に、返り血がしぶいたが、それも、いまのかれにとっては、地獄から甦った祝い酒のように感じられた。
にやりと血を浴びた顔が笑って傾斜をよじのぼり、深い林の中に駈け込んだ。
「弥三郎めが、逃げるぞ」
周防守は、弓をとって矢をつがえた。ろくに狙いをつけもせずに切って放したが、これは、あわてただけに、とんでもない方へそれ飛んだ。むしろ、二人目の侍が、首をすくめたくらいである。弥三郎春忠の姿は林の奥の暗がりに消えていた。
（死んではつまらぬ……）
ずぶ濡れのまま、弥三郎春忠は走りながら、思った。
（生きるのだ。せっかく、これだけのことをやったのに、死んではつまらぬ。北條新九郎長氏こと、早雲庵宗瑞をおれは殺った！　おれの名前は、永久に歴史に残るだろう。それだけ、おれは偉大になったのだ）
偉大になったことの現世の楽しみを味わわねば損だ、と弥三郎春忠は思った。
もしも小屋の中で、周防守がすぐに縄を掛けるなり、引っ立てるなりしたなら、かれはそのまま諦めたろう。
積年の仇である新九郎を仆したという喜びだけで、莞爾として、死に臨んだろう。
だが、
（逃げることが出来る！）
と、思ったとき、またいのちへの希望が、湧き上ったのだ。

かれは血刀をひっさげたまま、走っている。
五体に勇気が満ちていた。疲れているはずだったが、不思議と疲れは感じなかった。
川に飛びこみ、さらに人を斬る！　この凄まじい行為は、普通ならそれだけで、がっくりとくるものだが、弥三郎は、血の匂いによって甦ったようである。
壮漢を一刀のもとに斬り伏せた。
あの状況での行動が、かれに自信を甦らせたといっていい。やはり、戦国の漢なのである。
（みほは？……）
彼女のことを思いだしたのは、一刻ほども後である。
沢を渡り、谷へ降り、山を越えるなどして、漸く、韮山の北條領から脱け出してから、ほっとして尾根に立って汗を拭いた。
（あの女、逃げたであろうか）
気が利いた女なら、周防守はじめ侍たちが小屋から出て騒いでいる間に逃げだせる。
それくらいの気は利くはずであった。
が、弥三郎春忠は、そこまで考えて行動したのではない。かれは、おのれが逃げることだけ考えていた。
かれにしてみれば、みほのいのちなど、尊重する意味はない。片腕として役立てながら、いざとなると、虫ケラほどにも考えない。
（逃げたら逃げたでよし、捕まったら……それもしかたがない）
散々、利用したのだ。拷問されて何を吐こうとも、大して困らない。
箱根の隠れ小屋も、おそらく白状するだろう。そうすれば北條家から抗議がくる。
大森海実は狡いから、とぼけるに違いない。弥三郎春忠を他へ移す。さらに追い詰められれば、殺す。そこまでやりかねない。と、知りながら、しかし弥三郎春忠は海実のもとへ帰ることを考えていた。
山気は冷えている。弥三郎春忠は帯を解き、着物を脱いだ。下帯一つの裸になって、濡れた肌をごしごしこすった。奈良半晒をしぼって手拭の代りにした。
それだけではまだ寒い。
幸い、うす陽がさしていたので乾すことにした。標高はかなりあるので風は冷たい。
火を熾そうにも、燧石がない。人里を離れた山中なのである。
弥三郎春忠はこのあたりの地形を一応知っている。街道まではかなりあるが、間道が近くを通っているはずであった。少し離れた岩の上にのぼると、急に視界がひらけた。
四方を見まわすと、山腹に一条の青白い煙が立ちのぼっている。木立の中である。

（人がいるのか？）
旅人であろう。弥三郎春忠は濡れた衣類を一抱えにして歩きだした。
杉木立の中をおりていった。木立の中はすでに昏い。秋の陽が沈むのは半刻ほど後であろう。日没になると、山上は寒気がきびしくなる。
焚火にあたっているのは、一人の修験者だった。ここで野宿でもするのであろうか。かなりの急坂で、おりてゆくと、はずみがつき、足もとから、病葉が蹴立てられた。
その音に驚いて、修験者は身を起すや、戒刀に手をかけて振りかえった。
妙な裸の男が走りおりてくるのを見て、眉をひそめた。用心ぶかく刀の柄から手を放すと、
「何者じゃ……野伏りか」
「ははは、野伏りとは酷い」
弥三郎春忠は、他意ないところを見せるために、大仰に笑って、
「わしは、箱根の金剛王院の別当大森海実どのの寄人じゃ、怪しい者ではない」
「金剛王院の別当……」
その言葉は、修験者には、ききめがあったようである。が、それくらいでは、安心せぬ。
時は乱世、場所は人里はなれた山中である。
さらに、濡れた衣類を抱えた裸の武士、となると、これは怪しむほうが正しい。
「しかし、その恰好は一体、どうしたことだ」
「これか、何、谷川へ落ちてな、うかと、足を踏みすべらせたゆえ、このざまじゃ。まあ、話はあとだ。まず、火にあたらせてくれ」
「うむ、それはかまわぬが」
用心を怠らず、修験者は、焚火の反対側へまわった。
弥三郎春忠は濡れた衣類を近くの枝にかけ、火にすり寄って、からだをこすった。そのさまを凝っと、修験者は見守っている。弥三郎春忠はわざと両刀を右側へ置いた。
刀を右側へ置いたのは、いうまでもなく、他意ないことを示したのである。
修験者はそれを見て、まだ警戒は捨てないまでも、
（追い落しではないな）
と、思った。
それが弥三郎春忠の狙い目だったのである。
修験者が、ふと気を抜いた隙に弥三郎春忠は、ぱっと、焚火を蹴上げた。
あの小屋での脱出の成功が、またその術を使わせたのだ。
「うわッ、何をする」
仰天した修験者が顔を背向けてたたっと、あと退るのへ、弥三郎春忠は刀をつかむや、焚火を飛び越えて、抜刀した。

よろめいて、立ち直ろうとしたが、落葉が足の下でずるっと、滑った。
修験者が戒刀の柄に手をかけたとき、弥三郎春忠の刀がぴゅっと走った。
峰打ちだったのである。わざと刃を向けなかったのは、噴血を避けたのだ。
この一瞬に、その計算ができている。もしもこの一刀が空を打ち、修験者に抜刀の機会を与えてしまったら、斬る。なるべくなら、斬りたくなかった。慈悲ではない。かれの衣裳が血で汚れることを恐れたのだ。恐れるというより、弥三郎春忠の功利性であろう。
狙いは当った。峰打ちがきまって、ぼくっと、鈍い音で、修験者の耳の下を打っている。
峰打ちといっても、細い刀である。横殴りの一刀だ。刃のほうだったら、首が素ッ飛んでいよう。
修験者はさながら天狗倒しにあったように、横倒しに倒れた。
一瞬、痛みで眼が眩んだ。が、気丈にも、身を起す。そこへおどりこんだ弥三郎は、刀の柄に手をかけようとする肘を蹴った。
そして、第二撃をふたたび、小鬢のあたりに喰わせた。これで、おしまいだった。修験者は声もなく倒れた。口から血が噴いた。が、大したことはない。そのまま悶絶したようである。
「もろかったな」
弥三郎は刀をおさめると、ただちに、修験者の帯を解き、袴を脱がせ、広袖の衣を脱がせた。
裸なので、早い。弥三郎くらいの年齢になると、こうした特殊な衣裳の着付にも、一応通じている。
かれは、たちまち修験者になり代った。兜巾(ときん)もかぶり戒刀も腰にした。錫杖を手にして立つと、哀れな修験者を見おろした。それから、前の刀を抜いて、とどめを刺した。刺したままその刀は捨ててゆくことにした。
弥三郎春忠が名も知れぬ修験者を殺して、その衣裳を奪ったのは、いうまでもなく変身のためであった。
すでに北條領を出ているのだから、変装の必要はないようなものだが、かれには考えがあった。
その考えはしかし、修験者めがけて杉林の傾斜を駈けおりるあいだに浮んだもののらしい。
そのときまでは、まだ、濡れたからだを温め、濡れた衣類を乾かすくらいのつもりだった。
弥三郎春忠の心に、咄嗟に浮んだことなのである。かれは、それを、
(まだ才覚は衰えておらぬ)
と、思った。
かれは修験者に化けると、箱根の山を素通りした。

金剛王院にも、あの小屋にも寄らなかった。
真っ直ぐに箱根を通り抜けて、早川沿いに街道を下っていった。
修験者は仏僧と同じように関所などでも平気で通れる。密教の修験ということになっているのだ。
一応調べはしても、常人よりは一目おく。
殊に密教というのは、常人には得体が知れない。天狗の絵なども修験者の扮装に模してあるのは、その辺の庶民の恐怖と不安を物語っている。
衣裳に血が飛ぶことを憚った弥三郎春忠の狙いは正しかったようである。
もしも血に汚れていたなら、すれ違う者や、関の役人に不審を感じさせたろう。
小田原大森氏の家来が木戸に番をしている。後世徳川時代の関所とは規模や制度に於て大いに異なってはいたが小田原にとって、要衝であることは論をまたない。
充分に警戒を怠らないのだ。
弥三郎春忠の顔を多少おぼえているものも、しかし修験者に扮したところからは、思いだせなかったろう。
幸い、宵闇がすでにおりている。早川の渓流の音が夜とともに一層高くなったようであった。岩を嚙む白波が宵闇の中にあざやかに浮び上る。
弥三郎春忠は、疲れも見せず、坂をおりてゆく。
風祭の村を通るとき、はっとした。
御堂の前に、誰かうずくまっていた。
(や!?……修験者か)
おぼろに見えるのは、同じような柿色の衣を着た修験者にちがいない。
ホンモノにあったニセ者の当惑である。
一口に修験者といっても、必ずしも顔を知っているわけではないが、密教独特の符牒でやられては返事のしようがない。近寄ってゆくとその男はつと顔をあげた。
宵闇の中ではあったが、その男は、こっちをむいて、にやりと笑ったようであった。
弥三郎春忠は、はっとなった。
無視することはできなかったのである。
同じ修験者の恰好をしていて、こちらはニセ者という意識がある。
密教の内部は、常人にははかり難い。
独特の隠微なものに包まれている。修験者同士、道ですれ違えば、どんな挨拶をするのか。
(こんな扮装をしなければよかったな)
ちらっと後悔が胸を掠めた。
が、いまさらしかたがない。
黙って通りすぎようとした。
とたんに、その男は、ぬっと立ち上ったのである。

弥三郎春忠は反射的に飛び退っている。
が、相手は、飛びかかってくるのではなかった。小柄な
がら、両足をふんばり、がっと両肘を張るや、さっと宙を
指が走った。
「りん、ぴょう、とう、しゃ、かい、じん、れつ、ざい、
ぜん……」
と、叫びだした。
これはいうまでもなく、臨兵闘者皆陣裂在前——という
密教の通力九字の印だ。
タテヨコに指で空を切り、指を組み合わせる。これは、
九字を切り、九字を結ぶと称う。すなわち九字の印である。
その指の動きは速く、常人には何が何やらわからない。
弥三郎春忠は一応、修験者のそうした秘法のことは知っ
てはいるが自分がその方法を習ったことがないから、呆然
として見ているだけだった。
それが修験者の挨拶だとしたらこちらもそれをやらなけ
ればならないが、弥三郎にはとてもそれはできない。
九字を切り終ると、さらに、その男は、がっしと指を組
み合わせて、
「のうまくさんまんだばさらだ、せんたまかろしゃたやそ
はた、らやうんたらたかんまん……」
と、難しい呪文を唱えだした。
曩莫三曼多縛日羅多、仙多摩訶廬舎多耶蘇婆多、羅耶吽
多羅多唅満……
弥三郎は、なんだか、その呪文で、からだが竦むような
心持がし、じわじわとあと退りした。
(ぬッ、負けてはならぬ。これしきのことで負けては……)
かれは、抜刀しようかと思った。
切れば、この呪文から離脱できると思った。
が、もう小田原は目の前である。ここでいたずらに紛争
を起すのは避けねばならなかった。
(逃げよう)
相手に危害を加えさえしなければ、相手も憎むことはな
い。逃げればいいのだ。
どうせ、もはやニセ行者ということは隠せない。
「ご、御免!」
一揖すると、脱兎の如くに走りだした。
「おんきりきり、おんきりきり、のうまくさんまんだばさ
らだ……」
修験者の声は一層、大きくなった。
弥三郎春忠の背中に、その呪文を浴びせたのである。
打ちのめされたように、弥三郎は突んのめった。どうと
転った。まるで、その呪文が、かれの足を奪ったかに見え
たが、それは弥三郎の恐怖のせいとやはり疲れで、足が弱
っていたからであろう。
かれははね起きた。そして、土まみれのまま、喘ぎなが
ら走りだした。
唵枳哩枳哩、唵枳哩枳哩……いつまでも、その異様な言
葉が、追ってくるようであった。
修験の秘法の中では、しかし、それは、かなり通俗的な
通力とされている、内縛印、剣印、刀印、転法輪印で、も
っとも常人の威しにはよく用いられるものだった。
弥三郎春忠のその狼狽ぶりを、ほんものらしい修験者は
見送って、やがて印を解くと、にやりと笑った。
「あいつ、小田原へ何をしにゆくのか……」
呟いたのは、伊賀ノ太郎だったのである。
これもほんものではない。ニセ行者であった。ニセ者と
ニセ者だったのだ。
しかし、ニセ者としては、伊賀者のほうが、やはり一日
の長がある。いや、忍法には七方出という七態の基本的変
装術があるが、この修験者に扮するのも、その一つである。
九字を唱えるのなどはもとよりかれにとって容易なこと
であった。
(弥三郎は何をしに小田原へ行こうとするのか)
伊賀ノ太郎は、三浦義同や大森藤頼の動静を捜るために、
相模に出没していたのである。
かれは、まだ、〝新九郎の死〟を知らぬ。
弥三郎春忠のあやしげな行動はむろん看過できないこと
だった。
伊賀ノ太郎は、弥三郎の影が闇の底に沈むのを見終って
から、後を跟けはじめている。
弥三郎のほうでは気がつかない。
息のつづくかぎり走ってから、小田原の城下へ辿りつい
た。
「わしは箱根の金剛王院別当大森海実どのよりの使いじゃ、
老職の梶木上総介どのの御意を得たい」
と言った。
梶木上総介は嘗つて面識がある。大森一族の血縁に連り、
老職をつとめている。
藤頼の父氏頼の右腕でもあった。
弥三郎が茶々丸のもとで勢力を誇っていたころ、交流が
あった。
(あのころは、梶木の方で貢物を送って来たり、御所に出
入りしていたものだ)
その梶木から藤頼に話を通じて貰おうと思ったのだ。
「なに、別当どのからの使者がまいったと?」
梶木上総介は一寸、意外な顔をした。
意外であった。
別当大森海実とは意見を異にしている。感情的な対立が
あるわけではない。
両者とも、

〝御家を安泰に〟
という思いは同じなのだが、方法論が違う。
それは、対北條新九郎への意見の相違だった。
海実僧正は、
（新九郎は大変な男じゃ、気をゆるしてはならぬ）
としているのに対して、梶木上総介は、
（そのように恐れることはない。むしろ、尊敬し、信頼すべきではないか）
と言っていた。
（人間は信頼されれば、悪事は働かぬものよ。窮鳥も懐へ入ればの謂もある。人間、頼られれば、力になってくれようとするもの）
それを、海実僧正は嗤った。
（甘い！）
というのである。
（左様な甘いものではないぞ。たしかに一面の真理ではある。が、それはまず対等な立場にあるか、この方が向うよりも優位にある場合じゃ。以前ならよい、がいまの新九郎は、すでに大きくなりすぎた）
以前の北條氏といまの北條氏とは違うと力説する。
以前のといっても、鎌倉執権のころを称うのではない。
新九郎が智入りする以前の、ただ名跡が残っているだけというに近い北條氏である。

茶々丸を三浦時高とともにほろぼしてから、新九郎の〝北條〟の名声は一段とあがった。
それは、良い意味でも悪い意味でも、評判になっている。
前者は、天下の足利伊豆公方と三浦半島から相模の三分の一ほどを領していた大勢力を仆したという事実に対してであり、後者は、
〝下剋上〟
の恐るべき実践者への非難である。
これは、しかし正確ではない。
新九郎は伊豆公方の家来ではなかった。
足利政知のところに出入りはしていたが、禄を食んでいたわけではない。
今川竜王丸が氏親となる烏帽子親を政知がつとめたことは事実であるが、これとても、氏親と政知が主従になったことを意味しない。
況や茶々丸を討つことは、むしろ道義的に、政知の仇討をしてやったことになる。その是々非々は別にして、新九郎の存在が大きなものになったのは疑いの余地がない。
梶木上総介が、海実ほどに新九郎を疑っていないのは、新九郎の対大森氏政策の巧みさであろう。
氏頼はそれでも、かなり用心していたが、藤頼になると、もう新九郎を疑う前に、その抱擁力に負けている。
父の氏頼は死ぬ間際まで、新九郎に用心するようにと、

言い言いしていたが、その言葉が重なれば重なるほど、藤頼には、父が小さく見えた。
それにひきかえ、新九郎の態度は鷹揚だし、寛闊で、太っ腹であり、茶々丸を討ったのは、ただに茶々丸が実父殺しの狂人で、悪政をほしいままにする男だったからだと信じている。
それは三浦時高を討つ義同への同情と共感が深く、たまたま共通の敵という意味で、ごっちゃになってしまったのかもしれない。
それらのことも、藤頼の若さであり、その若さも、すでに新九郎の計算のうちに入っていたことだった。
新九郎のような男こそ、亀の甲より年齢の功というのであろう。
梶木の性格もあろうが、藤頼の意におもねるようなところもある。
藤頼は父のあとを継いで、大森家の当主になった以上、おのれの気持で、支配したい。海実僧正の忠告もかえって、わずらわしく感じるのだ。
梶木上総介も藤頼に同調しているうちに、同じように新九郎への疑いをうすめていった。
そうした矢先だったのである。
「海実僧正の使者が……」
何をしに来たのか、ともかく逢わないわけにはいかない。

かれは検地台帳と米の上納帳を照合しているところだった。
この年は雨がつづいて、山津波などがあって、流れ田が多く、収穫が減っていた。酒匂川の氾濫もこたえた。治水のための堤防工事なども、緊急を迫られていたのである。
「使者の間に通しておけ」
取り次ぎの者にそう命じてから、また眼を帳面に落した。
弥三郎は修験者の姿のまま、草鞋だけを脱ぎ、すすぎをつかって上へあがった。
使者の間にも、板の間と座敷とがある。
かれが通されたのは、板の間である。もっとも、よく磨かれて栗色に鈍く光っていい、円座が据えてあった。
そこへ胡坐すると、出された白湯を飲んだ。
こんな夜更けに通されたのは、海実の使者と名乗ったからである。そうでなければ、明朝、陽が上ってから訪れるのが常識である。
この時代の夜は、現代と違い、就寝が早い。待つほどもなく、上総介は入ってきた。
修験者は、その人が入ってくるのを見て平伏した。
一穂の灯がゆらいだ。上総介は板戸を排して入ってくると、修験者を見、尊大な顔になって、どっかと坐った。
「箱根からか」
「はあ」

「その方、名は何と？」
「お見忘れか」
つと、修験者は顔をあげた。
「おう……そちは」
「今川弥三郎春忠」
「まさか……」
「いや、正真」
にやりとかれは笑った。それは亡霊の笑いだったかもしれない。上総介には一瞬、そう見えた。
「生き還った？……」
「ははは、死にはせざった。さればの、この通り」
弥三郎春忠は両手をひろげ、それから胸をぱんぱんと叩いた。
「――全くな、いかさま今川弥三郎……呆れたな」
上総介は、まだ信じられないようであった。
「死ぬどころか、わしは、並の者にもやれぬことをやった」
「待て、弥三郎、おぬしは、左様にのうのうとはしておれぬはずだぞ、城を陥された大将なれば、その首は……」
「ははは、ま、そう話を急ぐことはない。この首を進呈してもよいが、いまさら、かような白髪首など貰うても仕方があるまい」
「……」
「それよりも、わしが一体、なぜ当家へ罷り出たかそれから詮索したほうがよくはないかの」
「うむ、それは……」
「わしは、当家のことを案じていた……」
「なんと、おぬし……」
いい加減なことをいうな、と眼を怒らせるのへ、ぬけぬけと弥三郎は言った。
「このままでは、あぶない。大森家の行末が案じられてならなんだ。ま、いま一言、聞かっしゃい、わしが故殿と旗を揚げたのを、おぬし、何と見た」
「……」
「当家を攻むるためと見たか」
「いや……」
「左様とも、当家には、何の怨みもない。の、当家とても、左様さ。三浦が同胞の確執はこの場合、別じゃ。われらが案じたのは、北條新九郎の野望よ。つまりは、相模侵略の意図じゃ……」
弥三郎の声は熱を帯び、上総介は、その熱に圧倒される思いだった。
「北條新九郎は当家を狙うていた。それゆえ、わしは、命に代えても新九郎を討ち亡ぼすのを、念願としてきたのじゃ」
「しかし……それはかなうまいぞ」

「ははは、左様に思うか。よく聞けよ上総介、本日、北條新九郎は死んだ。この弥三郎が討ちとったのじゃ」
「まさか！」梶木上総介は耳を疑った。「北條新九郎が……死んだ、そう言ったな」
「いかにも、左様に申した」
「新九郎が……まことか」
「まことでござる」
「信じられぬ……」
「何故に」
と、弥三郎春忠は、腹立たしげに言った。
「何故に信じられぬ。風聞を耳にしてきたのではないぞ」
「しかし、まだ、わしは他より聞かぬ」
「ははは、それは、道理。まだ半日と経ってはいないゆえな」
「すると……」
「左様、矢に当ってな、死んだ」
そう聞いても、まだ梶木上総介は信じ難い顔付きだった。
「矢は、まっすぐに、ここを」と、いらだって、弥三郎春忠は、おのれの左の胸をおさえた。「貫いたよ、まっすぐにな」
「――おぬし、見たのか」
「ああ、見た」
大きく頷いて、傲然と、胸を張った。
「見ないでか、その矢を放ったのは、このわしじゃ」
「げッ、おぬしが……」
「この手で、な」
これほど、誇らしい気持はなかった。弥三郎春忠の面は紅潮し、その声は、はずんだ。
「この手で、弓をひきしぼった、この手で、矢を放った」
「……」
「ははは、おれが仕止めてくれたのだ、ははは、天下の北條新九郎も、今川弥三郎さまの手にかかっては、モロイ。ははは、どうじゃ上総、わしが生きていてよかったであろうが」
「新九郎どのを……のう」
「まだ、信じ難いようじゃな。まあよい、明日になればわかる。いや、明日といわず、今夜のうちにも、報告がくるじゃろう」
当然、大森家からも、細作が韮山に入っているはずであった。
その者が、
〝北條新九郎どの暗殺〟
を急報してくるにちがいなかった。
情報の伝達の難しい時代である。したがって、流言も多い。
よほどの傍証がなければ、うかつには信じられない。一

方口の場合は特にそうであった。
大森家の死活にも関る、こうした情報を、うかつに信じるほど梶木上総介は軽率ではなかった。
「もしもわしの言葉に嘘があったら、この白髪首を進呈する。わしが殺ったのじゃ、間違いないぞ」
「わかった。とにかく、聞き届けておく」
「わしが殺ったのでなければ、どうして、のこのこと罷り出るか。そこのところを考えてみよ」
「それもそうだが……しかし、弥三郎、おぬし、いままで、どこで生きていたぞ」
「わしは、ある御方の庇護を受けていた」
と、弥三郎春忠は言った。
「その御方の名は、死んでも洩らすまいと思うていた。新井城で首胴異になるところを、助けて貰うたのじゃからな」
「その名、洩らすことはない」
はたと膝を打って、梶木上総介は頷いた。
「すでに、わしは存じている」
「え！　それは……」
今度は、弥三郎が驚く番であった。
「まさか」
「推測じゃよ」
にこりとして、
「箱根であろう」
「おう……」
「うすうすは耳にしていた、仄聞ゆえ、定かではなかったが、誰やらが潜んでいるとは聞いていた。そうか、おぬしだったか」
金剛王院別当の海実は、弥三郎春忠を助命の上匿うことについて、三浦義同と、大森藤頼の二人にだけは、了解をとりつけていた。
二人も、はじめは難色を示したが、一応、弥三郎には返り忠の功もあり、海実が責任を持つということで、了承したのである。
しかし、家来たちには知らせなかった。戦勝で、気のたかぶっている家来たちが知れば、とても収拾がつかなくなる。
戦国の世の主従関係は後世のように簡単ではない。実力の奉仕とその反対給付で成り立っている。
家来は主人に対して絶対服従ではないのだ。
いやになれば、いつでも飛び出せる。主人もそれを引き止めるには、高禄か、人間的魅力に頼るしかない。
それだけにからっとしていた。余分な義理がないし、拘束力がないのである。
大森藤頼が海実の意思を尊重した中には、一族だからという遠慮もたしかにあった。が、家来にしてみれば、それ

はない。海実の意思を尊重しなければならない義務はないのだ。
その辺の微妙な関係が、この秘密を三人だけのものにしていたのである。
弥三郎春忠としても、これだけの手柄をあげたからこそ、姿をあらわしたのであろう。
新九郎を事実、討ったとすると、これからの大森家としては考えねばならないことが、生じたわけだ。
（攻めこむか）
北條家中の混乱に乗じる。
（伊豆を掌におさめる好機じゃな）
梶木上総介は、凝っとしておれぬものを感じた。
（殿に相談せねば……）
上総介は膝を起した。
「言上してまいるゆえ、待っていよ」
と歩きはじめたとき、
〈待たれよ〉
と引き止める声がした。
梶木は藤頼の御殿に行こうとしていたのである。
うしろがみを引かれるように感じて、足を止めた。
「なんじゃ、何か……」
「いや？……」
「何か申されなんだか」
「いや」
弥三郎には聞えなかったのである。
その含み声は、梶木にだけ聞えた。
だが、そら耳かと思った。板戸に手をかけた。すると、また聞えた。
〈待たれい、信じてはならぬ〉
「なんと？」
〈嘘、じゃ〉
「え!?」
〈弥三郎の話、嘘じゃ〉
その声は、はっきりと聞えたのである。
梶木は、弥三郎の顔を見た。嘘と聞けば、報告にゆけない。韮山攻めなど、夢の夢だ。
弥三郎は白眉をひそめている。
声は別のところから聞えた。
頭上から聞えたようであった。
梶木は、反射的に頭上を振り仰いだ。が、別段何も見えない。天井にはくすんだ杉板があるだけである。
その声の主は、天井の裏に潜んでいるのか。
「ともかく、それへ待っていて貰おう」
梶木の態度は変っていた。
かれは、あの奇妙な声の主に、わかるように言った。
「もっと詳しく知りたい」

それは、弥三郎に背を向けての言葉であり、独り言のようにも聞えた。

〈別の場所で教えてくれ〉

と、いう意味だったのである。

梶木は、御殿の藤頼のところへ伺候するのではなく、もとの部屋へもどった。

そして、まだ残っていた下役二人に、退るようにと言った。かれ一人の方が、あの〝陰の声〟は、話し易いと思ったのである。

かれは、弥三郎のところから戻ってくる間、背後に、ある〝眼〟を感じた。

誰かが見守っている。それは一体どういう存在かわからなかったが、少なくとも弥三郎春忠の言葉に対する一つの否定を意味していた。自分の眼で見ないことには、信用しない梶木である。俗にいう石橋を叩いて渡る気質なのだ。

かれは座につくと、腕を組んだ。

「北條新九郎が死んだのは、まことか」

呟くような言葉である。

それは、〝影〟に向っての明らかに問いかけであった。

木魂の頭上で返事がした。

〈嘘じゃ、新九郎の殿は、死なぬわ……〉

はっきりと聞えた。

梶木は、その声を振り仰いだ。

「何者だ、そちは」

〈……〉

「姿を見せずに、もの申したとて、信じられぬぞ、これへ出い」

誘いであった。姿を見せず、声だけ出す〝怪しの者〟の正体を見きわめたいと梶木は思った。

「これへ出い」

と、頭上を振り仰いだ。

「左様なところにいては、話にならぬ」

〈ふふふ、どこにいると思う〉

揶揄するような声であった。

〈あてて見るがいい〉

「天井だ、天井裏であろう」

〈はて……そうかな〉

語尾が笑いを含んでいる。

するする、と音がした。はっとなって梶木はふりかえった。

左脇に置いた刀が、生き物のように滑っていた。

ぎょッとなった。あわてて手を伸ばした。

刀は止った。

屏風の陰を梶木は睨んだ。そこに隠れていて、刀を引っ張ったと思った。

が、さすがに立って屏風の陰を見ることはできなかった。

小田原大森家の老職としてのプライドである。

〈ふふふ……おわかりか〉

「む！」

声は、しかし、依然として頭上から聞えるのである。

〈おわかりにならぬ？〉

「……」

〈ここじゃ！〉

声は、板戸の方で聞えた。板戸には、青海波が大胆に描いてある。

その空間に、まるで、異様な爬虫類が羽を得て飛んでいるような絵が描いてあるのが見えた。

「や！」

そのものが、するすると動いたのである。

梶木は刀を摑んで片膝立てていた。

が、すぐに、それが一匹のヤモリだとわかった。

ヤモリは、平然として板戸を這い、下におり、灯を慕うように近寄ってきた。

〈こやつ……化身か〉

刀の柄をつかんだまま、梶木は血走った眼で睨んでいた。

〈ヤモリが珍しいかな〉

と、声は別のほうから聞えた。

〈ただのヤモリよ。あわてることはない〉

梶木は翻弄されていた。かれは苦笑を洩らして、膝をおろし、刀を左脇に置いた。

この怪しの声の主を見ようとする努力を放棄することにした。歯が立たない、という感じだった。固すぎて歯が立たないのではない。柔らかすぎて、歯ぐきにねばりつく、始末に悪い相手なのである。

その怖れを与えたのも、これ以上、詮索させないための忍びノ者の巧みな牽制であった。

〈ヤモリを珍しがっているようでは弥三郎の嘘に丸めこまれてしまうわな〉

「――証拠がほしい」

あえぐように梶木は言った。

「新九郎が生きている証拠がほしい」

無気味な笑い声がひびいた。それは嘲りに聞えた。

〈証拠だと？　証拠は、生きてござることだわさ〉

「しかし……」

梶木が言いたかったのは、もしも新九郎が生きているのならばなぜ、弥三郎が、そのような嘘を吐いたのか、ということだった。

〈韮山にゆけばわかること〉

あっさりと、その声は言った。

「うむ……」

〈弥三郎は、狂うている〉

それが最後の言葉だった。

それきり、その声は聞えなくなった。
暫くののち、小田原城から忍び出た影がある。
その影は、搦手の塀を乗り越え、裏山を風のように走った。
夜目にもそれとわかる亭々たる巨杉の根方にくると、大きな洞に手をのばした。
一抱えの包みをひきだした。そして、身にまとった鼠色装束を脱ぎ捨てた。
とりおろしたのは、柿色の衣や兜巾などの修験者の装束である。
かれは素早く着替えた。これは伊賀ノ太郎であった。
修験者となったかれがしたことは、割籠(わりご)の中から梅干をとりだして口に含み、ごろりと横になったことだった。
一仕事済んだ虚脱が、この伊賀者をとらえていた。
行者の姿に還っていれば、こういう山中で寝ていても咎められることはないのである。
かれは、梅干をしゃぶると、カリッと種を口で割り、器用に殻を吐きだした。中の核を味わいながら、眠りに落ちていった。
とうとう、陰の声の姿を見ることがなかった梶木は、弥三郎の言葉を全面的に否定するのも尚早な気がしている。
(明日になればわかる……)
透破が一人、韮山の城下に潜んでいる。

その男からの、何らかの報告があるにちがいない。
(明日一日、待って……)
もしも何も音沙汰がないようなら、誰か気の利いた者を派遣すればいい。
隠密にやるのもいいし、あるいは堂々と使者をやってもいいのだ。
然るべき用事をしたためて、直接、新九郎に宛てる。いやでも新九郎が直接、答えなければならないような用向きを考える。
それだけでも、一応、安否がわかる。姿をあらわせば、弥三郎の虚言とわかるし、何かと言をかまえて、新九郎に面接させぬようなら、あやしい。
その用向きを考えると、眼が冴えてきて、梶木は眠れなかった。漸く眠りに落ちたのは、夜明け近かった。
だが、隠密も使者も派遣することはなかった。その日、昼すぎてから、韮山の方から使者が来たのである。
「なに、韮山から?」
「はい」
「誰だ、その使いは」
「御家老の山中上野介どの」
「む……」
こちらから隠密を出そうと思っていたところだけに、梶木はぎくりとした。

まるで、こちらの腹の中を読まれたようなものであった。
「一人か?」
「荷駄二十頭に宰領以下三十人ほどでございます」
「荷駄……何を積んでまいった?」
「まだ品目はわかりませぬが、とにかく夥しい物で。はい、生物なども多く見えます。雪で冷やしたままのもので、早く新鮮なうちに召し上られたいと」
「雪でか!?」
梶木は驚いた。
まだ晩秋である。箱根に雪は降っていない。
「はい、何でも富士が嶺(みね)の雪を運びおろして荷詰めにしたとのことで」
そこまでするとは容易なことではない。
新九郎の命令を受けた家来たちが富士山に登って、新雪を掻き取り籠に盛って、下山してくる姿が浮んだ。
そうした苦労までして、新鮮な魚貝類を運んできたというのだ。
梶木は感激した。この話は、必ず、藤頼も感激させるに違いないと思った。
そう思うと、このまま素直に感激してもいられない。
(新九郎は死んだという……弥三郎の言葉が虚言かどうか)
梶木は迷った。
弥三郎の言葉が正しいとなると、新九郎の死を誤魔化すための行動であろう。
ともかく、山中上野介を引見した。
「何の御用か」
わざと、固く表情をひきしめて応対した。
「いや、別段のことではありませぬ。主君の仰せにより、罷り越しました」
ほんの交誼のしるし、というのである。
雪の中に埋められた石鯛や大海老やアワビなど、むろん小田原の漁師でも獲れないものではない。
が、わざわざ伊豆から運んでくるのは、よほどの好意でなければならない。
梶木は、城内に入ってきた荷駄を見やって、あらためて、感動した。
「左様か、早速、われらが主君へ言上するが、早雲庵どのには、御元気か」
と、捜(さぐ)りを入れた。
「御気遣い忝ない。頗る御壮健でござる。信濃守どのによしなにとのお言葉でござった」
明快に上野介は答えている。
「ほう、それはよかった……」と、まだ半信半疑で、梶木は、「早雲庵宗瑞どのには御壮健とあれば、あの噂は、事実無根のことでござるか」

「この信濃守どのへの書状にもしたためてあると思うが、実は、先ごろより、当領内の鹿が国境いを越えて、御近所へ迷惑をかけるにや聞き及んでおりました」
「ほう……それは、此方には初耳だが」
「伊東家領内へ入って、あちらより射止められるということがござってな」
上野介はそう言いながら梶木の表情を窺っていた。あの朱卍の矢の事件である。もしも梶木が、その策謀に一枚加わっていたとしたら、表情から、その翳りを読みとることができるはずだと思った。
だが、少なくとも梶木の眼には、その翳りは見出せなかった。
「そこで、先日より領内の鹿狩りを行いましたが」
「ほう、それは随分と獲物は多くござったろう」
「ところが、失敗しましてな。姿を見つけたものの半数以上に逃げられてしまいました」
「はは ア」
「箱根に逃げこんだのが多ござる。されば、御領内を荒しまわるおそれが生じました」
「いや、その儀は御懸念なく」
「われらが主君は、ひどく気にかけられまして、両三日のうちにいま一度、大がかりな鹿狩りをいたすことになりました」

「あの噂とは」
「左様……不吉な……不吉なことゆえ、お耳には入れますまい」
「はア、何か」
と、山中上野介は至極明るい顔で聞く。構えた様子はない。
「実は、申してよいかどうか、まことに申し難いことだが……早雲庵宗瑞どのが、その、お亡くなりになったと」
一なんと、そんな、たわけな」
それこそ初耳だというように、大仰に山中上野介は驚いてみせた。
「そのような、呆れたこと、一体、誰が」
「誰が、と申して、その噂でござる」梶木は、ねっとりと脂汗を腋の下にかいている。「噂がな、左様な噂がひろがっておりましたので、まさかとは思いながら……」
「ははは は、流言とはそのようなものじゃ、ははは は、しかし、死んだという噂は」
「縁起の悪い……」
「いやいや反対じゃ。寿命が延びると申しますな」
「まさか、いや、左様なことは知らなかった。が、しかし、それなれば重畳、ほっとしましたわい」
「ところで、このたび、罷り越しました次第は……」
上野介は、気分のほぐれたところで、軽く切りだした。

新九郎の領内で鹿狩りが行われたことは、むろん小田原では知っている。
隣国の動向は常に気にしていなければならない時代である。
梶木は国境を守る者から、報告を受けている。
たしかに、多くのけものたちが小田原領に逃げこんできているのも事実だった。
山中上野介が、きちんとした挨拶をしに来たということも、意外だったし、夥しい進物を贈ってきたというのが嬉しく感じられた。
（やっぱり、新九郎どのが死んだというのは流言であったな）
その口上が立派であった。
御領分内に逃げこんだ鹿が悪戯をすると御迷惑がかかる。それゆえ、大がかりな鹿狩りを行い、鹿を追い帰したい、如何なものでござろうか、というのである。
こう丁重な挨拶をされては、
「痛み入る」
と、いうほかはない。
「早速、主君に言上いたしまするゆえ、今宵はゆるりと御休息なされ」
上野介は、この由を、主君藤頼に取り次いだ。

若い藤頼は素直に新九郎の書状を信じた。喜びすらした。
「一々、鹿狩りくらいのことでかような御挨拶を受けては、御返事のしようがない。早雲庵どのの御心づかいに感じ入ったと仰せ下されい」
さらに、こうも申し添えている。
「御入用とならば、当家よりも、幾何かの人数を差し向けましょうか」
「いや、その儀には及びませぬ。お心のほどは、主君にお伝えいたしまする」
山中上野介は、一夜泊って、小田原を去っていった。
その行列が立ち去ってゆくのを見送ってから梶木上総介は、弥三郎春忠を軟禁してある部屋にいった。
弥三郎は書見をしていた。乞うて借りた〔孫子〕である。
入ってきた梶木は、にやりとして皮肉な口調で言った。
「兵書には、何と書いてあるかな、こうなったら弥三郎、いさぎよく腹を切るか」
「――新九郎が、生きていると思われるのか」
「あの山中どのの様子では、おぬしの方が分がない」
「しかし、たしかに、この手で、矢を……矢は、胸を貫いたのに。あれでは、絶対に、神ならぬ身の助かりようはない」
「見たか、しかと、宗瑞どのの顔を」
疑問を、梶木は口にした。

矢は、たしかに、〝かれ〟の胸を貫いた。
〝かれ〟は死んだ。その点に不審はない。ただ、影武者だったといわれると、それを否定するには、弥三郎は自信がなさすぎた。
そして、急に、あの矢を受けてもろく崩れた姿が、別人だったとしか思えなくなってきたのである。
「そうか、影武者だったか……しまった！」
狼狽と痛恨の表情を、梶木は意地悪く、眺めていた。
（この奴を、どうするか……）
新九郎殺しの手柄は、弥三郎の罪を消してあまりある。
が、それが白紙に戻ったいま、弥三郎は、新井城に籠って三浦、大森一族に敵対したという罪業を背負った、敗残の武将に戻るだけであった。
「弥三郎」
と、かれは、凝っと見守ったまま、沈痛な表情すら浮べて言った。
「何とする」
「え……」
「腹を切るか」
そこまでは、まだ考えていなかったのである。弥三郎は即座に返事が出来なかった。
失敗に違いない。が、失敗は自裁を意味しない。弥三郎がそのとき感じたのは、急ぎすぎて躓いた、というくらいのことであった。
「切腹……」
「男らしく、な。やれ」
「いや……その儀は」
「やれぬか」
梶木は冷酷な眼で見た。
「北條新九郎宗瑞どのが、その方がこの小田原城に在ると知ったら、何と思う。まるで、われらが、刺客として送りこんだことになるではないか」
「ま、お待ち下され、両三日、御猶予を……頼み申す」
野放しにしなければ万一の場合も面目は立つ。梶木はそう考えて、弥三郎を土牢に押し込めることにした。
山中上野介は韮山へ戻ってくると、早速、新九郎にことの次第を報告した。
「小田原では、安心しきっております」
「そうであろう、あの程度の頭では、こちらの術にひっかかるはずじゃ」
頭を丸めて早雲庵宗瑞と名乗っている新九郎は、ただちに行動を起した。すでに、ひそかに準備は進めていたのである。
「荒木、大道寺、かねて申しつけた通りに……」
「はい、いよいよでございますな」
荒木兵庫頭はにやりとして、
「待ちかねた日が来たわい」
山中上野介は膝を進めた。
「小者が聞き及んだことでござるが、小田原には、妙な者が匿われているようでございます」
「妙な者とは」
「その、信じ難いことでござるが、れいの今川弥三郎……」
新九郎は、うすい笑いで頷いた。
「存じておる」
「え！」
「調べはついておる」
「……」
「確かに今川弥三郎春忠。生きてあるとは思いがけなかったが」
「やはり！」
「周防も目のあたり見ている。間違いない、やつは生きていた」
「では、大森信濃が、殿を裏切って……」
「さあ、裏切りといえるかのう、向うには向うの術があってのことであろう」
新九郎は意に介せぬように、軽く笑っていた。
すでに弥三郎のすべては、新九郎にわかっている。伊賀ノ太郎が詳細、調べあげてきている。

弥三郎が大森海実に匿われ、みほを使っていたことから、山賤殺しまで、すべて、新九郎の耳に入っている。
影武者が殺されたことは、哀れむべきだが、影武者は、そんなときのために存在しているのだ。
「さあ、また鹿狩りじゃな」
荒川豊前守は在竹兵衛尉と顔を見合わせて、楽しそうに笑った。
「同じ鹿狩りでも、こんどは大きいの」
「大きい、大きい、待ち兼ねた大戦さよ」
韮山城下は支度を整えて出てくる勢子の群れでうずまった。
農民も漁師も動員されたようであった。鉦や小桶や、鼓や、何でもいい、音を出せる物を持って、集ってくる。
棍棒、錆槍、弓の折れ、脇差、鎌、あらゆる得物を持って、山へのぼった。
足軽たちは小具足に身をかため槍をかいこみ、弓組は、いずれもありったけの矢を携帯した。
僅かの留守の人数をとどめただけで、韮山の将士は、夥しい列をなして箱根道をのぼってゆく。
すでに、話は通じてある。堂々としたものであった。
いくら新九郎の将士が武装をしても、農民たちが、家業をなげうっての集合であっても、小田原では、案じることはなかった。
鹿狩りくらいで、わざわざ隣国へ一言にしろ挨拶を送る者はいない。それが丁重すぎるほどの挨拶だった。
「義理固いお方だ」
大森信濃守藤頼はこう感じ入った。
「われらのほうから、お手伝いの人数を」
とまで、申し出た。
それが新九郎の狙い目だったのである。
むろん、丁重に断っている。そして、将士と小者らが勢子でもって箱根の山を埋めた。
その日早朝から陸続としてのぼった夥しい軍勢は、晩秋の箱根山を埋め尽くして、麓から関をあげては、大いなる鹿狩り絵巻をくり展げた。
その勇壮な勢いに、全山の鳥が飛び立ち、兎や猪までが飛び出す。鹿の数も、一々数えていられないほど多かった。
もしも、この一群の中にあったなら、その恐ろしいほどの多くの獲物に対して、意外に執着のないかれらの様子に、些か不審をおぼえたにちがいない。
鹿を追いはしたが、まるで半ば戯れのように、鹿狩りは二ノ次のように、かれらは、笑い興じながら、追っているにすぎなかった。
「われらが領内へ追いこめば、ことたりるぞ、みな殺しに射止めるには及ばぬ」
そんな足軽頭の下知が、高揚した士卒の熱を冷ますのだった。

たしかに理屈はそうだが、普通こうした場合、その辺でとまらないのが人情なのだ。
ところが、部将たちの命令は、鹿をとることを、むしろ避けているようにすら、見えた。
そして、落ちるに早い秋の陽が沈んだころ、三々五々、ぞろぞろと登ってきていた牛の群れが、山頂近くの林の中に、幾つかの群れをなして、集められたのである。
「鹿狩りに、牛は何の用であろうかの」
「さあて、獲物を運ぶためであろうかの」
山者たちは、ひそひそ囁きあった。
だが、そんな程度のものではなかった。
夜闇とともに、牛追いや足軽たちは忙しく働きだしている。
牛の角に松明を縛りつけ、背中には薪を背負わした。
それが一体、何を意味するものか。
少し眼のある者には、わかるはずであった。たしかに、それを目撃した者がいる。その男は、山道をまっしぐらに走りおりた。
その男は鍛冶屋であった。
戦さがあると、鍛冶屋は忙しくなる。戦場までも同行する。
矢尻を作るのは弓師とは別だし、刀が曲ったり、鉢金が割れたり、鉄面半頬などの蝶番がはずれたりすることもあって、鍛冶屋の仕事は多い。
むろん、信用のおける男であった。その信用は、しかし、徳一というこの男が、意識的に作ったものであった。
韮山に住んで二十年近くになるといっているが、実際には、まだ六年ほどのものである。
それでも、温順で実直な人柄が買われて、鍛冶源と呼ばれる、親方のもとに奉公していた。
鍛冶源は、腕と度胸のよさから御城の御用をつとめている。その下職となって信用をつけていた。
忍びの間では、これを〝カマリ〟と呼び、三年カマリ、五年カマリなどと称する。
その年月は、下限を意味する。長いほどよいのは、いうまでもない。
この大規模な鹿狩りの裏側を眺めて、
(偽装じゃ)
と、感じた。
(御注進に)
牛の角に松明をつけ、薪を背負わせるのは、奇襲戦法である。この松明に点火し、一せいに箱根山から小田原へかけて、雪崩おとしに、走らせれば、どういうことになるか。
小田原城は半刻と保たずに潰滅するにちがいなかった。
「おい、どこへゆく」

と、竹藪の辻で呼び止められた。
ここを守っている足軽であった。
ぎょっとなったが、足軽が一人だと見ると、気をとりなおした。
「へえ、私でございます」
「私ではわからん……その方、見たような顔だな」
「へえ、鍛冶源の、若い者で」
「下職か、うむ。思いだした。その下職がどこへゆく」
「あの、ちょいと、忘れ物をしましたので」
「忘れ物？　それでは、方角が違う。韮山は、向うじゃ」
「へえ、間にあいませぬので、小田原まで、一っ走り」
小腰をかがめながら傍へ寄ると、タガネを握ったまま、どっと、からだごとぶつかった。
万一を恐れて、疑われるような刃物は持っていない。その職に就いている者らしい道具を用いて相手を沈黙させるしかないのである。
タガネは、足軽の脾腹に強い衝撃を与えた。
「むっ……」
と、海老なりになって崩れるのへのしかかって、今度は首をしめた。鍛冶屋の手は大きく、骨はふとい。
完全に息の音をとめるまでに、どれほどもかからなかった。
足軽を倒したまま、鍛冶屋は、すぐ走りだそうとした。
が、また思い直したように引きかえしてきた。
着ているものを剝ぎとろうとしたのか、死体にうずくまった。
これから小田原に下りるまでに、何度か、誰何されるにちがいない。それに備えて足軽に扮していれば、抜けるのに容易だと思ったのであろう。
だが、帯をほどいて、袴に手をかけたとき、どこかで、笑い声がした。
風の吹き抜けるような、妙に陰にこもった笑いだったので、ぎくりとして、身を起した。
〈ふふふふ、何をしている〉
その声は言った。
暗い木下闇である。声はどこから聞えるのかわからない。
〈足軽の懐ろをまさぐっても、銭はいくらもあるまい〉
「なに！　な、何者だ、うぬは」
〈銭が目的か？〉
「……」
〈ふふふ、そうではあるまい、そうではないことは、わかっておる〉
「うぬ！」
鍛冶屋は、足軽の衣裳を剝ぐことをあきらめ、刀だけを奪いとると、じりじりと、坂の下のほうへあとずさりしはじめた。

その声が、どこから聞えてくるかわからないだけに、一層、不安であった。
〈駄目だよ、あきらめるのだな、小田原の細作であることはわかっておるわい〉
「ぬッ、出ろ、姿を見せろ」
〈ほう、いいのか、そんな大声を出して？〉
「……」
〈おとなしく、刀を捨てるのだな、もう駄目じゃ、あきらめるがいい。往生ぎわをよくすることだ〉
その声は、頭上から聞えるようであり、背後から聞えてくるようでもあった。
〈足軽一人を殺した以上、うぬも命はたすからぬ〉
闇の声は、さながら、絶対の神の声を思わせた。
〈同じ死ぬのなら、せいぜい極楽におちることを願うがいい〉
「な、何者だ」
鍛冶屋は同じ言葉をくりかえすだけだった。
〈なかまは何人いる？〉
「……」
〈小田原から遣わされた透破の人数を聞いておる〉
「し、知らぬ」
〈知っているさ〉
「知らぬ」
ぱっと、かれは走りだした。
その前面に、黒い影が降りた。軽やかに、樹の枝からこぼれ落ちたのだ。
鍛冶屋は一言もなく、刀をふるって斬りかかっている。が、影は身軽く、飛んだ。刀は手から落ち、鍛冶屋はのけぞった。
的確な一刀であった。鍛冶屋が、血を噴きあげてのけぞると、伊賀ノ太郎は、あたりを見まわした。
あるいは、なかまが近寄っているかもしれない、と思ったのである。
が、闇に動くものはなかった。その気配を見てとってから、太郎は近寄った。
凄まじい呻きをあげながら、鍛冶屋はもがいていた。
「う、うぬは……うぬは、新九郎の……」
それには答えず、あの質問をくりかえしている。
「なかまは何人だ。韮山に何人いる？」
「う、ううむ……」
「この人数の中に、何人まぎれこんでいる？」
「く、くそ！　教えるものか」
さすがに、透破である。口の固いことも、忍びの常識であった。
「言いたくないなら、言わないさ……だが、言えば、助けてやる」

助けてやるにしては、斬りすぎた。
致命傷だと思われた。力が入りすぎた、と伊賀ノ太郎は、後悔した。
だが、その言葉は、一瞬、鍛冶屋を考えさせるだけの効果はあったようである。
「……」
「どうだ、饒舌らぬか」
「ぬう！」
かっと、鍛冶屋は血を吐いた。
「こ、このからだで、助かるものか」
「――助けてやる」
「う、嘘を」
「きさまが、真実を洩らせばな。血止めして、助けてやる。傷口もふさいでやる。だが、愚図々々していたら、時間ぎれだ」
ますます、苦渋に、顔を歪めた。
迷いがある。助かるなら、なかまの秘密もばらしたい。人間が生にすがるときは哀れなものだ。
「――た、助けてくれ」
「よし、では、言え」
「そ、その前に、血を……血を止めないと」
「言うんだ。何人、ここにまぎれこんでいる」
「――二人」
「む。そやつの名は？」
「血を、血を止めてくれたら、言う……早く、血を」
「うるさいやつだ」
太郎は、男の衣服を裂くと、傷口をしばろうとした。そして、ひるんだ。われながら、よく斬れている。とても、包帯でしばったくらいで、血は止らない。
そのためらいが、鍛冶屋にもわかったらしい。
「うぬ！　だ、だましたな、こやつ！」
「瞞しはせぬ。血は止めてやる。だが……」
その間にも鍛冶屋のからだは呆れるばかりに、しとどな血を噴き、呼吸も弱ってゆくのだ。
先日の鹿狩りは、あくまでも、今日のための、いうならば伏線であった。
そのため、新九郎は、影武者を出すことで、おのれは、今日のための準備に意をそそいでいた。
一つには、小田原大森氏を攻めることに就いての、今川氏親との密談である。
もはや、新九郎の力は、嘗つてのような小さなものではなくなっている。
堀越御所襲撃には、氏親から葛山氏を将とする応援の軍勢を仰がねばならなかったが、すでに、その必要はない。
新九郎の麾下たる伊豆東駿河の軍勢は、三万とも五万とも称されている。

当時の合戦の規模などは大体に於て戦国末期などのそれと違い、小さいものだ。
二百人や三百人で戦うのは、小さいほうではない。史上に残っていて、小さいものは、二十人、三十人くらいの合戦までである。
合戦と称するのもおかしいようなものだが、その一家一族にしてみれば浮沈をかけた以上、それは一族の大事件にちがいないから、合戦と称したくなるわけだ。
こうした印象はすべて比較の問題だから、小さいといって嗤うことはできないが、二、三十人なら、天保時代のやくざの争いのようなものだ。
ところで新九郎は、もはや数万を動員できる大名にのし上っていたわけだが、今川家に対しては、あくまでも、東の守将のつもりでいる。
おのれの甥である氏親への情があることも事実だが、また今川家とつながりを断たないことが、すなわち、おのれにとっても、西方が安心できるという計算があったことも否めまい。
それは狡さというより、賢さであろう。
背後の守りが、固いからこそ東方へ進出するのに、全精力をそそぐことができるのである。
昔日のことを思えば、関東管領によって、あやうく、今川駿河は分断、あるいは、簒奪されようとした。
その恨みというほどではないまでも、（太田道灌のおかげで救われたが）脅威であったことは事実だ。
したがって氏親のうしろだてを再確認した上で、この一大相模進出の挙に出たわけである。
箱根の山々をうずめた北條家の軍勢は、鹿狩りに名を得て、鼓を打ち、笛を吹き、気勢をあげていたが、ころやよしと見て、新九郎は、法螺貝と太鼓によって、小田原攻撃の命令を下したのである。すぐさま猛牛たちの松明に点火された。
夥しいこの火の海は火の雪崩となって急坂を小田原めがけて殺到した。
法螺貝の音が、天狗倒しの風の声のように、箱根連山の峰々をわたった。そのあとを継いで太鼓が鳴ったのである。
法螺貝にも太鼓にも、その鳴らし方で、それぞれの意味がある。
軍に用いるときは、その家中にだけわかる、あらかじめ定めておいた吹き方、打ち方によるのである。
それは、折々に、変える。他国へ知られては、効果が減じるからである。
細作などが入っているから、古いものは、たいてい知れている。
法螺貝を日常用いるのは山伏修験者の類いであり、この吹き方一つでなかまの内に連絡しあう。

修験者は、真言密教だから、小むずかしい理屈をつけてはいるが、要は、そのなかま同士の連絡に使ったからである。

修験者たちは峰々、山の谷々にそれぞれ小屋を建て棲んで修業をするが、それには、連絡がまず必要になる。

法螺貝の音は、傍で聞くと、なんとなく現代の楽器に比べて、音が鈍く、低く、ものの用をなさないように見えるが、これが山々、峰から峰への連絡には、非常にいいのだ。風があっても、風に逆らっても法螺貝の音だけは十里四方に聞えるという。

もっともそれには、修業せねばならぬ。現代の修験者は、その意味でも、真の法螺貝の吹奏にかなう者はまれであろう。

それはともかく——

いま、新九郎の命令一下、松明を角上に点じた猛牛の群れは、大雪崩のように、箱根から、早川沿いの道を小田原へ向って狂い走った。

数十頭の牛の群れである。

夥しい松明の火は風に千切れて舞い上り、その煙は濃淡、渦をまき、からみあって、尾を曳いて流れた。

猛牛たちは、誰が、何のために自分たちにこういうことを命ずるのか知らず、しかし、あまり愉快ではない、危険な疾走に、もうもうと、唸り声をあげて、走りおりる。

坂道なのだ。もはや、とどまるところがない。とどまろうとすれば、背後から追い突きとばされる。

せまい崖の上の道である。江戸時代の東海道よりも、せまく、険しいのだ。

何頭かは、崖の路肩を崩して、白く、岩を噛んで流れる早川の激流に転落していった。

どろどろと、地軸を揺るがして疾走する猛牛と松明の流れには小田原城中城下、天地が崩れるかとばかり驚愕した。

「防げぬのか、危ないぞ、牛に踏み殺されるな」

仰天して右往左往と逃げまわる。武士も小者らも防戦どころではなかった。

小田原城下は、嘗てない混乱に陥っていた。

地震と雷火が一度に襲って来たような凄まじさである。

極度の恐怖で、人々は逃げまわった。

本来防衛に立つべき武士たち、将士も、足軽も、小者もこの突然の〝天災〟に、驚愕し、狼狽し、恐怖した。

「地震だ」「火事だ」「津波だ」

人々は勝手なことを口走り、そして、それを耳にした人人が、また、真偽を確かめるよりも、復唱するほうが早く、

「地震だあ、逃げろ」「津波だぞう、大津波が来たぞ、山手へ逃げろ」「そうじゃない、山津波だ、雪崩だ、生埋めにされるな、浜だ、浜へ逃げろ」

混乱は、混乱を生んだ。

夜なのである。人々は街角でぶつかりあい、右も左もわからなくなり、強い者が、弱い者を突きのけ、弱い者は子供や老人などを踏みつけ、混乱の渦から出ようとして、狂奔した。

地鳴りだけではなかった。

乱火である。それが数十頭の猛牛の角につけられた松明だとは数間の彼方にくるまで、わからなかった。

闇の空を焦がして、猛牛たちは雪崩れて来たのである。

小田原の城下から見える箱根道は、夜の色に塗りつぶされていた。

夥しい火が、法螺貝と太鼓を合図に山上を移りはじめ、一塊の巨大な火の塊りが、一条の火の流れとなって、城下へ流れ落ちて来たのだ。

その火の流れは近づくほどに巨大になり城下を焼き亡ぼす溶岩の如くに、大地の鳴動と、異臭を伴って、襲撃してきた。

そして、その火の流れは、瞬時の間をもおかず、あとからあとからとつづいたのである。

数十頭の火の牛は、早川に転落するものもあったが、はずみがついて倒れたり、ぶつかったりしてその背の薪にも、飛火し、牛たちはおのれの背負った劫火に追われる地獄の牛のように怒りの咆哮をあげ、城下へ殺到している。

たしかに、凄まじい地鳴りは地震を思わせ、山上からの疾走は山津波さながらであり、その劫火が城下に火災を生じさせるのも必然であった。

人々の叫びは、結果に於て正しかったかもしれない。

牛は、半ば狂っていた。群集を蹴散らし家にぶつかり、塀にぶつかって倒れたりした。城内にも数頭が入ってきた。

弥三郎の牢格子にぶつかったやつがいる。めりめりと格子がゆがんで弥三郎に逃走の機会を与えた。

「しめた！」

弥三郎春忠は欣喜した。

もはや生きる可能性はすべて失ったかに見えたのである。

（やるだけやったのだ……）

その諦めはある。

ただ、新九郎を殺ったと思いこんでいただけに、あれが影武者だとわかると、失望が大きかった。

もはや、二度と、あのようなチャンスは訪れてこないだろう。

かれはすでに老いている。新井城で死ぬるべきいのちを助かっただけでも、感謝すべきところだった。

いうならば、最後の力だったのである。

それが失敗したのだ。挫折感は尠くなかった。

（新九郎を殺る！）

その一点に、エネルギーのすべてをそそぎこんで、生きてきたのである。

その情熱は、むしろ、信仰に近い。

（新九郎を殺るまでは死ねぬ）

病気をしたときも、その思いが治癒を早めた。

通常の体力ではない。気力が体力を補った。いや補うという程度ではなかった。殆ど、喪われかけたいのちの火を、気力で煽り起していたといっていい。

弥三郎春忠に残されているのは燠火にひとしい。

その燠火も、すでに絶えかけていたのだ。それをフイゴで吹き熾す。そのフイゴが、かれの気力であった。新九郎への憎しみと怨みが、フイゴの一押し一押しとなって、火を熾す。

そのフイゴを押す力がなくなったら、火は消えるのだ。

（神よ、仏よ、弥三郎めに力を貸し給え）

病いを得て、頭が上らぬほどのときも、弥三郎は祈念した。

その祈りが、神仏を動かしたとは思えない。

神や仏が、実際に力を持っているならば、弥三郎春忠のその憎悪と怨恨の殺人剣を助けるような真似はしないだろう。

そこにあるものは、ただ、かれの執念だった。

むしろ、神仏は、そのあまりの執念に匙を投げてしまったのではないか。

勝手にさらせ、というふうに。

新九郎と思って影武者を殺す、それは、愚かな弥三郎春忠への神仏の皮肉な痛棒かもしれなかった。

とすれば、この猛牛による牢舎の破壊――弥三郎春忠が脱出の機会を得たのは、何を意味するのだろう。

弥三郎が、その偶然をまた〝新九郎を殺れ〟という神仏の啓示に感じたとすれば、まことにかれに与えられた人生の業の深さに暗然とせざるを得ない。

弥三郎は傾いた牢格子を渾身の力で押しひろげて混乱の中に飛びだした。

さがみ野

伊勢新九郎という一介の旅牢人が北條五代の鼻祖、北條早雲長氏として、近世の歴史にその威名をとどめるようになったのは、この相模への進出が、大きなポイントになっている。

かれの後半生の行程を眺めると最初が今川家に於ける騒動の調停であり、次が茶々丸誅戮であり、三番目がこの小田原奇襲である。

どんな小さな人生にも、チャンスは三度あるという。そのチャンスを摑むかどうかで、社会の泥沼から浮び上りもし、埋没もする。

新九郎の早雲が、この三度の大きな機会を得たことは、多分にかれの年功がものを言っている。

もしも、若年ならば、その成功はなかったろう。

また、この成功を得るまでに、どれだけの挫折があったかしれない。

そして、その挫折が、積み重なって、後年の可能性にプラスしている。

人生行路に挫折はつきものであるが、その挫折をどう処理し、どう反省するか、発奮のよすがとするかによって、後半生は変ってくる。

むしろ、人生の後半生は前半生の結果として存在し、若壮の時代は、後半生のための前座にすぎないといえる。

早雲の成功は、常に、その若年時への反省と、その生かし方を心得ていたことによって、得られたといっていいだろう。

焦ることなく、凝っと、好機がくるのを待つことや、いざとなったら、全精力を傾注して、事に当る。

そこに大いなる成功が約束されるのだ。

小田原奇襲は完璧であった。

早雲の生涯の中で、もっとも華麗にして、もっとも痛快な攻撃だったろう。

堀越御所襲撃のときは、未知の不安と、期待があった。軍勢の不足を補うために、氏親から借りたりしたほどである。

だが、今度は、万に一つの失敗はない。

冷静な判断と、緻密な計算から成る成功の確率は百パーセントであった。

領内の鹿狩りから領外の鹿狩りへ――

夥しい軍勢を勢子に仕立ててのこの奇襲攻撃は、小田原大森氏の潰滅を意味した。

大森信濃守藤頼の若さは、新九郎の老巧さの前に、赤児の腕をひねるようなものだったのである。

大森海実も、梶木上総守も、藤頼の若さの後見役、補佐役としての任には力量不足といえよう。

いや、それを上廻る北條新九郎早雲庵宗瑞だったのである。大森氏の小田原はいま、闇の中で燃え上っている。

小田原は燃えていた。

大森氏十六代の権勢で繁栄を誇っていた小田原は、いま、天災にも似た打撃を受けていた。

武士集団である大名とその家臣たちは、本来、戦さのために存在している。

だが、その権勢が確立し、農工商の領民が唯々として、その支配下に日々を甘んじて暮すようになると、権力者たちもまた、そうした日常を、生活そのものとして受けとるようになる。

そこに矛盾や不条理を感じなくなるのだ。昨日が今日につづき、当然、また明日も来る、と信じる。

その安心感が権柄を反省せず放埒な権力の駆使となって、自ら他国の窺う隙となったのだ。

大森藤頼は丁度、食事を終ったところであった。

かれは性質は温和で、むしろ優柔不断なほどであった。

父親がいつまでも権力を握っている家では、子供は柔弱になるか反撥して、粗暴驕慢になるかのどちらかのケースが多い。

藤頼は前者であった。

かれにとって、父は偉大であり、おのれの卑小さを思い知らされていた。

父の偉大さは、しかし、よく十五代の家を守るということにあり、そこには発展性がなかった。

たしかにこの戦乱の時代に、大名の家を守るということは、難しいことであり、その眼の黒いうちは、〝家〟が存在したのだからそれだけでも信濃守氏頼は、藤頼よりも勝っていたといえよう。

藤頼の周辺に人材がなかったわけではない。

叔父の大森海実がいたし、従兄の三浦義同がいたし、老臣の梶木などもいた。

だが、いかに周辺に英才賢臣がいても、それを用いる才能がなければ、政治家として落第である。

藤頼は義同ほどの苦しみも忍耐も、それゆえの克己心も欲望もなく、新九郎に見るような乱世を治める経綸の豊富もなかった。

つまり、一般的に見ても父の氏頼は、かれが考え、怖れていたほど偉大ではなかったし、藤頼はさらに、それを小さくした男にすぎなかった。

その人間は、この乱世に大名たるに、

（ふさわしくない）

存在であったし、新九郎やその謀臣たちの眼からしても、

（いずれ、誰からか亡ぼさるべき男）

であった。

まず考えられるのは上杉顕定であり三浦義同だ。

どうせ滅亡するなら、一足先に新九郎が、傘下に収めるのが当然だと、かれらは考えた。これが乱世の論理である。

そして事実、運命はそれを肯定した。

隣国というのは、たとえ現在は友好的であっても、将来も友好的であるとはかぎらない。

常に安全の保障はないのである。

生存への欲求が当然のことなら、人は、そうなる安全度をもとめなければならなくなる。

箱根以東に強力な敵が棲む前に弱い敵を討つ。

そうすることで、箱根以西の安泰度が強まるのはいうまでもない。

乱世の興亡は常に、その不安と欲望の交錯によって進められている。

是々非々は、後世の論理である。

その時代に生きようとする意志の前には、宗教的、儒教的な倫理観など、論外だった。

倫理とは、すなわち、自身の生存を否定することにほかならなかったからである。

もしも――

歴史に於て、この仮定は愚かなことだが、敢て、そう考えてみるなら、新九郎が箱根以東へ進出しなかったならば、北條五代の繁栄はむろんなかったろうし、新九郎が韮山で存続したかどうかすらわからない。

あくまでも、攻めることが守ることであった時代なのだ。

この乱世の論理を、情に溺れて忘れていた大森藤頼は、やはり亡び去る運命の人であったろう。

すっかり新九郎の術に乗せられていた藤頼は、

〝鹿狩り〟

という挨拶を信じこんで、警戒さえしていなかったのである。

そして、先日の贈り物を悠々と食べていた。

一応の毒味はしたにちがいない。が、肴に毒がなかったからといって、それの贈り主に毒がひそんでいたことまでは、気がつかなかった。

「新九郎めが、新九郎め」

火の牛の群れが、城に雪崩れこんできたとき、一応かれは、大鎧に身を固めていた。

「北條勢の奇襲にござります」

という声に、横になってうとうととしていた藤頼は、寝耳に水の驚きではね起きたのである。

「まさか、まさか、新九郎どのが」
鎧をつける間も、うわごとのように呟いていた。
鎧は面倒であった。信濃守としての官位にふさわしい大鎧であった。
戦国時代もまだ初期である。鎧の様式にも旧来のこだわりがあった。
鎧が当世具足と称する桶側胴などの簡便なものになり、その普及を見るには、まだ間があった。
「急げ、急がねば……」
侍大将が傍から、着付けを手伝っている侍女たちを促した。
火牛が殺到したとき、藤頼は大薙刀を手にしていたが、蒼白になって、ぶるぶる顫え、鎧の重みで、馬に乗るのがやっとだった。
あわてるあまり馬上から転げ落ちた藤頼は、ふたたび、ささえられて漸く馬を走らせることができたが、
(縁起が悪い)
と、思った。
それが一層、かれから闘志を奪った。
闘う、のではなく、逃げる、のだ。
かれは自分に言いきかせた。
(一時、撤退しなければ)
それは盛り返すことを前提にしてのことのはずだった。
だが、はたして、ひきかえしてくる気持が少しでもあったろうか。
(牛だ、火の牛を相手に闘えるものか)
そうも思ったし、
(これは、常態ではない、まともな戦さではない)
戦場でなら、と言いたかった。
(合戦なら、負けない、合戦ならばだ……さがみ野は広い、この広いところで、なぜ闘わないのだ)
馬を走らせながら、藤頼はその不満が胸の中に滾っていた。
合戦なら負けない。いや合戦でなら、勝つも負けるも、武士の本望だ。
だが、奇襲にあっては、それも火牛の大群で雪崩れこまれては、まともに武将らしく、采配をとれないではないか。
(武将らしく……)
華々しく合戦の場で、数百数千の士卒を指揮したかった。その上で、武将同士の一騎討ちになろうとも、それこそ、本望だった。
(なぜ、その機会を与えてくれないのだ)
その機会を得るために、いま小田原を去るのだ。
かれは東へ向った。東へ東へと馬を走らせた。
この大森氏の小田原城の規模は後世から見ると、随分小さいものであった。

北條五代の拠点となってからの小田原城は、この国では珍しい城下町を包含した巨大なものになる。
〔北條五代記〕の記すところによると、〝東西へ五十町、南北へ七十町、総構五里〟とある。
大森氏の小田原城は現在の本丸を中心として、山寄りにあった。
後世ほどではないが、十六代を誇る大森氏にふさわしいものであったろう。
その小田原城の内外は、火牛の走り廻る音と、松明と薪の火が燃え移って起った火災とで、凄まじい地獄絵を現出していた。
火牛のあとから騎馬が駈け下って長槍や大薙刀を閃かした将士が乱入する。その牛馬におくれじと疾走してきた足軽らが長槍をふるって、城内を隅々まで掃討した。
手向う者は次々と討たれ、一刻たたぬうちに、城内は完全に北條勢の占拠するところとなった。
この奇襲が成功だったのは、実際、戦さらしい戦さがなかったことである。
それは殆ど、防戦というべきほどのものを、大森の家中がしなかったということだ。
むりもない。城主大森信濃守藤頼が先頭で逃げだしたのだ。
家中にしてみれば、城主の逃げたあとで、生命がけで働く気にはならないだろう。
この混乱に乗じて牢から脱出した弥三郎は、
(しめた!)
と、思った。
(天、いまだ我を見捨てず!)
火と煙と阿鼻叫喚が、弥三郎春忠の脱出を容易にした。誰もこの男の存在を気にとめるどころではなかった。
厩から飛びだした裸馬が、狂ったように嘶きながら、走っている。
血に飢えた野獣のような足軽たちが、功を競って、槍をふりまわしながら走ってくる。
騎馬の侍は、逃げまどう小者などを馬上から突き刺し、槍先にかけてはね飛ばしている。
しかるべき武将を討ち、兜首をあげることが武功であるのに、堂々と立ち向ってくる武将がいない以上、これは一方的な殺戮であった。
弥三郎春忠は、その一騎が井戸端で馬からおり、馬の口とりに水を汲ませているのを見た。
殺戮に夢中になって、咽喉に渇きをおぼえたのであろう。
弥三郎は物陰から、槍を投げた。
誰かが落していったものである。
槍は、その武将の背中を貫いた。
小者が驚いて、つるべの桶をとり落し、刀をとり直そう

とするのを、躍りかかって、打ち倒した。
老人とも思えない跳躍であった。
思いがけない動きであった。助かりたい一心の、必死な行動といえようか。
弥三郎春忠のその行為は、名ある者の首をとることではなかった。
かれは逃走の馬がほしかったにすぎない。
が、馬上の人となると、また別の欲が出た。
倒れた武将を、上から首を打ち落し、さながら芋を串刺しするように刀の先にぶすりと首級を突き刺した。
そのまま、馬腹を蹴って走りだしている。
夜と煙が、かき消すように包みこんで、彼を救った。
城の南東には、もう避難の群集が右往左往して、道をふさいでいる。
弥三郎春忠の馬は、しばしば、棒立ちになった。
声を怒らしても、道を埋める人々は、あまりにも多すぎた。
かれは、血のしたたる首級の髪を前壺に結びつけると、刀をふりまわして、
「道をひらけ、道を、うぬら、斬るぞ」
喚き散らした。
だが泣き叫んで逃げ惑う群集にしてみれば何もかもが恐怖なのだ。そんな老人の叱咤くらいには、耳をかさない。
むしろ、逆に、弥三郎をひきずり落しかねない有様だった。
この小田原奇襲に、もっとも衝撃を受けたのは、箱根権現の別当大森海実であった。
鹿狩りの勢子たちが、どんどん北條領を越えてくることに、
(大丈夫だろうか)
と、不安を抱いた。
(領外へ出た鹿を追い戻すとのふれこみだが……)
海実は、藤頼ほど若くもないし単純でもない。
ものごとを人生経験で観る。
口先よりも、行動であった。北條方の行動は、乱世の習いからいえば、これは不審を感じない方がおかしい。
それを巧みに誤魔化されている。
大森海実は、判然と、新九郎の野心を見抜いたわけではなかった。
ただ常識的にも、
(おかしい……鹿を追うにしては人数が多すぎるようだが)
国境いに来て、見守っていた。
鞍掛山の中腹から望遠すると、陸続として、登ってくる勢子たちの姿が見え、峠まで来て、広く分散するところなど、手にとるようにわかった。
勢子の数も夥しいし、将士の武装姿なども、海実僧正には、どうも尋常とは思えない。
(何を企んでいるやら、わからぬ……弥三郎めが戻って来ないのも気がかりじゃが)
少なくとも陽のあるうちは、北條勢の動きに不審はなかった。
槍や薙刀を従者に担がせ、長い打ち刀を横たえて華麗な鎧を着た武将といい、具足に身を固めたさむらいたちの姿は、たしかに合戦の支度ではあるが、前に述べたように鹿狩りや猪狩りなどは、いうならば兵馬の鍛錬が本旨なのだ。
こういう恰好をしていたからといって、直ちに疑いをかけるわけにはいかない。
だが、疑わしきものは、疑って、疑いすぎるということがないのが、この時代の相なのだ。その原則に、海実僧正は従うべきであった。
(まさか)
が、現実になり、後悔したときはすでに遅い。
夕闇が谷の靄と一緒にせり上ってきて、箱根連山を包んだとき海実僧正は、いつの間にか、周辺に黒い影が近づいていたのに気がついた。
それは一つではなかった。
二つ、三つ、と四囲にあらわれた。まるで、墨のにじみ出るように、夜の色が、その部分にかたまっているような感じであった。
「――何者じゃ、そのほうらは」
かれらは、松明もなかった。
無気味な近寄り方ではあったが態度は不遜ではなかった。
「権現の別当どのにおざるな」
影の一つが言った。
「む……ならば、なんとする。無礼であろう、大森海実と知っての」
「左様、その別当どのに、われら主人、要用がござれば」
「主人とは」
その問いに、はじめて、影たちは、嘲りをこめた含み笑いを洩らしている。
海実は身に寸鉄も帯びていなかった。
周囲に迫った影に対抗するすべもなかったのである。
「主人とは、北條早雲庵宗瑞どのか」
「参れ」
「どこに居るのだ」
「黙って来い」
大森海実は争うことの不利を悟った。
この人数では闘っても勝目はない。
数人の武装の者たちに、取り囲まれて、海実は鞍掛山を下った。
途中、夕闇の底にうごめく牛の群れに眼を瞠っている。
(何だろう。たしか、牛の群れのように見えたが)

かれが直感的に、火牛を連想しなかったのは、すでに武将の生活から遠去かって、権現別当たる環境に馴染んでいたせいであろう。

自分では大森家を守る存在と自負していたが、そして、弥三郎春忠を保護することで、北條家に備えるなど、配慮は怠らなかったにも関らず、感覚がすでにずれていたのであろう。

法螺の音がりょうりょうと鳴り渡り、つづいて太鼓の音がひびいて、にわかに山上がざわめきはじめたのは、海実がまだ新九郎のところへ到着しないうちであった。

牛の角に松明が火を吐き、勢子たちもそれぞれ松明を持って、火が、点けられていった。ために全山、さながら火の海に変っていった。

それは海実僧正の眼には、まさに地獄火だった。

火の海地獄は、山下の小田原へ向って雪崩れていった。

「なんということじゃ。なんという……」

海実はわなわなしているだけだった。目の前に現出したこの地獄図が現世のものとは思われぬすさまじさで、海実を呆然自失させたのだ。

火牛のあとから軍勢が走った。その地響きと関の声は箱根連山を揺るがし、山が崩壊するのではないかと思われるばかりであった。

海実はよろめくようにして、曳かれていった。

北條新九郎は、篝火を幾つも焚いて、真昼のように明るくなった中で、大絵図をひろげさせて、何やら指示していたが、海実が連れて来られたのを見ると、つと顔をあげて、微笑した。

「僧正か」

「こ、これは、なんと……北條どの、宗瑞どの、この有様は」

「見られる通りよ」

新九郎は微笑を湛えたままであった。

「小田原は落ちる。安心せい、おぬしは生かしておく」

海実の驚愕や狼狽や憤怒は、そのまま、大森主従の思いであり、それは、大森小田原の抵抗の無力を意味していた。

「卑怯な！」

大森海実は、大篝火に火照った顔で怒鳴った。

「ほ、北條新九郎！　うぬが入道したるは、われらをたばかるためであったのか」

黙れ、控えよ、と、君側の荒木らが怒鳴った。

が、海実は黙らなかった。かれには、小田原の城がこの奇襲を受けて崩壊し、火の海になるであろう様子が、ありありと描かれていた。

「早雲庵宗瑞などと、もっともらしい法名を名乗りおって、やることは鬼か、畜生か」

「早雲庵宗瑞は、鬼でもない、畜生でもない。こうするこ

とが正しいと信じておる」

「なにを、シラジラしい」

「僧正、口が過ぎようぞ、わしがいかに慈悲があるかは、そのほうの無礼を咎めずに置いてやることでもわかろう」

「うぬ！」

悠然たる早雲に比べて、海実の激昂ぶりは、一人浮き上って、哀れなものだった。

かれが昂奮すればするほど、気狂いじみて見えた。怒りをぶつけている姿が、滑稽ですらあった。

「い、いまこそ、わかったわ！　弥三郎の杞憂が……」

「僧正よ。大森家はいずれ三浦に亡ぼされる運命にあった」

早雲はあくまでも冷静であった。

「ならば、わしの傘下に入ったほうがよい。わしはの、僧正よ。藤頼のいのちまでとろうとはいわぬ」

「……」

「大森家は存続させてやりたい。その方に説得させようかと思うた。が、藤頼は耳をかすまい。若いからのう。されば、このような手段をとらねばならなかった」

「巧言……ならば、なぜ、愚拙に話を」

「すれば、洩れる。話をしても成らぬものは成らぬ。早雲は無駄はせぬ」

無駄をしている時間はない。早雲はおのれに、常に言い聞かせている。

かれは立ち上った。

話の間に軍勢の半ばは小田原に近づいている。

「奸物！」

海実は喚きざまにおどりかかろうとした。

とたんに、わきにいた足軽が槍で膝裏を薙いだ。

海実は前に突んのめった。すぐにはね起きようとしたところへ、数人が躍りかかった。

「放せ、うぬら、放せ」

喚き散らすのを、腕をねじ上げて、高手小手に縛り上げてしまった。

早雲は冷ややかに眺めて、

「金剛王院に押し籠めておけ、後から用がある」

言い捨てて、馬の方へ歩きだした。

（藤頼のいのちはとらぬ……）

早雲はそう言った。一時の巧弁ではない。事実、そこまでする気はなかった。

小田原を掌握し、西相模を確保すれば、第一の目的は達したことになる。

傘下に入った城と領土は、身内である。藤頼が反抗さえしなければ、抹殺することはなかった。

女子供に乱暴狼藉を許さぬと厳命した上に、

「逃げる者は斬るな」
と、足軽頭に言い含めさせてある。
「降人も同じだ。将士に関らず、降人はすべて許す」
怨恨があっての城攻めではない。
早雲にとっては、大森氏一族も家士も、何の怨みも憎しみもない。
城を攻めさえすればいいのだ。
その気持だけに、小田原城からみんなが逃げだしたあとは、大手門をはじめ、城下の辻、橋袂など、要所々々に、右の高札を立てさせた。
城内が、空になるや、大道寺はただちに、城中城下の消火に当らせている。
残敵掃討よりも降人を呼びかけることで、無益の争いをなくし、領民の恐怖と不安を払う配慮を怠らなかった。
堀越御所を攻め陥したときもそうであった。
一般人にとっては、戦乱は不幸であり、類火を恐れる。もっとも、中には、混乱に火事泥で儲けようとする者もいないではないが、それはごく少数の者だ。
まじめに生業に従う庶民は、毎日の平穏を願っている。避け難い天災でさえ、神仏に祈って免れようとする。況や、戦争は人災である。一般人には、ことの善悪、是非がわからない。
戦さの正当性などどうでもいい。騒ぎが起らないことが一番なのだ。
一般人にとって、侍たちの争いは、正当か不当かは、全く問題にならない。
所詮はエゴイズムの衝突にすぎない。その侍たちの争いで戦火に家を焼かれ、雑兵らに妻や娘を凌辱されるという被害を受けねばならないのだ。どっちがどうでも、戦さだけはしてほしくはない。
その希いを、早雲はよく知っていた。
貧窮の旅牢人の時代に、そうした人々の姿は、強く眼に灼きついている。
力のない、声のない人々である。が、その無力の人々にもできることが一つある。
それは、憎悪であり、怨念を抱くことだ。その憎しみの炎や怨念の心が、問わず語らずに、一つの強い集団の力となって、領主の治政に有形無形の反抗を示すことを、早雲は知悉している。
「民の心を獲るには、生業に安んじさせることだ。明日の利益よりも今日の平安を願う、その気持をかなえてやらねばならぬ」
早雲の信念だった。
降人は許す——早雲が立てさせた高札には、そうはっきりと書れている。
足軽たちはもとより、武将の中にも、その文言に惹かれて北條勢に投じた者もいる。
だが、今川弥三郎春忠だけは、投降することができない。早雲の影武者を殺したことは、多米周防守とその郎党らに知られている。
たとえ新井城の罪が許されても今度の一件だけは、どう間違っても、早雲が許すはずはない。
小田原城が陥落することは、かれにとって解放を意味しなかったのである。
馬を奪った弥三郎は、とにかく一歩でも遠くへ逃れなければならなかった。
小田原の東に酒匂川が横たわっている。
河原へ降りて水際までいったが、かなり流れがはげしい。
弥三郎は土堤へ馬をかえした。大森家中の者はどんどん川上の方へ逃げてゆく。浅瀬があるのであろうか。
弥三郎も、川上へ馬首をむけた。馬腹を蹴った。徒歩で走ってゆく雑兵や町人たちが、馬の鼻息に驚いて道をよけるところを砂埃りを蹴立てて、通り抜けた。
道をよける拍子に転ぶ者もいたし、土堤を滑り落ちる者もいたが、弥三郎は一瞥もくれなかった。
土堤といっても当時は低い。転落しても怪我はしないが、暗闇に悲鳴がつんざいた。
やはり土地の者たちは、浅瀬を知っていた。五、六町北へのぼったところに中州が見え、馬や人が、ぞろぞろと渡っている。
向う岸へ渡り着いて、漸くかれはほっとした。
どこへ逃げるというあてもなかったのである。が、川を渡れば、助かる。その思いだけで一杯だったのだ。
弥三郎はさらに馬を走らせた。
いつか、南へ向いていたとみえ、潮風の強い松林の中へ入っていた。
相模湾沿いの松林は強い海風を受けて、ねじ歪げられている。倒木もあった。
弥三郎は馬の足をゆるめた。夜道に灯りもなしに走るのは危険だった。
どのあたりまで来たか、はっきりはわからなかったが、およその見当はつく。
(大磯のあたりであろう)
弥三郎は、馬をおりた。水際まで馬を曳いていって、海水で顔を洗った。砂埃りをかぶって気持が悪かったからである。真水には及ばないが、洗わないよりマシだった。
あとは飲み水がほしかった。もう少しゆけば、漁師の家でも見つかるかもしれぬ、と思った。
砂を踏む足音が聞えたのはそのときであった。
声がした。女の声だった。
弥三郎春忠は、ぎくりとして刀を握り直した。
「ほほほほ、吃驚させたようだねえ……」

「――何者だ」
「名前かえ、名前なんか、どうでもいいじゃないかえ」
「……」
「おんなさ」
言葉どおりに、女の甘肌が匂った。ふんだんに香料を用いているのであろうか。
闇の中に浮んだ白い面は、幽艶なものに見えた。多分に、疲れた弥三郎の眼の錯覚もあったかもしれない。
「おんな……うむ」
ほっと肩で息をついて、刀を置いた。
その女一人である。浜の白砂が、闇を仄白くしている。松林の中に誰か潜んでいるかもしれないが、浜辺には、ほかに人影はなかった。
「なるほど、女だ、ははは」
そんな女一人に、ぎょっとした自分がおかしくなって、弥三郎は笑いを洩らした。
落武者の心境になっている。その上に、老いが加わっているようだ。
「何の用だ、銭はないぞ」
「あら……銭がなくっても、ほほほほ」
明らかに、化粧の女だ。このあたり、その昔から、曾我兄弟の物語の大磯のお虎など、街道沿いに男を慰める女たちの伝統がある。そうした女の一人であろう。
「立派なお馬があるじゃないか」
「馬鹿を申せ、馬一頭を一夜の遊びに代えられるか」
「一夜なんて言いませぬ。十日でも半月でも」
そんな女の言葉が戯れ口に聞え、弥三郎も、軽く答えていた。
「十日半月ということがあるか、半年か一年……そうじゃ、一年、流連してよいなら、話に乗らんこともないが」
「まあ、一年も」
「左様さ、一年、夜毎、おれに抱かれるか」
「あたしはよいけれど……でも、親方が、なんというか」
「なるほど、親方がうんといえばよいわけじゃな。わかった、親方にかけあおう」
「まあ、ほんきかえ」
「ほんきだ」
弥三郎は、素早く、女の襟から手をさし入れた。豊かな乳房を掌におさめた。
「まあ！」
「ほどよいふくらみだ」
「なんて手の早い」
女は、身をのけぞらし、あわてて襟をかきあわせながら、それでも、悪い気はしなかったらしい。
「今夜はたっぷりさわらせてあげるからさ、さ、行こうよ」
こんな際である。さして、女体がほしかったわけではない。
いくら女好きでも、首が飛ぶかどうかという瀬戸際なのだ。
弥三郎春忠がそのとき感じたのは、
（この女のところへ行けば）
少なくとも寝るところはある、ということだった。
残党狩りの手が及んでくるかもしれないが、
（ここまでは……）
一縷の希望を托した。
かなり走ったつもりだ。大磯辺らしい。となると、小田原を落城せしめた北條早雲の手が及んでくる可能性はまず五分と五分。
小田原城が前衛ならば、抜いた余勢で、本城へ迫るということがあるが、大森氏は小田原が本城だ。あとは支城へ逃げるしかない。
信濃守藤頼が討たれたか、逃げ延びたか、弥三郎にはわからなかった。
早雲にもまだわからないだろう。早雲の気持が奈辺にあるかも、判然としない。
大森氏の存在と影響をどの程度に思っているかで、追討の姿勢が違ってくる。
馬を曳いて、弥三郎は女の家へ行った。
松林の中に、その家はあった。かなり粗末な家であった。茅屋である。それも一戸ではない。
あっちをむいたり、こっちをむいたり、雑然として、十数軒がかたまっている。
丸木の柱に草葺きや蓆戸で、窓も板蔀であったり、蓆が下っていたり、舟板を利用して屋根を補修しているところもあるし、大きな石を幾つも乗せているのは強風に備えてのことだ。
水瓶が家の外にあったり、桶が転っている。茶碗や皿などが入ったままの桶が置いてあり、二人が近づくと急に猫が走りだした。残飯をあさっていたのか。
井戸が見えないのは、海が近くて、塩分が強いからであろう。
女は中ほど一軒の、比較的大きな家の蓆戸をめくって、
「お客だよ」
と、声をかけた。
中から、何か返事があった。
「馬をつないでおくよ」
「ああ」
「マグサをやっておくれ」
「ああ」
女は馴れた手つきで、手綱を戸口の傍の松の幹に縛りつけた。
「ここか、お前の家は」

「ううん、あっちさ」
女は顎をしゃくって、弥三郎の手をとった。
隙間だらけの小屋である。男女の嬌声が洩れてくる。小唄を唄っている声もあった。はげしい吐息と唸り声も、耳に入った。
けものめいた声であり、まるで、殺し合いでもしているのではないかと思われるような声であった。
「ここよ、お入りなさいな」
そこはもっとも外れにある小屋で、もっとも小さかった。狭い。天井も低い。弥三郎が背伸びすると、うすい髷がつかえそうであった。
(まるで乞食小屋だな)
とは思ったが、いまの弥三郎にしてみれば、眠りを貪ることができるだけでも有難い。
「なるほどな、ここか」
弥三郎はどっかと腰をおろすと、両手をのばし、どたりとうしろへからだを倒した。
「まだ名前も聞いていなかったな」
「名前なんか」
「妙な女だな、たいてい、名前を売りたがるものだがな」
「そうかしら」
「どうせ符牒さ、名前なんか。だが、呼ぶのに困る」
「そうだね、親のつけてくれた名は、お米……」
「お米か、いい名ではないか」
「でもさ、家にいるときは満足におコメなんか食べたことはなかったよ……だから、この名前はきらいさ、もうずっと誰も」
「ほかの名前があるのか」
「戯れ名さ、お虎とか、お熊とか」
「お虎か、大磯だからか、ははは、お虎御前か」
「猫でも犬でもいいさ、どうせ雌に変りはないのだもの」
「どうせ雌と雄さ」
弥三郎はお米の手をつかんだ。お米は崩れるように身を倒してかぶさった。
そして自分から、弥三郎の口を吸いに来た。
「あれ、もう?……」
男の股間に硬いものを感じた。
初老の男にしては、勢いがいい。お米は手でそこをまさぐった。
「脱がせてあげましょうね」
女の声は急に優しくなっていた。子供をあやすように、お米は、いたわりながら、弥三郎の帯を解いてやり、着物を脱がせていった。
疲れていたはずだし、女体をほしいとも思っていなかったのに、この小屋に入ると、おとこの勇気が出てきたのは何故であろうか。

安心感は、勇気の前駆的な情念を呼び醒ますのだろうか。勃起はしていたが、弥三郎は愉悦をもとめる気は殆どなかった。
「ねえ、お米と呼んで」
「うむ……お米」
弥三郎は苦笑して、言った。
かれは裸にさせられている。晩秋の夜である。夜気は冷えていた。
女は、自分も小袖を脱ぎ、腰のもの一つになって背中に、掻巻をかけただけであった。
掻巻は、うすいものだった。灯は細く、襟のあたりの汚れもそれほど気にならない。汚れているとはわかっていても、眼に見えなければ、それほど、こたえない。
「お前さまの名は」
「うむ……」
ちょっと戸惑った。どう言ったらいいものか、まだ考えていなかったのである。
まさか、女郎屋に来て、名前を聞かれるとは思っていなかったのだ。
(どっちの側というべきか)
迷いはそこにあった。
大森の家中というべきか、北條早雲ゆかりの者で通すか。
追討の手が伸びてくる恐れに対しては、後者のほうがごまかせるが、もしも、落武者たちが、そこらに出没するとなると、大森海実にゆかりの点を匂わせたほうがいい。
だが、そうでなければ、落武者の立場は弱い。
この時代は農民でも漁民でもイザとなれば闘争力をだす。弱り目にタタリ目の落武者とわかれば、鎧剝ぎ、着物剝ぎ、肌付金を奪うのは、きわめて当然の行為だった。
それを〝悪〟ときめつけ〝罪〟とする道徳は、神とともに死んでいた。
(弱味を見せてはならぬ)
弥三郎は、その、どっちでもないところを考えついて、
「三浦が一族じゃ」と、言った。「三浦弥次郎介長(すけなが)と申す。実はな、小田原に客分となっていたが、あの騒ぎよ、いや、えらい目におうたわ」
「三浦さまと仰有ると、新井のお城の」
「うむ……」
女の掌の中で、弥三郎のものは萎(な)えて小さくなっていた。
「したがって、わしは、どちらの味方でもない、敵でもない」
「——はい」
女は、よくわからぬようであった。あいまいな顔で頷いている。
「五分と五分……そうだな、強いて、どちらかといえば、大森のほうに同情するがな」

「……」

「三浦一族の力は、そちも聞いていよう。このあたりの地頭どもも、新井城や小坪の城には、参向しているであろう」

「はい」

こんな話になってしまっては、情事を楽しむ雰囲気ではなくなっている。

だが、弥三郎にしてみれば、一種の安全保障なのだ。こういう種類の女たちには、悪辣な連中が背後にくっついている。

あの馬を預けた家などが、彼女たちの親方かもしれない。女の肌を切り売りして、その束ねをする連中など、山賊とそう遠くはない。状況しだいで、いつでも斬り剝ぎ追落しに変容する。

「ははは、何やら難しゅうなってしまったな。酒など飲もうか。あるかの、酒が」

「あい、買うて来ますほどに」

女は手を出した。

「鳥目は落してしもうたよ。馬が預けてあるではないか、あとで一緒に勘定するがよい。うまい酒をな、それと肴をな、うまいやつを」

三浦弥次郎介長と、偽名を称した弥三郎は、

（これで、まず一安心）

と、酒に手をのばした。

いつ寝込みを襲われるかもしれぬという心配が一つなくなったと思った。

懐中無一文のことは、お米が知っているし、奪われるとすれば馬だけだ。

この酒も、女の抱き賃も、馬が担保なのである。その馬も、北條方の武将を殺して奪ってきたのだから、もとは無料だ。

「このお酒、お口にあうかどうか」

三浦の名を聞いたせいかどうか、お米の態度も大分、変っている。

「ははは、かような酸っぱい酒は飲んだことがないぞ。まあよい、こういう際だ、贅沢は申さぬさ」

そういうほど、悪い酒ではない。

むろん濁酒である。焼き魚と煮物が皿に盛られている。

弥三郎はがぶがぶ酒を飲んだ。当時、酒は食べる、食べ酔う、などと称う。

後世のような清酒がまだなかった。灰汁で澱ませて上澄みを漉すという、原始的な清酒の作り方も、まだ行われなかったらしい。

「そちも食べよ」

弥三郎は、お米に茶碗を持たせた。

「あい……でも、沢山は」

「早酔いするか」

「あい、酔い狂うたら、お虎の名がいっそふさわしいと、嗤いものにされまする」

「ははは、よいわさ、酒を食べれば酔う、酔うのがあたりまえじゃ、酔わねば、食べた意味がないわい」

弥三郎は酔いたかった。自棄酒である。

あれだけ計画を練りながら、とうとう新九郎を殺し損ねた無念さは、まだ胸に澱を残している。

この鬱屈したものは、一度、おのれを失うほど酔い狂わねば、発散できなかった。

お米も飲んだ。二人は酔い痴れて、抱きあって横倒しになった。

「ねえ、あたしゃ、ほしいよ」

お米はまた手をのばして来た。

弥三郎は眠くなった。女の手が股間をまさぐるのは悪い気持ではなかったが、それよりも眠気のほうが強かった。

狭いながら、囲炉裡には、粗朶が燃えていて、せまい家の内は温かかったし、酔いが、からだをけだるくしていた。

そのまま、うとうとと眠りこんだらしい。

「やい、起きろ」

ふいに弥三郎は蹴飛ばされた。突然だった。ぐっすり眠りこんでいるところを叩き起されたのだ。

「な、なんじゃ」

仰天した。寝耳に水というが、それ以上の驚きだった。

「どうした、戦さか」

「馬鹿！　起きろ、出て失せろ」

男が四人いた。夢うつつの弥三郎には、榾火を受けて鬼のように見えた。

何が起ったのかわからなかった。突然、夢を破られたのだ。そこが大磯の松林の中の女郎屋だということも、小田原落城とともに逃げだして来たのだということも忘れていた。

四人の男に叩き起され、蹴飛ばされ、弥三郎は、刀をつかむひまもなかった。

「何をするのじゃ、何を」

「出て失せろ」

「な、なんじゃと！　な、何を言うのだ、第一お前らは誰だ、一体……」

「つべこべ吐かすな。さっさと出て失せろ」

四人の男たちは、侍ではなかった。

ちぐはぐの具足をつけている。

胴丸だけの者もいたし、草摺だけの者、左右の籠手がそれぞれ色ちがいの者。どう見てもまともな恰好ではない。

（この連中は？……）

まだ、頭がはっきりしなかった。弥三郎は、疑いを抱きながらも、みんなに叩き出された。

反抗するどころではなかったし、この年齢まで生きてきた智慧が、
（いまは、おとなしくしていた方が得じゃ）
と、感じた。
弥三郎は転り出ると、馬のことを思いだした。
とにかく、馬に乗って逃げる。ここも安住の地ではなかったが、そうするよりしかたがない。
かれは、よろよろと立ち上ると、馬をつないだ家の方へ、行こうとした。
「やい、どっちへゆく」
ぐいと、腰帯をつかんで引き止められた。
「わしの馬を……」
「なんじゃと、馬がどうしたと？　うぬの馬じゃと、馬鹿め、うぬの馬など、どこにある」
「あれじゃ、あそこ……」
弥三郎は、その手を振り切って走りだした。
馬の尻が見えた。もう一息、と思ったところ、何かが、足にからんだ。棍棒のようなものが両足の間にはさまったのだ。
からんで、どうッと、倒れた。
「ははは、それみろ」
どかどかと追って来たやつが、したたかに蹴り上げた。
「やい、爺、打ち殺されないだけ、有難いと思え」
「さあ、死なないうちに、去った去った」
棍棒と思ったのは、太身の槍だった。穂先を先にしなかったのは殺す気がなかったからであろう。かれら屈強の若者の眼から見れば、弥三郎の姿は、いかにも老いぼれていた。虫けら同様にしか思わず平気で人を殺す連中も、老人には、さすがに手加減したくなるのか。
「馬、わしの馬……」
と、尚も這いずってゆこうとするのへ、
「やい、うぬの馬など、どこにある。あの馬は、わしらの長老の馬だぞ」
そのとき判然とした。弥三郎春忠ははじめて彼らの意図を察したのである。
（なんということだ、わしの馬を……）
かれらの狙いは、弥三郎の曳いてきた馬にあったのだ。馬を奪うために、こうした理不尽なことをしたのであろう。
そう悟ると、弥三郎はあきらめた。とにかく相手が多すぎる。相手が一人か二人なら、なんとかなる。まだ、それくらいの余裕はあった。その余裕のあるうちに、ここを逃れなければならない。
捲土重来である。弥三郎は這いずって小路へ入ると、闇にまぎれて逃げだした。
松林の闇が幸い、弥三郎を包み隠してくれた。
どれくらい走ったろう。夢中だった。目の前に一条の流

れが仄白く、闇の底に横たわっていた。
弥三郎は岸辺にばったり突っ伏すと、水を手で掬った。飲んだ。猫が顔を洗うように、ぺちゃぺちゃと水で濡らした。
やっと人心地がついた。
「ひどいことをしやがる」
深い息をついて、かれは今後の策をめぐらした。
夜が明ければ、かれらがやってくるかもしれない。闇を利用しなければならぬ、と思った。相手が多勢ならば、闇にまぎれて忍びこむこともできる。
（くそ！　やってやる）
このまま負け犬になってたまるものか、と思った。
城奪りでは、敗れたが、相手はいかがわしい奴らだ。娼婦のヒモのような野伏りまがいの連中など、世が世なら、目通りもできないところだ。
こんな最低の連中に、野良犬のように扱われて、おめおめと引き下っていては、もはや生き延びることもできない。
（石にかじりついても、立ち直るのだ。新九郎を討つ、討つまでは死なぬ）
弥三郎が、ふたたび、この聚落へやってきたのは、半刻ほど後だった。
かれはあの長老の家に忍びこんだ。馬は戸口につないだままである。
馬を奪いに来たのではない。どうせやるのなら、
（全部だ）
馬を一頭とりかえすのも、この聚落全部を奪うのも、同じことなのだ。
長老というやつが幾つくらいかわからないが、これだけの集団の束ねをしているのだからかなりの奴だろう。
蓆と丸太と板葺きの、粗末な小屋なのである。弥三郎は、忍び寄ると、蓆の隙間から、そっと中をのぞいた。
中には、異様な男がいた。年齢の見当もつかない老人である。
巨漢であった。白髪白髯、まるで毛のなかから眼と鼻が出ているような老人である。老人というより、翁といったほうがいいかもしれない。
女郎屋の亭主という感じではない。山賊の親分か、僻地の地頭というところである。
長い道服を着て、どっかと大胡坐をかき、酒杯を手にしている。まわりにいる男たちも、小袖を着ている者、半具足をまとっている者、陣羽織を着ている者もいたし、刀を研いでいる者もいた。
山賊の酒宴である。こうした男たちの宴につきものの女の姿がないのは、あくまでも、女は売りものという気なのかもしれない。
「小田原の騒ぎでは、あまり儲からなかったな」

一人が言った。
「急だったからの、あんなに簡単に城が陥ちては、われらが、入りこむひまがない」
「普通の城攻めなら、だいたい落城のころあいというのがわかるからな」
「それにしても、北條新九郎というやつ、大変な奴よな。いまに相模はそっくり奴に奪われてしまうじゃろ」
「そうかもしれん、だが、三浦の一族も大したもんじゃから、北條の思うようになるかどうか」
「その辺のところを早く見当つけぬといかぬの」と、長老が口をはさんだ。「われらの、腹づもりのしようもある」
「……」
「どっちにつくか、だ。目先の欲得につられて、下手をすると、元も子も失うからのう」
「左様で」
「ま、どっちが勝っても、わしらには関係ない。ただ、動きようがあるがな。戦さでも騒ぎでも、なんでもよいわな。世間がごたごたしているときが、われらの稼ぎの場よ。平穏無事では、儲けようがない」
「女の揚げ代くらいでは」
「うまい酒も飲めぬで」
「そういうこと、そういうこと」
げらげらと、みんな笑いだした。

それを隙と見た。弥三郎は蓆を破って飛びこんだ。
まず、長老の左脇に置かれた刀を奪いとるや、さっと抜き放つと同時に、長老の白髪をつかんでひき倒し、その咽喉首に、尖先を擬した。
あっという間の早わざであった。
あれだけ殴打されて、追い出された弥三郎が、ふたたび舞い戻って来ようとは考えられなかっただけでなく、こうした機敏な行動に出るのも、意外だった。
「戻って来たぞ」弥三郎は嗄れ声をふりしぼって叫んだ。「さきほどの礼をしにな。やい、うぬら、動くまい。手向いすればこの長老の咽喉をかき切るがよいか」
男たちは色めき立った。こういう場所で、特殊な群れをなしている連中である。普通人なら、まず不安を感じる。浮れ女たちが、化粧の色香と媚で男を誘うといっても、この時代は多くは昼遊びで夜は、宿泊が主なのだ。
潮騒と松籟のすさまじい晩秋の松林でも白昼なら、旅人たちが浮き心を出しもするが、夜ともなれば、よほど性根の坐った男でないと、不安が先に立つ。
したがって、この連中にしてみれば、自分のほうから乱暴したり、他人の家を犯すことはあっても、侵入されたことはない。
その太平楽の夢を破られたのだ。
驚きとともに、刀をつかんだが、それよりも弥三郎のほうが早かった。

「こやつが死ぬが先か、わしが死ぬが先か」
じろりと、みんなを睨めまわして言った。
「どうだ、賭けてみるか」
誰も動けないのだ。動けば長老の首を刀が貫く。
「うぬ……は、放せ」
長老は喚いてはね起きようとしたが、弥三郎の手が髪をつかんで引き据え、胸を膝で押えている。
むろん、力ではかなうまい。弥三郎の三倍の力を持っているだろう。
老翁といえば、いかにも枯れた感じがするが、この白髪白髯の長老は、膂力と巨体でこの多勢の無頼な連中の束ねをしているのだ。
壮年のころは、体力にものを言わせて、この勢力を作ったにちがいない。
「放してやる。ただし、死体になってからな」
「う、なんということを」
「死にたくなければ、わしの申す通りにすることだ」
弥三郎は半々に視線をやりながら、せいぜい声音に凄みをきかせた。
こういう連中には、まともな態度では駄目だということを充分知っている。
「う……お、女か」長老は呻いた。「お米がほしいのか」
「馬鹿め、馬鹿は馬鹿な考えしかしないとみゆる。わしのほしいものは」
弥三郎は尖先をさらに近づけた。チカリと、咽喉を傷つけた。
「う、馬か!?」
「うむ」
「馬なら、返す、こりゃ、松根、多安、う、馬を返してやれ」
へえ、と名前を呼ばれた二人が立とうとすると、
「馬は、もともとわしのものだ」と弥三郎は言った。「わしのものは、わしのところに戻るのが当然。だが、ひとたび理不尽に奪った以上は、利息をつけて貰おう」
「利息だと、それは……」
「うぬの持っているもの全部だ。この家も、金銀も、調度もだ」
自然と弥三郎の声は上ずっている。長老のいのちが大事なら、輩下の連中は、手出しはできないはずであった。
「馬はかえす……」
長老は呻いた。
「馬は、わしのものだ。利息をつけて貰わぬとな、有金を出せ」
「……」
「金だ、銀だ、そっくり吐きだすのだな」

「な、ない」
「何、無いことがあるか。いままで悪いことをしては貯めたものがあるはずだ、出して貰おう」
「ない！」
と、しぶとく、長老はくりかえした。
「ほう、言い張るのう。よかろう、では、このからだに聞いてくれる。まず、足だ」
「なんじゃと！」
「足よ。片足を切り落す」
と、弥三郎は、咽喉に擬していた刀をふりあげた。
それを見て、輩下の一人が、やにわに跳ねた。膝前の瓶子を蹴倒しざまに抜刀して飛びかかったのだ。
弥三郎は一瞬、身を低めるや、さっと、小手がえしに、刀を横に払った。悲鳴とともに、霧のように鮮血がしぶいて、長老の顔にかかった。
そして、どたりと何やら重く倒れてきた。
それはその男の切り放された片脚だった。
長老は自分の片脚が切断されたかのように、もの凄い呻き声を洩らした。
輩下たちは真蒼になっている。弥三郎の行為が、ただの威しだけではないとわかったからである。
「どうだな、決心がついたか。それとも、子分の脚なら、痛みは感じないか」
「与市よ」と、長老は、嗄れた声で言った。「青甕を出してやれ、こいつにくれてやれ」
「へえ、そっくりでございますか」
「当り前だ」と、大喝したのは弥三郎である。「言われた通りに持ってこい」
与市は不服そうな顔で同輩を促すと出ていった。
すぐに、戻ってきたが、二人で大きな甕を運んできた。
どさりと置いた様子でも、かなり中味が詰まっているとみえた。
蓋を開けさせてみると、ぎっしり宋銭が詰まってみえた。
「なんだ、銭ではないか」
「ああ、銭じゃ、ひ、ひゃく、百貫はあろうぞ」
「いい加減なことを申すな。せいぜい三十貫であろう。わしは銭より銀が好みじゃ、銀はどこに隠してある？」
「……」
「ふむ、こんどは、腕に聞くか」
ここまでくれば、どうせ一か八である。たった一人で、弥三郎春忠が、この連中に勝つには、かなり思いきった方法をとるしかない。
白髯の長老が、もしも勢力を持たぬなかまの一人にすぎなかったら、この連中のことだ。遠慮なく打ちかかってくるだろう。
幸いにも、長老のいのちを〝大事〟だと思う気持が支配

的だったことだ。
（うまくいくぞ）
銭甕を運んできたのを見ると、弥三郎は調子に乗った。
「青銭なぞ、馬に喰わせてやれ、金や銀があるはずだ」
「あるものか」かえり血にまみれた顔をあげて、長老は嗄れ声で叫んだ。「ぜ、銭もそれだけで精一杯じゃわい、もう堪忍してくれえ」
「舐めるな」弥三郎は叱えた。「泣き言は地獄へいって申せ、さっさ銀子を吐きだすのだ」
「な、ない……」
「まだシラをきるか」
血のしたたる刀で、長老の額にさっと一線を引いた。
「わっ！」
「女の肌を切り売りして酒を喰っているとは、畜生より酷いやつじゃ、犬の字を描いてくれるから、地獄へおちて未来永劫、血の池地獄で苦しむがよい」
額に大きく犬の字を切りこんだのだ。長老の号泣は一層はげしくなった。
白髪も白髯も、夥しい血に染まって、凄まじい顔になっている。眼も鼻も口もない。
「も、持って来い、与市、し、白甕を、早く、白甕を、こやつにくれてやれ」
「白甕もですかい」
不服そうに与市は言った。
「早くしろ、わしが、殺される」
与市は、同輩に顎をしゃくって、また出ていった。
今度は、少し時間がかかった。足を切られた男は、もう虫の息になり、断末魔の声が、地虫の呻きのように細く、絶え絶えになっている。その男の苦悶は長老を一層恐怖させたようである。
だが、銀子の詰まったらしい白い大甕を漸く運んできた与市ともう一人の男の気持は、いささか違った。
額に犬の字を彫りこまれた長老は、かれらの眼には、もう、親方としての権威も、価値も無くなっていた。
こういう手合いの間では、強い、ということが、長老たる最大条件である。弱い長老は、もはや存在価値がなかった。
ここで弥三郎を討ちとれば、おのれが横座、つまり長老の椅子に坐ることができると思ったらしい。
重い甕を運んでくるや、どさっと弥三郎の上に落して、刀にとびついたのだ。
銀子と言い習わしているが、要するに丁銀の類いである。銭は五十文百文と穴に緡を通して使う。当時、貨幣は銀がもっともよく使われた。
銭は嵩ばるが、銀ならば少しでも、値が高い。丁銀はだ

いたい掌で握り持つくらいの大きさのものに、何匁と刻印が打ってある。

これを使途に応じて、切って使う。したがって銀の取引には、秤を必ず用いたものであった。

連雀（行商人）などは必ず、秤を持ち歩いたし、ちゃんと刻印が打ってあっても、安心はできない。

刻印といっても大蔵省があるわけではなく、権威者のものであって、したがって、富有な豪商などの刻印もある。

金銀は時代によって、産出量も場所も異なっている。換金相場は、常に流動的であった。

そうした不安な時代だけに、信用ということはない。不信感は当然のことで、生きるためにはまず、疑ってかからねばならない。

丁銀を大体目分量で切る。大きすぎた分は、小粒銀で差し引いたり、もっと少額の場合は銭で還す。

こういう取引は、現在から思うと、随分小面倒だが、当時は万事のんびりしていたから、当然のこととして日常に行われていたらしい。

この銀を貯めこんだ白甕であった。

銭は青甕へ入れ、銀は白甕に入れておくというのは、たしかに、わかり易い。銭は青銭、青びた、などと称い、銀はしろがねである。

この重い白甕を、どさっと、弥三郎の上に落す——

与市ともう一人のなかまは、外でその手はずをきめてきたのだろう。

二人で抱え上げるのもやっとという重さだ。それを落されてはたまらない。

もろに落ちてきたら、弥三郎もそれまでだったろうが、もう一人のやつが、土壇場で迷った。

重すぎて自由にならなかったらしい。おのれの足の上に落ちる心配もあったのか。

与市が声をかけた。

「それっ」

といった途端によろめいた。

咄嗟に弥三郎は身を転じている。どさっと、重く落ちた。よろめいた分だけ、甕のほうは衝撃が少なかったために、男が転ぶのと同時に、長老の脚の上に落ちることになった。

ぎゃあっ、と押し潰されるような悲鳴があがったときは、弥三郎の血刀は、その男を斬り、翻転して与市へ——

与市は刀を抜いただけで、弥三郎の血刀で逆袈裟に斬り下げられていた。

白甕が割れなかったのは、落したというより、殆ど与市のなかまが一緒に転ったからであった。下敷きになった長老の脚こそ災難だったが、丁度よいクッションになった。

「わあッ、あ、脚が、折れた」

長老は泣き声をだした。

与市ともう一人の男が斬られてあたり一面、血どろの海になったのも、かれにとっては、脚ほど重要ではなかったらしい。

「た、救けてくれい、み、みんなやる、銀をやる、金もやる、いのちばかりは救けてくれい」

多勢の男女を顎で使う地位に君臨して、これだけ、金銀を貯める栄華を満喫しながら、まだ未練があるのか。

「金だと、黄金も貯めこんでいるのか」

「……」

「そいつも持って来い」

「あ、いや……」

あわてて誤魔化そうとする。

弥三郎は、その折れた足を、ぎゅっと踏んづけた。

「げえっ、痛う！」

「金はどこへ隠している。どうせ、銭も銀も出したのだ、ついでに金も吐き出してしまえ」

長老にしてみれば、金だけは隠しておくつもりだったろう。銭や銀に比較すれば、金は少量で価が高い。

「うぬが地獄へゆくのに必要なのは青銅六文だけだ。これだけ咥えて、地獄へおちろ」

弥三郎は血刀を咽喉くびへあてた。そのまま、ぐいと押し切ろうとする。

長老は、もうそれ以上は抵抗できなかった。

「だ、出しまする、出しまする。この下じゃ」

「この下？」

「囲炉裡の下じゃ」

なるほど、考えたものだ。まさか炉の火の下に黄金が埋まっているとは、誰も考えない。

「掘り出せ」

血刀を長老の咽喉くびにあてたまま、弥三郎は、残りの輩下たちへ顎をしゃくった。

粗朶や灰である。うっかりすると、灰を蹴上げられる。

弥三郎は位置を替えて、油断なく、目をくばりながら、

「妙な真似をしてみろ、首が胴と離れるのだぞ、わしはかまわぬがな。まだ地獄へ行きたくなかったら、こやつらに、なまじな忠義立てをさせぬことだ」

「わ、わかった。おい、おとなしく金の壺を出すのじゃ……」

長老はもう半死半生で喘いでいる。

与市たちの失敗が、残りの連中の意気を失わせたらしい。今度は命じられた通りに、粗朶をとり捨て灰を掻きわけて、朱塗りの壺をとり出した。これは人間の頭ほどのものだが、黄金がぎっしり入っていれば、かなりの額になるだろう。

大人の頭くらいの朱塗りの壺であった。

囲炉裡の熱くらいでは、壺の蓋は溶けないから、これは、この程度の茅屋では、絶好の隠し場所であったろう。

「開けろ」
弥三郎はなおも油断なく、血刀をあてたまま、顎をしゃくった。
輩下が蓋をとろうとすると、
「わ、わしがする」
執念を見せて、長老は、手をのばした。すっかり奪われるというのに、まだ自分の手で、開けたいのだろうか。
いや、どうせ奪われるのなら、せめて、最後の感触だけでも味わっておきたいのだろう。
蓋にすぼりとかぶせた油紙が黄ろく焦てはじけている。やはり熱が及ぼしているのだ。
ふるえる手で長老は蓋をあけた。
そこには砂があった。砂をかぶせて、黄金の入っていることを誤魔化しているのであろう。
砂の中に手を突っこむと、かれは袋をつかみ出した。それは握り拳くらいの大きさのもので、布地は華麗なつづれ錦であった。
「砂金か……」
弥三郎は、渇いた声で言い、無意識に舌舐めずりした。
「そうじゃ、これだけあれば」
「城が買えるか」
「さ、もうよいであろう、去んでくれ」
「袋は一つか」
「……」
「こやつ、おれの目をフシ穴と思うているか。馬鹿め、その甕の中に幾つあるか知らぬが、全部、貰うておく」
「そ、それは、あんまり……」
「未練たらしいやつだ」
弥三郎は鼻で笑った。それから、輩下たちを見まわした。
「どうだな、みんな。この金銀は一体、誰のものなのだ。うぬらのものか」
輩下たちは顔を見合わせ、それから、一せいに否定した。
「と、とんでもねい、楠の長老のもので」
「楠の長老とは？　こやつか」
弥三郎は、長老を見た。
「へえ、みんな、鐚一文、わっしらには……」
「そいつは酷いな」
「全くで」一人が飛びつくように返事すると、みんなも和した。「全くで、酷いもので」
「うぬらは、このような吝いやつのために働いているのか、なぜだ」
「へえ……なかまを抜けると殺されますので」
こういう連中の掟は厳しい。長老は絶対の権力を持っているのであろう。
「馬鹿だな、殺されるくらいならみんなで殺ったらどうだ」
どうせ、こんな集団で唯々として働いている男たちであ

る。頭のまわる奴は少ない。楠の長老は膂力も強かったし、生きてゆくことすら難しい時代では、二度の飯にありつけさえすれば、何でもするという者が尠くなかった。
あとからわかったことだが、巧妙な長老は、流れ者、犯罪者などに一宿一飯の恩を着せた上で、輩下にしたが、三日に一度は、しょうばい物の女を抱かせた。
つまり、飯と女で、かれらを操っていたのだ。
「酷いやつだな」
弥三郎は、いかにも輩下らに同情を禁じ得ないというふうに、楠と名乗る長老を見た。
「こんなやつの命令にしたがうことはない」
「……」
「さっさと殺してしまうがいいだろう」
けろりとして弥三郎はこう言い放った。
弥三郎が巧みに、輩下らの人心収攬をはかっていることを、長老は、敏感に察したようである。
「うっ、こいつ、何を吐かす。やい、みんな、こやつの言葉に惑わされるではないぞ」
口ぎたなく喚いて、必死に食い止めようとしたが、連中の表情や素振りは、そんな弱り切った老翁を見捨てようとしている。
弥三郎は内心、にやりと北叟笑んだ。
「ろくに小遣銭も貰わいでは、生甲斐があるまい。みんなにくれてやる、こい」
無造作に青甕に手を突っこむと銅銭を握っては、一人に二つかみずつ、くれてやった。
小屋の中に残っていたのは四人である。この連中が幹部なのであろう。
「ほかのやつも呼んで来い」
こうなると、もう、弥三郎が親方であった。
一人がすぐに出ていった。と思うと、ぞろぞろとつながって入って来た。
さっきからの様子で、戸口まで来ていたらしい。下手に騒ぐと、楠の長老が殺されるから、びくびくもので、中の様子をうかがっていたのだ。
「ええ、太市と申しまする」
「一助でござります」
「国次で……親方、よろしくお引立て下されませい」
次々と、平伏するのが、六人。
「これでぜんぶか」
都合、十人ということになる。
「わしが三浦弥次郎介長だ」
「はい……御高名は、みんなよく存じております」
松根が哥兄ぶんで代表してお追従した。口から出まかせの偽名である。高名どころではない。が、みんな、威名に打たれたように、額を板張りにこすりつけた。

弥三郎は勝利を感じた。かれはさらに青褪の中から、一つかみずつ銅銭を太市らにくれてやった。

どうせ、楠が貯めこんだ銭である。吝しくはない。この十人の荒くれ男たちを、おのれの輩下に鞍替えさせることが、出来るかどうかの瀬戸際だったのである。

「そら、手を出せ、くれてやる」

「有難うございます」

「お前にもだ」

「お情けぶかい親方で」

おかしいほど、かれらは恐縮したり感激したりしている。よほどに楠の長老のために搾取されていたのであろう。

弥三郎が情けぶかいわけではない。太っ腹なわけでもない。所詮これらの金銀も、自分の汗で稼いだものではないからだ。

(うぬらにくれてやるのは、銭だけよ)

金銀は、おのれのものにする。そのためにも、銭で誤魔化す必要があったのだ。

銭を一つかみずつやっても、大甕だから、まだ余っている。目分量であった。弥三郎はさらに、また一つかみずつ、松根などからまた配った。それで漸く、底が見えるようになった。

「残りは、女どもにくれてやれ」

「いえ、女にやっては、甘やかすことになりますで」

「薄情なことを申すな。女どもが肌を切り売りしていたゆえ、うぬらは、顎が干上らなかったのではないか。有難いと思え」

「へえ、理屈はまあ、そうですがねえ」

「つべこべ申すな。くれてやれ、小銭ではないか。それくらい貰っても逃げ出しはすまい」

女たちに銭を持たせれば、こんなところは逃げだしてしまうだろう。そんな心配があるというのも、日ごろ阿漕な稼がせかたをしているからであろう。

しかし、弥三郎の見込みは違った。

どうせ、こんな不安定な世の中なのだ。大金を摑めば別だが、僅かな銭では、その気も起すまい。

それに、これから、いままでとは事情が違ってくるとなれば、女のほうでも安心する。

この場合、楠の長老を、悪党ときめつけることで、弥三郎を慈悲ぶかい度量のある武将だと思いこませるのが、大事だった。

女たちが呼びこまれた。意外に少なく、七人しかいない。むろん、その中にお米もいた。

弥三郎は、お米に笑いかけたが、恐怖と不安で、お米は、顔をこわばらせている。

「さあ、今日から、わしが、ここの親方になる」

と、言い放って、

「そのしるしじゃ、みんなに銭をくれてやる。それ、一人ずつ手を出せ」

はじめ、女たちは、信じなかった。

こういうところで、春をひさいでいるような女たちにしてみれば全く、信じ難いことであった。

「さあ、手を出せ、遠慮するな」

弥三郎は、まず、お米に顎をしゃくった。お米なら、少なくともほかの女よりも、弥三郎を理解しているはずであった。

「ははは、どうした。わしは鬼でもない蛇でもない」

「……」

「そなたたちを救いに来たのだ」

言葉の勢いである。調子づいてべらべらと、饒舌った。年の功だ。もともと弁舌は達者でもある。

「この楠の長老が、悪辣なやりかたで、おまえらを虐めて金儲けをしていると聞いてな、それで、救けに来たのだ」

「……」

「わしの申す通りにすれば、みんなが倖せになる。どうだ、わしの申し条を聞くか」

「はい、よしなに」

「さあ、まず銭をやる」

お米が、まず、膝を進めた。それにつづいて、女たちは次々に前へ出て、銭を貰った。

青褪の底をさらうようにして、残りの銭も、みんな渡してしまうと、

「どうだ、みんな。このまま、いままで通りのしょうばいをつづけたいと思うか?」

「はあ……」と、松根と多安は顔を見合わせて、「こんなうめえしょうばいはありませんで。へえ、なんしろ、資本はタダですので」

「なるほど、女のからだはタダか」

「それに、まあ、こういっちゃなんですが、女どもも、好きなやつがいますでね」

多安が、おどけ顔になってこう言うと、女たちは、肩をすくめ、小突きあって、くすくす笑いだした。

「へへ、男でも女でもアレが嫌いなやつはいませんで、へえ、それは辛えときもあるかもしれねえが、とにかく、いい思いをして、銭になるのだから」

「なるほど、いい思いか」弥三郎は調子を合わせて、にやりとした。「だが、もっといい思いをしたくはないのか」

「え?」

「つまり、男も女も、お互いに好きな相手とだけ、楽しめて、子をもうけて、栄華な暮しができるような身分になることだ」

「そ、それはもう、願ってもないことですがねえ」

松根たちも女たちも、何を夢物語をするのだという顔に

なった。
「できる」
「え？」
「わしの申す通りにすればだ。この砂金と丁銀が、役に立つ。どうだ、わしの命令に従うか？」
弥三郎の狙いは功を奏した。
誰でも豊かで安定した生活を希わない者はない。
好きで、こういう賤しいことをしているわけではないのだ。異常な性向の者がいるにしても、それはそれとして、生活が豊かになってからでも楽しめることである。
「どうだな、わしの言葉を信じて、従うならば、人並みな暮しにしてやる」
自信ありげであった。
これまでにも、弥三郎ほどの武将と、親しく口をきいたことがないだけに、みんなが、従う気になった。
「では、どうすればよろしいので」
松根が、代表格で、おそるおそる、お伺いをたてた。
「左様、これから、あるところへ向う」
「……」
「つまり、ここを、捨てることだ」
「へえ？　ここから離れるので」
「そうだ、かような浅ましく卑しいことをしていては、まともな暮しはできぬ」
弥三郎は、男たちに、具足などがどれほどあるかと聞いた。
女の揚げ代として、貰ったものや落武者から剝ぎ取ったものなど、かなりあるはずだった。
「へえ、それは、いくらかはありますが」
「男は具足を着込め。女は小袖でよいが、なるべく、上物を着ろ」
「はあ……すると、侍になりますので？」
「姿かたちはな」
「へえへえ、それはなれますがねえ」多安が、弱ったような声をだした。「にわか侍では、どうにも、恰好がつきませぬわな」
「恰好をつけろ、それらしい顔つきをすればいいのだ」
「へえ、ですが、戦さにでるのはあんまり、好きじゃないので」
「誰が、戦さに出ると言った？　戦さをはじめるのではない」
「……」
「これだけ金銀があるのだ。戦さをはじめなくても、よいのだ。まあその辺のところは、わしに任せておけ、さあ、早くしろ」
別に急ぐこともなかったが、みんなの気が変ってはならなかった。

こういう連中は、たたみこんで何が何やらわからぬうちに、引きずってしまわねばならないのだ。
白甕は厳重に縄でくくって太い棒を何本も合わせたものにぶらさげ、交代で担がせる。
砂金の朱甕は鞍に結びつけて、これは弥三郎が乗ることにした。
男も女も、手廻りのものを手荷物にして、出立することになった。
こうした動きを、呻きながら見ていた楠の長老は、いよいよとなって、喚きだした。
「やい、わしをどうする気じゃ、みんな去んでしまうのか。わしを捨ててゆく気か、罰が当るぞ、罰が」
「来たければ、来い」と、弥三郎は冷たい眼で、長老を見下した。「歩けるならば、だ。歩けさえすれば、荷担ぎくらいには使ってやってもよい」
「あ、歩けだと……この脚で、折れてしもうて、ああ、くそ！　わしをこんなところに置き去りにして、みんな、去んでしまう気か、この老人を、殺す気か」
声をふり絞って喚いた。
が、誰も、同情の眼を向けようとはしない。長年にわたって搾取してきたのだ。こうなるのも罪の報いだと、みんな思っているのだった。
「まあ、しかたがあるまいな」
弥三郎は、冷たく言い放った。
「罪のつぐないをすることだ。這ってゆくがいい、街道へ出て旅人にもの乞いすれば、干飯の余りくらいは、くれるだろうよ」
「あんまりじゃ」
「何があんまりだ。みんなにナブリ殺しにされぬだけ、有難いと思え」
ほんとうなら、こういう小屋には火をかけてゆく。それをしないだけ、楠の長老は有難く思わねばならないのだ。
「さあ、参るぞ」
弥三郎は、冷たく言い捨てて外へ出た。
馬上の人となると、金銀の甕をたしかめてから、
「東へ参るのだ」
と、馬首をむけた。
すでに弥三郎春忠には、構想が出来ている。かれはこの賤しい男女たちを、おのれの手足とするには、あまりにも貧弱だと知っている。
（つなぎだ）と、思っている。（水を導くための、な）
かれが嘗って持たなかったもの。それは金銀である。世の中は金銀さえあれば、どうにでも動く。
これを持っているということは、この乱世にどれだけ力強く、役に立つことか。
一握りの青銭で、容易に人を殺す時代である。城を抜く

軍勢も、たいていは傭兵であって、金しだいで敵にも味方にもなる。

金を持っているほうが、軍勢が多くなる理屈であり、それは国勢を拡大することにつながる。

いま弥三郎の手にある金銀が、どれほどの人間を動かすことができるか。

人間と武装の費用である。そこでたちどころに強力な軍隊が誕生する。

（新九郎め……いまに見ていろ）

小田原城を攻めとった北條早雲はいまや得意の絶頂にあるだろう。その得意顔をおもうと、弥三郎ははらわたが煮えくりかえるようであった。だが、思いがけなく手に入れたこの資金で、一矢をむくいることができる。その夢がいま、弥三郎を昂奮させていた。

相模湾に沿った松林の中の小径を弥三郎春忠は意気揚々として馬を進めた。

このあたり、ずっと平地である。

乱世の戦さはおおむね山城を拠点としたし、この時代、かなり平山城が増えていたが、小田原から鎌倉まで、海沿いには丘陵がない。

古都として栄えた鎌倉が要地たる条件の一つに、この山に囲まれているということがある。

高いということ、登るに難渋するというだけで、すでに、城あるいは砦としての要素を持っている。後世のようにがみごとな石垣や白亜の天守閣を備えるまでは、防寨は峨峨たる天然の険峻を必要とした。

この楠の長老が支配する売春窟の存立は、その昔のことは別にしても、あたりに山城がなく、武門の拠点から離れているという条件が幸いしたのであろう。

異様な一団であった。白昼に見れば、何かと疑われるにちがいなかった。

掠奪したり質物にとったりした具足を身に鎧い、刀や槍、薙刀などを担いで、荷物をくくってぶら下げている。

女たちも、それぞれ着替えなどを持ってつづいていた。

途中、辻ノ堂のあたりで、農家から老いぼれた牛を買いもとめ、重い荷物を負わせることにした。

夜が明けてから、稲村ヶ崎を通った。潮の退くのを半刻ほど待っている。

弥三郎が、目的地をはっきりと口にしたのは、そのときである。

「住吉城へゆく」

住吉城とは、前にも述べたように、現在の由比ヶ浜と逗子の小坪の境に聳えている平山城である。

稲村ヶ崎も、その昔の新田義貞の故事でも有名なように、海ぎわにそそりたった岬であるが、この小坪の山城の下も、

すぐに海面に接し、岩礁が乱立蟠踞していて、海から攻めるのは、困難だった。

三浦時高が三浦半島の咽喉部の守りとして死守せしめたことも、前に記したが、いまは三浦義同が、弟道香に守らせていたのだった。

そのことをむろん、弥三郎は知っている。

かれは義同に嘗つて敵対している。新井城でさんざん手こずらせているので、大森海実の口添えで、助命されたものの、大きな顔をして、逢いにゆけるものではなかった。

が、いまは情勢が変っている。

それを口実にするのだ。新九郎早雲の相模進出、小田原の落城は三浦一族に、大きな衝撃を与えたはずであった。

（おのれの才覚と、この金銀が、ほしくないはずはない）

弥三郎はこう睨んでいたのである。かれらの一行が由比ヶ浜を進んでくるのを見て、数騎の武者が水際を疾走して来た。

「その者ども、止れ、止れ」

おそらく、小坪の住吉城の望楼から、発見されたのであろう。

こうした〝眼〟があることは知っていた。

住吉城の西の安全帯が由比ヶ浜である。城の上から見ると、ひろびろとして文字通り白砂青松が弓状につづいて、左に江ノ島が横たわり、掛け橋のように富士が嶺が中空にぽかっと絵のように浮んでいる。

西の方から攻めてくる敵影は一人も見遁さない。胡乱な者が近寄れば、ただちに制禦できるのだ。

城の手前に細い流れがある。いまもその流れは溝川となって残っているが、これが西の外濠をなしていた。

その疾走して来た騎馬は、大音声に叫んだ。

「止れ、うぬら何者だ、何処へまいるぞ」

長槍を横たえた騎馬武者たちである。

むろん抵抗する気はない。弥三郎は待ちもうけていたもののように、馬の歩みを止めた。

「手向いしてはならぬぞ、控えよ」

弥三郎は松根たちに命じた。

先頭の武者は、もののしく半頬までかぶっている。

戦闘態勢である。小田原が奇襲を喰って攻め落されたという知らせは、当然、入っているのであろう。

そのために一段と警戒が強まっているにちがいなかった。

「ここは三浦家の領内だ。胡乱な者の侵入は許さぬ」

荒武者の声は吼えるが如く、渚にひびきわたった。

弥三郎は馬からは降りぬ。こういう連中に弱味を見せてはならないのである。

「わしは北條の者ではない」

と、最初に言い放った。

その疑いで相手が緊張しているだけに、これは効果的で

あった。
「わしは小田原城にいた」
老獪な弥三郎である。〝いた〟という単純な表現で、大森家の敵ではないと思わせた。
「突然の北條の襲撃を受けての、すんでのことに、一命失うところよ」
「名を聞こう」
「三浦弥次郎介長」
ぬけぬけと名乗った。
かれにしてみれば、ともかく城内に入ってしまえば、こちらのものだという気がある。
こんな由比ヶ浜で阻まれていては、埒があかない。愚図ついていると、計画が毀れるおそれがあった。
「大森どのは何とされたぞ」
「落ちた」と明快に答えている。「多分、真田の城に落ちられたのではないか。何しろあの混乱じゃ、鹿狩りなどと称して軍勢を箱根へ集め、夜襲をかけてまいった。卑劣なは北條早雲、いや、旅牢人あがりの新九郎よ」
三浦家中にしてみれば、親戚の大森家が襲われ城を奪われたことで、北條早雲へ憎しみを感じている。
ここで、早雲の悪口を言うのは相手の心を柔らげ、同志的連帯感をそそることになる。
弥三郎は、そう見抜いたのである。

「それで？」
と、しかし相手はさすがに、簡単には乗って来ずに、供の男女のほうを注意ぶかく見た。
何しろ、謀略の時代なのだ。親子でも頭から信用はできない。況や、この異様な一団を、簡単に信じろというほうが無理であろう。
「逃げてまいったわけだな、小田原から」
「うむ……いや、ただ逃亡して来たというのではない」
素早く、頭をめぐらせて弥三郎は、胸を張った。
哀れを乞うのが得策ではなかった。憐愍などが通る時代ではないのである。
「三浦一党にとって得策を具申にまいったのじゃ」
大きく出たな、というように武者の眼は警戒の色をにじませた。
「わしは北條新九郎めの悪辣さをよく存じておる」
「……」
「されば、こたびも、随分と大森家の人々に、忠告していたのだ。かかることがあろうことを憂えてな、それを聞き流していたからこそ、かようなことになった」
「……」
「大森の次は三浦……不吉なことを申すようだが、彼奴の眼は必ず、こちらへ向いてまいるぞ、いや、もはや、その準備をしているかもしれぬ」
それは恐怖的にすぎるとしても、三浦一党が、北條の牙をはじめて認識したのは事実だった。
弥三郎の言葉は、そこをぐさりと突き刺したのである。
「軍資金も運んでまいった、三浦家のために」
弥三郎は松根たちをふりかえって、それを、と白甕を顎で示した。
心得て松根と太市が白甕を武者の前へ置く。
蓋を開けると、ぎっしりと詰まった丁銀が見え、武者たちは眼を見合わせた。
「これだけあれば、新品の具足百領がほどにはなろうぞ、如何じゃ城主どのに取り次いでくれまいか」
「わかりました」
言葉まで変っている。
武者の一騎がただちに馬首をめぐらした。
水際を一散に城へ駈け戻ったと思うと、ほどなく、十数人の小者を率いて戻って来た。
これは荷物に手を貸すためであり、入城を許す意味の言葉を伝えた。弥三郎は内心、北叟笑んだ。あとは、巧弁一つである。三浦義同も、事態がこうなっては、かれを必要とするはずであった。
（もう大丈夫だ、五分通り、成功だ）
弥三郎はそう思うと、鷹揚に頷いてから、馬を歩み出させた。

蛟竜の如く

北條新九郎早雲庵宗瑞が相模小田原城を陥したのは、明応四年九月十六日のことである。
これは早雲の相模進出の第一歩として記念すべき日になった。
かれの目途するものが、小田原大森家の所領だけでないことはいうまでもない。
あくまでも、小田原は、その第一歩であった。関東十州（当時はそう称した）を併合する希望の関門だったのである。
したがって、かれは、小田原城を奪うと、ただちに、城郭の整備を命じ、領民の人心の慰撫につとめた。
れいの早雲の手法である。
高札が城下の要所要所に立てられたのはいうまでもない。その文言も、嘗つて、かれが韮山をはじめ西伊豆のと同じものであった。

禁制

一、明（空）家に入り、諸道具に手を掛る事、

一、一銭に当る物何にても取候事、

一、相模国小田原の侍、並に土民に至るまで、住処を去る事、

右の条々堅く停止せしめ、若違犯の輩是あるに於ては、稼穡を踏み、在家を放火すべき者也。

稼穡を踏み、とは田畑の作物を滅茶々々にする、ということである。

悪くいえば、すかしたり威したり、ということになるが、当時もその以後も、戦国時代の大名で、かれほどの人徳を明示した者はいないのだから、やはり、その城攻め後の規律としては、第一級に推さねばならない。

何しろこの時代である。後々までそうだが、雑兵小者の輩は、半分山賊のようなものだから、人殺しや強姦は日常だった。

況や、盗みなどは勝者として当然ということになる。

こういう制札は、したがって、多分に、かれらの恣意を押えるわけで、

「馬鹿らし、せっかく戦さに勝っても、なんのウマミもないではないか」

と、忿懣を洩らして、禁を犯して、悪事を働く者もいる。

そうした者を見つけると、どんな地位にある者でも、早雲は捕えしめて、城の大手前や辻々で、これを磔刑にかけ、あるいは斬首した。

土地の者が、おそるおそる非違を訴えると、

「よしよし、調べてくれる」

と、手を尽くして調査し、事実だとわかれば、仮借なく、処断した。

ために、北條早雲の評判は、奇襲に対する怨みを消すほどに、高まり、ひろがっていって、一たん逃げだした領民たちも、城下へもどってきた。

次にとった政策は、れいによって、四公六民である。ひどいところは七公三民というのまで、罷り通っている力の時代だから、民衆の感激は大変なものだった。

新九郎の偉いところは、約束を守ったことである。

権力者というものは、もともと支配下の無力な民衆、あるいは弱い家来に対して、傲慢で尊大で、強圧的だ。

約束というのは、対等の場合に拘束力を生じる。

絶対権力者は支配下に対して約束はしない。命令するだけである。

あるいは、一面、約束のように見えて、実は、空手形というのも多い。

これは詐欺的行為であるが、絶対権力者に対しては、問詰や責任追及をする機関がない。

革命心は、こういう場合に弱者の胸にもこみ上げてくる

のだ。

旅牢人の時期が長かったために新九郎の早雲は、そうした人心の機微に通じていた。

かれは一度び口外したことは、「必ず守るぞ」と、揚言し、実行した。

その誠実さが、民衆の心を獲得したのであろう。

が、そうした約束は治政の上だけのことで、戦術としては、強力な敵に向っては老獪巧妙な手段を用いている。

かれにしてみれば、戦さは対等であり、政治は権威という概念があったのではないか。

治める者と、治められる者とでは対等ではない。

その弱い者への慈悲と哀れみが早雲の政治を完璧ならしめたとみてよい。

たとえば、後年の豊臣秀吉などと比較してみると、その違いがはっきりする。

秀吉は若年のうちは慈悲深いところがあって（信長と特に対照的なのだが）あまり人を殺したがらなかったが、老境に入ると、人が違ったように、妄想に駈られ狂的に殺人を、それも嘗つての信長のように、集団殺人をくりかえした。

秀頼への盲愛などという理由は別として、政治家としての冷酷さエゴイズムを剝きだしたマキャベリストと化している。

早雲はしかし、年齢とともに、治世太平の信念による政治家へ移行していったことが、年貢の下に厚く、上に薄い政策に読みとれるのだ。

かれのその大望には、しかし、伊豆と小田原を中心とした相模の一部では、小さすぎた。

（関東を傘下に収めねば……）

だが、そのためには、まだまだ強豪が蟠踞している。

管領扇谷上杉定正は死んだが、もう一人の山内上杉顕定は健在だし、三浦一族も義同を頭領に立て、日に日に盛んになっている。

定正の嗣子朝良が後を継いでいるが、定正の威名には及ぶべくもないから、いまこそとばかり顕定は版図をひろげようとしていた。早雲はこの強敵にまともに打つかろうとはしない。策をもって目的を隠蔽していた。

かれは上杉顕定に使者を送ることを考えた。

「使者はやはり山中だな」

山中上野介の妻は、寿々女であった。嘗つて少女のころ、浜松の曳馬城に人質になっていたのを助けた由縁がある。

泉ヶ谷の一庵老人は今川家の継承争いに望みを抱いていたが、氏親が継いでから間もなく、病死した。最後まで、寿々女の身を案じていたが、後事を新九郎に托したのである。

新九郎は寿々女の成長とともに、上野介の妻に世話した。

「山内どののところへな」というと、上野介は、新九郎の

心中を計りかねて、驚きをあらわにした。
山内上杉顕定は扇谷と並んで関東管領を称している。いまや、伊豆公方が滅亡したあと、古河公方に拮抗するために、山内公方を称しかねない勢いであった。
話が後戻りするようだが、早雲の新九郎が、韮山の堀越御所を急襲したときも、実は、扇谷定正と連携してやったと世間では取沙汰した。
当時、伊豆は顕定の分国であり、茶々丸の父政知は顕定の力の余恵を受けていたからである。
いうなれば、遠交近攻策で定正は新九郎に手を差しのべ、唆かしたというのだ。
顕定は必ずしも茶々丸の行為（父殺し）を肯定したのではあるまいが、おのれに反抗しなければ家庭内の争いは、見て見ぬふりをしようと思ったのであろう。
こういう時代の政治とは、何が正しいかではなく、力のあるほうが正しいのだ。
したがって、早雲が堀越公方をほろぼしたのは、ある意味で顕定の片腕をもぎとったことになるが、その行動が定正の意を体したものではなく、また、おのれに反抗するための前衛攻撃という確証がない以上、正面立っての火蓋を切ることにはならない。
こういう立場は、現在の世界の大国間の流動的な姿勢に共通している。
いつの時代でも、国家と多くの人間は功利性でしか動かないものである。
早雲は、その顕定の気持を見抜いている。
かれは茶々丸を討つのに、
「父殺しの極悪人」
を誅戮したという名分を保ち、さらに三浦半島に追い詰めて殺したときも、三浦義同を表面に立てて、野心がないことを態度であらわしている。
こんどの小田原攻めも、一夜にして成功したにもかかわらず、それ以上、大森藤頼を追討する手を控え、足元の固めに意をそそいだ。
これは、早雲の相模侵略の一歩には違いなかったが、見方を変えれば、定正亡きあと、弱体の朝良では、いつ顕定に伊豆攻めされるかもわからない不安を解消するためでもあった。
最大の守りは攻撃、という戦国の鉄則がここで証明されている。
「上野介、山内にまいって、貢進を申し出るのだ。わしが被官を望んでいるとな、伝えよ」
山中上野介は、耳を疑った。あらためて、瞠目して、早雲を見た。
「ただいまの仰せよう、御本心からでございますか」
「言葉の通りよ」

早雲はにやにや笑っている。
「山内の被官に!?」
「左様に申した」
「それは！……御本心とも思えませぬ。第一、左様なことを申し出ても、山内どののほうでは信用しますまい」
「信用させるのさ」けろりとして早雲は言った。「それが、そのほうの役目ではないか」
「いのちがけでございますな」
「貢進の宰領じゃ、殺されることはない」
「よほどに、大量に持ってまいりませぬと」
「そのために日ごろ倹約している」
早雲は、日ごろ家族はむろんのこと、家来たちにも、奢侈を戒めている。
領民から搾取しない以上、大名の生計は、裕福にならない。
心に驕りの起ることを戒めたのである。
のちに早雲寺二十一カ条として知られる家訓の中にも、節倹のことが出ている。
この条々は、早雲の遺言とか生前から守らしめたかのようにいう人もあるが、その成り立ちから見て、これは早雲の死後、誰かが、生前の言葉を書きとめていたのをまとめたものであろう。
まとめて、鼻祖の遺言として、北條家の家訓にしたのであろう。そう見ると、二代目の氏綱や弟の長綱などが相談してのことかもしれない。
その二十一カ条の中に、
一、刀衣裳、人のごとく結構に有べしと思ふべからず、見ぐるしくなはと心得て、なき物をかりもとめ無力かさなりなば、他人のあざけり成べし。
というのがある。この訓えなど武士が名刀をほしがり、女子のように衣裳のきらびやかを誇りあうような愚かしさを説いている。
ついでに記しておくと、こういう文言もある。
一、上下万民に対し、一言半句にしても虚言を申べからず、かりそめにも、有のままたるべし。そらごと言付ればくせに成りてせゝらるゝ也。人にやがて見かぎらるべし。人に糺され申ては一期の恥と心得べき也。
上に対して嘘を吐くなというのなら主君の言葉として普通だが、上下万民に対してと言っているところが、まれに見る人物なのだ。
この言葉と、下剋上との矛盾を云々する史家も尠くないが、早雲は下剋上ではない。茶々丸はかれにとって主君ではなかったし、かれの今川氏親へ仕える態度は最後まで変らない誠実なものだったのである。
管領上杉顕定が早雲から、
「被官になりたい」

という使者を受けて、どのように返事したかは、記録にはない。

自分の傘下の小田原を奪い取られただけでも、充分非を鳴らして攻撃する名分が立つ。また昔からの被官である大森家の本貫の地を奪還してやる義理もあるわけだが、その矢先に、早雲の方から、ぬけぬけと、（お盃頂戴）と言ってきたのだ。

顕定は、まず、呆れたろう。

（なんたるシラジラしい！）

早雲の勢力がたんに大森家に勝る程度のものだったら、山中上野介を上使とする一行は、生きて小田原へは戻れなかったろう。

顕定は新九郎の時代からの、かれの今川家に於ける動きを見ている。

例の氏親が竜王丸と称していたころ、一族の範満と世嗣争いで、新九郎が一躍名をあげた。

顕定の脳裡に、〝伊勢新九郎〟の名がきざみつけられたのは、そのときが最初である。

だが、駿東の興国寺城の主となったときくらいまでは、今日ほどののし上り方をするとは、夢にも思っていなかったろう。

それは、ただ顕定だけではなく、定正にしても、堀越御所の政知（将軍義政の弟）にしても同じことだったろう。

むろん、力と智慧才覚だけでは難しい。運が備わらねば、こううまくいくものではない。

その運を逃さぬ努力も大きい。運というもの、好機というものは、案外よくめぐってくるものだ。

それを見逃すかどうかである。

人間四十年五十年生きていると、誰でも、あのときが好機だった、と思いあたるふしがあるものだ。

ただ、いろいろな事情で、それをつかみ損ねるほうが多い。運の神は素早い。よく前額部にしか毛が生えていない、などと称われるが、つかもうとする手が短かったり、つかんだつもりでも、手がすべったりする。それが人生だ。

若年のころには、特に、それが多い。新九郎も擡頭してくるまでには三十余年の試行錯誤の歳月があったのだ。

若年の失敗を壮年にあって生かす。それのうまくいった者に成果が齎されるのである。

（あの新九郎めが……）

北條早雲庵宗瑞として、ここまでのし上って来ようとは。

（早く叩きつぶしておけばよかった）

顕定は臍を噛む思いだった。

自分の被官のすべてを奪いとった上で、ぬけぬけと、それにとって代ることを宣言する。

一家一門のお家騒動ではそういうことがあっても、外部のやつが、そんな申し出をすることは少ない。舐められて

いるというより、

（狡猾なやつだ）

こちらの肚裡の底まで読んでいる横着さが、油断がならなかった。

その昔の新九郎よりすれば、

（彼奴は強くなりすぎた……）

それが口外はできないが、顕定の実感だった。

ただ強いだけではない。新九郎の粘りは、空恐ろしいくらいであった。

新九郎は定正の要請で合戦に出馬することも度々あったが、そういうときは、決して、矢面には立たない。

危険な場所に陣取りしないのだ。適当に戦闘はするし、味方を助けはしても、いよいよとなると、さっと陣を退く。

その点でそつがなかった。新九郎にしてみれば、あくまでも与力しているのであり、自身の目的とは違う。

おのれの目的に向って進むことが第一義であり、他の助勢で勢力を減らしたり、一命を失ってはならぬ。

だが、要請があれば出動しておかないと、いざという際に助けを必要とした場合、そっぽを向かれる。

その辺のことも、早雲の年功は知悉していた。

顕定には、それがわかる。その巧みさが、憎いのだ。あまりにも巧妙すぎる。

（彼奴は、一歩一歩、わしの版図を犯して来おった）

蚕食という言葉がある。蚕が桑の葉を食べるように、一端からしだいに侵略することである。

顕定の勢力圏は伊豆全土に及んでいた。それがしだいに食い荒されてくる。

伊豆はすでに隅々まで早雲のものとなり、危険を感じているうちにとうとう相模へ雪崩れこんできたのだ。

当然、顕定は西相の軍勢を催して、小田原を攻める手はずを練っていたのだ。

早急にそれが行動に移せなかったのは、早雲の力が予想以上だったからである。

その逡巡がますます顕定の旗色を悪くした。

顕定としては、小田原の悲報に接したとき、ただちに行動を起すべきだったろう。

一刻おくれれば一刻だけ、早雲の備えが固くなるのだ。

他人の城というものは、勝手が違いすぎる。戦さ巧者の武将ほど、城を奪えば、おのれの守り易いように改築するものだ。

その閑を与えず、攻めこむのが最善だったのである。

その機はすでに去った。

三浦義同と作戦を練ろうとしていたところに、早雲の使者が乗りこんできたのだ。

内懐ろを見透かされたというか、使者を斬って、首を送りかえす自信のないのがいまいましかった。

「願いの儀はいずれ返事を仕わそう。ゆるりとしてゆけい」

顕定は山中上野介を屋形にとどめると、女を与えて籠絡させようとした。その考えは浅薄だったようである。それだけ顕定が焦っていた証拠であろう。

早雲が被官を申し出たのはいうまでもなく、時間を稼ぐためである。

小田原城の改築と人心収攬が、急がねばならぬ最初の仕事であった。

領民をまず味方にする。昨日までは大森家の支配に甘んじていた人々が、早雲の民本主義的な行政によって、大森色を脱し、北條家を信奉するようになれば、それだけ、北條の軍勢が増えることを意味する。

当初に棟別銭を課し、酷税をかき集めて軍備に充てるよりも、どれだけ、効果的かわからない。

早雲が民心の慰撫につとめ、その生活の安定を事実、願ったことは、かれの生前ばかりでなく、死後も、その遺徳が守られていたことでも明らかである。

かれの死後三十年経たのちの文書によっても証明される。北條家から出された印判状が残っていて相州文書に収録されているが、

——地頭に候共、百姓迷惑に及候公事以下、申かけるに付ては御庭へ参り、申上ぐ可き事……

とある。

地頭が権力を濫用して農民に迷惑をかけるような揉め事などあれば、ただちにお城に来て訴えるがよい、というのである。

江戸時代は、官僚の天下で、階級制をはっきりと作ってしまったが、早雲とその後裔の後北條時代はそうではなかった。

駈け込み訴え、直訴を許しているのだ。

因みに江戸時代の直訴は死罪である。これは将軍が雲上の人となって、庶民の苦悩を見ようとしなかったことを物語っている。

——この人慈悲の心ふかくて百姓をあはれみ、毎年の年貢をいうめん（宥免）せらる。是によつて百姓共、かく慈悲なる地頭殿に会ひぬる物かなとよろこび、此君の情には、命の用にもたつべし、あはれ世に久しく栄え給へかしと……

とある。

これは〔北條五代記〕の記すところで、ひいき目の表現が否めないが、この点に関しては誇大ではなかったことがわかるのである。

早雲は相模に入って、足下の情勢にばかり気を遣ったのではない。

かれは京の政局にも多大の関心を払っている。

京では大変な政変が起っていたのである。

八代将軍義政が薨じたあと、義視の子義材（義政の養子でのちの義稙）が十代将軍を宣下（延徳二年七月五日）した。義視はその半年後に薨じたが、義材は三年ほどで戦さに敗れ、越中へ走った。義材を逐ったのは管領細川政元である。

政元はおのれの権力保持のために傀儡政権を樹てた。すなわち十一代将軍義高。

この義高（のちの義澄）こそは、茶々丸の異母弟で韮山から逃れた義遐だったのである。

全く、人間の運命はわからない。

義遐の運命は、こうした乱世なればこそのことだが、数奇と称うに価するであろう。

堀越御所足利政知（八代将軍義政の弟）の二男に生れた義遐は、長兄茶々丸には異母弟にあたる。母（円満院）の陰謀が茶々丸を監禁したり、廃嫡を工作したりしたため、茶々丸は土牢を破って一家惨殺の行動に出たのである。

新九郎に救出された義遐は、韮山を逃れて、京へ奔った。

管領を目ざす細川政元の手で、洛西天竜寺の香厳院に入り、はじめは喝食として過した義遐は、間もなく薙髪して清晃と名乗っていた。

当時の京は、一応、兵火が終息し、小康を保っていたが、近江ではいわゆる応仁ノ大乱と呼ばれる勢力争いの余炎が、鎮まってはぶり返し、欲望のままに、昨日の味方も敵になるという、攻防をくりかえしていた。

足利義材を将軍に盛りたてるについては細川政元は大いに尽力しているが、その義材が、畠山政長と密着して畠山基家を攻撃しはじめたのが、明応二年の浅春。

細川政元はひそかに基家と呼応して、義材が河内に進撃している間に、足利清晃を還俗させて、名目人として、京にアンチ義材の兵を挙げたのである。

政元に呼応した赤松政則などの猛攻で政長は和泉に敗れ、河内正覚寺に退いて自害した。

義材は捕われ、山城竜安寺に幽閉されたが、いのちと引替えに伝家の鎧刀を義遐に授けた。これは将軍職の委譲を意味していた。

だが、それからひと月あまり義遐が義高と改名し、将軍宣下の準備をしているうちに、義材は六月末の風雨の夜、幽所（上原元秀第）を脱出、越中に奔った。

越中には政長の遺臣神保越前守がいた。

ただちに越前守は同志を糾合し義材の名で檄を飛ばした。

これに応じたのが畠山義統、大内政弘などである。

こうした戦国の兵馬倥傯の一々を辿ることは容易ではない。さながら、乱麻のようなものだ。理詰めに辿って行こうとしても、不可解な行動にぶつかる。

戦さそのものが、不条理であった。一族の名利や私的な憎悪がからみ、彼我の強弱で情勢は急激に変ずる。

朝に味方だったのが夕方に敵対するかと思うと、夜明けに和睦し共通の敵に向って進む、というふうに、よくいえば流動的、悪くいえば、砂金の一包みで、ころころと変った。

将軍の宣旨といっても、便宜的なものだし、政治的必然性がない。

政治そのものがないのだ。ただ強いか弱いかだけが、六十余州を血と火で焦しつづけていた。

第十一代義高の将軍宣下も、そういう渦中で行われている。

細川政元は、天下に野望があって義遐を保護したのであろうか。

当時の武将である。全くその気持がなかったとはいえない。

が、計画的ということはあるまい。

義遐の場合は、義政の甥であって、血の濃淡からいえば、当時あまり有力とはいえない。

やはり、これは新九郎や氏親の頼みを聞いたと見たほうが妥当であろう。

義材が畠山政長と組むようなことがなかったら、政元は義遐を立てることも考えなかったのではなかろうか。

どっちにしても、こういう時代だけに義遐が将軍に立つ運命にあったのだ。

面白いのは、母の円満院が茶々丸を憎み廃嫡しようとしたのも、伊豆公方の二代を継がせたかったからであり、その結果が悲惨な結果を招き、さながら、その血どろの中から、天下の将軍として、その子が京に生きたということである。

運命のいたずらとしかいいようがない。

むろん、円満院はそのとき生きてはいない。茶々丸に惨殺されている。

この円満院という戒名は誰がつけたのかしらないが、こうしたお家騒動の張本人にはそぐわない戒名である。

もっとも、それだからこそ、遺臣が、その行跡を晦ませるような〝福徳円満〟の意を菩提寺の住職に頼んだのかもしれない。

それはともあれ、政知の子義遐は、義高となって将軍職へ就いた。

これが明応三年の暮れも押し詰まった十二月二十七日である。

北條早雲が相模小田原に前述の奇襲をかけて城を奪い大森氏を逐ったのは、その僅々二カ月と経たぬうちだ。

この間に、何らかの関聯があったと見るほうが至当であろう。

当時の交通事情から考えても、義高将軍宣下は一月の末には、早雲の耳に入っている。

半ばには入っていたかもしれない。

それから小田原攻めまで半月乃至一カ月しかない。

早雲や今川氏親にしてみれば、

(新将軍は、あの恩は忘れてはいまい)

とおもったろうし、

(多少、手荒でも、無理が通せよう)

と、確信したに相違ない。

それが、あの小田原攻めになったと筆者は見たい。

前述したように、攻撃が守りの最たるもの、であり、相模進出は早雲の宿願ではあったろうがその直接行動を促したものは、この義高の将軍宣下だとおもうのだ。

新九郎が義高にお伺いをたてたとか、黙契があったとかする文書も証拠もない。が、当時の戦さには必要はない。

大森氏が前将軍義材側だというだけで充分であった。

地方大名豪族にあっては、殊に帰趨は流動的であったから、その口実は容易に成り立つのである。

むろん、将軍のうしろ楯があるからといって、直接効果はない。

それほど〝将軍〟の肩書の権威が発揮されるようなら、六十余州が火の海にはならない。

乱世とは、すなわち、将軍の政治力が殆ど失われていた時代を称う。

応仁ノ乱そのものがすでに管領の権力争奪に端を発しているのだから、それを圧えることができなかった将軍の弱体化が、やはり要因と見てよいであろう。

ただ、新将軍が、かつて生命を助けてやった少年だったということは、プラスであるには相違ない。

有形の効果はないまでも、無形の圧力はあるはずであった。

早雲が、強引といってよいほどのこの城取りをやった裏には、義遐が義高となって新将軍宣下したことが、作用していたのは疑いない。

そして山内上杉顕定が、関東管領の権威を持ちながらおのれの被官が城を逐われたという事実にも、眼をつむって、ただちに小田原城の北條早雲を攻めなかったのも、中央のその権力を憚ったに相違ない。

いうならば早雲の行動は、他の会社のシェアに食いこんだようなものであった。

近代でも大をなした実業家は、口を揃えて、企業の集中経済力が勝敗を決める、という。

小資本の乱立は、徒らに競争を煽って、商品の質的低下と価格の暴騰を招くという。

あるいは、早雲の胸中もそうした気持だったかもしれない。乱麻の世の中は、群雄割拠による争乱が重要な因子だと。

その個々の欲望を圧えることによってしか、平和は齎し得ない、と。

（おれがやらねば、やれるやつはいない）と。

これはかなり思い上った考えにちがいない。

だが、関東の兵乱が、いつまで経っても治まらないという事実は時勢そのものが早雲の出馬を要請しているともいえたのである。

伊豆公方足利政知がその実子茶々丸に弑逆（前年に病死という説もある）されたことで、二人の関東公方は一人になった。

古河公方といわれる成氏である。関東管領も二人、扇谷定正と山内顕定である。

もしも成氏に真に力があったら政知の死後は、伊豆のことは別にしても、定正と顕定を和睦させその他の豪族たちの盲動を押えるなどして、充分、関東に平和を招来できたはずだ。

関東が依然として、争乱を重ねていたのは、この成氏が名ばかりの公方だったといえるのではないか。

こうしたところを見て、早雲が、

（乃公出でずんば）

の気持になったのは当然である。

こう見てくると、関東争乱の元兇は足利成氏（古河公方）にあるようである。

もともと成氏は、持氏の四子である。

この国の歴史で戦国時代と称されるほど、もっともはげしい血の時代は応仁以来の百余年とされるのだが、これは足利将軍の権威の失墜を意味しているから、戦国時代は足利氏によって、生みだされたといっても過言ではない。

この関東公方なるものが出来たのも、急な話ではなく、鎌倉管領（関東管領）に遡らなければならない。

もともと征夷大将軍鎌倉管領の称は足利尊氏の称えたものだが、尊氏は、鎌倉に〝幕府〟をひらき、自身、京へのぼるさいに、弟直義にその任を与えた。

また直義が上京するに及んで、尊氏はおのれの三子義詮を置いた。

義詮はのちに二代将軍を継いでいるのだが、この父親に忠実な子が上京するとき基氏をその役に据えた。

こうした要職の持ち廻りは足利氏の独壇場で、朝廷の権威も何もあったものではないが、ともあれ、はっきりと鎌倉管領として名分職責の整ったのはこの基氏が最初で、したがって初代ということになっている。

以降、氏満、満兼、持氏とつづくのだが、この管領の下にあって執事したのが上杉氏である。

ところが、代々のうちに京の足利政権の力が弱まるにともない、関東管領としての力を得てきて天下の政権がほしくなってきた。

京は疲弊しているが地方では豊穣な田畑を持ち、いやでも勢力が出来てくる。

足利氏と一口に言っても、その一族が増加するに及び、赤の他人と同じになる。いや、野心と野心がぶつかると、かえって一族だけに憎悪怨恨もふかくなるのだ。

下剋上というも、所詮は、この錯綜した恩讐の複雑をぬきにして、簡単に言えるものではない。

満兼の子持氏は、四代将軍義持の没後、将軍職たらんとした。

この野望もあながち無理ではない。

三代将軍義満の子として義持が将軍に坐ったのまではいいが、かれが将軍職を譲った義量は酒乱で将軍の器ではなく、義持も度々諫めているがきき目がなかった。

この義量が十九で死んでいる。酒毒とも暗殺とも称われているが、ともかく、この仲に将軍職を譲ったことが、持氏をして野望を起させることになったのは疑いない。

義量の死は応永三十二年で、義持の死は正長元年。

持氏が、関東管領より、足利六代将軍になるチャンスと思ったのは無理もない。

ところが本家のほうには、まだ人材はあった。義満の子、つまり義持の弟がいたのだ。

足利将軍家のこうした御家騒動はまことに面倒なものだが、これらの人脈がよくわからないと、なんのために、戦さばかりしていたのか理解できない。

義持が死ねば、鎌倉にいる持氏しか、次代（六代）将軍に立つべき人材はいない、と持氏とその周辺が思ったのは早計だった。

僧籍に入っていたので、気がつかなかったのだ。だいたい、仏門に入るというのは、一たん世を捨てたのだから、還俗というのもおかしなものだが、もともと仏教の存在が、真の宗教心からではなく権力との密接な因果関係によって出来ており、特に院外団的な圧力を示す。いわば、潜在勢力として、意図的に、一族を送りこむのが多かった。

一族に一人は僧籍に入らないと極楽にゆけない、などというのは、そのためのレトリックでもある。

ともかく、一人いた。義満の子である。

初名義宣、僧名義円。青蓮院に入って天台座主となっていた。

これを急遽還俗させて、将軍職を継がせたのだ。これが六代将軍義教だ。

持氏の野望を叩きつぶすべく、京都からは軍勢を送り、牒を飛ばせた。足利満隆（氏満の三子、新御堂殿と称す）や持仲（満兼の二男）らに攻められて鎌倉で戦い敗れた持氏は駿河に走って今川氏を頼り、軍勢を糾合して反攻してくるや、かれらを仆した。

こうして、戦乱の渦は渦を呼んで拡がってゆき、鎌倉管領は完全に足利幕府の敵となったのだが、持氏にしてみれば、

（義教がいなかったら――もしくは、戦さに勝って京を侵していたら）

いまごろは将軍だ、と思う気持が、子の成氏にも伝わっていたのであろう。

持氏は、さながらその野望の当然の結果のように四十二歳のとき敗れて鎌倉永安寺で自殺し、遺児は分散し遺児三人が下総に走った。

これが古河公方の出現した所以である。

下総といっても、北の外れで、両野、常陸などに近い。ここの豪族結城氏朝が庇護した。

春王、安王、永寿王という三人の子。

この名前を見てもわかるように将軍職を窺うというより天皇の座を狙っていたのではないか。どうせ、乱れ乱れた時代だ、将軍になるのもわが子に天皇を継がせるのも同じと思ったのかもしれない。もっとも、王という字をつけたから、必ずしも天皇の座とはかぎらないが、当時、南帝と称して南朝の皇族尊義王を擁して旗をあげた日野有光（前権大納言）という野心家もいた。

禁中を襲い放火して玉璽宝剣を奪い、延暦寺根本中堂で挙兵している。戦前の歴史ではこうしたことはタブーにされていたが、事実である。こうした事件があったことなど見ても、持氏に野心があったのは一応、肯けるのではなかろうか。

野望というものは、とどまるところを知らない。おそらくヒットラーも、最初ナチスを結党したときまでは、将来、歴史上の大悪人大虐殺者として名をとどめるようになるなどとは、夢にも思わなかったろう。

野望とサジズムはエスカレートすると、狂気に達するものだ。

持氏の野望（といっても足利幕府の存立と正当性を肯定するものではない）が潰れ、再興を期した結城氏朝が六条河原に梟首され、春王（十三）、安王（十一）も誅戮された。

末子の永寿王だけが、幼さのゆえに助命を許されている。この永寿王が、すなわち成氏に成長するのである。

ついでに書いておけば、南帝と称した南朝の尊義王と日野有光は戦さに敗れて自殺したが、その子尊秀王を〝南方新皇〟と吉野の民衆は尊称して、天皇の座を狙っていたのである。

まことに乱脈をきわめた時代と称わねばならない。が、また、権力というものの真の相がどんなものか、よくわかるようでもある。

話が随分ひろがったようだが、この永寿王が生きのびることができたのは、幼かっただけではなく、将軍義教が誘

殺されて、憎しみの矢も拡散したせいでもある。

二人の兄が誅せられたのが五月で、義教が赤松満祐に殺されたのが六月、永寿王の延命とともに関東管領を約束されたのが、七月だ。

もっとも、幕府にしても、これだけ恩を与えておけば、幕府の管領――つまり関東支社長として忠勤を励んでくれるにちがいない、という目論見もあったのであろう。

ところが、永寿王の成氏はそうではなかった。

（父と兄二人の恨み、忘れるものか）

と、歯軋りしつつ育った。

京都の将軍を望んで得られなかった父持氏が、自ら関東将軍をとなえていたのにならい、成氏も成長するにしたがい、

〝公方〟

と、僭称した。

公方というのは字を見てもわかる通り、おおやけかた、である。

これは公家（くげ）の方の略であって、本来は朝廷をさした言葉であるが、北條氏が幕府を鎌倉にひらいて以来、武士たちが公方と尊称した。

そのことから、将軍の別称になっていた。足利将軍らが公方と呼ばれていたため、持氏は、鎌倉こそ武士の覇府であるとして、自ら公方と名乗り、世人は関東公方と呼んだのである。

元服して成氏と改名した永寿王は鎌倉に戻って、執事の上杉憲忠や顕房らの協力をとりつけた。

公方だけでは力はない。すでに上杉氏は執事の地位以上の勢力を持っていたのだ。

成氏が関東公方として、それなりに行政手腕を発揮していたなら関東に二人の公方も出現せず、したがって二人の管領も出現せず、争乱の度合も、もっと小さなものだったかもしれない。

成氏はその点でも、考えが浅かった。

かれは一たん協力をとりつけた執事上杉憲忠と顕房を間もなく誘殺してしまっている。

これが、上杉氏を叛（そむ）かせることになった。

上杉房顕や長尾景仲などが叛いて、関東はまたもや戦乱の野と化した。

こうして成氏は各地に転戦せざるを得なくなるのだが、この自ら戦乱をひきおこした人の心境は、現代人には理解に難い。

成氏の行動を見ていると、まるで戦さが好きなように、始終、戦っている。執事の上杉氏が、成氏の地位を狙ったからだといわれているが、真実はどうか。康正元年六月将軍義政の命をうけた駿河守護今川憲忠が大軍をもって、鎌倉を攻めたので、成氏は下総に走りついに、鎌倉に帰るこ

とがなかった。二年後下総の居城鴻巣から古河城に移って、ここに腰をおちつけることになった。

この時期は長禄元年（一四五七）といわれている。成氏はこの城を古河御所と呼ばせた。

当時は、やはり関東公方と呼ばれていたのだがこの僭越不遜を怒った幕府では、成氏を討たせるために上杉房顕を関東管領と為した。

上杉氏は前述したように管領たる関東（鎌倉）足利氏の執事だったのである。それを管領に昇格させたのだ。

これでは、成氏の公方を認めることになるようだが、むろん八代将軍義政（初め義成）の真意はそこにはない。

とにかく成氏を討ちとってしまいたい。そのためには上杉房顕にれっきとした官位を与えることによって、諸大名たちを糾合できる。

それと同時に、弟の政知を派遣した。これには、公然と関東公方の称を許したのである。

もはや、行政組織が紊れて、関東公方なる役職が必要になっているのなら、認めよう、ただし、それは、成氏ではなく、政知だ、というわけである。

そこで、政知は関東へ下向したのだが、成氏の息のかかった連中が、箱根で抵抗したので、関東へ入れない。

やむなく伊豆の韮山の堀越に屋形を築いて、腰を据え、ここから指図することにしたのだ。

こうした弱気のところにも、乱世の人物としては不足しているのだが、こうなって、ここを堀越御所と呼び、堀越公方、伊豆公方と呼ぶことによって、成氏は古河公方と呼ばれるようになったのだ。

もっとも、両方とも、当人たちはわれこそは、関東公方なり、と嘯いていたのだが、世間がそのように対等に見てしまった。そのために関東公方が二人、という変なことになってしまったのだ。

歴史上でも、甚だ奇妙な現象であった。

関東公方が二人。これはどう見ても、戦乱の発火点になる。

関東管領たる上杉房顕が三十二歳で病死すると、その養嗣子顕定（房定の二子）がその後を継いだ。

幕府では鎌倉執事の任を与えたが、顕定は関東管領を称するようになる。

したがって、上杉扇谷定正が関東管領を称するようになったのは、のちのことでその意味からも、顕定の方に正当性がある。

もっとも定正は持朝の四子で、持朝は鎌倉執事であったから、これが関東管領に昇格したのなら、おれも関東管領だと称して憚らなくなったとすると、故なきではない。

はじめ、定正は顕定とともに戦っていたのだが、成氏が手を替えて、両者に和睦を申し入れて来て、一時、平和が

来たことがある。

成氏も成長して、力押しだけでは駄目だと悟ったのだろう。

和睦した上で、工作した。定正を顕定から引き離すことであり、自分の勢力に入れることだ。

そのためには甘言も弄したろう。

「関東管領に補す」

古河公方として、その好餌をぶら下げたことも推測に難くない。

肩書がほしいのは、いまもむかしも変らない。特にこのころは、まだ戦国時代のトバロで名門意識や官位の権威が強い。

成氏が両者と和睦したのが、文明十年正月、十二年の二月には、成氏は顕定の実父房定に就いて幕府に和睦を申し出ている。

義政のほうでも、子の義尚との仲が悪くなったりしていたせいもあり、和を講じたきむね、書翰を成氏に下したりしている。

実際、義政はほとほと戦争がいやになっていたのだ。かれが東山新第（銀閣寺）に移り隠棲しようとしたのは、その翌年（文明十五年）のことである。

ところが、関東では、今度は両上杉のほうで、憎しみの炎が強くなってきている。

両者が、はっきりと、敵対するようになったのは、れいの太田道灌を定正が謀殺してからといわれる。

定正は、忠臣にして明敏な道灌の心事を疑って殺した。

これが顕定の謀略だったという。

顕定にしてみれば、定正が成氏と接近し、対立的に地歩を固めて強大になってゆくのが好ましくなかったのだろう。

扇谷上杉六代の定正が、いつから関東管領を称するようになったかは、はっきりしない。が、成氏と和睦後——前後の様子から考えて、文明十五年ごろからではあるまいか。即ち、義政が和睦の書を、成氏に与えた翌年あたり。つまり、成氏と和睦することは、かれの関東公方を認めることだから、そうすれば、関東管領に補されて当然、ということになる。

世の中がこういうふうに乱れてくると、何が正しいか、何が悪いかとかは、一概に言えなくなってくる。

まがりなりにも——事実、全く有名無実となっていた——足利将軍の室町幕府というものが存在する以上、その将軍の上意が正義だとする論理は、きわめて非現実的なものになる。

その政治権力の奪い合いも力が決着するとあれば、六十余州、津々浦々で、力の争いが行われるようになったことを、誰も咎めることはできない。

力を制するものは、力でしかなかった。

政治が真の意味での、多くの民衆のための政治だったなら、正と邪と区別は、自ら判断できたであろう。

権力抗争とその果ての栄華とは、民衆の苦しみを一顧だにしようとしない権勢構図は、人間の希望と信頼を失わせていったのだ。

「この世は地獄に候えば……」

と、ある高僧は記しているし、

「憂き世なれば浮きことのみ仕り侍らん……」

と、したためた連歌師もある。足利幕府を正とすれば、古河公方成氏や、その与力となった扇谷上杉定正は悪とされ、山内上杉顕定や、伊豆公方足利政知は善とされるわけである。

そういう単純な見方では、この複雑多様な乱世は解剖できない。

むしろ、こういう時代をひきおこしたのが、政権を朝廷から任された足利一族とその腹心の守護管領らであった。およそ人間の生活にあって、人を支配する権利を持つ者は誰もいない。

政権を担当した者には、民衆の生活の安寧を計る義務が課せられているはずであった。それは天命と呼ばれるものであろう。

その力を失ったとき、その政権は担当能力を欠いたわけであり、その地位に齎される財貨は、わたくしすべきものではないはずだった。

足利幕府の歴代の将軍とその側近は、よりよい政治のために権威に固執するのではなく、将軍の座が齎す栄華と権勢に恋々としていた。

その座の奪い合いが天下を乱したとすれば、その座から発せられた指令には、何らの〝正〟も〝善〟もない。むしろ悪臭に包まれ、邪気を発していよう。その手先に反抗するということは、民衆の側から見れば、正義ということになる。

こうした抗争の歴史は、正確なかたちでは伝わり難い。勝者は敗者の記録を抹殺し、おのれの行動を修飾する。乱世の戦さが是々非々を問われないのは、右のゆえである。

が、いつの世でも変らない価値体系がある。

民衆の為に何をなしたか、だ。

その判別からした場合、北條早雲の行動は、当時にあっては、やはり特筆するに足るものがあったのではないか。

「新九郎の評判は悪くない……」

ある日、三浦陸奥守義同が言った。

三浦半島の新井城の望楼で北西の方を眺めている。

うずくまっているのは、扇谷上杉高救の重臣太田資康であった。

資康は太田道灌資長の子である。父を主君定正に殺されてから、資康は定正のもとを逃れ、顕定に与し敵対したが、定正の死後、高救（定正の兄）の傘下に入っていた。

この歳、義同に男児が生れた。高救のもとより祝い物を持って新井城を訪れたのである。

この子がのちの義意であった。

「おぬしは、何と思うな」

「は？」

資康は、あまりの景色のよさに眼を奪われていたので、義同の言葉をろくによく聞いていなかった。

「別段に……」

と、あいまいな返事をしたが、義同には、この返事が、こころよいものではなかったと見て、すばやく、言葉を換えた。

「それがしには、よくわかりませぬが……」

「評判よ。世間の評判がな、わしには納得いかぬのだ」

「なるほど」

「新九郎めは、巧い」

義同は、資康が上の空だったことを咎めずに、話を進めた。実際かれは悩んでいたのだ。

「あの巧さには、誰でもが瞞される。昔はおれも……」

「早雲庵宗瑞どののことでござりますな」

「新九郎めよ」義同の語気は荒く、吐き出すような調子だった。「おれが最初、逢うたときは伊勢新九郎と名乗っておった。まだ、今川の客分だったころじゃ、家来も十人とは居らざった。一介の旅牢人あがりと聞いたが……」

「大したものでございます」

「なに！」

「一介の旅牢人から、いまの身分にのし上ったのは、やはり、大したもので」

「うむ。そうだ、たしかにな。くわせ者よ。頭はよい。才覚がある。たかが気の利いた客人……今川の捨て扶持を有難がっているやつと思うていたが」

「爪を隠していたのでございますな」しきりに資康は感じ入っている。「能ある鷹は爪を隠すとやら申しますが、これはなかなかに出来ぬことでございます。隠すよりはあらわるるはなしと申す通り」

「嚢中の錐か、うむ」

「才覚あれば、自ずと出したくなるもの、それを圧えていられるのは、よほどの器量人でございましょう」

「そうだ。器量人すぎる。みんな瞞された」

「能ある鷹でございますな」

「鷹……いや、竜だな、海中に隠れて海蛇くらいにしか思わせなかったのが、風雲を得て、竜となって舞い上ったといおうか」

三浦陸奥守義同は、さすがに正確に、新九郎を把握して

いた。客観的には、かれもまた人物である。三浦一族の中でも傑出している。もっとも、かれは上杉扇谷高救の実子であって、三浦時高の養子になったことは、前に述べた通りである。

時高に実子が生れたので、うとまれて、三浦の家を出た。放浪の時期にかれの人間は練れた。

母の生家たる大森家を頼って小田原城に在り、足柄山山麓に庵主となって隠忍の歳月をおくったのだ。

その果てに、養父時高を討ち滅ぼしている。

そのときは新九郎の力を借りたのだから、恩といえば恩がある。

もっとも、新九郎の方では茶々丸討伐に、かれを利用したともいえる。

したがって、連携することで、共存できたのだ。メリットからいえば、義同のほうが大きい。

それだけに、直後、新九郎が、相模に野心を示さなかったことを、むしろ無気味に思っていたのである。

「やはり、野心を持っていたのだ。あのとき、牙をむかなかったのはわれらを安心させるためだったのだ」

「攻めてまいりましょうか」

太田資康は首をかしげた。それは疑問を意味していた。

「山内のほうへ被官を願い出たとか、仄聞しましたが」

「それが術じゃ」

「しかし……」

「おぬしにはわからぬかもしれぬ。おぬしの父御道灌どのは新九郎とは、肝胆相照らした仲だと聞いておる」

義同は半ば蔑みで、半ば憐れむように、この若者を見た。のちに、かれは娘の聟にこの資康を容れている。資康は膂力があり、美丈夫であった。

義同には叔父に当る定正の忠臣であった太田道灌の遺児である。名門といい、資質といい、聟として不足はない。父の非業の死で、苦労もしている。が、義同の眼から見れば、おのれには及ばないとおもわれるのだ。

「しかし……」と、また資康は言った。

「もしも早雲どのに、御当家を犯す気持があれば、小田原城を乗っ取った勢いをかりて、真田城や岡崎城に攻め寄せたのではありますまいか。大森の藤頼どのは、真田城へ入った由、これを追って……」

「そのように、おぬしは思う」

「はあ」

「世間もそう思うであろうわさ」

「……」

「それゆえ、新九郎はせなんだ」

それを巧妙というのだ。それがわからないのか、ともどかしく義同は感じた。

「世間の思う裏をかく。それが彼奴の術だ。乗せられるな

よ、資康、おれの口からは申したくはないがおぬしの父御を討たせたのは、新九郎だというぞ」

「――その噂は聞いております」

太田源六郎資康は大きく頷いた。

太田道灌を誅戮したあとで主君の定正は、ひどく後悔した。顕定の奸策におどらされて忠臣を殺したことは、自ら右腕を斬りおとしたようなものだと悟ったのだ。

さらに当時では、顕定を巧みに動かしたのが、伊勢新九郎だという噂もたしかにあった。

資康は定正のもとから奔って顕定の陣営に加わってから折に触れて、その真相をさぐったが、顕定もくせ者だから、なかなかわからない。

漸く捜りだしたのが、やはり顕定の謀略だったらしいということである。

定正は、おどらされたにすぎないのだ。と、知ったときは定正はすでに死んでいた。

考えてみれば、むしろ定正の暗愚さの故である。許せないのは、顕定であったと知って、資康はこの謀将のもとを去った。

資康は、堂々と戦場で顕定と対決しようとしたのである。そういうところは、父親道灌譲りであろうか。

こうした時代には、むしろ古風といえる資康であった。

資康は一時、両上杉との関係を断った。これに誘いをかけたのは定正の兄高救である。

道灌の非業の死に対して充分、同情していたし、山内上杉に拮抗する扇谷上杉としても、太田資康とその一族の動向は、放置できないものだった。

「定正の暴戻は水に流してくれぬか」

高救から、そう下手に出られては、資康も態度を変えざるを得ない。

義同も間に入った。義同が三浦時高の遺領を完全に掌握したことによって、扇谷の勢力圏は増大している。

太田資康にしても、一門の保全と伸長を考えたであろう。

こうして、ふたたび資康は扇谷の被官とはなったが、定正の嗣子（定正の兄七沢城主朝昌の子）朝良には、なかなか打ちとけなかったようだ。朝良も暗愚で、定正がその愚かさをなげき、訓した有名な長文の手紙が残っているが、すでにして、扇谷上杉の前途は必ずしも明るくはなかった。

義同が三浦一族の総帥として大いに意欲的になっていたこの時期が、その頂点といえたかもしれない。

しかし、そのときですら、すでに、伊勢新九郎長氏こと北条早雲庵宗瑞の偉大な影が、西方に聳え立って、落陽の相武をその陰影で昏くしていたのである。

義同が本能的に感じた疑惑と不安は、そうした根拠に立ってのものであった。

「たしかに安心はできますまいが……しかし、それにして

は、早雲庵どのは動きませぬな」
源六郎資康は、まだ納得しかねるように、相模湾のかなたを見やった。
「サグリを入れてみたいが……おぬし、小田原にまいってみぬか」
義同はさらりと言った。その考えは、ずっと持ちつづけていたらしい。それを切りだす時を選んでいたようである。
「それがしが？」
「そうだ、おぬしなら、彼奴も気を許すだろうからな」
暫く見ないうちに、一廻りも二廻りも偉大になったように感じる陸奥守義同であった。
すでに故人となった父道灌と新九郎は浅からぬ因縁がある。今川五郎氏親が竜王丸と称った時、お家騒動から今川家が崩壊しかかった。
竜王丸の母は新九郎の義妹であり、つまり伯父甥の間柄になる。関東管領はこの騒ぎに乗じて駿河乗っ取りを企み太田道灌を仲裁と称して派遣してきたのである。
新九郎は道灌とこのとき初対面だったが、熱誠こめて解決を誓った。
竜王丸と対立していた今川新五郎範満を斥けて、竜王丸を擁立するまでには、新九郎は大変な努力を払っている。
それはともかく、この事件が新九郎と道灌との友情のきっかけとなったのである。
その道灌の遺児とあれば、新九郎も粗略にはしない。
だが、陸奥守義同の真意は、それだけではなかったようである。
源六郎資康が従者五人と小田原城下へ入っていったとき、新九郎の早雲はいなかった。
軍勢を率いて甲州へ進撃していたのである。
甲州はいうまでもなく武田氏が勢力を持っていたが、武田氏の望みは海のある土地へ進出することであった。
のちのことだが、川中島の戦いで知られた上杉謙信と武田信玄の間で、塩が贈られた話が、人口に膾炙している。
これは事実とは思えないが、ともかく、山国しか持たぬ武田氏が塩をほしがっていたのは、明らかなことだ。
武田氏が海へ出るのに、もっとも近道は駿河を横断することである。
遠江では遠くなるし、三河へ出るには信州を抜けなければならない。
したがって、眼を東方へ転じて相模へ出る道もあるが、これも、かなり遠くなる。
今川氏親と武田氏の争いは、もう数年来のものであった。
小田原に進出した北條早雲は、城を改築して足もとを固めるや、氏親の要請に応じて、軍を出した。
義に厚い早雲は、相模の大敵を前にしながらも、氏親の要請を拒むことをしない。度々、自ら出馬している。資康

が訪れたのは、丁度その留守のときであった。
そして、資康に一日おくれて、小田原へ忍び寄っている者たちがいたのである。
そのことを、源六郎資康は知らぬ。
「留守か、それは残念な」
心から、そう思った。
留守城を預っていた荒木兵庫頭は、二、三日すれば帰城あるものと存ずれば、ゆるりと逗留あれ、と奨めた。
資康の相手をしたのは、松田頼重である。頼重は、古くからの足柄上郡の豪族で、大森氏とは確執があり、交流を断っていた。
北條早雲の小田原乗込みを聞いて、進んで被官を申し出てきたのである。
すでに早雲の治政は相模にも聞えている。殊に足柄山を越えてすぐの土地だけに、早雲の名声に憧れる者も尠くなかった。
松田頼重が参向したと聞くと、その他の大小の群雄や村人を代表して庄屋などが、挨拶に来た。
早雲はこれらを一々引見して、あるいは安堵状を出し、あるいは見どころのある者は家来の端に加えるなどして、相模の第一歩を固めていったのである。
その意味でも松田頼重の処遇には世間の注目が集っていた。
早雲の魅力は政治家というよりも、その人間の大きさにある。
本来なら、二十年苦労をともにしてきた腹心の六将と比較すれば新参の松田頼重などは、十枚も二十枚も下位にランクされるべきものだが、早雲は、相州武者の筆頭に据えた。
これは老職でこそないが、重役の末席をけがすものであり、松田頼重が感激したのはいうまでもないが、半信半疑の相模の人々の心をひきつけた。
「早雲庵さまの仰せらるること、卒爾にあらず、相模にお心をかけられている証ぞ」
と、協力的になった。
政治の成功度は民心を獲るかどうかにある。領主が権力だけをふりまわしたのでは、民衆はついてはゆかない。
年貢米にしても、その収穫の度合が、はじめから低ければ、上納分が少なくなるのだ。それを力ずくで奪おうとすると、民心が離れ、怨嗟の声がひろがる。
それは澱んだ溝にぶつぶつと噴きだすメタンガスの泡のようなものであっても、しだいに、地上を蔽い、山々に木魂して、権力者への反抗の嵐となるものであった。
政治を司る者には望むと望まないとに関らず、権力が付随するのは、東西の四千年の歴史が証明している。
民衆の上に立つものは、どこまでも腰を低くし、民意を

尊重するべきであった。それは尊重しすぎるということはない。

早雲以来、五代の後北條氏がこの新しい土地に根をおろして栄えたのも、この民衆の基盤があったからであり、その国づくりの要諦は、早雲の無欲と平和への希求から出ているものであろう。

慈悲の心ふかく、無欲ではあるが、放漫というのではない。のちのことだが越前の守護朝倉教景が、連歌師の宗長から、早雲のことを聞いた。

心ある武将は、名将の逸話に多く耳を傾け、それを糧として政治に生かしたのである。

宗長は今川氏親の父、義忠のころから今川家に出入りしていて、氏親や早雲のことに通じている。

「古来、武士は銭を軽んじる風があるが、金銀は軽んじるものではなく、また、逆に淫すべきではない。有徳人（富有者）どもは、貯蓄を第一に心懸け、ただ貯めこむばかりで、金銀の使い方を知らぬ。そういう人間は、金の亡者で下等な者であり、武士たるにふさわしくない性向といわねばならない。

伊豆の早雲は、針ほどのものをも蔵に積むというほどの細かい蓄えをしたが、いざ合戦となると、蔵の戸を開けて、金銀は吐きだし、費えに足りねば貴重な玉さえ砕いて使う人物であった」

こういうことを宗長に聞いて、教景は大いに感じとるところがあったという。

早雲の平生の心がけは、難しいことではない。政治の本質をわきまえ、政治家の心得るべきことを実行しているだけだった。この時代、政治家とはすなわち敵に侵されぬ才略にたけていなければならない。その意味で、武将としてすぐれている必要があった。

猛々しい武人であることが第一義ではなかった。

松田頼重はそうした早雲像に惚れこんでいたようである。

「茶を進ぜましょうぞ」

頼重は城内の控え家に誘って、太田源六郎資康に、茶をふるまった。

「みごとなお点前でござる」

「茶事はお好きかな」

「茶は好きです」

率直に資康は言った。

「酒は気を昂ぶらせますが、茶は気を鎮めまする。私に言わせれば酒は百薬の長と申すが、茶こそ、それ以上の薬効がありまするな」

「左様……」

と、頼重も自ら一服、しずかに茶碗をかたむけている。

「茶というものは、気持に添うものだ。気が平なときは、茶もうまい。渋みがなんともいえず、気持を爽やかに、伸びやかにするが、心に鬱屈があるときは、苦みが舌に残りまするな」

「早雲庵どのも、茶はお好きでしょうな」

「酒よりは茶を、な」

頼重は大きく頷いた。

「酒にも茶にも淫することがないお方じゃ。茶はお好きだが、茶事に時を過されるということがない。茶事に淫している最中を討たれた何とか申す武将がいたが、間違ってもあのようなことは、ないお方だ」

その語尾をぶち破るように、突然、太鼓の音が鳴りひびいた。

その太鼓の音は、充分二人を驚かせるものだった。

「何ごとか」

太田源六郎資康は思わず片膝を起している。

「あれは、異変の知らせじゃ」

松田頼重はきっと眉をあげた。

太鼓の音は、狂ったような激しさであった。太鼓矢倉が曲輪ごとに設けてある。本丸、二ノ丸、三ノ丸とそれぞれの矢倉で打ち鳴らす音が、城内の邸に急を知らせるのだ。

そこへ走ってきた者がある。

「大変でございます、火災が」

「火事か、場所はどこじゃ」

「三ノ丸の厩舎でございます」

「なに、厩で？」

「はい、放火らしいとのことで」

三ノ丸の厩舎付近には、火を扱うところはない。百余頭の馬をつないだ場所である。放火としか思われなかった。

城内は騒然としていた。

三ノ丸では厩舎の馬が切りほどかれ、恐怖と不安の嘶きで右往左往していた。

ずっと乾燥していたせいもあろう、火はまわりが早く、濛々たる黒煙をあげて、燃え狂っていた。

「逃げろ、馬に踏みつぶされるな。蹴殺されるな」

逃げ惑う人々と、火を消そうとして、小桶の水を持って走る者たちとがぶつかりあい、悲鳴をあげた。

「放火した者を捕えろ」

「胡乱なやつは見つけしだい、斬れ」

侍長屋からも走り出てくる。

夕刻であった。まだ昏いというほどではない。ただ風が強い。この小田原は港だけにいつも風があるが、この日、かなりの強風で、まるで放火を助けるために吹きだしたかのようであった。

厩には藁がある。次々と燃え移り、風に煽られて、渦巻く炎は囂々と凄まじく吠え狂い、小桶の水くらいでは、炎を鎮めるどころか、かえって勢いを強める結果になっているかのようであった。

資康はただちに輩下の者を呼び、
「かような場合は、妄動してはならぬぞ」
「でも、水を汲むなど手伝わねばなりますまい」
「いや、そうではない。へたに動けば、あらぬ疑いをかけられる。われらの立場は難しいのだ。余分なことはせぬことだ」
人が信じられぬ時代なのだ。瓜田の履、李下に冠のたとえもある。乱世に生きてゆくには、その心得が必要であった。
それに、この屋敷は二ノ丸にある。三ノ丸の火の手がこちら側へ移ってくるには、まだ間があるようであった。
「しかし、間の悪いときに、火事になりましたな」
「放火だというぞ、用心せい」
混乱の際には、流言が乱れ飛ぶものだ。火事となると、一層恐怖からの叫びが、あらぬ声となって奔る。
恐怖や不安が妄想を生むこともある。
しかし、
「放火だぞ」
という叫びの、もとは、妄想ではなかった。
目撃した厩小者の声だったのである。
厩のうしろでもぞもぞしている男を見つけた小者が、怪しんで近寄ったとき、藁に火をつけるのが見えたのだ。
その男は、火種を持っていた。小さな墨壺のようなものに入っていた。藁の下に突っこむと、火吹竹で吹き熾したのだ。火吹竹は尺八のように腰に差していたのである。
その男は一人ではなかった。なかまがいたのである。
「こりゃ、何をさらす」
と、仰天した小者が、走り寄ろうとすると、物陰から飛び出した男がやにわに刃物を叩きつけた。
背を割られながら、小者は放火だと叫んだのだ。
その声は、遠くの者にも微かに聞えた。
火の手が直後にあがった。放火だという声は、そこここに起り、それは三ノ丸一円に波紋のようにひろがっていった。
火の手は一カ所ではない。数カ所で前後して起っている。
夕餉をしたためていた荒木兵庫頭は裸足のまま走り出た。
「早く火を消せ、近くの厩は叩き毀せ、風下の小屋は引き倒すのだ」
万一を慮って、城内には井戸が幾つも掘ってある。
どんどん水を汲みだす、小桶を手から手へ渡して、火にかける。
その間、兵庫頭は家来に命じて放火犯たちを探させた。
「胡乱な者は捕えろ、手向いしたら容赦なく斬れ。曲輪の出入口は閉めろ、人改めをきびしくするのだ」
火の手は風に煽られて厩を二棟焼き、馬喰小屋を幾つか焼いて、漸く鎮火するまでに、半刻ちかくかかっている。

放火した者たちは、その混乱に乗じて逃げだそうとしていた。
曲輪の出入口を閉じる前に、三ノ丸からあらかた飛びだしている。
逃げおくれた一人は、
「門札を見せろ」
と怒鳴られて、咄嗟に、
「太田家の郎党でございます。怪しいものではございませぬ」
「太田資康さまか」
「はい」
「太田どのなら、二ノ丸の松田屋敷にお出でではないか、あっちだ」
しまった、と思ったが間に合わない。その男はあわてて、またひきかえした。これは松根だったのである。
松根は二ノ丸へむかって走った。
三ノ丸から出ようとして失敗したのだ。
太田資康の郎党だと偽ったのが、かえって藪蛇になった。
二ノ丸へゆくということは、放火して速やかに逃げるという、最初の打ち合わせに反することだったが、人改めがきびしくなった以上しかたはない。
「おい、どこへゆく」
髭の強そうな男に呼び止められた。
「へい、あの……」
「逃げるのか、うぬは」
嚙みつかんばかりに喚かれて、ぎくりとしたが、
「いえ、そのような」
「消火を手伝え」
ほっとした。素姓を見ぬかれたのではなかったのだ。
松根はあわてて、井戸の方へ走り寄った。
自分が放火したのを、自分で消しにまわるのは、おかしなものだった。手桶の水を四、五回運んでから、また眼を盗んで、その場を離れた。
（ほかのやつらは逃げてしまったろうか）
小坪の住吉城から、かれらはひそかに、小田原にやってきたのである。
弥三郎春忠はこまかな命令をしただけで、小田原には来ていない。
姿を見せることを憚ったのだ。
松根たちが命令されたのは、放火と騒擾だった。
「殺しはやりませぬので？」
と、反問したやつがいる。
「やりたくばやれ、だが、そのために捕まるようなことがあってはならぬ」
弥三郎は厳命した。

「そのことに留意せよ。捕まったら、口が裂けても、白状するではない。助けにいってやるゆえ、口を割るな。この城のことはどんなことがあっても白状するな」
三浦一族の手先だということがわからなければ、何をしてもいいという。
「盗みも？」
「そうだ」
「強姦も？」
「かまわぬ」
放火と騒擾――不安をかきたてるための工作である。その中には殺人、強姦、掠奪も含まれよう。
小田原城内に何か事が起ればそれだけ北條氏の人気は落ちる。
領民の信頼感がうすれ、一族の中で相互不信が起る。
それが狙いであった。
北條早雲庵宗瑞の西相模領主としての信望は、日を逐って高くなっている。
その人気は、やがて南へ東へ、北へ及んでくることは自明の理だ。
弥三郎春忠は住吉城に入って以来、小田原城内外攪乱の役目をひきうけている。
あの大磯で家来にした連中はそうしたことには長けていた。
松根もその一人である。三ノ丸からひそかに脱出しようとして出口を探していると、すれ違った男が足を止めた。
「おい、きさま、どこかで見たことのある顔だぞ」
足軽らしい男だった。火明りを半面に受けていかつい顔が笑っていた。
「きさま、この城の者ではないな、どこかで見た顔だぞ」
「いえ、てまえのほうでは」
「知らぬ？　やい、待たぬか」
「急ぎますので」
「こりゃ、胡乱な者は斬ってもよいというお達しが出ておるのだ。待て、名前だ、うぬの名前だ」
「はあ……その、ま、松根でございます」
しまったとおもった。ほかの名を言えばよかった。
相手はおぼえていた。世間はせまい。どこで知っている奴に逢うかしれない。
「そうだ、そんな名だったな」
「……」
「大磯の、アレだな」
間違いではなかった。足軽は急に好色な顔になった。
「おんな宿の下人だったな。きさま、何をしている」
「へえ、その……」
「浮れ女を世話しているのか。誰かに頼まれて、連れてきたのか、そうだろう」

そう錯覚してくれるなら、有難い。性的なことなら、寛大なのがこの国の習慣である。
「へえ、まあ、そういったようなもんで」
あわてて、そういう顔つきに切りかえた。それで糊塗できるかと思ったが、相手はかえってからみついてきた。
「誰だえ、その果報者は、その女は美い女か」
「へえ、まあ、とにかく、いま急ぎますので」
「おいおい待たんか。おれもここのところ、女ッ気なしで、倅がカッカしているのじゃ、おれのほうにも女をまわせ」
「へえ、弱りましたな」
「弱ることはあるまい、商売であろ、幾らだ。なあにひと晩でなくていい、ひと切でいいのだ、幾らだ、昔馴染だから安くしろ」
「へえへえ、そりゃアお安くしますがね。いまは、あいにくで」
なんとかして、この場を逃れようとしたが、足軽は放さないのだ。よほど女体に不自由しているのであろう。
「あいにくということがあるか。誰かのところに女を連れて来たのだろう、そいつを廻せよ」
「――そういうわけにはまいりませんので。へえ、とにかく、二、三日うちに、またまいりますよ、お前さまの名前は」
「玉置十太夫さまの組下で金七と申せばわかる」
「へい、おぼえました、では御免下され」
「急ぐなよ、松根。明日は明日だ、今夜の女は……」
この調子では限りがない。松根はぱっと走りだした。愚図愚図していると素姓がばれてしまうのだ。
「やい、どこへ行く！」
玉置十太夫組下の足軽金七という男は、よほど女に飢えていたらしい。
北條早雲の家来たちは、戦さに勝っても掠奪や強姦など厳しく禁じられていた。当時、そういう悪辣なことも、士気をふるいたたせるための重要な条件であったから、北條家の軍律は厳格すぎたということになろう。
そのひずみが、足軽金七のような不満となって滲み出したのかもしれない。
「逃げるな松根」
金七は大声を張り上げた。
だけではない、本気になって追って来た。
「おおい、誰か、あいつを捕まえろ」
それだけでは効目がないと思ったのか、走りながら、
「捕まえろ、胡乱なやつが入ったぞ、逃すな」
その言葉が、耳をそばだたせた。
城内である。三ノ丸はいうならば城下ともっとも近い。逃げ出されたらそれまでだった。
耳にした数人が追ってきた。前方にいた男が、大手をひ

ろげて立ちふさがった。
松根は、横っ飛びに走った。背後の数人がななめに追ってゆく。
松根は逃げるのを諦めた。
「待って下され、怪しい者じゃない、決して怪しい者じゃございません」
「黙れ！　おとなしくしろ」
槍を持っていた奴が双脚を殴った。折れるかと思われるばかりの痛みであった。松根はもんどりうって転った。
「こやつ、縛り上げろ」
「ぶち殺してしまえ」
「いや、待て、調べるのが先だ」
口々に喚いている。蹴る奴がいる。小突きまわす奴がいる。松根は悲鳴をあげた。泣き声に変った。
「助けてくれ、何もしてはいねえよ、あ、あの、金七が……」
その金七は、ひき止めるための口から出まかせが、意外に事を大きくしたことに、自分で驚いている。
「いや、待ってくれ、みんな、こいつは、昔の知り人で、怪しいというほどのことは……」
と、言いかけたが、集ってきた男たちは気が立っていて、耳もかさない。
「放火したのは、こいつじゃろ」
「ふていやつだ、火つけなどしおって」
「火あぶりにして、苦しめろ、焼き殺すのじゃ」
武士たちも駈けつけてきた。
こうなると、もう、金七の出る幕ではなかった。松根には命とりの騒ぎになったのである。
松根は縛り上げられ、横目のところに追い立てられた。
横目は家士の非違を取り締る者である。
「怪しき奴を捕まえましたので、放火もこやつの仕業かと存じまする」
足軽頭は言った。金七もそのうしろで、黙って頭を下げている。
松根はもう生きた心地がしなかった。
放火犯を火刑にすることは、古来からしばしば行われている。この国の家屋敷は、いかに凝って造作しても火には弱い。
西欧の市街と違って、石や磚瓦（れんがの一種）を使わないから、火には弱い。
それだけに放火犯に対する制裁は厳しい。いうまでもなく、刑罰は常に見せしめのためだから、火を弄ぶ者を火で焼くことは、きわめて多数の意にかなうことであった。
（や、焼き殺されてしまうのかいな、おれ、火あぶりになるのか）
松根は真っ蒼になっていた。

横目は引き据えられた松根を見て、
「嘘を吐きそうな顔じゃな」
のっけから言った。
「ぶちのめせ、半殺しにするがいい、そうすりゃ、少しは、本当のことを言うだろう」
乱暴な言葉である。が、これがこの男のやり方だったらしい。下役は、心得て、弓の折れを持ってきた。
まず通常の質問を省くというのだ。戦場などで、乱破らしい男を捕まえても、まともな扱いをしていては、時間が惜しい。いつ敵が攻めてくるかわからないし、故意に虚言を弄して、陣中を混乱させることがある。
そういう場合には、嘘の吐けないほど打ちのめす。それから質問する。
弓の折れが五度六度、手加減なしに背中を打ったから、松根の衣服は裂け、皮膚は破れて血を噴いた。
「申します、なんでも申します。痛う！　やめて下され、死んでしまうわ」
松根は、恥も外聞もなく泣き叫んだ。
「じゃア饒舌（しゃべ）れ、うぬが火つけしたのであろう」
「とんでもないことで」
このことだけは口が裂けてもいえないとおもった。
「てまえは、ただ、女を……へえ女を世話する商売で」
「女じゃと、うぬは女買いか」
「いえ、女売り……へえ、御所望しだいで、肥ったの、痩せたの、大きいの、小さいの、色の白いの、黒いの……」
「黙れ、左様なごたくは城下の辻でやれ、誰が城に入るのを許した」
「へえ、その……」
松根はきょろきょろと、まわりを見まわした。
足軽の金七と眼があった。金七はあわてて口をはさんだ。
「そいつを私も知りたかったんでさ。ところが、こやつ、急に逃げだしたんで」
横目は頷いた。
「打ちかたが足りなかったようじゃな」
顎をしゃくった。
ふたたび下役は弓の折れを振りあげた。すでに血で汚れているやつである。松根は悲鳴をあげた。その悲鳴も聞えぬもののようにに打ちのめしている。その弓の折れが血でまみれ、二つに折れたとき、はじめて松根は放火を自白している。
松根の自白は、早雲の留守を預っている荒木兵庫や山中上野介たちをおどろかせた。
「ただの放火ではなかったのか」
「乱破のしわざとは思うたが」
松根はすべてを饒舌ってしまった。弥三郎春忠のことも隠そうとはしなかった。

乱破の訓練は受けたが、もともと、街道で売色の鞘とりをしていた男である。
その心情は、強い方へ、儲けの方へと傾く。正と邪の区別のつかない男だった。
いのちが助かりたい一心だった。
「たしかに、てまえも火を点けました」
と、言ったが、すぐに、
「てまえは嫌だと言ったのでございますが、なかまが、はい、てまえは、ちょっとつけただけで、あとは、なかまが」
なかまとは誰だ、と追及されると、太市や多安のことも饒舌った。
そこまで洩らしてしまえば、あとは一瀉千里だった。
弥三郎春忠のこと、住吉城のこと、小田原城攪乱のこと、すべて知っている限り、饒舌ってしまっている。
饒舌りさえすれば、放火の罪も乱破のことも、すべて許されるとおもった。
「こやつ、火焙りにして見せしめにするがようございましょう」
横目の者はすっかり昂奮していた。
たかが火事場泥棒の類いではないかと当初は睨んでいたのである。
足軽金七にしてみれば、売春の世話を頼むつもりだっただけに、これはもう、思わぬ手柄を喜ぶどころではなかった。がたがたと顫えだしている。
「火焙りにするか、磔刑にするか、殿の御帰城のあとでお伺いする」
荒木は、松根をひとまず牢に入れた上で、山中や松田頼重などと相談した。
容易ならぬことだった。
三浦のもとから、小田原城攪乱の乱破が派遣されたということは、これまでの交誼の断絶を意味する。
「殿のお留守を狙ってのことではないか」
「物見の者を酒匂川に走らしたが、敵勢の押し寄せる様子はないというぞ」
「安心はならぬ。見張りを立てて置こう。水軍も出動させるのだ」
弥三郎らが城下に潜伏しているようなら、ただちに急襲して一網打尽にするところだったが、放火したあとは、真田城へ逃げ込むことになっていたという。
おそらく、他の者も、城下にはまごまごしてはいまい。
荒木兵庫頭は、胡麻塩の眉根を寄せて、凝っと考えていたが、
「あやつ、松根とか申したやつがわれらの手に落ちたこと、表沙汰にしない方がよいかもしれぬ」
と、言った。
荒木兵庫頭の言葉は、山中上野介には意外だったのであ

る。
かれは、松根の自白を証拠として、三浦一族攻撃を考えていたところであった。
「せっかくの機会ではないか。大森を庇っている三浦義同を撃ち滅ぼすには、よい機じゃ」
「わしもそう思うたよ。が、殿はそうは思われまい」
「……」
「殿が御在城なら、笑うてこう言われるだろうな。失火ということにいたせ、と」
「そうかのう……」
上野介には、納得できないようであった。
「向うから仕掛けてきたのだ。受けて立つのが……」
「さ、そこよ。むろん、いずれは三浦をやるお心ではあろう。だがかようなことくらいで、下手に動きはなさるまい」
兵庫頭のほうが、早雲の気持を深く摑んでいた。
乱破一人の自白をよりどころとして、兵を動かすのは軽忽かもしれない。
三浦陸奥守義同がどこまで策をめぐらしているかしれないが、こうしたことも、すでに〝読み〟のうちに入っているかもしれぬ。
北條氏の軍勢が、報復の矢羽根を鳴らして、進撃してくるのを伏勢が待ちかまえているのではないか。
松根のような下人の言葉は、三浦一族の権勢に、何らのひびを入れる力は持たない。
たとえどれほどの特命を受けて潜入したにせよ、その自白は、一笑に付されてしまう。
「賤しい下人の申すこと」
とり上げるほうが、おかしい。そう突っ放されてしまうにちがいない。
弥三郎春忠ならば別である。松根はあまりにも、身分が賤しい。
武家社会にあっては、身分が軽い——つまり地位の低い者は、責任も軽い、とされていた。
罪も軽くなるのである。それは人格を軽視されていることの裏返しではあったが、それだけ気楽だったとはいえよう。
たとえば、自らおのれの城に火を放って、乱破のしわざだと言いふらし、これこれの自白があった、と、話をでっち上げることだってできるのである。
非情な時代である。城下の辻で処刑してしまえば、それまでなのだ。
「どちらにせよ、いまは妄動しないことだな」
兵庫頭は自説を確認するように繰りかえした。
むろん、遠征中の早雲には早馬が報告に行っている。折返し、指令がとどくはずであった。

「すると、奴はどうなのだ」
急を聞いて他出から戻ってきた在竹兵衛尉が、吼えるように言った。
「道灌の伜よ、あやつも一味ではないのか」
「――なんともいえぬ」
と、兵庫頭は腕をこまぬいた。
「ただ、偶然とは思えぬがな」
「放火をさせて、混乱に乗じて、殿を討ちとる……その目算できたのではないか」
「まさか、それにしては、人数が少なすぎる。従者たった五人ではな」
「いや、少ない方が、当方も安心する。安心させた上で、こちらの虚につけこむ」
上野介は、両者の間の脈絡を否定できないと睨んでいた。
そうした論議の間、黙っていた松田頼重が、遠慮がちに口をはさんだ。
「しかし、それにしては、太田資康どのの様子は、きわめて平静なものでしたな」
「ふむ……おぬしの眼を憚ってのことではないか」
上野介は、疑いを消さない。
「さ、それはなんとも……ただ怪しいふしはなかった。そのことははっきり言えますな」
資康は、三ノ丸が火事と聞くと、郎党らを集めて立ち騒ぐことのないよう、いましめている。
「もしも、何か策動するつもりならば、火事騒ぎは、絶好の機会でござろう」
「……」
「従者どもが、消火の手助けなりとも、と申しでたのを、強く圧えたそうで」
「なるほど、人物だの」
在竹兵衛尉は、感じ入ったように首を振った。
「ソツがないな」
「心得た人物だの。若いが、なかなかに出来ておる」
兵庫頭も言った。
「それだけに、底が知れぬ。今度のこと……兵衛は何と考える」
「太田が指示したということか」
「いや、そこまではやるまい。かれが来城した目的よ。三浦の差金ではないのか」
「わしは、そう思うたが」
「だとすれば、面妖だぞ。太田をよこし、同時に下人に放火させる……当然、太田に何かの動きがあってよいはずではないか」
「三浦からの指示でまいったとすれば、であろう。泰然としていたということは、放火の計画を知らなかったからではないか」

「もう一つ考えられるな」
と、山中上野介は、往時の端正だった面影を残している目もとを笑わせて皮肉な調子で言った。
「つまり、売り込みさ」
「……」
「当家に邪心を抱いていないということが、立証された」
「なるほどな、だが、なんのために？」
「それよ、悪く考えれば、三浦が当家の方針をさぐらせるためではないか。安心させた上で……」
「すると、太田は大名透破（スッパ）ということになるなあ」
語呂合わせではないが、スッパはスパイである。

秘策

早雲は戦場でこの報告を聞いている。
小田原の城に放火されたということは、敵の謀略に違いなかった。殊に、そのとき太田資康が来城していたということが、かえって手の裡を見たという気がした。
（三浦義同がやりそうなことよ）
早雲は、使い番に訊して、火事の様子を仔細に聞いている。
三ノ丸の厩舎に数カ所放火したらしいこと、間もなく鎮火したこと、焼失部分が少なかったこと、その火事の規模の裏付けとしての風の工合、消火に当ったおよその人数などこまかく訊した。
それは、放火の意図を識（し）る上からも、重要なことがらだったのである。
（義同が、ただちに攻め寄せるつもりならば……小火では済まさぬ）

乱破どもの手違いということもあるが、およその想像はできる。

（太田を先に来城させていたことといい……）

これは〝虚〟の手ではないか。

太田資康が扇谷上杉のもとから小田原に来ていて、この火事の中で、敵対行動に出ようとしなかったことは、三浦家が北條氏に悪意を抱いていない証明ともいえる。

問題は、放火犯の逮捕が、予測されてのことかどうかにかかっていた。

早雲が、使者の話を聞いたのは入浴している最中であった。

野陣のことである。風呂桶を樹の下に据えて入っていた。むろん、これはただの桶で、湯は大釜に沸かしたやつを運んで来て、注ぎ入れるのだ。こうした桶風呂は、すい風呂と呼ばれていた。

早雲は風呂好きであった。当時は風呂といえば、蒸風呂を普通はさすのであるが、野陣ではそういう設備はない。湯でからだを温めながら、あれこれと考えをめぐらす。思いがけない考えが浮ぶことが多い。

むろん、少し離れたところに数人の側臣たちが見張りをしている。

早雲はたとえ城内の蒸風呂に入るときでも、下帯をしめたままで、万一の用心を怠らなかった。

髷を結っていたときは、小柄を一本ひそませていたが、剃りこぼちて入道したいまは、刃物は持たない。

「小太郎よ」

早雲は低い声で呼んだ。

殆ど、呟くような調子だったが、どこかで返事がした。それは早雲だけに聞きとれるほどの声であった。

〈御用でございますか〉

「うむ……住吉からの乱破が火を放ったと申す」

〈承りました〉

「調べてみるか、住吉の城を」

〈仰せならば、すぐに〉

声だけである。姿は見えない。

その声は、頭上でしているようであった。

「小太郎よ」と、早雲は風呂桶の中から、頭上をふり仰いだ。「住吉の城で弥三郎めが何を考えておるか、すべて捜ってまいれ」

「三浦の方は」

「こたびの放火が弥三郎めの考えから出たものか、三浦の差図か、それを突き止めることじゃ」

ざぶっと、早雲は湯をはねて風呂桶の中に立ち上った。

水音を聞いて、小姓が急いで手拭を持ってきた。

早雲はかわいた手拭で、きゅっきゅっと肌を拭っている。赤銅色の筋骨である。太い血管が針金のように頸すじや腕

などに見える。

かれが風呂から上ったことは、風魔ノ小太郎なる忍びノ者に指令が終ったことを意味している。

頭上の声はもうしなかった。葉の音一つしない。風のように小太郎は去ったのであろう。

早雲は麻の帷子をまとってから下帯をはずした。素早く手が動く。

戦場では、寸時も油断がならないのである。早飯早支度を要求されるのはそのせいである。戦場往来の早雲は身の動きが素早い。老齢になっても、衰えはない。

（おれのすることはまだある）

まだ死ねないのだ。人間はおのおの生あるうちに為さねばならぬ仕事がある。

その目的意識が、早雲の気力の基になっていた。この年齢になっても、矍鑠たるものである。

早雲は荒川豊前守を呼ぶと、

「あとはまかせるぞ」

「御帰城に」

「小田原にもどる」

馬曳け、と、命じた。

休む間もない。かれは馬上の人となるや、一鞭くれて走りだしている。

小姓や馬廻りの者が、十数騎あわてて後を追った。

早雲には不眠とか、気鬱とかはない。そういうものは、所詮、怠け心からくるものと思っている。

陽のあるうちを精一杯、考え、行動し、充分に生きれば、夜は休息が齎される。

人間に生があり、その果てに死があるのは免れないとすれば、一日もまた、そのひとつだという考えである。

一日一日を、大事なものに生きる。一日の休息が自然な眠りになるように、一生の休息には死が与えられる。

その死を、泰然と迎えるには、いかによりよく生きるかにかかっている。充分な生は、充分な大往生となって報いられるのである。

（おのれの使命は、関東を掌握し、関東、東海に平和を齎すことだ、それを果すまでは、死ねぬ）

東へむかって馬を走らせる早雲の眼は爛々と光っていた。

早雲が帰城してくるまで、太田資康は待っていた。

待ちくたびれて城を出たのでは、放火騒ぎと関聯して疑われる。それを慮ったのであろう。

「火災があったとやら、おけがはなかったかな」

早雲は資康を引見すると、気軽に訊ねている。

気軽な調子は、その放火を気にもとめていないところを見せているのだった。

太田資康には、そうした早雲の茫洋とした態度が、何か

無気味なほどに感じられた。
早雲自身は、太田道灌への畏敬から、資康には他の者とは違う親しみを抱いていたのだが、やはり、胸の底に、
（三浦義同に言い含められて来たのではないか）
という含みがある。
それが資康をたじろがせているのだ。人間の厚みの違いというか早雲の息づかい、眼の動き、一つ一つに、尋常ではない勁さがある。
「まあ、ゆるりとしてゆくがよい、この城くるわは如何かな」
「は？」どきりとした。
早雲の真意を計りかねたのだ。
早雲は気軽な態度を見せながらちらっちらっと、鋭い箭を放ってくるようであった。
「まことに、難攻不落の……」
「ははは、左様かな。わしには脆すぎる構えとしか見えぬが」
「……」
「脆いゆえ、わしが落した」
太田資康は返事に困った。
「わしのものとなって以来、多少手は入れたが……当座のものよ。漸次、大規模に改築する所存じゃ」
「はあ」
「おぬしの父御は、城作りにかけては、非常に優れていた。あのころ、江戸城にまいったわしは、えらく感じ入ったものよ」
資康も父のことを褒められるのは、悪い気はしない。
父の道灌資長が扇谷定正に謀殺されたとき、資康は十八歳であった。
武士としてもっとも多感な年齢である。かれは、江戸を離れ、甲州へ走ったが、その後、山内顕定の庇護を受けたことで、定正に対等の陣が張れるようになったが、当初、かれが考えたのは、伊勢新九郎のことである。
甲州へ走ったのも、相模には定正が蟠踞していて通れなかったからであり、甲州を経由して東海へ出るつもりであったという。
「城のなかは見たかの」
早雲は言った。
「案内しよう、まいられよ」
いささか軽率に見える態度であった。早雲には、どんな考えがあったのか。城の内部を詳しく教えることは、この時代に危険なことである。
しかし、そこには太田資康だけではなく、ひいては扇谷の朝良や三浦義同の乗じる隙をわざと見せる早雲の深い考えが働いていたようだ。

「口が裂けても、白状するな」
弥三郎春忠は、松根たちに厳命していた。
松根が、そんなにも早く、自白していようとは、弥三郎は知らなかった。
「火事になれば、城内は大騒ぎになる。その混雑にまぎれて逃げだすのだ」
かれの知っているかぎりの城内の様子を図で示した。また住吉城にも、大森氏時代の小田原城内の建物の配置や勾配などに通じている者を呼んで、詳しく知らしめた。
「城内でも、城下でも、余裕があれば放火するなり、人を斬るなりしてもよいぞ」
「女を犯してもよろしいので」
「よい。だが、捕まってはならぬ。そのことは充分、考えてやれ、物を盗るもよい、女を犯すもよい、人を斬るもよい……城中城下を騒がせればよい。だが、捕まるな」
これは難しい注文だった。難しいが、無頼な連中には、待ちのぞんだ時でもあった。
街道の売春宿と山賊のようなことをしていた連中にとって住吉の城での生活は、堅苦しくて面白味は少ない。
たしかに、食事にも酒にもありつけるが、もともと怠け者たちなのだ。
それだけでは、
（坊主になったようだ）
と、感じた。
この連中を引き水にして、三浦家の中で、一方の将に返り咲こうとした弥三郎の思惑ははずれたようである。
三浦義同はそれほど甘くはなかった。かれが住吉の城へ入ったと聞いても、長い間、目通りも許さなかった。
「飼うておけ」
と、命じただけである。
「見張りを怠らずにな」
と、付け加えることも忘れなかった。
すでに身分が違うのだ。義同の眼から見れば、弥三郎の価値は低い。
（あの老いぼれ、どれほどに使えるものやら）
高く買わなかったのだ。
（飼うておけば……何かの足しにはなろう）と、おもった。
（老馬でも、戦場の用には立たずとも、つぶして肉を喰うことはできる）
その程度にしか考えていなかったのだ。
むろん、弥三郎にもそれはわかる。そのことで、腹を立てるにはかれは、武将の心事を知りすぎていた。
（わしが義同でも、左様に突っ放すだろう）と、頷いた。
（わしが老いぼれ馬ではないところを見せてくれる）
かれは松根たちを、いっぱしの乱破に仕立てあげるべく専念した。

（駄目だな、こやつらは……）

半歳も経つと、しかし弥三郎は絶望した。

ものになるものなら、三カ月でもなる。半歳たっても、かれらは使いものにならなかった。

だが、絶望することは、弥三郎自身を抹殺することになるのだ。かれは諦めなかった。ほかに家来がいない以上、（こやつらを使うしかない）

思ったことの十分ノ一の働きしかできないでも、まるきり行動に出ないよりはマシだ。

（それに、ひょっとして……）

うまくいくかもしれない。と、かれは万一に望みをかけた。

綿密に計画された戦さでも、予測通りにはいかないことが多い。

が、その反対に、思いもしない好結果になることもあるのだ。

戦さは水ものである。多勢の士卒によって構成されている軍勢は、いかにも頼母し気ではあるが、ちょっとしたことでも、甚だしく影響を受ける。小さな虫一匹で大将の馬が驚いてはねても、士気にひびくこともあるのだ。

そういう僥倖をアテにしているようでは、しかたがなかったが、いまの弥三郎には精一杯なのだった。

小田原領外で待機していた弥三郎は、逃げ戻って来た輩下らを住吉城に帰した上で、太市というのを連れただけで、真田城に向った。

この企ては、成功とはいえなかった。

（松根が、もどらぬ……）

松根だけ帰って来ないというのは、捕まったか、斬られたかのどちらかに相違なかった。

約束の時刻から、小半刻（一時間）余経っても、松根は姿を見せなかったのだ。

「捕まったと思うか、太市」

馬を進めながら、弥三郎は聞く。

口とりの太市は、へえ、と主を仰いだ。何と返事するべきか迷っているようだった。

「――松根のことでございますからな……」

「だから、何だ？」

「へえ、ムザと捕まるようなことは」

「ないか」

「ないとも言いきれませんがね、でも、足は速いほうで」

そのことは知っている。が、戻って来ないという事実が、弥三郎の胸を閊えさせているのだ。

「ひょっとして……箱根の方へでも逃げたんじゃありますまいか」

「――そのようなことはあるまい。逃げ道を間違えることは」

箱根の山に逃げこむことも考えられるが、やはり、東へ向うほうが安全なのだ。地の理は心得ている松根である。

「捕えられたかもしれぬ、太市、小田原へ戻って捜ってくるか？」

太市には、とてもそのような勇気はなかった。

「と、とんでもないことで。いま城下へまいったら、とっ捕まってしまいます」

「度胸のない奴じゃ」

弥三郎は吐き捨てるようにいう。

だが、太市のような男は、はじめから武士の矜持などないから平気なものだった。

「へえへえ、わっしらは、どうせ下賤な者でございますよ。生れも悪けりゃ、育ちも悪いので」

と、悪びれる。

たしかに、氏素姓からいえば、弥三郎春忠は、よすぎるくらいだ。足利氏の血を引く今川の家系であり、その名誉は東海だけのものではない。

「しようのないやつだ。氏素姓が悪くとも、人間は心がけしだいだ。其の方らには、立派な人間になろうという気持はないのか」

「へえ、立派な人間、ねえ」

太市は、馬上の弥三郎を見上げる。

その言葉の調子が、皮肉めいて聞える。

お前さんが、立派かねえ、と嘲っているようであった。

そう感じるのは、弥三郎春忠の〝現在〟が満足すべきものではないことを、誰よりも、かれ自身が知っているからではないか。

あわてて弥三郎は言った。

「立派でなくともよい。まともであることだ」

「そうでございますかねえ、誰のためなんで」

「なに？」

「誰のために、まともや、立派でなければならないので」

「誰のと申して……」

弥三郎は、反駁されようとは思っていなかっただけに、言葉に窮した。

道は川の畔りに出ていた。現在の平塚市の西郊、金目川と呼ばれている花水川の上流であった。

「どうせ、こんな乱れきった、腐れきった世の中じゃございませんか、下司は下司なりに生き方がございます」

「……」

「好きなように、好きなことをする……へえ、どなたさまもそうじゃございませんかねえ」

「たわけたことを申すな！」

弥三郎は、声を荒だてた。一言でこの男を説伏する論理が組み上っていなかっただけに、狼狽が先に来た。

「へ？　どこがたわけているので、あなたさまにしても、

北條新九郎にしても、天下をとって栄華をきわめたいと思っておいでございましょうがな」
「黙らぬか、新九郎は知らず、わしは、わしは……」
「ほれ、図星じゃ」
太市はけらけらと、夜空に嗤いを噴き上げた。
思わずかっとなった弥三郎は刀の柄に手をかけるや抜き放っている。
相手はたかが草賊あがりの愚劣な者である。今川弥三郎春忠ともあろうものが、腹を立てることはなかった。
下賤な者と諍いをすれば、おのれも下賤になる。日ごろは、そう言い言いしてきた弥三郎である。
零落して、住吉城に寄食する身が、せめて今川の血統たる矜持だけを支えにしていたのだ。
抜刀したとたん、自分でも、はっとなった。
「あっ、何を……」
仰天して太市は馬の轡を放した。
身を翻えした。その動作が、かえって殺意を誘った。弥三郎は馬上から、身を延ばすようにして、白刃を叩きつけていた。
太市の後頭部から背中へ——ざくっと斬り下げていた。が、その拍子に、重心が狂って弥三郎のからだは揺らいだ。
馬が驚いて棒立ちになったのだ。あわてて鞍の前壺にしがみつこうとしたが、蹄が路肩の草で滑った。
馬が高々と嘶いた。弥三郎はたまらずに鞍からすべりおちている。
小高い土堤の上である。素手だったら、身を庇うこともできたかもしれない。
血刀を手にしていたのが、かえって、弥三郎の自由を奪った。
転落すると同時に、かれは危ないと思い、刀は放したが、したたかに膝を打った。
足が折れた、と思った。
そのまま、ずるずると、水際まで傾斜を滑り落ちた。ざぶりと葦の生えた川の中にからだが半分くらい沈んだが、反射的に草をつかんでいる。
「誰か……」
嗄れた声をあげたが、夜の底に川波がざわめいているだけで、あたりに人通りはなかった。
弥三郎の一刀は、太市を完全に死に至らしめたのであろうか、太市の呻きも、ここまでは聞えなかった。
半身が氷のように冷たくなっている。片腕も痺れて感覚がなかった。右膝の皿が割れたようであった。
どれくらい、かれはもがいていたろう。
すでに若くはない。文字通り老骨である。このからだで、あくまで新九郎の早雲に復讐しようとしていることが、すでに、常態ではなかった。
弥三郎がこの川から土堤の上まで這い上ったのは、かなりの時間が経ってからであった。
馬は少し離れたところで、草を食べている。足萎えのようにかれは這って馬に近づいた。
馬に乗ることさえできれば、と思ったが、それは容易ではなかった。
泣きたいような気持だった。この老齢になって、こんな思いをしなければならないとは。血と泥にまみれ、弥三郎は馬の鞍にとりすがって、ぼろぼろ涙をこぼした。
その涙は、一層、新九郎への憎しみで熱く頬にしみた。
弥三郎春忠が、真田の城に辿りついたのは、深夜のことだった。
血と泥にまみれ、まるでぼろ布のようになったからだを、鞍に乗せて、真田城にやってきた弥三郎を見て、門番は驚いた。
「こ、これを……」
弥三郎は、懐中にしていた住吉城の割符を差しだした。これには城将の花押があり、弥三郎の身分を保証するものだった。
「住吉城のものか、介抱してやれい」
小頭が命じた。
医者が来て膝の傷を手当てしてくれた。
医者は、外科と接骨も兼ねている。膝の骨を触診して白い眉をひそめた。
「骨にひびが入っているようじゃな、これは養生せぬと……」
「治らぬか」
「何せ、御老齢じゃで」
若いころと違って、恢復力が弱まっているのは事実であろう。
「無念じゃ……」
弥三郎は腹の底から、呻いた。
気が張っている間はいいが、一つ歯車が狂いだすと、からだのあちこちが痛んでくる。
弥三郎はそれから十日ほどは、頭の上らぬ病人になってしまった。
長い間の疲労が一度に噴きでたようであった。半月ほどして、漸く起き上れるようになったが、脚は快癒しなかった。
右足の膝は縮んだままになり、歩くたびにかなりひどく、曳きずらねばならない。だが、それでも、歩けるようになっただけ、有難い。
弥三郎春忠は、歩けるようになると、大森藤頼に目通りを願った。
助けて貰った礼を述べるとともに、今後のことを計った。

「三浦どのから、おぬしのことは聞いていた」と、藤頼は言った。「小田原城内の騒擾を計っているならば、事前に私のところになぜ聞きに来なんだぞ。搦手などを教えてくれたのに」

「忝ないお言葉にござります」

弥三郎は伜のような若者に頭を下げた。いまの立場は似たようなものだが、大森藤頼には、

（いまに小田原城に還るぞ）

という気持がある。

衆目の見るところ、その可能性は百に一つもないようだが、藤頼とその側近は、まだその希望を捨てない。

「放火したそうだが、風向きなどを考えてしたことか。同じことなら、軍勢を城下近くに伏せて、火の手を合図に奇襲をかけるなどの方策もあったであろう」

藤頼はおのれが早雲の奇襲で城を奪われているだけに、その無念を、いつか復讐したいと考えているようであった。

「ほとぼりが冷めましたならば、左様に仕りましょう。色色と、考えております。それがしの眼の黒いうちに、必ずともに新九郎めを叩き落して御覧にいれまする」

北條早雲の逞しいところは、年齢による衰えを感じさせないことである。

いうまでもなく戦国の武将は、常に周辺の武将を宿命の敵、あるいは仮想敵と見なして年齢や健康を計っている。

豪勇の者にも年齢の衰えがくる。病いに犯されることもある。そうしたハンデを正確に見抜くことも、武将の叡智であった。

もとより一族間の紛争や感情的な対立なども大きく実力に影響を及ぼすのはいうまでもない。

度々、出てくるが〝透破〟とか〝細作〟あるいは〝乱破〟の違いがそこにある。

乱破は放火、殺人、後方攪乱を主たる任務とする。細作は透破に似たようなものだが、流言を放ち、馬や武器や兵粮などに細工する、秘密文書を盗み、あるいは読みとる等のことをする。

透破はそれらもやるが、主に情報蒐集である。忍びノ者の本来の行動といっていい。城内の配置や武器、糧食の量を調べたり、城主や部将らの血族関係やその肉体条件などをこまかく通報する。

孫子の兵法にもあるように、敵を識ることが、勝利につながるのだ。

早雲のもとにも、近隣からの透破が入ってきているに相違なかったが、早雲の年齢と矍鑠たる体軀は、誰の目にも異様なほどであった。

小田原城を奪った明応四年、早雲は六十四歳になっていた。

城主が還暦過ぎとなると、敵は乗じ易いと見る。そのためには早く、壮者に城を譲って隠居する者が多い。早雲は、すでに氏綱や氏時、長綱など三子をもうけていたが、かれらが幼いせいもあったが、未だ家督を譲ろうとしなかった。

（まだ現役だぞ）

という気持だったのだ。

かれにとって、関東征覇の夢は生甲斐だった。

栄華を目的としての城とり国とりではない。もしそうならば、伊豆一国を完全に掌握し、駿東と相西に城を持ったいま、老齢でもあるし、充分、満足すべきところだった。

隠居して花鳥風月を友とする暮しに浸ればよいのである。

無教養な者ならば、飽くなき野望にかられようが、新九郎は礼節を心得、教養がある。今川義忠、氏親に仕えた宗長などの連歌師からも、多くのものを吸収している。

かれが、隠居しようとしなかったのは、あくまで目的を達成するまで、熄まぬ気持と、戦国の武将としての自覚からだった。

（おれがやらねば……）

関東に平和はこない。

古河公方や両上杉の存在が紛糾のもとであり、この関東足利氏の残滓を払底することだと、かれは心に決めていた。そのためにも三浦一族は屠らねばならなかった。その手はじめとして小田原城奪取であり、大森藤頼の反抗も叩きつぶさねばならないのだ。

人間は老齢になると、面の皮が厚くなる。なかなか肚裡の底は見せない。顔はにこやかに笑っていても、眼は冷たく冴えている。

早雲がその胸中、何を考えているか、妻子でもわからなかった。伜の氏綱にもわからない。側近の六将にもわからない。

「わしのからだは未だ、四十歳くらいのものだ」

と、早雲は、よく自慢した。

事実、矍鑠たるものではあったが、日ごろ埒もない自慢や大言壮語を嫌っている早雲である。

敢てそうしたことを口にした真意は、一つには、かれの精神と肉体の若さを誇示することで、家臣や領民の信頼に応え、いま一つは、かれの所領を窺う近隣の敵のあなどりを招かないためであった。

（――まだ、死ねぬ……）

偽りのない早雲の思惟であったろう。

（子どもが大きくならねば）

それが、かれにとって唯一の弱点なのであった。

長男の氏綱は、文明十九年に生れている。長享元年である。したがって小田原進出のときは氏綱はまだ八歳なのだ。普通なら、孫、それも遅い方である。

早雲は新九郎の昔から幾度かの試行錯誤をくりかえして

きた。どうやら一城を預る身分となったのが遅く、すでに中年を過ぎていた。

いまとなってみれば、もっと早く男子を作っておくべきだったのだが、徒手空拳の新九郎が、他国で一旗揚げるには、子供のことなど考えるひまがなかったのだ。

（せめて氏綱が十五歳になるまでは……）

――眼をつぶれない。

非情冷酷なるべき戦国の武将ではあるが、幼い子らに対しては人一倍の愛情を抱いていた。

普通、末の子ほど可愛いという。子より孫の方が可愛いともいう。

早雲の年齢にしてみれば、氏綱をはじめとする三人の子は、末の子と同じであり、孫のようなものなのだ。

（氏綱が成長するまでは）

と、考えていたらしいことは、小田原城をとって以来、十数年の間、北條方から、三浦氏に対しては攻撃をしかけていないことでもわかる。

前に述べたように、上杉管領家にも、相模の地に野心がないことを表明して被官を申し出ているし、数年後に三浦方から、仕掛けて来たときには応戦するくらいで、小田原からは出ようとしなかった。

今川氏親の要請に応じて、三河や甲州や、遠江に兵を進めることは屢々であったが、たいてい今川の被官を集めて総大将もしくは軍師の位置にとどまっている。命を賭けるには、東漸の壮図が大きかったのである。

こちらから攻める意志はなくても、向うから攻められたら、守るしかない。

三浦義同も、うかつには攻めこまなかった。太田資康をして様子を捜らせたり、弥三郎を使嗾して放火させたりして、小あたりに当っていた。

だが、大森藤頼は、義同ほど余裕は持てない。父祖の城を奪われたのだ。

（一日も早く！）

奪還したいと焦っている。

かれは太田資康に城の内部のことを聞いた。早雲が入ってからどれくらい改築したか、その様子を聞いたのである。

むろん、軍勢を催して小田原城に攻め寄せるためであった。

中一年おいた明応六年九月、大森藤頼は千二百の兵を動員して、小田原に攻め寄せてきた。

かねがね、計画していたことではあったが、その日は、暴風雨のすさまじい日であった。かれが予定した日は、その三日後であった。かれは、大風を知って、

「天佑！」

と、思った。

三日前だということは、いうならば、動員力に不足を来たす。二千の兵力がなければと思って、集めていたのである。が、大暴風雨となれば、

（この機会を逃すではない）

と、思いたったのは、当然であろう。

だが、それは凡人の発想だったかもしれない。なぜなら、暴風雨は三日三晩つづいたからである。

かれをいそがせたのは、焦りだった。

千二百の軍勢は、少々の不備は暴風雨が庇ってくれるとばかりに小田原へ押し寄せたのだ。

風と雨は、大津波を起している。小田原の浜辺は巨浪が牙を剝いて打ち寄せ、北條家の水軍は大小の軍船を浜へ引き揚げたり、浜辺の巨松に繋いだり大童だった。

たしかに、こういう天候は望んで望めるものではない。

藤頼が天佑と感じたのも無理はない。

奇襲は北條早雲の得意な戦法である。藤頼にしてみれば、早雲にしてやられたのと似たやりかたで復讐した思いであったろう。

だが、そういう感情は冷静なるべき戦さでは余分なものだ。藤頼は早雲とは器が違うことを自覚するべきであった。

大暴風雨となったなかに、突然、千余の軍勢の来襲は、小田原城を驚愕と混乱に陥れている。

が、早雲と部将らには、事前にこの情報は入っていた。

（近々の内に大森藤頼来襲の企てあり……）

という風魔小太郎からの報告があった。

ただ、それが何時か、判然としなかった。その日時に就いては大森方でも極秘として計画を進めていたのだ。

藤頼自身が計画を三日もくりあげたのである。さすがの風魔小太郎の情報も正確を欠いたのはしかたがない。

だが、立ち直るのは早かった。

東と北から攻めこんだ軍勢は、城下に乱入するや、民家に闖入して火をつけてまわった。

外は風と雨である。雨は横殴りに叩きつけて、室内まで吹き込んでくる。

燃えあがった建具や調度は、強風に煽られて消えるものもあった。柱や壁に燃え移って天井を焼いた火も軒端を舐めたとたんに、叩き消された。

豪雨の中では弓が使えない。よほどの強弓でなければ風雨に遮られるし、火矢も利かない。

槍や打刀をふりかざして風雨の中を城へ迫った大森勢は、濠を渡り、高塀にとりついた。

塀の上にはいざという場合、楯を並べるように出来ている。後世の城と違い、城構えも頑丈ではない。

何よりも石を使うことが少ない。もともと、この国の山城や平山城には石が殆ど使われなかった。僅かに礎石や、塀の基礎の石垣などに使っているくらいである。

築地塀には、しかし、掛矢などで打ち毀されないように、瓦や石が嵌めこんで造ってある。

門扉は鉄の蝶番や鉄筋張りでがっしりと出来ている。巨木を数人がかりで打ちつけても、容易に破れはしない。

北條方では望楼に弓の達者をのぼらせ、あるいは塀や楼門の屋根からの石落しなどで、防戦した。

風速が弱まったときを狙って望楼からは一せいに矢をきって放つ。なまじ町屋に放火したのが、寄手の姿をくっきりと闇の中に浮き上らせたのである。

風の中での矢交ぜは、上からと下からとでは効率が違う。寄手がひるんだとき、追手門が真一文字に開き、どっと城兵が吐き出されてきた。

雨はまだ降っている。風もある。

凄まじい合戦になった。大森勢も城を奪還せんとして必死だったし、北條方はこの城を致すことは、箱根を越えて、韮山へ戻ることを意味する。

「退くな、退くな、攻めて来た奴らを生きて返すな」

荒木兵庫頭や大道寺玄蕃頭など老齢にも拘らず、大薙刀をふるって寄手の中に斬りこんでいった。

家老たちが真っ先に斬りこんでゆくのだ。家来たちも勇気をかりたてられた。この熾烈な戦いは半刻あまりつづいている。

そのうちに水軍も駈けつけてきて新手が増えると、大森勢はひるんできた。

早雲も乗りだした。入道頭に兜もなく小具足に陣羽織を羽織っただけの軽装で、大身の槍をかいこんだ姿である。城兵はさらに勇躍した。

「大森の息の音を止めねばならぬな……」

暴風雨を衝いての合戦で、散々に打ち破られて大森勢が北東の真田城へ敗走すると、早雲は深追いさせずに守りを固めさせた。

このまま余勢をかって追走して一気に真田城を抜き、さらに岡崎城も奪いとりましょうぞ、と進言する者が多かった。

「早まるな」早雲は、それを制して言った。「深追いすれば、伏勢に迎え撃たれるだけじゃ」

「しかし……」

昂ぶりを残した荒木兵庫頭などは、胡麻塩の髪をふり乱して、

「せっかくの好機を、ムザと」

「そうではない。当方で好機と思うであろうことは、向うでも計算済みじゃ、必ず、伏勢を置く」

永年の経験が、早雲に的確な判断を与えていた。

そのとき、すでに、早雲の胸には、次の手段が湧いている。

かれは小田原城を奪ったとき、大森藤頼の逃亡を許した。

追い討ちしようとはしなかった。

(逃げるものなら、逃がしてやろう)

そう寛大な気持になっていた。

茶々丸を追討したときとは違う。茶々丸がもしも三浦時高を頼らなければ、早雲は新井城まで軍勢を進めなかったのではないか。

相模の西と南——つまり鎌倉を中心として、三浦氏本貫の地を簒奪する望みがあったとしても、茶々丸が眼の届かないところへ逃げるなり、反攻の気勢を示したりしなかったら、敢て追い討ちはかけなかったろう。

結果的には、早雲にとって好都合だったとはいえるが、あくまでも、結果論であり、はじめから、抹殺を策していたのではない。

茶々丸と大森藤頼の場合、落城の際に、ともかく脱出している。

かれらを討ちとるのが目的だったら、逃すようなことはない。ただ殺すだけなら乱破を放つだけでも、容易なのである。

この時代の武将に共通したものは、ただ殺すだけ、ただ勝つだけのためではなく、堂々と戦場で勝つことが、必要なのであり、敵将を合戦の場で討ちとることが大事なのであった。

すでに、源平の昔のように名乗りをあげての一騎討ちの風習は廃れかけている。

いわゆる戦闘主力が団体化して足軽と呼ばれる者たちに移っていったのは、この少し前からでありそうした合戦の規模や様相の変化が一騎討ちをへらしていったのは疑いない。

だが、大将となると話は別である。合戦は大将の恣意によって計画される以上、戦場に於けるその生死が、帰趨の決定の大きなポイントにもなる。

三浦義同に比べれば、すでに本城を失った大森藤頼は、爪をもぎとられた軍鶏のようなものだった。

こうした〝小物〟は、三浦を仆しさえすれば、自然に淘汰される、と、早雲はおもっていた。

だが、小うるさく攻めてくるとなると、城士もさることながら、城下の人心への影響を考えねばならなかった。

何よりも領民が安心して生計を営むことが、領主への信頼の基になると信じている早雲である。

早雲は小田原の城を絶えず改築させていた。

城の改築はその間に攻撃されると不利になるが、また透破が入っても決定的な城内の間取り図がとれないという強味がある。

次々と改築されてゆけば、情報が狂ってくるわけだから、攻めかけても、成功は難しい。

永続的な改築を安全に進めるには、外囲いをするほかは

ない。
「城下をそっくり包みこんではどうじゃ」
と、腹心らに計った。
「城下を？」
大道寺らはあきれたように、顔を見合わせた。
「それは大変でございます。とてもに……」
「何が大変だ？」
「用材だけでも、容易ではありませぬし、手間もかかります。とても三月や半歳では」
「三年かかっても五年かかってもよい。城は如何に堅固にしても、籠城が長びけば兵粮などの調達に困るようになる。兵粮だけではない。日常のものにも不自由する。それと……女もな」
早雲はにやりとした。
腹心の六将は、つられたように、相好を崩したが、そのあとの言葉に耳を澄ました。
「城下をそっくり包みこんで、いわば城の内にしてしまえば、つまり、侍も町衆も、共に敵を防ぐことになる。そうであろう」
「なるほど、そういうことになりますが」
「城方だけで戦うのは、城下の者どもが劫掠や強姦にさらされていても助けることはできぬ。常に町衆や浜方（漁師）もわれらと一心同体になることで、敵を撃ち払うことができるわけじゃ」
「……」
「幸い、この小田原は、北に山を背負い、西に早川の流れがあり、東には酒匂川がある。南はいうまでもなく大海じゃ。自然の要地ではあるが、これを城壁で守れば完璧になる」
ほう、と太い息が洩れた。六将らは顔を見合わせた。
「むろん、万一、外壁を破られても、内の城がある。この二重構えを破って侵入するほどの強敵は、関東には見あたらぬぞ」
早雲のこの腹案は、かなり前から温められてきたものであった。はじめてこのとき、腹心の前に披瀝されたのである。
いまだ嘗つて、こうした大規模な城作りは、この国では聞いたことがない。
山城にせよ、平山城にせよ、また城館あるいは、侍屋敷にしても、いずれも、侍が戦うための防禦を第一にしたものであって、山城などは、殊に、戦時以外は留守番を置いただけの空家にひとしくなっている。山城の多くが、その麓に、日常の生活の場である屋形、あるいは屋敷をかまえて、いざ敵襲となると、山上にのぼって、敵をひき寄せて防ぎ戦う、というのが、これまでのやり方であった。
それらの遺構は今日、各地に残っている。根小屋という地名の殆どがそれを意味している。はじめ、お寝小屋と称したのが、根小屋になったともいうが、山麓を意味する根元の小屋の意もあろう。
ともあれ、源平以降、戦国前期までの山城の戦さと日常の生活は、そういう使いわけによってなされたのであり、平山城でも、この習いによって、日常生活の御殿や、侍屋敷が周辺に並んでいるほうが多かった。
あくまでも城は戦さのためのものであり、生活とは切り離して考えられていたのである。
この二元的な武家生活のマイナス点は、たとえ籠城が成功しても、根小屋をはじめ、城下の家屋敷が敵に焼き払われてしまうことだ。
早雲が考えたのは、この城と日常の生活を合致させようとしたことである。
それだけ、戦さが日常的であり早雲はこの小田原城を関東進出の拠点にするつもりだった。
城下町をそっくり城壁で囲もうというのも、その長期の計画のためであった。
「唐土では、どこの城でも、城下を高い塀で包みこんでいるそうじゃ。唐人は気が長い、城の内外で、五年でも十年でも粘って睨み合いするそうだからのう」
時間と費用がかかることを覚悟の上ならば、この国ではじめてのこころみも、効果があるにちがいない。
早雲は数日後に縄張りにとりかかった。
三ノ丸外の内濠をさらい、改築を進めるとともに大きく町の外に塀を築かせる。気宇壮大な早雲である。
かれにはすでに五代に及ぶ北條家の繁栄が予感されていたのであろう。
この内外の工事は、あるいは小田原攻めのもっとも可能な好機だったかもしれない。
が、大森藤頼は、かえって自制している。
「早雲のことだ、陥穽が設けられているにちがいない」
もとより一筋縄ではいかない早雲である。陥穽は設けてはいなかったが、次の秘策を実行に移していた。
東西城下の入口の高札場に新しい布告が立てられた。
その高札の文面は、これまでの早雲の治政を知る者には、およそ、異様なものであった。
いや、異常といっていいかもしれない。
憐れみの心ふかく、常々、民衆あっての大名だと口癖のように言っていた早雲の布告とも思えないものであった。
——上下、各々、その分に従って働かざるべからず。身体不自由にして、他に迷惑を及ぼす者、無用の存在なり。領内の盲人共如何なる身分たりとも、これを許さぬもの也……
とあって、三日限りと日限を切られていた。
如何なる身分、とは、盲人には上は検校の位から段々と、

階級があって、努力によって昇進できる。
当道の社会は制度上の官職でこそないが、目の不自由なる人々のための特許団体で時代によって差はあるが、検校の位ともなれば、小大名くらいの権勢が得られたものだ。
ともかく、これら検校、勾当などの身分がある者もない者も、ひとまとめにして、存在を許さぬというのである。
「なんと、おそろしいことよ」
「眼が悪いというだけで、首を斬られるとよ」
「いや、火焙りにされると聞いたぞ」
「わしが聞いたところでは、舟に乗せられて、海へ沈められるそうじゃ」
恐怖が、盲人とその家族や親類たちを浮足立たせた。
その高札が立てられた日から三日間のうちに、盲人たちは城下はむろん、領内から遁走した。
城下を東へ出て、酒匂河原の少し手まえに〝目病み地蔵〟というのがある。
傍に清水が流れていて、その水で眼を洗うと、眼病が治ると言い伝えられていたものだが、
「逃散するときは、目病み地蔵にお詣りしてゆけや。御利益があるというぞ」
そんな囁きが、ひそかに伝えられていた。
夜に入って逃げだした人たちはお地蔵さまの前で手を合わせたが、そこで青銭や食物の包みを貰ったという。

「お地蔵さまが下さったのだ」
盲人たちには、わからない。半盲の者も、夜闇の中で、その青銭や握り飯などを渡してくれた者の姿が見えず、
「目病み地蔵の御利益……」
と、思った。
捨てる神あれば拾う神もある。世の中はそう絶望することもない、と、希望を持ったにちがいない。
そうして三日間のうちに、盲人たちが、領内から、すっかり姿を消したと聞くと、早雲は、ただ一言、念を押している。
「間違いなく銭は渡したであろうな？」
後に、わかったことだが、城下から去るものには、前述のような方法で、銭と食物を渡したが、周辺の土地でも、それぞれに「おめぐみ」とか、「授けもの」とかいうかたちで、家にほうりこまれたり、戸口に置かれたりしてあった。
神仏のタタリや物ノ化も信じられていた時代である。不幸な者は、仏に救われると思いたかったし、また事実、慈悲ぶかい篤志家もいて、そういう個人的な救済の手を差しのべる者もいた。
この度の盲人追放の際に、ひそかに行われたその慈善が、早雲により配慮されたと知る者は少ない。
慈悲をむねとして領民に慕われて来た早雲が〝盲人は無

用なる者〟という暴言を吐くことからして、不可解である。
「偉くなると人間が変るものか」
と、家中からでさえ、非難の声が出た。
家老たちが、そうした世評を伝えると、
「いまにわかる」
と、だけ、早雲は言った。
「わしが非難されるだけならば、よい。甘んじて受けておこう」
三日限り——という日限におくれて、まだ城下でまごまごしている者もいたが、早雲は役人を制し、ひそかに連れ出してやっている。
したがって、あの異常な布告によって処刑された者は出ていない。
甘んじて、責めを受けながら早雲の胸には、
(しっかりやってくれい)
と、望むものがあった。
小田原から四方へ逃散した盲人たちの中に、実は透破や乱破たちが、混っていたのである。
いや、半ばが、それであった。この透破乱破たちは、風魔ノ小太郎が、伊賀から伴って来た者たちであった。
かれは、三浦一族の版図に、大量に侵入させることの難しいのを知って、このことを提案した。
「盲人に変して、侵入すれば、容易でございます」
と、申し出た小太郎の提案を早雲ははじめは斥けている。
城下から盲人を追放、という思いきった手段が、たとえ、敵の眼をあざむく擬態であるにしても、領主たるものの行いではないと拒んだのである。
一時的にせよ、そうした人たちを不幸にするのは耐えられなかった。
誰も好きこのんで、不自由な身になっているのではない。五体満足でも生きるに難しい世の中であるのに、少しでも不自由なところがあれば、ハンデを背負うことになる。そういう人々を歎かせるわけにはいかない。
「充分な銭を与えるのじゃ。無辜の者を苦しませてはならぬ」
早雲は決断した。三浦一族を討つことが、いまやかれの最後の願いであった。
早雲のこの奇策は成功している。
琵琶を抱えた盲人たちは、あるいは真田の城に、あるいは小坪の住吉城に逃げこんでいった。
平家琵琶を弾き語りするのが盲人の職業となって久しい。
この語り物が、のちに、浪花節や講談に形容を変えてゆくのだが、「平家」の持つ悲壮な叙事詩は、当時の武家の心を打つものがあった。
その琵琶を弾じ、語りの巧拙で、位が上下したといわれるほどで、いかに、当時の公家、武家が、これを好んだか

がわかる。
「琵琶法師が城下にまいったと聞いたが」
大森藤頼は、興をおぼえたように、家臣に命じた。
「すぐに召せ、聞きたい」
「いますぐにでございますか」
家臣は躊躇した。
「すぐだ」
「しかし……身元も知れぬ者でございます。素姓をあらためましたる上で」
「何を慮っておる。たかが、めしいた琵琶法師の一人や二人、たとえ、どのような者であろうとも、大したことはない」
「お言葉をかえすようでございますが、万一ということもございまする」
「何が万一だ」
「妙な噂を聞きましたれば」
小田原での盲人追放のことである。
早雲の謀略ではないか、という噂も、伝わっている。
「早雲という男、食わせ者なれば一応は、疑ってかかるがよろしいかと存じますが」
「ふむ……」
早雲の老獪さは、もとより藤頼は骨身に沁みて知っている。だがこの場合は、疑う余地がないように思われた。
「われらの城を乗っとって、調子づいているのだ。四公六民だの上納延期などと、領民の機嫌とりをやって、人気をあげてきたやつだが、もはや、駿豆相、三国にまたがって、漸く馬脚をあらわしたのではないか」
「……」
「彼奴の地金が出たというところだ。追われた盲人どもに罪はない」
言葉の勢いというものはおそろしい。なまじ、諫めた家臣への対抗意識もある。藤頼は、あまりにも若かった。
「早雲に追われた盲人が当領内に入ったならば、手厚く扱うてやれい」
とまで言いだした。
藤頼はそのとき、たしかにいい気持だったのであろう。
「住むところも世話してやるのだ。いかに、わしが早雲と違うかを、見せてやる。琵琶法師どもも、感泣するであろうし、聞きたい者があれば、集めて、弾き語りさせるがよい。領内の者も喜ぶことであろう」
大森藤頼がこう言ったと知ったなら、早雲は横手を打って、快哉を叫んだにちがいない。
(かかりおった!)
と。
投げた釣針に、若い藤頼は食いついてきたのだ。

早雲としては、こうまで、うまくひっかかるとは思いがけなかったにちがいない。
たしかに、かれの奇手は、多くの成功をおさめてきている。運もあろう。後から思うと、どうして、易々とひっかかるかと思われるほど、あざやかに、かれの思う壺にはまっている。
それだけ充分の考察と予測があってのことであろう。奇手とは一見、正攻法の対語のように見えるし、破れかぶれの手段のような含みも感じられるが、早雲の場合は余裕を持ってのそれであった。
そのことが成功の要因でもあったろう。
真田城下にやってきた琵琶法師は二人であった。
一人は六十歳くらいで、いま一人は三十ばかりの壮軀である。
二人とも全盲らしく、琵琶を背にして、竹の杖を突いてきた。二人は前後して来た。
壮者の方が、一日、早くたどりついた。
かれは、城の追手門に近い馬喰ノ辻で、百日紅(さるすべり)の樹の根方にどっかりと坐って、琵琶を弾じつつ、新作を語っていた。
——さるほどに
北條領の盲共(めしい)
三日を限りて追い払われて
漸く落ちのび
御当家を頼りて
かくは辿り着きにけり……
平家物語の替え唄である。切々として、泣くが如く、訴えるが如く、哀れな境遇を物語るのだ。
城下の人々は、たちまち集ってきて、この新作の琵琶唄に耳を傾けた。
城下といっても、真田城は小城であり、町の形態をなすほどにはなっていない。
農家と大して変らない規模の侍屋敷が並んでいる。
当時は日常の品物を売る店も少なかった。京や山口や駿河の府中のような大きな都市では、すでに触れ売りの中世の商業形態から、見世棚を設けて居売りする近世のそれに移行しかけている。
だが、この真田城下は、そうした発展はしていない。
城も小さいし、城士も少ない。したがって、城下は侍屋敷があるほかは、すぐに農家につづいているのだ。
「そちの名は何と申すぞ」
役人は壮年の琵琶法師を誰何した。
「木山良徳」
嘯くように、かれは応えた。
「勾当の位を持っております」
「小田原にいたのか」

「はい、十日ばかり。賑わいを聞いてまいったところが、とんだ目に逢いました。命からがら逃げてまいりました」

木山勾当はどろりと濁った眼をしばたたいた。

老人の方の琵琶法師は、一日おくれてやってきた。これは息もたえだえに青竹の杖にすがって城下へくるところを、城内の鍛冶屋に救けられている。鍛冶屋は矢尻を作るのに必要な河原の砂を採りに川をおりてきて、老法師を見かけたのである。

「すんでのところで、磔刑にかけられるところでござりましたわ」

あばら骨の浮いた胸をあえがせて、老法師は、訴えた。

もしも、家臣の中に、目の利く者がいたら、老齢で一見枯れ木のような頼りなげな姿態をしているものの、太い血管や筋肉が尋常ではないことに気がついたであろう。

それは、特殊な鍛錬をしたものだけに齎される体軀にちがいなかった。

もっとも、琵琶法師といっても眼を悪くするまでの、その境遇はさまざまである。どういう過去があるかわからない。体軀だけからその素姓は割りだせないが、しかし、透破乱破の侵入を防ぐ目安になることは事実である。

老法師の演技は、しかし、その疑いを抱かせないほど迫真的であったらしい。

「手厚く治療してやれい」

大森藤頼は、看病を命じた。

「美濃生れの増田行一勾当」

と老法師は名乗った。

「地獄から逃れた心地でござる。われをお救け下されたは仏のお慈悲」

手を合わせて、御殿の方を拝んだと聞いて、藤頼は苦笑した。悪い気持ではなかった。

「釈尊ではないぞ、手を合わされては困る。恢復した暁には、ゆるりと平家を聞かしてもらおう」

それだけでよい、と言った。

藤頼がいい気持になっていたのは、半月くらいのものであった。

十日あまり経って、老法師は武蔵をさして旅立っていった。

武蔵へ向ったのは事実だが、行先を誰も確かめたわけではない。

その数日後に、良徳勾当も奥州へ行きたいと申し出た。

「急ぐこともあるまい、当分滞在して、平家を聞かしてくれい」

藤頼は良徳勾当が気に入った様子だった。

真田城下に流れてきた盲人はかれら二人ではない。琵琶法師ではなく、弓師の息子もいたし、牛飼いの老人もいた。舟大工だったという男もいた。かれらは、親や伜や妻など

に付添われて逃げてきていた。

城下に住まわせてもらい、細々ながら、生活をはじめている。

こうした人々は、小坪の住吉城にも、岡崎城にも流れこんだ。

その一人であろう。油壺の新井城に走った男が、実は盲目を装っていた透破だということが、判明したのである。義同はただちに支城や関所に早馬を飛ばした。

その男は、〝弦召そ〟を生業としていた。

つるめそというのは、弓の弦を売る商売である。弓の弦は弓師の見世で扱うのが常だが、この弦召そは、弓弦を輪にしたものを入れた小箱を下げて、屋敷町を売り歩く。武士の姿を見たら、

「弦を召せ、弦は如何か」

と、押し売りをする。

一種の門付け、強要で、こういうのは執こくてうるさいから、留守宅で女人しかいないところでは、さほど必要でなくても、つい買ってしまう。

現代でいえば、ゴム紐売りであろう。時代は変っても、こういうことはあまり違いはない。

その〝盲目の弦召そ〟は、いささか変っていた。

「弦を召しませ、安くいたしまする。そのいわれは、この弓弦で、北條早雲庵宗瑞を射とめて頂きたいがゆえ」

と、口上した。

甲州の者だというふれこみで、過ぐる戦さに、北條勢に両眼をやられたという。

こうした憐れを誘う口上は、おおむね作り話であるが、その男、口がなめらかで、盲いていても愛嬌がある。

弦が売れると、

「御礼じゃほどに」

といって、幸若を舞う。舞いながら、好色な戯れ唄を唄う。

それが受けていた。いつも赤い投頭巾をかぶっているので、赤頭巾の弦召そ、という渾名がついていた。

その男が、盲目とは作りもので立派な目明きだとわかったのだから、三浦義同をはじめ、驚愕し、怒った。

「さては、透破であったか」

それがわかったのは、この弦召そに惚れた女がいたせいだ。足軽の後家で、おうらという名だったが、弦召その寝ているところへ忍んでいった。

城下はずれの浜辺の粗末な小屋である。用心はしていても、これは計算外のことだったのであろう。弦召そは、女の乳房に胸を圧されてはね起きた。透破にしては軽率である。寝呆け眼ではあったが、立派な目明きだった。おうらは物ノ化にあったように仰天し、親元のところに走りもどった。

咄嗟に、かれは、女の驚きを理解できなかった。いかに透破とはいえ、寝呆けていたのはしかたがない。

かれは、須臾ののちに小屋を飛びだして、城下を脱けた。が、三浦半島は、隅々まで、義同のものだ。早馬が要所に先触れして逃げおおせるものではなかった。

かれは現在の葉山のあたりで捕まった。すでに漁師に窶していたがその懐中から、異様なものが出てきた。

盲目を装うための小道具、二枚の魚鱗であった。これを両眼に嵌めて、演技していたのだ。

「さては早雲めの奇略なり、盲目の逃散者に心せよ」

早馬はその指令を届けて来たのである。

透破には第六感も必要であった。木山良徳勾当のところへ、屈強の足軽三人が来たとき、かれは、

(ばれた!)

と、直感した。

三人の目つきや語気が前日とは違っていた。魚鱗を透して、それと見抜いた。

魚鱗を上下の瞼の間にはさんで、盲いを装っているが、まるきり見えなくては、透破乱破の役目はつとまらない。どろりと灰色に濁ったように見えて、裏からは透し見えるのである。見にくいときは、裏から軽石をあてて、うすくするなど、いろいろ方法がある。

「殿がお呼びだ」

先頭の足軽は仁王立ちになってそういい、他の二人に、目くばせした。

二人が合点するのまで、見えた。

良徳は覚悟の上である。

「お召しでございますか、ははは、今日は、何を語りましょうかの」

さりげなく応対して支度をした。

「琵琶の御用ではない」

気負っていたからか、一人が、怒鳴るように言った。

それで、はっきりとわかった。

良徳は、軽く受けたように、

「ほう、琵琶の御用でなければ、諸国噺でも御所望かのう」

と、言いながら、隠し持った鎧通しで、足軽の胸を突き刺していた。

「ぬッ、わりゃ何を……」

仰天した二人に琵琶を叩きつけた。弦が切れ、胴が割れた。両の瞼から、魚鱗がはじけるように飛んだ。

「たわけめ、風魔の七方出、見破ったときは地獄行きじゃわ」

足軽の手から槍をもぎとると、三人ともとどめを刺した。

柿色の広袖の衣を脱ぎ捨てたのは、それからである。

「琵琶法師、良徳はこれで消ゆるわ」

下帯になると、足軽の具足を素早く剝ぎとって着こんだ。

柿色の衣と、そこらの調度などを囲炉裡に叩きこむ。ぽうっと燃え上ったのをそのままに、小屋の戸を閉めて出た。

天井や壁を燃やして、炎が外へ洩れるころ、この男は、城内の高みの松の梢から、城下を眺めていた。

(もうくるころだが)

老法師はいうまでもなく風魔のなかまである。真田城の人数、守りの固さ、搦手の部分、濠の深さなど、十日ほどの間に調べあげたものを持って、小田原に戻っているはずであった。武蔵を目ざしたのはいうまでもなく、疑いの眼を外らすためである。

それから、さらに五日経っている。情報を得た早雲が、もう行動を起すころであった。

ぽうっと小屋に火の手があがり城内が騒然となったなかで、梢の風魔は、城外の闇の中に、はっきりと呼応の烽火があがったのを見た。

大津波のような鬨の声が、真田城下をゆるがしていた。大軍を擁した北條勢が殺到したのである。

「敵だ」

「北條勢じゃ」

「弓をとれ、矢を放て」

狼狽した城下の将士は、着のみ着のままで、屋敷や小屋から飛びだしてきた。

すでに出火で城へ駈けつけている者は、とって返すひまはない。

戦さとなれば、家族も、兵粮や武器をとって城へ逃げこむのである。

女も子供も、あるいは家財を担ぎ、あるいは犬を抱えるなどして、逃げこむ。犬はペットであるが、いざとなったら、肉が食糧になる。冷厳な時代に生きる者には、宗教的制約も力を持たない。

早雲の戦法は常に奇襲であるといわれるが、この時代の戦さに、奇襲ならざるはないといっても、言いすぎではない。

戦さとは、敵を討つことであり勝つためのものであった。勝てば官軍という否定語は、あくまでも近代のものである。

乱世では、事に於て善悪はない。是非はない。勝つことが、善であり、是であった。勝つための手段は、すべて肯定されるのだ。

泰平がつづくと、人間は善悪にこだわり、その解釈も多様化する。宗教色が入り、教義や、道徳観で左右されてくる。

弱者は隷属化され、抹殺される。勝つか負けるかに限定されるのだ。中間はなかった。おのれだけの平和を維持させないのが、乱世であった。

権謀術数、冷酷無情が乱世の常態である以上、弥三郎春忠が劃策するのも当然ならば、早雲がこれに対応するのも、

大森氏を討つのもまた必然だった。
勝つためとは、すなわち、生きるためであった。
いかに奇襲を成功させるかは、いかに、城下での抵抗を少なくさせるかにかかっている。
早雲の軍勢は城下に押し寄せると、ただちに、侍屋敷や足軽長屋などの内外を調べ、潜む者を探しだして、抵抗する者を斬り、降伏する者を一カ所に押し籠めた。
その一方で、抜け穴や隠し道を探させる。雑兵らが分捕り品に狂奔するのは、このときである。
まず城下に攻め寄せると、仕寄りを作るのが、城攻めの戦法である。
仕寄りというのは、城からの出撃や、細作などの出入りを防ぐための柵である。
近くの木を切って柵を作る。竹藪があれば、竹を切り出して矢竹に組む。俵に土を入れて並べ重ねる。後世のような銃撃戦になるまでは、これは少なかったが、楯を並べ、騎馬での突撃を防ぐ逆茂木を集めるなどし、平山城に対しては井楼を組み上げることもあった。
戦さの巧者とは、敵城を攻める場合の仕寄りの作事が、いかに迅速か、確実か、という点でも評価される。
それくらい、城攻めの仕寄りの采配は難しいものであった。
この真田攻めに押し寄せた北條勢の先鋒は、在竹兵衛尉と葛山備中守である。
この備中守は、早雲の妻の父ではない。二代目である。したがって、早雲には義弟になるわけだが葛山氏は、先祖を遡れば、大森家と血族だ。先代が生きている間、早雲が大森家を敵視しなかったのも、そんなつながりのせいもある。
非情な時代でも人間としての感情は個々の違いがある。かれがよくいわれるようにただの下剋上の先達だったならば、もっと冷酷な行動をしたはずである。
早雲が不必要な殺戮や、城攻めや領地の切りとりを行わなかったことに、いわゆる乱世の草賊あがりとは、ちがった教養が感じられるのだ。
もっとも、親子兄弟も、血を血で洗う戦いをくりかえしているのが乱世だから、先祖が同じだということくらいは、殆ど問題にする必要はなかったかもしれない。
戦略的な眼で眺めれば、その一族意識が、万一の場合に甦るおそれはなしとしない。
味方と思って安心していると、急に寝返りをうたれることもある。
その点を留意したとすると、これは早雲のやはり年功ともいえるのだ。
在竹が二千人、葛山が千三百を率いての来襲であった。
「北條勢の来襲！」

と聞いて城内へ士卒や家族が駈けこむ騒ぎの間、追手門や四方の門は開いていた。
風魔の忍びノ者は、もしも脱出しようとすれば、この間に充分出られたわけであるが、かれは出ようとはしなかった。
（透破が乱破になるのは、これからじゃ）
と、闇の中で北叟笑んだにちがいない。
城下にも盲人を装って入りこんだ透破が何人かいる。
かれらは、城士の家族たちにまぎれて駈けこんだ。混乱の中だけに、一々、人別を改めるわけにはいかない。
いずれも盲目のふりをするのに魚鱗を眼にはめていた。
油壺の新井城で偽装が発見されてから、三浦の勢力圏内での盲人調査がはじまっている。
城内へまぎれこんだ透破たちは魚鱗をはずし、着衣を替えて、別人になりすました。
城内では、門を閉じ、仕寄りに向って矢を浴びせかけた。
現在真田城址本丸あとは天徳寺という曹洞宗のお寺の境内になっている。高さはせいぜい二十メートルほどしかない。
周辺は低い湿地帯で、濠になっていたにちがいない。
「早雲めが……」
大森藤頼は南の方を睨みつけながらばりばり歯がみした。
「奴が出馬してきたら、刺し違えても、殺ってくれる」
本丸郭の高みから見ると、夥しい長旒や旗印が城下を埋めていた。在竹兵衛尉と葛山備中守の軍勢である。
「敵はおよそ四千。配軍の様子からまだ後備えがくると見えます」
「うぬ、この小城を、大軍で襲う気か。援軍はどうした、まだ到着せぬか。岡崎城からの早馬は着かぬのか」
東北三キロあまりのところにある中郡の岡崎城には三浦の城代がおよそ三千の軍勢を率いて守っている。
義同は三浦半島の突端の油壺にある新井城にいる。伜の荒次郎義意は小坪の住吉城を守っていて、連絡は常に緊密に行われている。
注進を受けた岡崎城からはただちに小坪に連絡がいったはずである。
岡崎城から応急に援軍がくる。包囲軍の背後を衝いてくれる。
北條勢は狼狽する——
「そこへ撃って出るのだ。そうすれば、敵の立場は逆転する。やつらは、北條勢は、腹背に……」
それが望みだった。望みがついロに出た。かれは昂奮しているおのれに気がついて、口を噤んだ。
家臣の前で醜態を見せることは慎まねばならなかった。
その岡崎からの援軍が来ないと真田城は孤立してしまう。

北條勢がこれ以上増えると、援軍のくる機会はなくなる。藤頼の苛立ちは、そこにあった。

（なんということだ、これが半月前だったら……）

半月前には、岡崎城に義意がいた。

義意は巨漢であった。父の義同も体軀は巨大である。義同は、養父の時高に怨みを霽らすためにからだを鍛えた。年月をかけてからだを作ったのだ。それは倅にも及んだ。身長七尺五寸、八十五人力という。いささか誇張すぎるが、そういう評判もあるほどの巨漢であったことは否めない。それだけに、義同も大いに力としていた。

三浦氏の版図は広く、信頼できる者が多く必要であり、わが子がおのれを凌ぐ巨漢で、背丈は衆にぬきんでて見るからに、仁王の如く、力もまた、大したものであるとすれば、三浦氏の前途は洋々たるものに思われたろう。

力や巨軀は、必ずしも武将の条件ではないが、矮軀痩身非力であるよりは、プラスになること、世間一般というものは、大きく強いことを信頼の目途の一つにすることも事実なのだ。

たしかに、大きいことは、乱世にあっては、武将として好条件にちがいない。武力だけでは、天下は制せられないとしても、基盤になるものは、力であり、その強靱な肉体である。

たとえば、豊臣秀吉は巨漢ではなかったが、病身ではない。もとより才覚も大いに必要であるが、そして才覚だけでは、山賊の頭領にもなれないが馬鹿でも巨軀で力があれば、なれるのである。そこに乱世の特異な現象がある。

三浦義同にとって、倅の荒次郎義意は支城を預けるに足る存在であり、麾下の武将にも、また三浦家の安泰を信じさせることになったのは疑いない。

家臣ばかりではない。

大森藤頼もまた、

（われを支えるに三浦一族あり）

と、安心している。

義同が養父時高に迫われて、小田原を頼って来たとき、充分なことをしてやっている。時高の眼を遁れて丹沢山麓の寺に隠棲したときも大森の庇護のもとに、安全だった。むろん、藤頼が守ったのではない。父の氏頼がこの甥に同情したからだが、藤頼もまた血のつながった従兄に、実の兄のような慕しさをおぼえていた。

こうしたつながりからいっても三浦一族が、藤頼を見捨てるはずがなかった。

小田原を捨てて真田城に逃げこんだ藤頼は、嘗つての義同の立場ほどではないが、似たようなものだったのである。

かれが、三浦一族に期待したとしても、それは、かれの脆弱さでもなければ、哀れさを意味するものでもないだろう。

「――なぜ、援軍は来ないのだ」

藤頼はじりじりして待った。

早馬を走らせてから、もう一刻も経っている。

両城の距離は、わずか三キロあまり、急を聞いて武装してから、走っても、とっくに着到しなければならない。

馬蹄のひびきも、鬨の声も聞えないのだ。それどころか敵は猛攻を加えてきた。

「殿、敵が攻めこんでまいります」

三ノ丸の東の外濠が埋められたという。

そこの外濠はもっとも浅い。どの部分の濠が深いか浅いか、あの透破どもが、悉皆、小田原に通報したにちがいなかった。

もっとも浅い濠めがけて、次々と、がらくたが投げこまれた。屋敷の戸板や唐櫃や、甕や樽やあらゆるものが投げこまれて、その上に藁束、土俵などが、ほうりこまれ、半刻たらずで、足場が固まってしまったという。

「なんと、なぜ、矢を浴びせぬ」

「射ました、射ましたが、やつら楯で防ぎながら……敵の援護の矢もなかなかに手ごわく」

注進に来た男も矢傷を負っていた。

城の攻防は、濠と城壁の如何にかかっている。濠を埋められ壁を越されたら、その城の生命は大半を失ったといってよい。

真田城の三ノ丸の東の外濠が機能を失ったと聞いて、大森藤頼は蒼白になった。

「二ノ丸を固めろ、二ノ丸には絶対に入れるでないぞ」

かれは、床几から立ち上って苛々と歩きまわり、ときどきひとりごとを洩らしては、手の采配でそこらの柱や鎧櫃などを打ったりした。

その間にも、敵の喚声は近くなるようであった。

すさまじい声が津波の押し寄せるように近づいてくるのは、恐怖であった。

「――一体、どうしたのだ、岡崎城の援軍は」

かれは同じ言葉を、無意味にくりかえした。その言葉の中に、もう、援軍は来ないのだという諦めがあった。

感覚的に、かれはさとっていた。何かで遅延しているのではなく、もう絶対に来ないのだとすら思った。

そう思いながら、その言葉を口にせずにいられないのは、もはや希いというよりは、愚痴であろう。

「殿！　しっかりなさいませ」

側近の大迫太郎左衛門が膝でにじり寄った。かれは左の耳が半ば切れて、頬に大きく傷あとが残っている。これは、小田原落城の際斬られたものである。意識を失っていたので、死人扱いされたのか、あとから正気にかえり、脱出した。

半面がために歪み、口の端がひっつれていた。

「いまが大事のときでござりますぞ、気丈におなりなさらねば、士気にも及ぼしまする」
「わかっている」
答えたが、力はなかった。
「攻め寄する敵を打ち返し、その余勢で以て、一気に、小田原へ押し返しましょうぞ」
「うむ……」
不可能だ。万に一つの勝目も、もうない。藤頼は、むしろ、不思議そうに、大迫を見やった。
（この老人は、奇妙なことを言うな、頭がおかしいのではないか）
そんな眼だった。
「さ、さ、とにかく、外へ出て家来どもに号令をかけて下され、御姿を見れば、士気が鼓舞されまする」
「――出ればよいのか」
藤頼は素直に頷いた。
深い絶望と恐怖が、それこそかれの頭をおかしくしているようであった。
わーっ、わーっと、喚声は、すぐ足もとまでせり上って来るように聞えた。雄叫びや、弓弦のひびき、矢羽の風を切る、ひょうひょうという唸りなどが、一度に、藤頼を押し包んだ。
本丸の御殿の望楼である。後世の天守閣のような立派なものではない。簡素な二階作りで高欄がまわしてあるだけだ。藤頼の姿が見えたのか、矢が飛んできた。
（援軍は来ない……）
大迫太郎左衛門にははっきりわかっていた。
真田城に向った使者は、三人である。
最初の男は遠矢にかけられて討たれた。二度目は斬られた。寄手は、まず斥候の一部を割いてこの真田城と岡崎城の間に網を張っていたのである。
三人目の男は捕われた。
両城の間はおよそ三キロである。波のうねりのような起伏の間に、水田があり、沼があり、小川が流れている。
三人目の男は夜目にも白い道を馬を走らしたが、突然、馬が突んのめって、かれは、宙へ飛び、水田の中に叩きつけられた。
そのとき片脚を折ったが、いのちだけは助かった。むろん、逃げだすどころではない。
道の左右の木に綱が張ってあり、それは、騎馬がさしかかったとき、ふいに、せり上ったのだ。樹の陰に潜んでいた北條方の者が操作したのである。
捕われたかれは陣営に曳いてゆかれ、そこで、二つの首級を見た。それは、先に注進に行った使い番であった。
「お前の首もここへ並べようか」
と、小頭は面白そうに笑った。

「三つ並べても、どうせ、ろくな面でもないからな、二つも三つも変りはない」
はじめから、斬る気はなかったらしい。
使者が岡崎城に到着しなかったとなれば、真田城の士気は衰える。孤立感というものが、どれほど絶望にかりたてるものか。
その心理作戦を狙ったのであろう。
「許してやる」と、小頭は言った。「いのちだけは許してやる」
「か、忝ない……」
「だが、タダでは駄目だ。いのちの代償に、耳を貰う」
「え!? み、耳を」
「そうだ、安いものだ」
小頭が顎をしゃくると、脇にいた男が無造作に、使者の耳をつかんだ。あっと思ったとき、ざくっと、小刀で切りとっていた。
「うわっ……」
血がざっと吹きだして半面を染め、頸すじから、胸へ流れおちた。
「痛いか」
「う、う……」
「死ぬことを思えば、大したことはない。蚊に刺されたようなものじゃ」
「そ、そんな……」
「さア、行け。真田城に立ちかえって、報告しろ、岡崎の城へは一人も辿りつきませなんだゆえ、援軍はまいりませぬ、とな」
血まみれになって、漸く帰って来た男から、大迫はこのことを聞いていたのである。
わざと大森藤頼には教えなかった。悪いことは耳に入れないほうがいいと大迫は知っている。これが物に動じない男なら、衆にぬきんでた器量人ならば、どういう情報でも耳に入れておくほうがいい。
清濁併せ呑むだけの度量がなければ、濁水で腹痛を起すだけである。
大迫はつくづくと、凡庸な主人を持ったことを悔んだ。北條早雲のような偉大な男に仕える者の倖せを思った。
人間には、はじめから人の上に立つだけの力量を備えた者と、人の臣たるだけの存在があると、かれは思っている。
それは卑屈さというよりは、どうにもならない、持って生れた〝色〟の違いではないだろうか。そして、それは運命と呼ばれるしかない。
人は努力によって、おのれの人生を切り拓くことができる。だが、それにも、持って生れた気性なり体質なりが作用せずにはいないのだ。それが、運命であろう。
その努力すら、できる者とできない者とがいるという。

運命の岐路はそこでおよそ決められてしまうのではなかろうか。

（おれは家臣としては、人一倍の努力をした）

と、大迫は自賛ではなく思った。

（だが、報われたことといえば、小田原落城であり、真田城のこのありさまじゃ……）

努力が不足した、との誹りもあろう。だが、決して、怠慢ではなかった。神仏に向っても、はっきりいえる。

（おれはやったのだ、殿を鍛えもし、諫めもした……が、駄目であった）

北條早雲とその股肱たちの器量が、大森一族のそれを上廻ったのだ。

あとは精一杯、力のかぎり戦うことであった。そして、おそらく死を迎えるであろう。そのとき、はじめて、かれは武士としての華やかさを示すことができるのだ。いかに、いさぎよく、みごとな死にざまで生涯を飾るかであった。

望楼に姿を見せたとたん矢が飛んできたことで、藤頼はまたひるんだ。

あわてて、身を翻そうとするのを、

「殿、なりませぬ。ここで采配を願いまする」

大迫太郎左衛門は、肘をつかんで言った。

「是非とも……殿の采配が必要になりまする」

藤頼の奮起が、最後のたのみの綱であった。太郎左衛門は、闇を焦がす炎の明りのもとに斬り結ぶ彼我の軍勢を眺めやった。鎧の金具がぎらぎら照り返して赤く光っている。三ノ丸に乱入した敵は二ノ丸にいまも侵攻せんばかりであった。

太郎左衛門は物頭を呼んで、命令した。

「れいのものを用意させよ。本丸境の築地の上に並べるのじゃ」

二ノ丸を陥したとき、北條勢の間から、自ら凱歌があがった。

たいていの場合、頑強な敵であっても、二ノ丸が陥ちればそれまでで、降伏するしかない。

抵抗の無駄を悟るものである。だが、真田城の大森勢はひるまなかった。

「まだ殿が在すぞ、岡崎からの援軍がくるぞ」

そういう希望の声が城兵の間を流れ、必死に抵抗した。

三ノ丸、二ノ丸で戦った生残りは圧されて、本丸へ逃げこみがっしりした郭門を閉じて、狭間から、惜しみない矢の雨を降らせてきた。

北條勢の方でも、矢で応酬する。

狭間の敵を射返し、弓勢を撓めたあとに、一せいに石垣にとりつくのである。

二ノ丸と本丸は、場所によっては高いところもあるが、総体には、大したことはない。

後世のように、立派な石垣は使ってない。丸石の乱積みならいい方で、いわゆる掻上げが多い。土を盛り上げ、粘土質の土でタタキ固めて、垂直に近い傾斜にしてある。

その上に柵を作り、丸太や竹を組んだ狭間である。場所によっては、楯を並べてある。

太い孟宗で屏風のようなものを作り、弾丸除けの楯にして、効果があったと、ずっと後の彰義隊の戦さのときの志士の遺談にあるが、鉄砲弾ですら竹で防げたのだ。

いかにするどい大簇矢や尖り矢でも、火薬で発射する鉛玉ほどの威力はない。速度がまるきり違う。

竹楯に当って、ぴんと弾け、あるいは、横にそれてしまう。

そうした攻防も、しかし、時間の問題であった。

「いま一息ぞ、敵の弓勢に弛みが見えたり」

北條勢はどっと喚いた。さらに矢がはげしくなったと思うと、数十の兜虫が雪崩れるように、鉢金をかたむけて、郭の境い目に殺到した。

これは人梯子の基礎になるのである。

鉢金と袖鎧で、矢を防ぎ、べたっと、掻上げの傾斜にはりつく。その背後に抱きつくようにして、次の人段がくる。

三人目は走り寄りざまに、これを踏み台にして肩に立つ。さらに次の者が、そのうしろに——

こうして、次々と、人垣を作って、一丈余の上にある柵に手をかける。

「くそ、突き落せ」

矢尻を下に向けて射放し、あるいは長槍で、上から突き落そうとする。これを援護の矢が、狙い射る。

凄まじい攻防戦である。

このとき、狭間の間から、一せいに桶がぶちまけられたのである。

太郎左衛門が用意させていた油であった。

ざーっと、油がぶち撒けられたのだ。

「わあッ、油だ」

どろどろの液体である。頭からどっぷりと浴びて、眼も鼻もつぶれる思いで、もんどり打って落ちる。

必死に柵にすがった者も、ぬるりと滑って、悲鳴をあげて転落した。

人梯子の基になった者たちは上から油まみれの鎧武者が滑り落ちてきたから、支えようとしても、油に手をとられ、足をとられして折り重なって倒れ、ずるずると滑るばかりだった。

城兵たちは、はじめて歓喜の声をあげた。

太郎左衛門は、

（あるいは……）

と、おもった。

奇策が功を奏したのだ。

（巻き返しが出来るかもしれぬ）

かれは、全身の血が、甦ったように流れだすのを感じながら、嗄れ声をふりしぼった。

「よし、これで勝利はわれらのものじゃ、二ノ櫓を用意せよ」

新手の北條勢が藁束を抱えて殺到してくる。藁を積み、油のすべりを消そうというのだ。

たちまち、藁束や、空俵、蓆などが積まれ、梯子を幾つも運んでくる。

長槍を持った足軽たちが、梯子をのぼりながら、上からの攻撃と戦おうというのだ。

だが、太郎左衛門はそれをさせなかった。

かれはさらに二ノ手の櫓をぶち撒けさせるや、

「火を飛ばせ」

と、命じたのである。

点火された松明を、その油の上に投げ捨てる。

たまったものではなかった。さすがの北條勢も、頭から油を浴びせられ、その上に、火が落ちてきたのだ。

鎧武者も、名刀も名槍も、一度に火焔に包まれた。なまじ藁や蓆で、油を消そうとしたのが悪かった。ただでさえ燃え易い藁である。梯子も火に包まれ、鎧武者とともに燃え上ったのを、上から、槍で突き落す。凄惨な死闘である。最初の油が傾斜地を流れ、十数メートルにもひろがっていたのは、この奇策を一層、成功に導いた。

火は、油の流れにしたがって、炎を流し、攻撃軍を浮足立てたからである。

火に包まれた鎧武者が苦しみながら、ごろごろと転ると、それだけ、火の範囲がひろがるのだ。

「いまだ、いまこそ、殿、お下知を」

太郎左衛門は、声を張りあげて藤頼を促した。

「殿のお下知があれば、みなふるい立ちます、殿！」

だが、どうしたことか、凄まじい炎と、火だるまの武者たちの姿が、さながら、おのれの終焉の姿に見えるのか、藤頼は、全く声を失って、蒼白になり、ぶるぶる顫えるばかりだった。

戦さには勝機がある。況や、九分九厘まで負けている戦さが、勝機を得るのは、全く、天運である。その機をつかむか、はずすかが、天国と地獄の境い目になる。

藤頼はすでに自失していた。勝機は、短い間であった。北條勢が、驚愕と狼狽と恐怖に浮足立ったときにこそ、城兵あげて反攻に出るべきだった。

短いものではあったが、その〝刻〟はあったのである。

藤頼の怯気と優柔不断が、これを逃した。

大森氏と三浦一族にとっては、千載の遺恨事といわねばなるまい。

藤頼が、顫えて、口をもぐもぐしている間に、勝機は去

った。

北條勢は、後備えの軍勢が到着したことでふたたび、盛り返して来たのである。

むろん、死傷者は後方に運び、遠巻きにして、矢攻めをはじめる。と、見せて、実は、軍勢の一部が背後から襲ったのだ。

この両面作戦は、城方の最後の希望を微塵に砕くものであった。

真田城は低い丘である。周辺は泥田の低湿地で、ところどころ沼があり、寄手にとって、条件はいいとはいえないが、三ノ丸、二ノ丸がすでに陥ちたあとの本丸の存在力は、きわめてもろいものであった。

油と火の逆襲はたしかに効果的ではあったが、すでに石は坂を転りはじめているのである。止めることは止めても、ふたたび、もとに戻るには、常識を超える力が作用するしかなかった。

真田城を取り巻いて、夥しい旗が立ち並び、びっしりと包囲されていた。

この攻防戦は、夜明けまでつづいている。厳密には、暁までというべきだろうか。

しだいに夜の色がうすれてくるころ、城兵たちに、焦りと疲れが見えてきた。

何よりも、大森藤頼が、絶望で半ば死にかけていたことが、士気の盛り返しを虚しくさせたことだった。

太郎左衛門が、静かな足取りで藤頼のところへ来たのは、夜の底に、僅かに紅い色が東方の闇を彩りはじめたころである。

「殿、もはや、お覚悟をなさらねばなりませぬなあ」

いたわるように言った。太郎左衛門の眼は、この凡庸な主人への憐れみで、いっぱいだった。

いまはただ残念というだけで、うらみがましい気持はなかった。

「覚悟を？……余が、死ぬのか」

「左様」

深く頷いて、太郎左衛門は脇差を抜いた。

「爺、おれを、主を殺すか」

藤頼は立ち上った。

太刀を抜いて、拝み打ちに斬った。もろに肩から斬り下げている。太郎左衛門は脇差を手にしたまま、血のなかに崩れた。

あまりの呆気なさに立ちつくした藤頼の耳に、太郎左衛門の最後の言葉が聞えてきた。

「爺は……殿の死ざまを見ずに、冥途へまいることが、何よりもうれしゅうござる……」

朝焼け富士

西相の名家、大森藤頼の最期はよくわからない。誰が首を打ったか、どういう死ざまをしたか詳述した正しい記録は一つもない。

だが、北條勢の猛攻にあって真田城で敗北したことは、事実である。説の一つに、落城とともに、落ちのびようとして、泥田に馬が脚をとられ、投げだされたところを、よってたかって、首を掻かれたとか、いや、首を打ったのは、真田城の足軽なにがしとか、面白そうな話も、野乗の類いに載せてあるが、信憑性はうすい。おそらく、巷説を採っただけであろう。

信濃守藤頼は討たれた。真田城は陥ちた。北條早雲の勢力圏はそれだけ拡大された。

だが、この戦さに於ける早雲の得た名声と威名は、計り知れないほど大きかった。

それは名門大森氏を抹殺したことであり、三浦一族の片腕をもぎとったことになるからであった。

世間は早雲を非難する前に、三浦義同の出動の遅きを嗤った。

岡崎城と真田城の距離は度々くりかえしているように、僅か三キロあまりにすぎない。

馬を飛ばせば、一碗の飯を食い終らない間に着く。その近さでありながら、北條勢の思うままに真田城を陥させてしまったこと。軍勢が、城近くまで駈けつければ、相呼応して、勝利を齎す可能性があったこと。そうした好機をみすみす逸したことで、

「三浦どのの御威勢、紙貼りの太鼓にて候や……」

と、あなどられた。

これは単に、世評というだけではない。三浦氏と密接な血縁がある扇谷上杉の被官たちにとっては、将来にもつながる問題であった。

被官になっている以上、それだけのメリットがほしいのは当然である。

いざという際に助けてくれないような管領家では困るのだ。扇谷上杉の当主である朝良は、しかし、抗議の一文を送っただけで、それ以上の行動に出ることはできなかった。

後押しとしては三浦義同が居り義同を筆頭として、被官大名たちを動員して、岡崎城にはやってきたが、真田城奪還の名目がなく、ただ、威嚇的な示威をくりかえすだけに

とどまった。

「やらせておけ」

様子を聞くなり、早雲はうすく笑って、言った。

「攻めては来まい。来たら、ただちに、岡崎城を攻め陥してくれよう」

真田城と小田原城に大軍を集結させながら、表面は、平穏を保った。早雲の老獪さである。かれは、老いてますます、慎重になった。その慎重な態度は裏付けとしては軍備の充実と、領民の信頼がある。かれは悠々と、次の策を考えている。

(次は三浦どのが首を飛ばされる番であろ)

相模の各地では、そういう噂が専らであった。

それは、北條早雲の果敢な侵攻が、瞠目すべきものであったせいもあり、三浦家領分の民衆たちが、北條の勢力圏に入ることを望む声でもあった。

だが、三浦義同は信じなかった。

「たわけな、おおかた細作どもがひろめたのであろう」

と、言い放った。

それを強調したのは、弥三郎春忠である。

「新九郎めのいつもの術でござるぞ、まず、民衆を手なずけて、土台が出来たところで攻めこんでくる。これはやつらが動く前兆でござろう」

「よし、そうとなれば、こちらから先手をとってゆくしかあるまいぞ」

三浦義同は、精兵二千をもって小田原城を攻めることにした。

真田城のほうには留守勢が入っているが、直接小田原を攻めとりさえすれば、真田城は孤立する。

その作戦であった。真田城のほうでは、いつくるかいつくるかと、防備を怠らないが小田原城の方はいくぶん手すきになる。

そう睨んだのだ。むろん、三浦の方でも、斥候を放ち、防備をさぐらせた。

その上での進軍であった。

二千の三浦勢が押し寄せたと聞くと、早雲はにやりと笑って、

「来おったか」と、頷いた。

「東門を閉じよ。弓組をして固めさせ、矢交ぜをするにとどめよ」

小田原城ではすでに、外郭が出来ている。後年のものほど完全ではなかったが、東側の防壁だけは、いつ三浦勢の襲撃を受けても、びくともしないだけの堅固さになっている。

三浦義同が二千の軍勢を差し向けて、北條早雲誅戮を号した名分は、むろん、大森藤頼の弔い合戦である。

「伊豆の老妖、相模を犯すや」

相模に土着の三浦氏としては、当然の憤激であった。

ここで北條氏に一撃を与えなければ、相模はもとより、関東全域を、北條勢の馬蹄で蹂躙されるにちがいないという危惧が、扇谷上杉などにもひろがっている。三浦を後援していたことは疑いない。

三浦勢は、小田原城に押し寄せてきたが、早雲は、いくら矢を射かけてきても、矢で応戦するだけで、門から兵を出そうとしなかった。三日三晩攻めたが、同じであった。

「腰ぬけの北條方め、怯気づいたか」

散々に罵声を放ち、一たん引き上げた。その次に押し寄せたのは十日ほど経ってからである。このときも、早雲は門を閉じたままだった。三浦勢はしだいに、北條方を舐めきって、馬入川で、河原で水浴したり、馬を洗ったりするようになった。

常識的に考えると、こんな馬鹿げた話はない。戦争を仕掛けて来て、その城の面前で、武装を解き、水浴びをするなど、愚の骨頂である。

だが、その信じられぬことが起ったのだ。

早雲の戦法もまた、その信じられぬ結果を惹き起すだけのねばりのあるものだった。

三浦義同の軍勢二千が、何度も小田原城に押し寄せてきても、城門を固く閉じ、一兵も出撃させようとしなかったのである。

北條早雲の軍勢動員力は、いまや数万に及んでいるが、常時、小田原に在る士卒は二、三千ほどだ。

これは戦国時代の常駐城士としては多すぎる人数である。それだけ、早雲の日常が、戦さに明け暮れていたからであろう。

(そろそろ、三浦の方から仕掛けてくるはずだ)

という〝読み〟が、かれの胸にあったにちがいない。

それは早雲の偉大さを物語るというよりは、かれの五十年間の戦争体験が予測させたものではあるまいか。

押し寄せた敵の軍勢が伯仲する程度なら、堂々と城門を開いて、うって出るのが普通だ。

相手が少ない場合は、尚更である。

だが、そうと知りながら、相手にせず、門を閉ざし、城壁を固めて、近寄る者を射たり、よじのぼろうとする者を長槍で突き落し、あるいは、石落しで阻むなどさせるだけで、いうならば、消極的な戦さしかさせなかったのである。

「北條勢に戦意なし」

と見た三浦勢は、舐めきった態度に出たのである。

馬入川の畔りで布陣を解き、鎧を脱いで、水浴したり、甲羅を干したりしはじめたのである。

丁度、季節は六月の半ばで、盛夏なのだ。

鎧は半具足であっても、身にまとっていると重く、蒸し暑い。

「やつらは城から出る気はない。一寸ぐらい休んでもどうということはあるまい」

「そうじゃな、われらの勢いに恐れたのであろう」

「北條勢は腰抜けばかりかの」

「いやいや、われら三浦勢が、天下一ということだわさ」

「左様々々」

みんないい気持になった。

水浴して汗を流す。子供のように水をかけあったり、競泳しはじめる者もある。

暑いのは、人も馬も同じだから鞍をはずしてやり、腹帯もとり去り、川の中へ入って、ざぶざぶ馬ダワシで洗ってやる。

まるっきり北條方を無視しているのである。

最初は、それでもまだ警戒を残していたが、これが再三に及んでも、北條勢は一向に出撃して来ようとしない。

「面白いことになりそうじゃ」

弥三郎春忠はこれを聞いて、膝を打った。

「早雲めは、ひっかかる！　あやつは、こうした蔑(さげす)みには、我慢ならぬ性質のはずじゃ」

かれは義同の伜の荒次郎義意に申し出て、おのれの輩下のほかに、軍勢百人を借りることにした。

「やつがれに考えがござる」

「どんな考えか」

義意は前にも述べたように、巨漢で怪力の持ち主だ。義同も巨軀で、鍛えぬいたからだで、その頑健さをそっくりうけついでいる上に、申し分のない環境で育ったので、さらに逞しく成長したのである。

かれは、この醜悪な老人に侮蔑に近い感情を持っていた。

弥三郎春忠が、折にふれ、血すじを誇るほど、蔑みを強めた。

かれのような若い武将にとって現在がすべてであり、膂力と衆望と地位と財力を持っている者には、昔を懐しむ必要はない。

況や、氏も育ちも、この相模の三浦では誰にもひけはとらない。かれは弥三郎春忠に何も期待していなかった。今川の一族という名流の血をうけていなければ、胡乱なやつとして処刑してしまったかもしれなかった。

「申してみよ、一応聞いてくれる」

「早雲めを、おびきだすのでござる。策を設けて、城外へ誘いだしまする」

「ふうん、できるか、それが」

「十中、八九……できまする」

こういうことを申し出るには、それなりの責任をとらねばならない。弥三郎は覚悟していた。

(これが、わしの最期の賭けじゃ、今度失敗したら……生きてはいまい)

それでもいい。随分、長い年月を生きてきた、とおもう。弥三郎春忠の後半生は、伊勢新九郎こと北條早雲への憎しみと復讐のために生きてきたようなものであった。

何度、挫折したことか。こうやって、永らえているほうが、不思議なくらいだった。

弥三郎は百人の軍勢を借り受けると、おのれの輩下二十数名とともに、馬入川の河原の近くの茂みに潜ませた。

この輩下は、太市らの生残りとその後に加え入れた者たちである。むろん、素姓は、太市らと大差のない連中だった。

こんな程度の悪い家来しか持てないのは、情けないが、老いた弥三郎には徒手空拳よりもマシであった。

「早雲めの一つの狙いは、陸奥守（義同）どの。されば、この御人数の中に、陸奥守どの在りと、城内に噂をひろめるのでござる」

「なるほど、それで出てくるか」

「必ず……出てまいります。冬ごもりの蛇が、春の匂いに惹かれたごとくに」

小田原の城内に情報を流すのは簡単だった。

「陸奥守さま御出馬」

の噂をひろめればいいのである。

民衆の間で、その噂が囁かれるようになれば、城内にも通じる。

城の内に民衆の生活があるのだ。籠城といっても、小田原城の場合、規模がすでに違っている。中国の城郭のように街そのものを包含しているのだ。

この早雲の智慧は、次の代になって生かされ、この国では類を見ない広大な城域が完成する。

日常の生活が行われているのだから、民衆の間の交流はある。口さがない者たちが、いいように伝えてくれるのだ。（早雲にとって、この上の目的は三浦氏本貫の地を版図に加えることだ）

と、見ぬいた弥三郎の眼は間違ってはいない。

この、弥三郎の企みは、成功するかに見えた。

「陸奥守義同来る！」

の噂は北條勢の間にも浸透し、

「殿の御出馬を望んでおりますぞ」

と、馬廻りの者たちも言った。

かれも早雲の指揮のもとに戦場を疾駆する喜びを味わいたいのであった。早雲はしかし、もうその単純さを責めることはしない。

「わしの槍さばきは、いまだに劣えぬぞ」

と言い、物ノ具を身にまとった。

かれは老いてなお、粗食に甘んじ、肥満を避けていた。若壮のころに鍛えた体軀は、筋骨質で血管は太い鉄筋を入れたようであり、七十を過ぎてなお矍鑠（かくしゃく）たるものであった。

かれのその様子は、たちまち城下の町衆の間にもしれわたり、

「宗瑞さまが、陸奥守どのと一騎打ちをなさるそうじゃ」

「それは華々しいこと、近ごろ絶えて久しい古風な武将のふるまいよな」

人々は驚き、畏れ、好奇心と興味で、寄るとさわるとその噂で持ち切りとなった。

弥三郎春忠は、城下では、すでに、誰しらぬ者はない噂となっていると聞くと、

「それ、見たことか」

と、飛び上りたいような気持になって、

「もはや、彼奴の首は、この手のうちに入ったようなものぞ」

しかし――

そのころ、城内の早雲は、荒木や大道寺らと、一室にこもって、風魔ノ小太郎に密命を与えていた。

小太郎の矮軀は、闇にまぎれて北門から抜け、山伝いに風のように走った。

かれが真田城に吸いこまれるように消えてから、半刻たぬうちに、天ノ河の白々と流れる下を、数百の軍勢が、一燈の松明もなく、粛々と、南西へ向って進んでいた。

二千の軍勢のうち三百人ほどをして、れいの馬入川での水浴びをさせる。

「これは囮（おとり）じゃ、よいか、そのつもりで、せいぜい楽しそうにやらせい」

その日も、空は灼けていた。水を見ると人も馬も一泳ぎしたくなる。

城内の高みからも、馬入川がのぞめた。きらきら光る川水と河原に多勢の人馬が寛ろいでいる姿が望遠できる。あくまでも明るい白昼である。戦さがはじまっているというのも信じられないくらいの明るさ。平和そのものの姿なのだ。まるで行楽に来ているかのようであった。

早雲の出馬をいまかいまかと、待っている伏勢があるとも思えない。

城内から太鼓の音がとうとうとひびきだしたのは、八ツ下り、つまり三時ごろのことである。

「素破ッ、出撃じゃ」

弥三郎春忠は林の陰で頷いた。

城外の仕寄りに配してある斥候が馬を飛ばしてきた。

「いよいよでござる、出てきますぞ」

「早雲めもか、たしかに」

「まず、間違いありませぬ。昨夜は出撃のことで馬の手入れ、人数調べなど、遅くまで、ざわめいておりました」

「よしっ、これで早雲も最期じゃ」

弥三郎は、全員に指令して、すぐにも飛びださせるようにした。

それから、四半刻——
待ったが、城門は依然として、閉ざされたままである。
（どうしたのだ？）
城門が八文字に開き、早雲が肥馬にまたがって、躍りでる。
槍組がまず、穂先を揃えて、どっと突いて出る。そのあとから、騎馬が長槍をふるってくる。
むろん、城壁のはざまからは、援護の矢が、雨のように飛ぶ。その城兵らが、河原の三浦勢に襲いかかったとき、こちらの伏兵が、一度に飛びだす——という戦法であった。
（なぜ、出てこないのだ？）
いい加減じりじりしてきたとき突然、大地が割れるような喚声があがった。
疎林の中の伏兵めがけて数百の軍勢が襲いかかったのである。
寝耳に水であった。
「うわッ、なんだ、どうしたのだ」
それが敵であるということが、一瞬、信じられなかった。まるで、味方が、何か間違って、突っ込んできたとしか思えないほど、それは突然であり、思いがけないことだったのである。
それが真田城から昨夜、闇にまぎれて忍び出た、伏兵討ちの奇襲部隊であることに気がついたとき、弥三郎春忠はじめ、盛り返しの利かぬ痛手を蒙っていた。
計ったつもりが、計られる。かれらが受けた痛撃は、少なくなかった。
伏勢は自分たちの方なのだ。威かす方が、逆に威かされたのである。信じられないことであった。
（味方が間違って……）
と、思ったし、
（同士討ちではないか）
と、口をとがらして抗議しようとすらした。
だが、夥しい奇襲勢は、旗差物をひるがえし、兜のしころをかたむけて、刀槍を閃かして突っこんできたのだ。
何が何だかわからぬうちに、血がしぶき、怒号と罵声と悲鳴が交錯した。
疎林の中にあるいは身を伏せあるいはうずくまり、あるいは、矢ごろを考えて梢上にあった。
その背後を襲われたのである。
何によらず、背後というのは、弱い。鎧には背中に押付という板がある。旗差物を立てたりする場合に、背中を保護するわけだが、この押付に、奇襲勢の放った矢が突っ立ち、揉烏帽子を貫いたり、内腿に突き刺さったりした。
その狼狽と混乱は、当然、馬入川の畔りで休んでいた者たちにも波及している。
囮になっているはずが、とんでもない方向から、敵があらわれたのだ。
「敵だ！」
仰天し、川から駈け上る。河原で甲羅を干していた者は、あわてて物ノ具をまとい、刀を抜き、あるいは薙刀に手を伸ばす。
馬を洗うのに、鞍はむろん腹帯まで、はずしてしまっている。はだか馬に乗った者。馴れないので、馬が棒立ちになって、すべり落ちる者。
かれらは、談笑しながらも、時々城の方をぬすみ見ていたのだ。その城からは、誰も出て来ないで、背後から、思いもかけない軍勢が襲って来たのである。
疎林の中から、馬入川の畔りにかけて、剣戟のひびき、馬の嘶き、物ノ具の触れあう音。叫喚が渦を巻いて、血臭が漲った。
奇襲の軍勢にくらべて、三浦方は数倍である。最初の驚愕と動揺と狼狽の時が過ぎれば立ち直る。
「敵は寡勢じゃ、ひるむな」
弥三郎春忠は叱咤した。
嘆れてはいるが、戦場往来の声である。その督励の効果はあったかに見えた。
そのとき、この合戦に応じるように、太鼓の音が鳴りひびき、陣鉦と法螺の音が城内から聞えてきた。
見よ。
城門がさっと開けられるや、地軸をゆるがすような鯨波とともに真っ黒い鉄砲水が堰を切って噴きだすように、夥しい軍勢があふれで、怒濤のように進撃してきたのである。
「何ということであろう、いま一息のところを」
弥三郎春忠は、ばりばりと奥歯を噛んだ。
北條勢の、これは明らかなる作戦であった。計ったつもりが計られたのだ。
（負ける！）
弥三郎春忠には、この合戦の成り行きが、即座に予見できた。
（死!?……）
と、感じたとき、かれは采配を投げ捨てている。
（死んでたまるか、死ねぬ！）
逃げるのだ、とおもった。逃げる。逃げ延びる。かれにとっては、戦場から逃げることも、うしろを見せることにも、もはや、恥という意識はなかった。
恥を知る、には、すでに老齢をとりすぎていた。かれを支えていたのは、
（早雲めの首を掻きとる）
その希いだった。
早雲に勝つ。戦さに勝つだけでは足りない。かれの築きあげた人生、覇者の名誉をひき裂き、恥辱を与え、面罵して、おのれの優性を誇示する。

すでに弥三郎のその執念は、若いころの思いから逸脱したものになっていた。

はじめは、旅牢人ごときに負けてたまるか、というエリート意識にすぎなかった。

今川の血筋の者が、素姓の知れぬ旅牢人に負けないはず、という思い上りだったのである。

かれの眼から見れば、伊勢新九郎は一介の旅牢人であったろう。

新九郎の素姓には種々の説があるが、現在では、生国を備中とする者など、かなり研究が進んでいて、嘗つてよくいわれたように、後年の松永弾正や、斎藤道三などと比べられる、〝素姓あやしき者〟という巷説は、衰退している。

伊勢平氏の出にしても、備中説をとるにしても、とにかく、若年のころには、京の足利将軍家に仕えていたのであるから、賤しい生れではない。

ただ、当時の交通事情などから見ても、情報の疎通が、排他的空気を醸成していたであろうことは推測に難くないのである。

その意味で、東海の雄であった今川家の人々が、おのれの世界に胡坐し、他国の事情や人物にうとかったのは、しかたがない。

殊に今川弥三郎の驕慢な性格は他を見下して、真実を見ぬこうとしなかった。

その失敗が、三十数年後になお、うらみを残しているのである。

かれは、巧みに樹々の陰から陰を伝わって、戦線から、離れようとした。

幸いなのは、夏草が生い茂って弥三郎の痩軀を隠してくれることであった。

（もう大丈夫だ）

と、思ったとき、馬蹄の音が近くで聞えた。

草の間から眼をのぞかせた弥三郎は、あっと、思わず声をあげるところだった。

弥三郎の眼は、大きく瞠られ、真っ赤に充血していた。

（なんと……彼奴ではないか!?）

騎馬は三頭。

馬の口とりと、馬まわりの長槍の者が五人ばかり。それだけの人数である。

まだら馬に乗っているのは、疑いもなく北條早雲庵宗瑞であった。

死んでも、その容貌は忘れぬ。憎い、仇敵であった。

（彼奴！……）

草がそよぐほど、弥三郎春忠は呻いた。その唇から洩れる息は火のように熱い。

逃げるつもりだった弥三郎が、草の根をつかんで、からだの顫えに耐えたのは、

（千載一遇の機会じゃ……早雲を殺せる！）

と、いう思いが、胸いっぱいにふくれ上ったからであった。

（いま殺らねば……）

殺るときはない。

距離はおよそ五間。

弓矢が手にないのが残念だった。

（今度は間違いない、本物だ、影武者ではない）

伊豆では失敗している。影武者を殺している。あのときは、笠をかぶっていたので、誤魔化されたが、今度は間違いない。

入道頭の早雲は、広袖の衣をまとい、腹巻（胴鎧）に草摺脛当の姿である。

殺れると思うのは、弥三郎だけではあるまい。すでに北條早雲は、関東で五本の指の中に入る存在であった。その武将が、これだけの小人数でいる折など、めったにあるものではなかった。

弥三郎は、刀の柄に手をかけた。

早雲は、手に軍配団扇を持ち、高くかかげて、左右の将に何やら指示している。

その一人は、葛山備中守でありいま一人は、多米周防守にちがいなかった。

（もう少し、近ければ）

一跳びで、早雲の馬に飛びつければ——と、そのことを残念に思った。

こうなったら、尋常のふるまいなど、考えることもない。馬を切ればよい。馬の足にでも刀が届きさえすれば、傷つけられた馬は、痛みと怒りで、はね跳び、早雲をふり落す。

落ちたところへのしかかって、首に刀を擬す。

まわりの者も、そうなると、手が出せないはずだ。たとえ、多勢にめった斬りにされようとも早雲を殺せば、弥三郎春忠は本望なのであった。

（しかたがない、まず、鎧通しを投げるか、馬の腹に！）

そう思いついて、鎧通しに手をのばしたとき、早雲が、からからと高い声で笑うのが聞えた。

（くそ！　ここにわしがいるのも知らで）

気持よさそうに。見ておれ、討ちとってやる、どんな顔をするか。かれは鎧通しをそろりと抜くや、さっと投げた。鎧通しが、キラリと陽をかえして光り、早雲の馬に向って糸を引くように、飛んだ。

と、同時に、弥三郎春忠の痩軀は、草むらから、はね上り、風を巻いて走った。その手に打ち刀が抜き放たれた。

「危ない！」

誰かが叫んだ。

その周囲の誰の姿も、弥三郎の眼には入らなかった。かれの眼の中には、早雲だけがある。

太陽を凝っと見つめて、眼を閉じると、残像が残る。周辺がきらめき、太陽だけが、黒く網膜に灼きついたように残るが、いまの弥三郎の眼の中の早雲が、それであった。

他の一切が、かれには無であり虚であった。

眼にもし閃光があれば、それは一条の光の箭となって、早雲を射たにちがいない。

弥三郎の痩軀は枯葦の跳ぶように、馬上の早雲を目がけている。

やはり、あわてていたのであろう。

かれの手裡から、白光を曳いて走った鎧通しは、早雲にも、その馬にも命中しなかった。

馬の鼻面を掠めたにすぎなかった。

馬が驚いて、棒立ちになる。鞍上の早雲が手綱を握りしめるのが見えた。弥三郎は駈け寄りざま、その早雲に斬りつけた。

かれは無念なことにすでに五体満足ではない。片手も、片足も不自由である。

刀の伸びがなかった。

(あと一寸……)

一寸の近くで、刃は空を切った。

嘗つての壮軀であったら、確実に、早雲を傷つけることができたであろう。

「ぬッ、ぬッ！　ぬう」

どうしたのだ。なぜ、切れないのだ。なぜ、刀が早雲にさわらないのだ。

弥三郎は惑乱した。かれの耳に、周辺の騒音が、わーっと聲するばかりに聞えるだけで、言葉の意味も、わからなかった。

「やれ、斬れ」

「斬れ、叩っ斬れ」

顔が、刀が、槍が、頭上で、眼前で、左右で躍った。どこを斬られたのかも、打たれたのかも弥三郎は気がつかなかった。かっと全身が熱くなり、眼の中に火が燃えた。世界が真っ赤になり、かれはなおも、刀をふりまわしていた。

「殺すな！」

その声だけは、惑乱した耳にもなぜかはっきりと聞えたのである。

それが、早雲の声だと知ったとき、かれの劣等感はこの上ないものになっていた。

「殺してはならぬ、押えよ」

なんと、悠然たる言葉であったろう。

はねまわる馬から落ちもせず、この余裕を持った男に比べて、なんと弥三郎自身が、卑小なものに見えたことか。

「ぬう……、殺せ」

かれは血を吐くように叫んだ。

手から刀を叩き落され、槍の柄で足を薙ぎ払われ、草むらに転ってからも、弥三郎はまだ、手足の動けるところは動かしていた。

髪は逆立ち、眼は裂けんばかりに瞠られ、口は動いていた。

「殺してやる、殺してやる」

それは呪咀というよりは、いのちの叫びだった。目的を遂げるまでは叫びつづける執念が、弥三郎春忠を、この世のものならぬ凄惨な姿に見せていた。

数カ所を斬られ、殴られ、全身が朱に染まっていた。そのからだで暴れまわるのだ。血はさらに噴きだし、白髪を赤く染め、顔は眼も鼻もないばかりに汚れていた。

あらんかぎりの声で喚きつづける。声には限度がないつもりであった。

「殺せ、殺せ、早く殺せ」そう叫んだ口の下から、「殺してやる、殺してやる、殺してやる」と反対のことを喚き散らすのだった。

矛盾しているような言葉も、弥三郎春忠にとっては、矛盾ではなかった。

それはかれの六十余年の生涯のすべてを凝集した叫びだったのだから。

早雲を、

「殺す！」

のが最終目的であり、それに失敗した以上、

「殺せ」

というしかない。

もはや弥三郎には、何も残されていなかった。

今川氏の血統だという氏素姓の正しさも自己満足の条件にすぎなかった。非情な世間は、氏素姓だけでは、頭を下げない。現世的に、それが社会的地位と結びついたときにはじめて増幅して、畏敬の眼をむけるのである。

身分もなく、金もなく、妻も子もなく、肉体は衰え、見るかげもない姿となって、なお、かれを生きさせているのは、ただ、早雲への対抗意識にすぎない。

早雲をいまの地位から引きずりおろし、顔を土足で踏んづけ、唾を吐きかけてやりたい。それさえできれば、あとはもう死ぬだけであった。

その意地が、生き永らえさせてきたのだ。

かれの惨落に比べ、早雲の今日は何と偉大に見えることか。

男児も三人持っているという。有能な腹心に守られ、数千の軍勢と、幾つもの城を持ち、さらに大飛躍を遂げんとしている。

そこには雲泥の差があった。

何がこの運命を岐れさせたのか。

持って生れた運か。出生の違いであろうか。人生観の違いか。目的意識の違いか。

茶々丸攻めが、新九郎を今日の早雲にのし上げることになったと同時に、義同をも、三浦の後継者としての地位を与えることになっている。

その意味では、義同は、早雲に感謝するべきだし、恩義も感じねばならない立場であった。

が、義同にしてみれば、

（おれの力で、得た地位だ）

といいたいのだ。

おのれを恃む心の強い者ほど、そうおもいがちだし、事実、義同は、かれを慕ってきた将士を率いて、養父を攻めたのだ。

早雲とはたんに共同戦線を張ったにすぎない。恩義というほどのものはない、とおもっているだろう。

それだけに、かれの扱いは早雲にしても難しい。

三浦氏は前に述べたように南相模では、連綿たる家柄である。その上、扇谷上杉氏に生れての養子という、まことに名実ともに、支配者たる存在なのだ。

当時の世間の眼は、その権威を認めるに吝かではなかった。

むしろ――

北條早雲のほうに、疑惑の眼がむけられる。

早雲の出自について多くの異説があるが、かれの後半生の行動の中で、もっとも、隘路をなしたのは、この東海豆

「殺せ、殺せ……」

叫ぶ声もしだいにかすれてきて唇だけがぱくぱく動いているのを早雲は馬上から見おろして言った。

「哀れなやつだ……傷の手当てをしてやれ」

この戦さは、早雲の才覚によって圧倒的な勝利を得た。

三浦勢は過半数を失い、ほうほうのていで逃げ去った。

「このまま、後を追って、一気に新井城まで攻めてまいっては」

と、荒木や大道寺たちは提案したが、早雲は首をふって、

「いや、三浦を舐めてかかっては痛い目にあおうぞ」

と、慎重だった。

東は大磯のあたりまで追い、東北に逃げた者を、岡崎城の近くまで追っただけでさっと、兵を引き上げさせている。

「これだけ打撃を与えただけでも義同には相当こたえたはずだ」

早雲は、義同を知っている。

かれを足柄山麓の寺に訪ねたときのことを思いだす。義同は一介の学生とも見まちがう生活をしていた。

養父時高に逐われていた時期である。

むろん、そのころから、かれは今日ある逞しい面がまえで、凛然たるところはあったが、当時の新九郎から見ても、若いという感は免れなかった。

相の地に、出生も育ちも由縁がないことであった。

かれが、反早雲の人々にとって、

〝一介の旅牢人あがり〟

あるいは、

〝素姓あやしき者〟

あるいは、

〝下剋上の典型〟

などと罵られる理由の多くはそのゆえであろう。

現在でも辺境にゆくと、排他的である。この国にかぎらない。人間は保身のために、そうなるものだ。早雲の苦労はそこにあった。

所詮、人間は弱い。

辺境の排他性も、部外者への憎しみも、おのれ可愛さからきている。それは、敵を恐れる心の裏返しのほかの何ものでもない。

それはある意味で、たとえば郷土愛の反動性でもあり、一概に否定すべきではないにも関らず、やはり、因習の弊は免れ難い。

伊勢ノ新九郎は、伊豆でも相模でも、

〝ヨソ者〟

であった。

だからこそ、かれは、北條家と婚姻し、北條を姓とした。

その苦心も、牢固たる郷党への対抗策であり、懐柔策でもあった。

そうした点を、否定する者は、指して老獪と称し、狡猾と称う。

だが、かれが行った政治には非難すべきはない。

ヨソ者であるから、害を為すと見るのは早計であろう。

土地の者だから、善と目すのもまた。

ヨソ者や流れ者という非難に与える答えは、ただ一つである。

善政を行うほかはない。大いなる政治への抱負は、この乱世の劫火をいかにして鎮めるかが当面の課題であった。

群雄の割拠が、地上を焼き亡ぼしてゆくのだ。強を圧えるには、さらなる強を以てするしかない。

かれが東海の小城の主として一被官大名になって抱いた目的は、ここにあった。

「吾人出でずんば」

豆相から手を伸ばして関東を手に掌握する。そのとき、はじめて、この広大な土地の劫火は熄むのである。

かれにとっては区々たる郷土愛や、名跡など、本来、問題とするにたりなかった。

劫火は、もはや誰の力をもってしても熄まぬところまできている。それを鎮めようとする者に、名流や顕門の証が要るだろうか。

（火は消せばいいのだ）

そのためには、むしろ、名門にこだわらない捨身の努力と献身が必要であった。

かれの事蹟の中でこればかりは、誰も批判できないことに、れいの四公六民、三公七民の年貢率がある。

平時でも、五分五分であり乱世は戦費がかかるから、むしろ一般には逆であった。

この思いきった措置は、民衆への愛から出ていた。悪口をいっても、せいぜい人気とりという以外にない。真似でも親孝行はせよという。多くの民衆が、救われたことを思えば、人気とりうんぬんは徒らな誹謗にすぎないことがわかろう。

かれは、多くの大名たちのように奢侈をもとめなかった。したがって、そうした余分の費用は必要なかったともいえる。

戦国大名の多くが、名利をもとめていることは、各々の逸話を見れば、よくわかることである。それは割引いてもなお、余りがある。

たとえば織田信長にしても松永弾正にしても、細川幽斎などにしても、豊臣秀吉にしてもそれぞれに美術工芸品を私有し、誇示し、権力の象徴とさえした。大きくは城が、たんに戦さの用とするだけでなく、華麗な建造物として、衆目を愕かせ、恐れさせたし、一個の壺に万金を投じて悔いなかった。

それを高尚な趣味と見るのは俗眼である。高価のゆえに貴し、とするのは、俗の最たるものだ。

北條早雲には、そういう類いのものを持ち、耽溺した話が一切ない。

話が飛ぶが、千利休が愛でて以来、ルソン壺は一国一城を傾けるほどの価値を持つに至ったが、これはフィリッピン諸島で古くから小便壺に用いられていたものに過ぎないという説がある。

その当否は別としても、当事者の評価と、ものの真の価値とが違うことを考えれば、松永弾正などが平蜘蛛の釜のために信長に滅ぼされたという話ほど、哀れで滑稽なものはない。

同じ戦国時代でも、早雲のころは初期であり、時代にずれはあるにしても、モノに執着し、虚栄に憑かれる愚かさは同じであろう。

安土城をはじめとする白亜の高層石造りの華麗な城郭が、この国の建築学上の貴重な遺産であることは論を俟たないが、そのゆえに暴戻残虐な殺戮政治を行った信長を許していいものではない。単に功罪では片付けられないものだ。

かれらが、その万金を投じて趣味性を満足させたことも、今日安土桃山文化として、評価される風潮を生んだのは事実だが、その財力が、民衆の一人一人の血と汗の結晶であったことを考えると、手放しで礼賛できないのである。

北條早雲には、建造物も調度什器にも、偏執することがない。

かれの遺訓と伝えられるもののなかの、〝刀衣裳、人のごとく結構に有べしと思ふべからず……〟とあるのを見ても、徒らに銘刀をもとめていないことがわかる。

また、

〝少の隙あらば物の本、文字の有物を懐ろに入、つねに人目を忍び見るべし……〟とも言っている。

学問にはげむことを教えている。

道具や調度に淫しないことは、無学を意味しない。

その点は、はっきりと言っている。

〝歌道なき人は、無手に賤き事也。学ぶべし……〟と。

歌道は、今日いうところのただの歌ではない。それが文学を意味していたことは、つづけて——常の出言につつしみ有べし、一言にても人の胸中しらるる也。

と、言っていることでもわかる。

高価な調度什器などの道具をもとめるのは、趣味性だけではなく、財産価値として、蓄財にもなる、という反撥もあろう。

だが、早雲はこう言っている。

「蓄財の心懸けは、当座のみにてよきものなり……」

その言葉通りだったかどうか確証はないが、かれにしても、武器や、兵粮などの点で、財力が必要なことは知っている。徒手空拳からはじめただけに、特によく知っていたのではないか。

かれが言いたいのは、徒らに、蓄財せんとして、足もとがふらつき、人の恨みを買い、人を苦しめては、結局、得にならぬ、ということである。

もっとも、早雲の言葉の意味は、自信から出た見通しに裏付けされた独自のものがあるので、一般的ではないかもしれない。

「——（当座は）ひたすら兵馬を養い、合戦に臨み、これに勝つ……宗瑞の孫の代に至れば金銀を蓄えること、不要にならん」

早雲から数えて三代——ということになれば、扇谷、山内の上杉家の勢力は衰え、北條家が関東の覇者となっていよう。

そうなれば、被官も増え、自ずと衆望が北條家を支えるようになる。

むろん、それにこたえる善政をしなければならぬことはいうまでもないが、その点に関しては、早雲は、おのれの死後も、代々、家が繁栄することを信じて疑わなかった。

（わしの家訓を遵法しさえすれば……）

そのためにも、腹心らにも言い含めていたにちがいない。

「関東十箇国を領有するなれば、この地方の兵火は熄む。されば金銀をばら撒かずとも、よき家来も増え、働く者も

喜びを見出すようになる」

国の繁栄は、したがって、領主の力と仁徳にあると、かれは信じていた。

かれの政治の力学は常に二面性を持っていたといってよい。民衆の至福を願うことと、拮抗する敵を撃つことだ。

北條早雲を評して、マキャベリアンとなす人が尠くない。だが、それは武断的な一面だけを見てのことではなかろうか。武士が武断的であることは当然であり、またそうでなければ、戦乱が治まることはない。

人間の歴史が、そのすべてを証明している。口で平和を唱えて平和はくるものではない。乱世には多くの宗教人が平和を齎そうとして努力はしている。

が、その一つも、成功してはいない。人間の欲望は教義や説教だけでは、無くなるものではない。この乱世の兵火を少なくするのは、より大いなる力で圧えるしかなかった。油田の火事には、ニトログリセリンを大量に爆発させねば、治まらぬのと同じ理屈である。

マキャベリアンをかたち作っているものは、冷血と野獣性と功利性と、病的なまでの征服欲である。

北條早雲には、そのどれもない。

かれが単に征服の快感を持ち、そして、そのことで前の三つの条件を満たそうとするならば、困難な豆相に手を伸ばさずとも、今川家を乗っとるだけで充分であったろうし、また、その方が容易だったはずだ。

六十四歳という高齢になって、やっと相模の入口にまでしか侵入できないほどの迂遠な道を歩かずとも済んだのである。

かれが今川竜王丸と称していた氏親を実の甥のように感じていたせいもあるだろうが、真のマキャベリアンならば、そうした感情そのものをかなぐり捨てるはずだ。

たとえ、愛人の北川どのの血をわけた子であるにせよ、そうした情にひかされるはずがない。

情に動かされるというだけでもマキャベリアンの資格はない。早雲はその点から見ても、心の温かさを持つ、きわめて普遍的な人物だったといえる。

ただ、努力の人であり、強靱な神経を持ち、そして、人生を無駄に過すことをしなかったとだけはいえる。

だが、そうであるからといって、幼少のころから天才的であったとか、神童だったなどと付会する気は毛頭ない。むしろ、一応名流の端に生れはしたものの、極く平凡な若年期をおくったのではないか。青年時代には不如意のことが多かったにちがいない。

かれが若少のころより神童であったり、郷党の期待を担っていた人物であったりするほうがおかしい。

歴史的にも、京都時代のかれの活躍は記録されるほどに、傑出していなかったからだ。だが、そうであるからこそ、

中年以降の人生に、大望を賭けたのではあるまいか。

そして、それは成功した。成功に導いたのは、青少年時代に育ったものの成果にほかならない。

病床に呻吟した者ほど、生きてあることの喜びと意義を感じ、感謝の念を抱くように、不如意の青春が、苦汁に満ちていればこそ後半生を有意義に過させるのである。

かれが、単に征服欲や殺戮の嗜虐性を持っている人物だったら、三浦義同を仆すのに二十年近い月日を賭けはすまい。

それだけの年月をもってしても三浦氏を仆さねば、ならなかったのだ。かれの目的を達成するためにはしかたがなかったのだ。

そのために、充分の歳月をかけ、計画を練り、兵を養って、最終目標にぶつかっていったのだ。早雲が、はっきりと三浦義同へ戦いを挑んだのは永正九年、なんと早雲は八十歳を過ぎていたのである。

八十歳といえば、その歳まで生きているだけでも、稀有な時代である。

当時は、人生五十年というが、大方は三十代で死ぬ者が多かった。食生活のちがいもある。が、何よりも、乱世の武士は、死ぬ機会が多すぎた。日常が死と隣り合っていたのだ。その中をくぐり抜けて還暦を迎えるというだけでも大変なことである。五十知命とは、まことに至言であった。

さらに、古稀を越え、八十の声を聞く。

七十歳が古来、稀というのなら、八十歳は何と呼ぶべきか。

しかし、矍鑠たる早雲は、格別のことはないような顔をしていた。

「わしは、人生を四十歳からやり直した。されば、四十歳を一として、いままでで漸く、四十歳ということになる」

と、言った。

「やらねばならぬことがある。四十歳になれば、不惑と申すからのう、惑うてもおれぬ」

たしかに、かれの眼光も、気宇も、壮者のものであった。

三浦義同を攻めはじめた八十一歳のとき、かれは、この理論をむりにあてはめた。

「八十一は、半という字になる。人生半ばということじゃな。わしの人生はこれからよ」

なるほど、七十七歳を喜の字（略字）に作り、八十八を米寿、九十歳を卒翁という伝からすれば八十一は〝半〟である。

「さ、これからじゃ、攻むるぞ」

急に言いだしたので、荒木兵庫たちは驚いた。

「三浦を、でございますか」

「左様、ほかに誰がいる」

「いや……突然ゆえ」

「突然ではない、サグリは入れておいた。大体、ほしいものは手に入った。あとは、城を一つ一つ潰してゆくだけじゃな」

この細作には、風魔小太郎が忍びノ者を多勢駆使して、情報蒐集につとめている。

「義同の身に変化があった。存じているな」

早雲はこう言って、腹心の老臣たちを見まわした。

かつて伊勢で奇妙な縁により血盟した者たちである。荒木も大道寺も、荒川も、在竹も山中も、そして多米も、みんな年をとっていた。

もっとも若かった山中ですら、六十の坂を越している。

「隠居のことでございますか」

大道寺重時が聞いた。

「そうだ。彼奴は、岡崎に来た」

義同はこの春、入道して道寸と号し、伜の荒次郎義意をして新井城を守らせ、おのれは、岡崎城に居坐った。

早雲が、松田頼重を置いている真田城からは三キロと離れていない。

ここに三浦道寸義同が出て来たことは、かれもまた入道したことで、最後の決戦を早雲にいどむ意思と見てよかった。

「いずれ、埒あけねばならぬこと」

三浦義同の方でも思っていた。

大森藤頼が小田原城を追い落されたときからである。さらに、藤頼が真田城で討たれ、城を奪われたことは、三浦一族にとって、侵蝕の危機を意味している。

早雲がすぐに岡崎城を攻めなかったのは、かれの老獪さである。

攻めれば、攻め取れたであろう。が、岡崎城を取れば、即、三浦一族と扇谷上杉一党を敵にまわすことになる。

そこまで、戦火を拡大するには時機尚早であった。

(時を稼ぐ……)

ためにも、真田城のみにとどめておく必要があったのである。

それだけで終っていれば、扇谷上杉朝良も、強く出ることが出来ない。

「彼奴のいつもの術じゃ」

と、義同はいきまいたが、駄目だった。

「茶々丸を亡ぼしたときと同じ術ではないか。茶々丸だけを討てばよい、三浦の所領に野心はないと申したゆえ……」

義同は養父時高への怨み霽らしで出馬した。藤頼も、一翼を担った。

たしかに、そのとき、早雲はさっと、軍勢を引き上げさせた。

ために、いくらかの懸念を抱いていた人々も、愁眉をひ

らいたのである。

大森藤頼なぞはすっかり信用してしまった。そこへ攻めこまれたのだ。箱根の山頂からの火牛戦法である。

「あのときと同じように……」

三浦の所領を蚕食されてはたまらない。

義同の勘というか、士は士を知る、というか、早雲がこのまま、伸長を止めるはずがないと見抜いていたのである。

いつぞやの太田資康の派遣もこの間の消息を物語っている。

「彼奴が動かねば、こちらから攻めてくれようぞ」

義同が、家臣をして度々、小田原城に攻め寄せさせたことは前に述べた通りであるが、かれ自身は、あくまでも、最後尾の新井城にあって、報告を聞いていた。

このころの特色だが、先鋒をして攻めさせても、本人は、涼しい顔で、知らぬふりをきめこんでおれた。

被官を使嗾する狡いやりかたである。

被官は家来ではないのだ。ただ臣従しているだけである。したがってその行動まで、一々、管領家や守護大名が見張っているわけではない。

責任回避は充分できる。小田原城を攻めたのも、三浦義同はいざとなると知らぬと言い張れるのである。

だが、あの弥三郎の戦法でも敗れたのだ。

(もはや姑息なやり方では埒が明かぬ)

と、思うようになって来たのも義同自身、年齢を感じるようになったからかもしれない。

早雲に比べて、道寸義同の子ははやく生れている。生れつき大きく、衆にぬきんでる怪力の持ち主となった。荒次郎という名は、実は、三浦家の先祖の名をとったのである。

三浦氏はもともと、坂東武士の流れを汲み三浦半島に住みついて領有したころから、三浦を姓とするようになった。平治ノ乱のときには、源義朝の家人として大いに働いた。その三浦氏が、荒次郎義澄である。

この名をとったのも、義意が、義同にとっては自慢してよい荒武者に成長したからだ。

義同が入道して道寸と号したことは、荒次郎に三浦の後事を托せると見たからにほかならない。

こうした義同の変化に対して早雲は決戦を挑んだわけである。

「道寸めが岡崎城へまいったことは、自ら、死をもとめてのことであろう」

と、早雲は士気を鼓舞するように言った。

「岡崎城をぬき、道寸を討てば、三浦一族は顫え上るであろうぞ」

かれにしてみれば、討たれるために出て来たという感じであった。

そのためには堅固にかまえ、邀撃の用意を怠りないと見

た。早雲は伊豆からも軍勢を呼び寄せ、自ら先頭に立って、岡崎城に攻め寄せた。

早雲がこの戦さに賭けていたことは、緒戦から、かれ自身、先頭に立って出陣したことでも、わかる。

三浦を討ちほろぼせば、扇谷上杉の権勢は崩れる。この戦さがヤマであった。また、道寸の方でも、軽々には思っていない。太田資康を語らい、その軍勢をもって後備(うしろぞなえ)とした。

岡崎城は前に述べたように、真田城とは指呼の間にある。城の規模としては岡崎城の方が大きいが、早雲はこの戦さでも、一計を案じた。

大根川が真田城の北を流れ、北東の岡崎城の南麓を洗って、南下する。

この真田城は、現在の鶴巻温泉の真南二キロほどのところである。このあたりも現在は家が多くなっているが、低い丘が点在し、田園がひろがって、静かなところである。おそらく、当時は、原生林も多く、鷹狩りをしたくなるような水田地帯であったろう。鶴なども多く飛来したのではあるまいか。

当初、早雲は、軍勢の半数を鶴巻方面に北上させて、真西と西南から攻撃させた。

必然的に岡崎兵は、西面して戦うことになる。

永正七年八月十三日の七ツ刻、すなわち午後四時ごろであった。

かっと西陽があたり、その陽を背に受けた北條勢は、兜の星や八幡座を光らせて、鬨の声をあげて突進した。

一騎打ちの場合はいうまでもないが、集団の合戦でも、太陽を背にうけるのと、正面から戦うのとでは大いに違う。岡崎城からは南南西に真田城がある。早雲が考えそうなことだと、義同はおもった。

人間の考えなど、大体似たようなものだ。僅かの違いでしかない。その僅かの違いが、大きな差となってあらわれるのである。

三浦義同が、このことに思いつかなかったのが、かれの生涯の悔いになった。

早雲自らが出馬してきたのは、絵図の上で戦さ駒を動かして、微妙な駈け引きを、他にまかせておけないという気持だったからだ。

毎日、午後、七ツ時分になると、北條勢は、岡崎城に攻めかける。

まず遠矢にかけて、機先を制したのちに、長槍隊が押し寄せる。熾烈な太陽の中から、矢の雨が降ってくるのは異様であった。妖奇な現象をおもわせ、それだけでも城兵たちは、戦意を喪失した。

五日目だったが、八ツごろから天気が悪くなり、雲が出て、陽を隠した。この曇天は、北條勢にとって同時刻の進

撃を無意味なものにおもわせた。

「来るか、来ないか……」

西の空に暗灰色の雲が湧き、恐ろしいほどの早さでひろがり、頭上を蔽ってくるのを城兵たちは、不安と好奇心のいりまじった気持で見ていた。

半刻ほど待った。

ついに北條勢の姿はあらわれない。

ほっとした。

「あいつら、太陽を背にしなければ、戦えないのだ」

「そうだ、いっそ、こっちが、そうやればよい。われらは、朝日を背にする」

「なるほど、朝か。うむ、いい考えだ。夜のうちに、金目川のほうまで出ていればよい。そして時刻を決めて、一せいに攻めよせるのじゃ」

「殿に申しあげろ」

なぜ、こんな策を早く考えつかなかったかと、城兵たちは、地団駄踏む思いだった。

その考えをしかし、道寸が検討するひまはなかった。突然、南の山麓でわっと凄まじい叫びが起り矢声が城を揺すった。

南麓を流れる大根川は、そのまま岡崎城の南の外濠をなしていた。城を守る濠には、川の流れはときに両刃の剣になる。

曇天と知った北條早雲は手をこまぬいて、翌日の晴天を願ってはいなかった。

数十艘の小舟に苫をかぶせ、三々五々、目立たぬように、時間をかけて、大根川を下らせたのである。

そして、近くの葦のかげにひそんでいた。時刻は暮六ツ——かれらは一せいに立ち上り、見張りの足軽らを射落して、城山にとりついたのである。

大根川はこの下になると鈴川とも称(い)っている。岡崎城の関係者は岡崎川とか城川とか勝手に呼ぶ。山川の名称などそのようなものである。

ともあれ、この北條勢の奇襲は岡崎城を混乱させた。

西から来るとばかり思っていたのが南の外濠から攻めてきたのだ。

「射よ射よ、かわうそどもを蹴落せ」

狂ったように、城兵たちは叫び石を投げたり、鹿柴(ろくさい)を投げ落したりして防いだ。

この日の凄まじい戦いは、城方が、百余の死者をだして、城の角をとられて終ったが、実際に岡崎城が落ちたのは、それから二カ月ほど経ってからである。

城の機能は、本丸まで攻めて行くまでに、幾つかの郭があって、簡単には進めないようになっているが、だが、一角を破られてしまえば、所詮、時間の問題なのだ。

城の半ばが北條勢によって占められ、城兵が浮足立つと

見ると三浦道寸は、城を捨てて、落ちた。
君側の者が、女衣裳をどこからか持って来て、女装で脱出することを奨めたが、道寸は笑ってかぶりを振った。
女装までして落ちたくはない。せめてかれの矜持であろう。
混乱がかれに幸いした。岡崎城が炎に包まれたなかを、かれは足軽らとともに落ちた。
そして、小坪の住吉城へ走った。
かれはこの岡崎城をとられても、せいぜい中郡を失うだけだと思っていた。三浦家の所領からいうならば、十分の一くらいの損失にすぎなかったが、道寸が負けたという評判は、致命的な傷になっている。
道寸は小坪で充分反撃の機会をつかめると思った。
だが、早雲は追撃の手を弛めなかった。
執拗に攻めかけた。道寸がどのくらい住吉城で持ちこたえたかは判然としないが、前後を考えると半年くらいのものではなかったかと思われる。
鎌倉に隣接する小坪の城は、三浦半島の咽喉部である。城を落されると、かれらはさらに南へ、半島の先へ向って逃げるしかなかった。そして、とうとう油壺の新井城——つまり、三浦時高終焉の地まで、追い詰められたのである。
ここまでくると、もう盛り返しはきかない。だが、道寸はよく耐えた。伜の荒次郎義意とともに押し寄せてくる北條勢を邀撃って戦った。
驚くべきことに、この三浦、北條の戦いは数年にわたっているのである。
早雲もまた、倦むことなく攻める手を休めなかった。応援の扇谷勢を撃ち斥けながら、道寸、義意の父子を攻めたてた。かれが、新井城を陥したのは実に、七年後のことであった。
これほど三浦道寸が頑張ったのは、父子の強さもさりながら、新井城が要害堅固だったためでもある。前にも茶々丸攻めのところで出てきたが、油壺に望んだ崖下に千貫櫓という繩蔵があって、兵粮を貯蔵していたために、海陸からの攻撃にも、よく耐えられたのだ。
つまり普通の城を攻めるように兵粮攻めということが、難しい城であった。
しかし、道寸にしてみれば、最後の残念さは、言うも愚かであったろう。
かれは嘗つて、この城に養父時高を攻め落している。その同じ城でおのれもまた、生涯の終りを迎えたのである。伝奇小説的にいえば、時高の亡霊に苦しめられ、導かれて討死したということになるだろうか。
道寸の辞世が遺っている。
こうした場合の辞世というのは必ずしも真かどうかはわからないが、一応、記しておく。

討つものも　討たるるものも土器(かわらけ)よ
砕けてあとはもとの土くれ

義意の歌と伝えるものも遺っているが、割愛する。
ともあれ、由緒ある三浦氏が亡ぼされて南相模に北條氏の勢力がひろげられるわけだが、この新井城落城は永正十五年七月であった。
時に早雲は八十七歳。かれは生涯をかけたこの大仕事が達成した翌年、八十八歳で大往生するのである。
のちのことだが、徳川家康も、豊臣一族を抹殺するのに十七年費している。早雲が小田原城を陥してから十七年。
そして、家康もまた、大坂落城の翌年、すべての精力をつかい果したごとく死んだ。乱世の武将の生きざまとしても、奇妙な符合を感じるのである。
早雲の命日は八月十五日。死んだのは小田原城ではなく、伊豆の韮山城であった。
かれとしては、やはり伊豆の風物を愛したのであろう。
はじめて一城の主となったときが、富士山を真北に見る、愛鷹山の麓の興国寺城であり、また韮山も、狩野川の流れに映る富士の姿は古今に歎賞されている。
子供の氏綱を小田原城においてかれは、もはや思い残すことは何もなかったであろう。
氏綱はすでに三十三歳。かれの頑健な体軀を受けて、立派な武将として成人している。
その朝、早雲は、韮山城の御殿に身を横たえて、朝焼けの美しい富士を見ていた。おのれの過してきた波瀾万丈の人生を、富士は優しく見つめてくれるような気がしていた。
「富士よ……」
こう呼びかけたのは、何を言いたかったのであろうか。
声がとぎれたとき、早雲は死んでいた。
これほどの乱世を生きた人とも思えない、安らかな顔であった。

あとがき

この「北條早雲」は静岡新聞に連載した。連載中は「新九郎はいま」という題であった。読んで下さった方には、どういう意図でその題名をつけたかは、理解して頂けたと思う。新九郎と称した若き日の早雲の行動に、乱世の男の像を見ようと思った。当初は、これほど長く書くつもりはなかった。せいぜい二年くらいの予定だった。それも、一年くらいで若き日を終え、二年目で伊豆から小田原へと歩を進めるつもりだった。というのも、資料が少なく、その〝若き日〟にどういう行動をしていたかを探るのが至難であった。後年になると関係資料も増えて、比較的その行動半径は分明だが、本篇はあくまでも小説北條早雲である。

近時、歴史小説が、歴史そのままと思わせる形態をとるものが多く、何か、それを本筋と錯覚している向きがある。史伝と歴史小説は別個のものなのだ。歴史かならずしも真実を語るものではない。ラ・ロシュフーコーも言っているように、「歴史は真実の小部分でしかない」のである。

私はこの新聞小説で一千三百十八回に及ぶ長篇を書き終えたとき、私の中に坐っていた新九郎——早雲の像が、活々と血の通った人間となって立ち上り、濶達に笑い、そして歩きだしたのを感じた。早雲を贔仰する人、批判する人、さまざまあろう。が私にとって、乱世に生きたこの壮漢は、正に〝男として生きた〟ことを感じさせるのである。作家が一人の人物を描こうとするとき、ナマな人間としての親近感を持つことが大事ではなかろうか。読者が読み終えて、早雲という男に、何ほどかの感慨を抱いて下されば作者の喜びはこれに過ぎるものはない。

この長篇を書きつづけるに当って実に多くの方の教示を得た。わざわざ資料を持参して下さった方もある。殊に、静岡新聞の小柳津隆弘編集部長には、新九郎ゆかりの地を何度も数日にわたって案内して頂いたり、お世話になった。連載中、七回ほど外国旅行をしたので、地球の反対側から原稿を空輸したり、国際電話で送稿したり、大分ハラハラさせたようだ。お詫びする。

このたび五巻本として上梓するに当っては、文藝春秋出版部高松繁子さんにも大変面倒をかけた。長年月に及んだための矛盾の訂正や、資料の照会などで、一方ならぬ御尽力を賜わった。御礼を申し上げたい。

新聞小説としては十二本目であるが、いずれも長くて二年程度だった。足かけ五年、原稿用紙にして四千六百余枚、書き終えて、自身、呆然とした。私は、さながら桎梏から解かれたような放心状態にある。歩きだした早雲の肩を叩いて、おい随分悩ませたなあ、と話しかけたい気持だ。

昭和五十一年十一月

天皇在位五十年式典の日とか、戸外にデモの声を聞きつつ

早乙女　貢

北條早雲五

昭和五十一年十二月十五日　第一刷

著者　早乙女貢
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三

本文印刷　理想社印刷
オフセット　共同印刷
製本　中島製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Mitsugu Saotome 1976

Printed in Japan

白石一郎 幻島記

慶長三年、別府湾上の瓜生島は一夜の地震で沈没――その謎をめぐって展開する江戸から現代にわたる壮大な時代小説。直木賞候補作

980円

綱淵謙錠 幻（げん）

大火の年に生を享けた将軍侍医の娘が江戸城大奥の火災で落命する数奇な運命を描いた表題作の他に本格的な歴史小説の佳作五篇収録

980円

文藝春秋刊

藤沢周平 檻車墨河を渡る

薩摩討つべし。奥羽列藩を翻弄する幕末動乱の嵐のさなか、討薩ひとすじに奔走した志士雲井龍雄の悲憤の生涯を描く長篇歴史小説！

980円

笹沢左保 剣鬼啾々

天下無双をめざし、生死を賭けて勝負に挑む残酷なまでの華麗さ…剣一筋に己の道を往く流浪の武芸者の、非情な生きざまを描く傑作

950円

文藝春秋刊

早女乙貢

雄大な構想のもとに滔々と描く大河小説

北條早雲

全五巻

出自は謎につつまれ、一介の牢人から身をおこし、ついには乱世の英雄と謳われるまでの波瀾にみちたその生涯——靱勃たる野心を秘めた風雲児・伊勢新九郎（のちの早雲）の、赫々たる生きざま！

各九五〇円

文藝春秋刊